

を隔て月と日と相對ふといへども、日月交を離れ相むかふゆゑ、日の光大地を除けて月を照し、地の光を妨げず。よつて月蝕することなし、月蝕は月中天の交にありて日月大地を正中にはさむゆゑ月蝕するなり。

日の雜占

○旭出づるは其色青く見ゆる時は大風大雨のしるしなり。又雲多く破れ日をもらし光散りて射る時は雨のしるしなり。又日の出づる時に日の中くぼみて見ゆるものは濕風吹くしるしなり。  
○日の出る時日の兩脇に雲あるは大風なり  
○旭出て天を焦すがごとく赤きは風のしるしなり。  
○朝日赤く地を焼くが如くにはあめふる、亦朝日のいる黄に見えて雲其の下にたなびくは北風ふくなり。  
○朝日常より大きく明かにて空の色黄に見ゆるは雷雨大風なり。  
○日の出て映すること無きは晴天のしるしなり。  
○入日に雲覆ひたる中に白氣直ちに立のぼつ

て空に沖ものはほどなく雨降なり。  
○入日の色紅粉の如くなるはあめなく風吹くしるしなり。  
○入日返り照して人面に映ずるは晴なり、人の眼入日を見るにまばゆからぬは雨のしるしなり。  
○日入りて後白き光有りて氣の如く地より天に沖り直ちに北斗の中にいり其邊りの星ども色うしなふものは其夜かならず大風なり。  
○日に雲のまとひたる如く輪有りて光るものは大風大雨なり。  
○日の出入に其色青く見え雲おほく重なるははげしき風吹くしるしなり。  
○日の色紫なるは風多し。又黄なるは炎の印とす。  
○日の色離淡て色さへざるは雨のしるし、又霧降なり。  
○申の時より後日の兩わきに雲あらば大風の印なり。

月の雜占

○三日月の下に雲あれば四日の内に雨ふるなり。

又生死なきこと能はず、死するときは土にかへる、是を墓といふ。然

黄幡神

羅喉星、家造り、門立、井穿等すべて土を動かすこと大にあし。



れども、陰さはまつて陽生じ、かゝるがゆゑに、弓を射はしめ旗をひら

豹尾神

計都星、此方に向ひて尾の有る生るゐを求むべからず、大小便すべからず、又嫁娶、臨産一切の不淨を忌む。



金神之説

き幕を張る等にはよし、但し財寶を出し入るには大に忌むべし。  
○黄幡神と對して向ふゆゑに、戌の方にあれば黄幡、辰の方に相對す豹の尾を動かし走るがごとき猛惡の神なり。

○金神は金氣の精にて萬物をからし死す事を主とれば、尤も忌み恐る



Table with 4 columns and 2 rows of zodiac signs and years.

甲年	申酉	乙年	辰巳
丙年	子丑	丁年	寅卯
戊年	申酉	巳年	午未
庚年	辰巳	辛年	寅卯
壬年	亥卯	癸年	子丑

べき大凶方なり。但し年によりて輕重あり、重き時に此方を犯せば金

○三日月若照うして明らかに洞ふ時は其月風雨おほし、又赤く黄なれば其月旱なり。  
 ○三日月の色と廿七八日頃の月の色と粟毛に見ゆるは、大風ふくしるしなり。又光り大ひにして光らず又動くやうに只ゆるは大風吹く微なり。  
 ○三日月かくのごとくなれば其月雨多し、かくの如く堅なれば晴天おほし。  
 ○四日月光ふとく見ゆるは、大風大雨のしるしなり。  
 ○月の色極めて白きは雨あるなり。赤は旱を主とす。  
 ○月の色緑色なるは大に寒す。  
 ○月の色青みは虹立つしるしなり。  
 ○凡月の輪の上下に黄なる雲ありて、昏暗して月を覆ふものは大風なり。  
 ○雲氣月の輪の上下にありて廣く布くものは三日の内に大風又は俄か雨あり、月輪畢星の内にかゝれば雨有り、もし畢星の南にかゝれば雨ふることなし、月箕星にかゝれば風吹くなり。

月蝕の雜占

○二月に月蝕あれば粟の價安く人にわざはひあり。  
 ○三月に月蝕あれば米のあたひたかしといふ。  
 ○四月に月蝕あれば五穀あれて人飢るといへり。  
 ○七月に月蝕あれば來年にいたりて牛馬價高しといふ。  
 ○九月に月蝕あれば年あれて凶なり。  
 ○十月に月蝕あれば來年ごとく貴し。  
 ○十一月十二月に月蝕あれば翌年とし荒るなり。  
 ○月蝕に月赤き色有らば旱のしるしなり。

月の暈の説

暈は日月ともに迫り近く水氣なり、是れ空中に微薄雨ありて、日月の光此雨氣を透らして暈を爲すなり。試に沸湯を大なる盥に盛れ、その湯氣を隔て、月を望めば暈を生ず、又フソガラス日月をみるとふめがねなりに息をふきかけて望めば日に暈を生ず。これ湯氣口氣もおなじ水氣なれば暈の水氣なることあきらかなり。

神の七殺とて七人を殺すほどの祟りありといへり。是れ金の魂は七ツ有り、ゆゑに七人を殺すと云ふ。春夏冬は其祟り輕し、四季の土用は重く、秋は金氣にて金神の金と金旺金と重なり、其毒氣甚し。若し秋に此方を犯せば其人を始め七人を殺す、其家に人数たらざれば、隣家の人をそへて殺すといふ。恐れ慎むべし。就中庚辛のとし申酉の年其祟り尤もするどく、然し遊行日には本所にさはりなし。此方に向ひて萬事おそるべし、普請、移徙、窓を明け、門あけ、出行婚禮等務々用ゆべからず。

○鬼神遊行日

甲寅の日より五日が間南に在 □ 丙寅の日より五日が間西に在 □  
 戊寅の日より五日が間中央に在 □ 戊寅の日より五日が間北に在 □  
 壬寅の日より五日が間東に在 □

○同四季遊行日

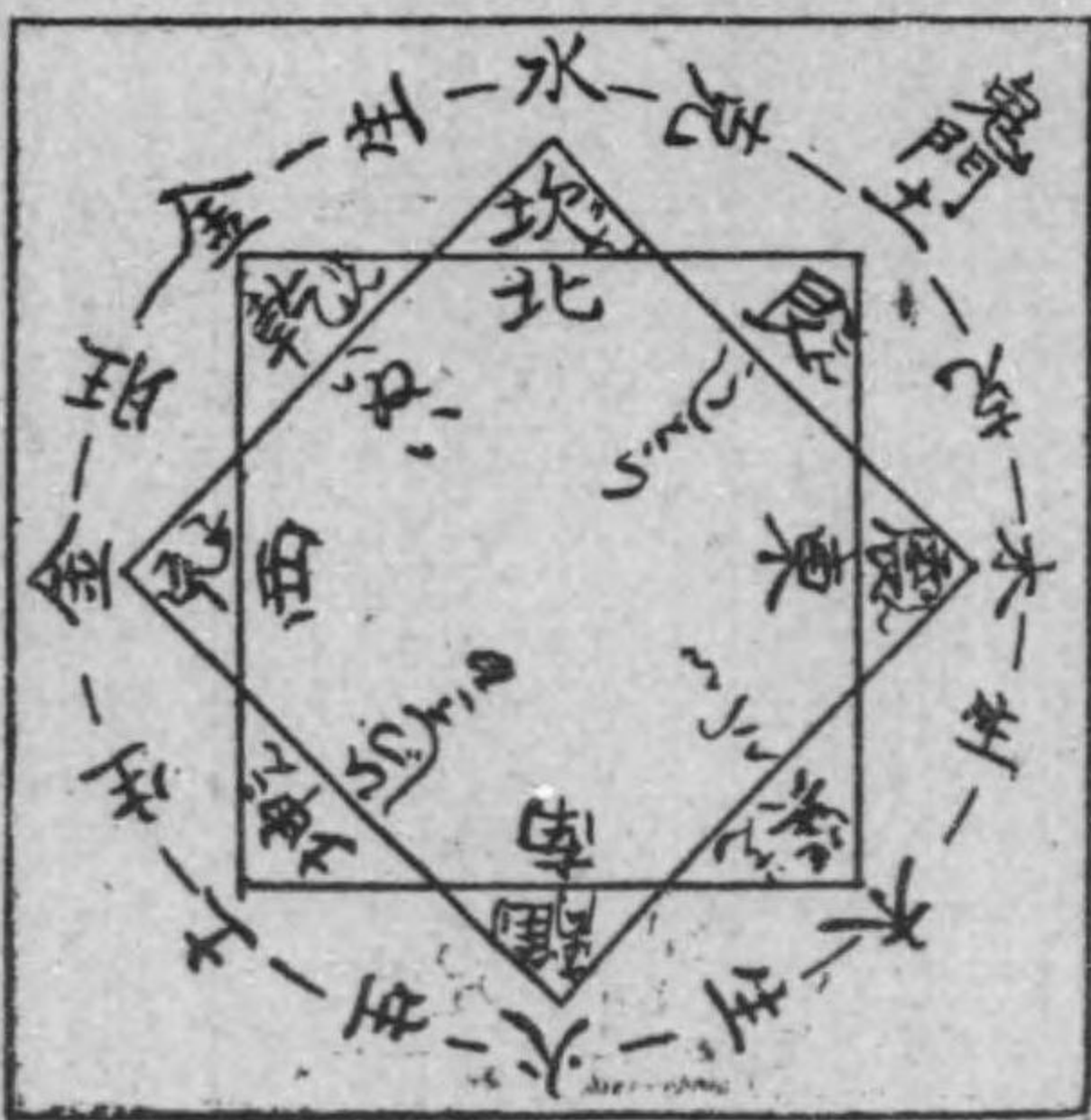
春 乙卯の日より五日 夏 丙午の日より五日 秋 辛酉の日より五日 冬 壬子の日より五日  
 春が間ひがしにあり 夏が間ひがなみにあり 秋が間にしにあり 冬が間きたにあり

●鬼神といふは大將軍に向ふ方なり。たとへば子の年大將軍酉の方であれば、卯の方を鬼神とす。寅の年大將軍子の方であれば、其向

ひ午の方を鬼神とす。鬼神ほどに重からねども、物によりて此方位をも恐れ慎むべし

鬼門之方位口訣

○夫れ乾隅を天門と號く、坤隅を人門と號く、巽隅を風門と云ひ、艮隅を鬼門といふ。其由縁海外經に有りといへども、奇怪にて信じ



がたし。鬼の形容を見たる者なし、唐の吳道子始めて鬼を描くに頭に角有りて腰に虎の皮を絆ふ、是れ鬼門は丑寅の間なれば、頭の角は牛の頭を象り、腰の皮は寅を象る、鬼門にもとづき鬼の形を描き出す所も畫工の才といふべし。後世鬼を畫くに是れを倣へり、方位家の秘説に曰く、震の方より殘る七卦を唯茶臼まはりにかぞへ周るに

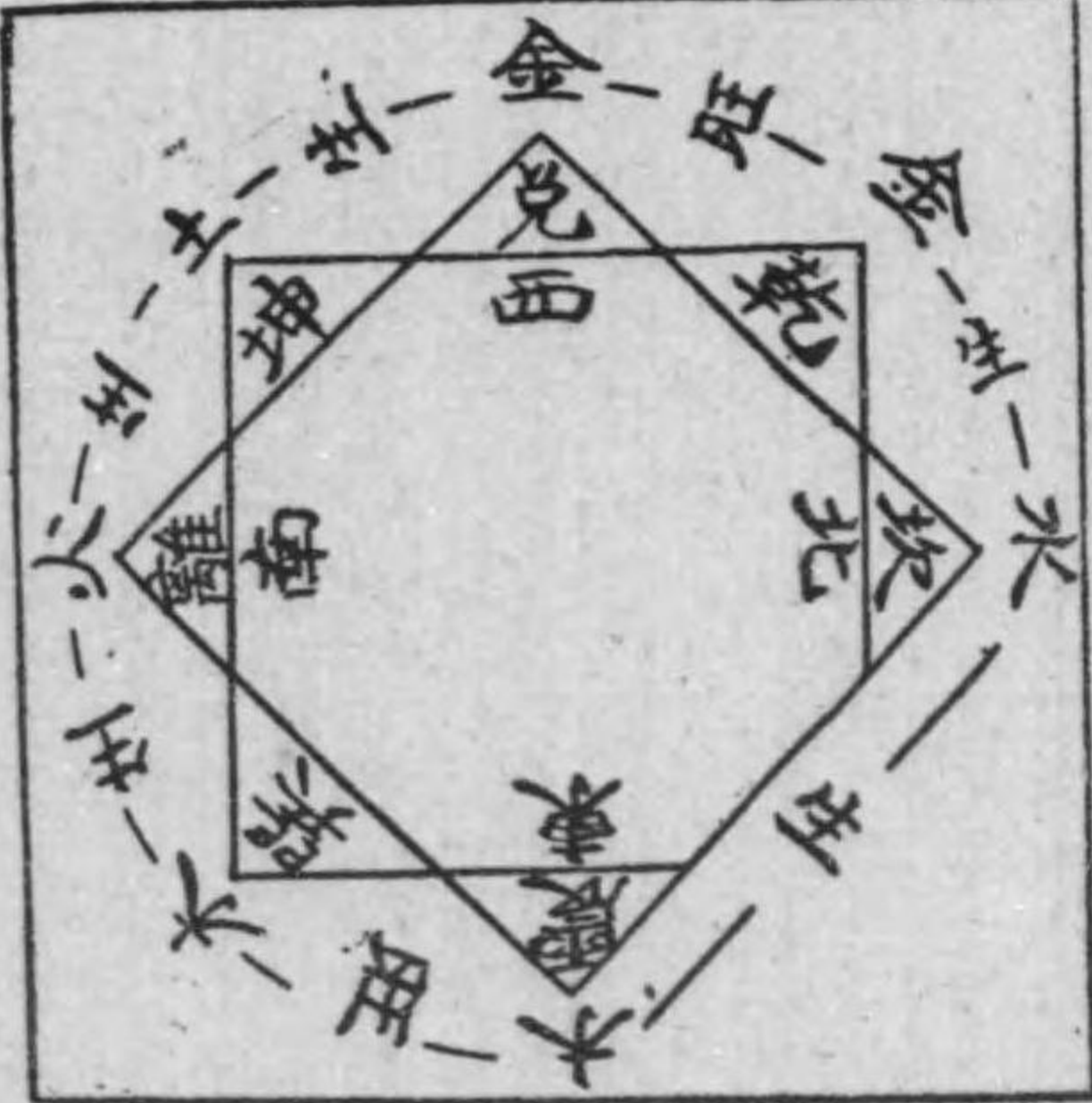
暈の雜占

○日輪初めて出づるとき暈あればかならず雨降るなり。
○暈の時より前に日に暈あれば北風吹くなり
○暈の時より後に日に暈あれば南風吹くなり
○暈の時より前に日に暈あれば北風吹くなり
○暈の時より後に日に暈あれば南風吹くなり
○暈の時より前に日に暈あれば北風吹くなり
○暈の時より後に日に暈あれば南風吹くなり

星の説

星は月と同じく元光なく日を受けて光を顯はすゆゑ顯晦盈虧の分ち有ること月と全くおなじ、又日月と同じく西より東へ巡れども是れも天の東より西へ巡ること早き故、天に從ひて西へ巡るなり。星の中にも五星といふもの尤も大なり、木星一名歳星、火星一名熒惑星、土星一名鎮星、金星一名太白星、水星一名辰星、以上を五星といふ。是れに日月を加へて七星と云ふ。是れに羅喉、計都の二星を加へて九曜星と云ふ。右の五星の旋ぐる天の下の高下ありて巡ることも遅速あり、天に九天ありて第一低き天を月天、是れ月の巡る天なり。第二を水星天といひ、是れ水星の巡る天なり。第三を金星天、第四を火星天といふ。是れ日の巡る天なり。第五を木星天、第六を土星天、第七を土星天、第八を恒星天とす。二十八宿はじめ衆星の旋ぐる天なり。第九は殊に高く衆動天といひ。此天は餘の天と異し、晝夜に東より西へ周す。日月五星其他衆星此衆動天に從ひ、西より東へあゆみ運びながら東より西へ旋ぐるなり

圖のごとく或は相生し、或は相旺すれども、艮の方は前後へ相克す、依つて此角を鬼門ととなへ忌み恐るゝなり。鬼は死し殺すの義なり此方位を犯す時は忽ち其主を殺す恐れ慎しむべし。然るに艮の八卦を欠くときは相克の恐れなし圖の如く艮の隅を欠くときは相生するなり旺はさかんなりとよむ。



金生水坎の水より震の木へ水生木此のごとく相生す。家造りに艮の隅を缺くことは此ゆゑなりと知るべし。凡此方に向ひ萬の事皆大に惡し若し犯す時は、禍忽ちいたる。常に此方に汚れたる物おくことなく随分清淨にすべし。

曆の上段十干の解

○人の忘むべきことは忌み、しひて方位になづむべからず。方位家に依つて尋ね問ひ其上にて事を計らふべし。

十干十二支はひかし大撓と云ふ人北斗星の運動をみて、初めて是を制り、十は數の名なり、すなはち天の數にして干は幹なり、強とよむ、木の太きところにてたとへしものにて、木の幹なり。十二は地の數にて支は枝にて枝なり。則ち十干は幹、十二支は枝なりと、たとへを執つて謂へり。十干は天と配し、十二支は地に配す。されば、干支は天地造化の根本にて、陰陽にとれば十干を陽とし、十二支を陰とす。陽中に陰あり、陰中に陽あり、甲、丙、戊、庚、壬は陽なり。又乙、丁、己、辛、癸は陰なり。これ陽中の陰、又子、丑、寅、卯、辰、巳は陽なり。是れ陰中の陽とす。又午、未、申、酉、戌、亥は陰なり。是れを陰中の陰とす。干と支と相はなるべからざること木に枝の有るがごとし。二ツの物合して天地のよくなす。是れを年に配すれば、甲乙は春の干、丙丁は夏の干、庚辛は秋の干、戊己は四季の土用の干、壬癸は冬の干なり。十二支は正月寅にはいし、二月を丑にはいす。干支

又金水の二星は日輪を軸とし、各々旋ぐる所の道あれば日により高きもあり、ひくきもありといふ説なり。

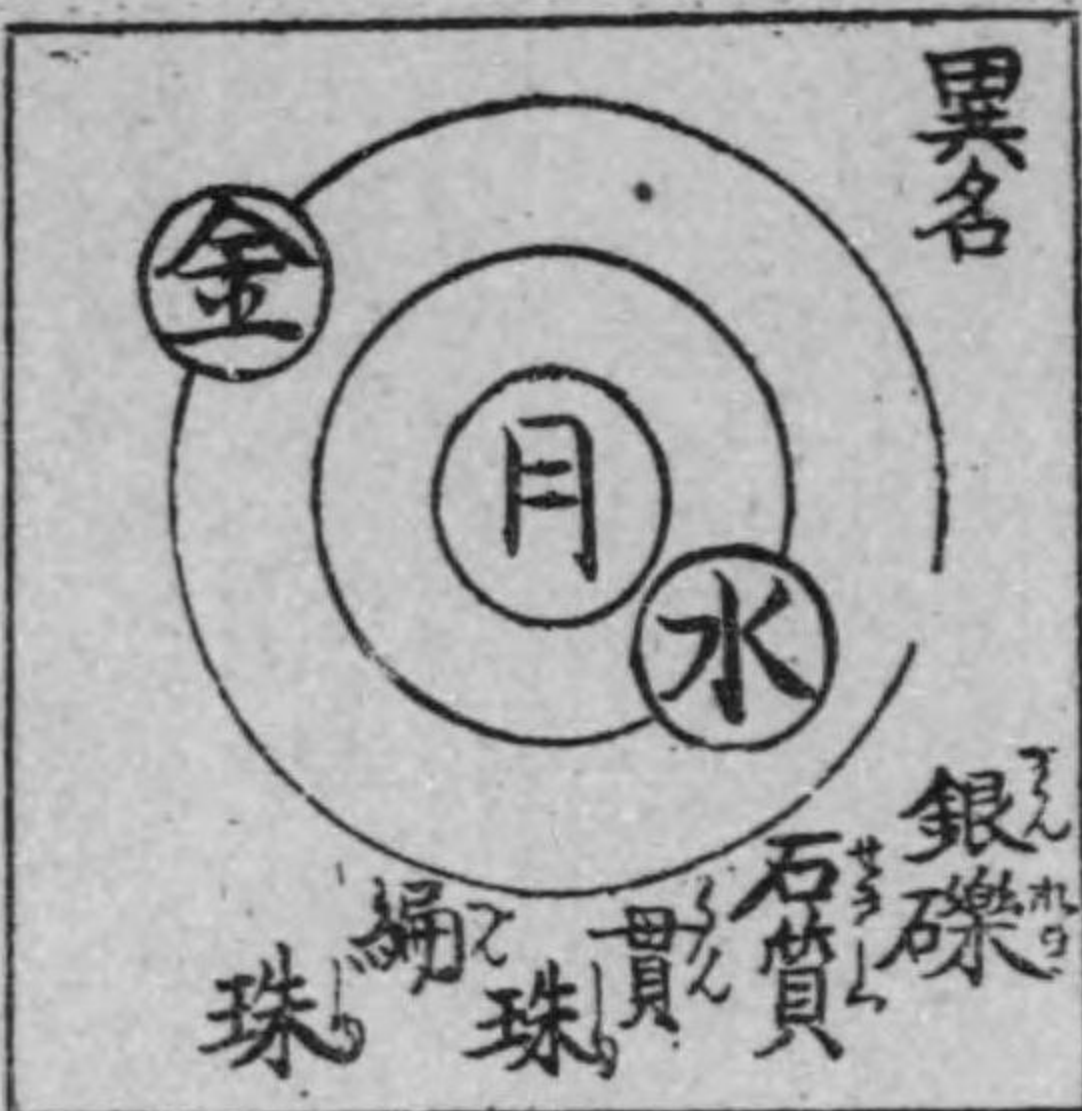
星の雜占

○星の光定らずしてきら／＼したるは明日風なり。  
○夏の夜星しげればよく日大に曇し。  
○星常より大く見えて光輝き又うごくやうにみゆるは三日の内に大風ふくべし。  
○星に赤く輪をしやうずるは風ふくなり。  
○星常より白くみゆるは風なり。  
○晝雨降つて其夜星を見るは明日も雨なり。  
○正午に銀星みゆるは早暈すといふ。  
○正午に辰星見ゆるは洪水なり。兼星あきらかにして天高くみゆる連日晴なり。  
○天低く見へ星あきらかに近くみゆるは近日の内雨と知るべし。

彗星昏星の説

金星を太白星と云ふ、宵明星、曉明星、是れなり。水星一名辰星。  
太白星は餘の星とちがひ、常に日輪を軸とし

徐かに右へ旋ぐる年三三百六十日に日輪に連れて西より東へ周る日輪も又太白星をしたがへながら宗動天にしたがひ、東より西へ晝夜に一周す。ゆゑに太白星は日の上半輪を旋



異名  
ぐる間は星東へ行きて夕に見え、又下半輪を巡る間は、西へ行き晨にみゆるなり。依つて日輪の下を巡る時は地より甚だ近ければ星にも見え、又大く見ゆるなり、水星も是と同じく日輪を巡るなり、其巡る道水星は金星よりやゝ日輪へちかし。

を合して年と日をまもれり。されば元亨利貞の四ツも寒暑燥閔の四ツも風、雨、霜、雪、五臟、五味、五音、六律、鳥獸、艸木、金石、森羅萬象、此十干十二支をはなる、こと能はず、實に萬世の妙理といふべし。

曆の十二支の解

○夫れ十干は天の五行にして、十二支は地の五行なり、十干は氣にして十二支は質なり、其五行の配當も各々陰陽あり。  
子水 丑土 寅木 卯木 辰土 巳火 午火 未土 申金 酉金 戌土 亥木  
木火金水の四ツは各々陰陽二ツ宛にして、土のみ四隅を主とるゆゑに四ツ有り、地の五行は十二有るは是を天の十二宮の刻宿を用ひしなり是れに三十六禽を配當して、一宮毎に三禽あり、是れ其星と同氣の禽獸を假用ひしなり。其内正當にあたるもの十二有り、所謂鼠、牛、虎、兔、龍、蛇、馬、羊、猴、鶏、犬、猪、是なり。藥師の十二神將より出てたりといへども實は星の名なり。

曆の中段十二直の解

○俗に曆の中段に十二直といふもの、又十二客ともいふ。前にもいふ

二十神將之圖



如く十干は天なり、十二支は地なり、此の十二直は人なり。故に第一建を寅の日にあたる。是は人は寅に生るといふ義をとれり、是を覺

北辰の説

北極星一名北辰ともいふ、世に北斗と混じり同じやうにおもふ人あれども、大に違へり。北辰は北方紫微宮の中に有り、第一を太子とし、第二を帝王とす。此星、明らかなれば天下祥瑞あり、第三を庶子とす、第四を後宮とし、第五を北極とす。又四ツの輔星有つて北極を戴く。此星小にして明らかなれば吉事あり。北極は地を出づること三十六度、故に日本、中華、朝鮮、暹羅、天竺、琉球、紅毛等の赤道より北に在る國の人はあふいで北極を見ざるを得、赤道より南の國は地球につかへて見ることは、又北極に相向ふて南極星あり是れ北極と相反して此地より低きこと三十六度なり。故に赤道より北の國の人はみること能はず、赤道より南の人はこれを見るといへり。およそ一度といふは地にうつし見れば日本里數三十里ばかり也。されども上なるほど廣くなるなり。たとへば菊の紋の花の葉の如く地の度を菊の心とし、花葉の末を天の度として見れば、上に至るほど其度の廣きこと量りたし、さて日月星皆動けども北極南極

は動くことなく、天および日月星の旋ぐるも此南極北極を車の軸の如にして巡るなり。ゆゑに北辰其所に居て衆星是れに供する語あり。此北極は北の極にて磁石の針は此星を指すなり。西洋船の海を渡るもこの北極南極にて目的を定めるといふ。北辰を佛家にては北辰妙見大菩薩といふ。道家にては鎮宅靈符神とまつれり、壽命運氣を守護給ふ星なり。

北斗星の説

廣博物志に曰く北斗七星各々其間相去ること九千里(日本三十六丁一里にして凡千五百里)の外に二星あり、見えざるもの相去ること千里(日本里數にして千三百餘里)このもの九星有つて天の中に運り、四方に望み制して四時建となり。其見えざる星の名を洞明星又隱元星といふ。天樞は陽德を主どり、天璇は陰刑を主どり、天機は我書を主どり、天權は無道を伐ち玉衡は四方中央を主どり、開陽は五穀を主どり、搖光は兵を主どり、いづれも明かなるをよしとす。北斗大雪の(十一月のせつ)後に子に建せば冬至には癸に建し、小寒(十二月のせつ)丑に建す此餘准じてしるべし。

ゆるる法は、正月は寅の月なれば寅を建とし、卯を除くとし、辰の日を満とす。次第是にてしるべし。二月は卯の月なれば卯を建とし辰の日を除くとす。又毎月節に入前日満なれば節に入る日も満なり。猶中段の日取を暗におぼゆる歌は、  
十二直そのかしら字を覺ゆべし

たのみたさうやあにおひとなり

建

毎月(げつ)の月建(げつけん)なり、月建とは建はあさすと訓みて其月の支をさすこと也。正月は寅、二月は卯、其月々の支を建とす、故に月建といふ。此日はよく萬物を生ずる日なれば、あたらしき衣服を着せめ、柱立、財寶を取あさめ、旅立等大吉日、但し士を穿船にのり、藏を開く等に忌む。

除

此日は天帝百の凶をはらひ、除く日なるゆゑ除となづく。煤はらひ、掃除、沐浴、服藥等に用ひて吉日なり、婚禮出行井掘等には凶し。

満

此日は天の倉曹とて天帝寶庫に萬のたからを積滿しむる日なるゆゑ、満と號く、家造り、婚禮、移徙、物裁、出行等に吉日なり。士を動かし藥を呑み始む等には凶し。

平

此日は天帝諸の官人を召し集めて人間に萬の物を平に分ちあたへ給ふ故、平と號く、婚禮、移徙、道を造り、かべぬり等に吉、溝を掘種蒔等には凶し。

定

此日は天帝諸客の座を定むる日なるゆゑ、定と名づく、家造り、婚禮、移徙、下人を抱へ、牛馬を求め、士をうごかし、祈禱する等に吉日なり。訴訟ならびに出行にはあし。

執

此日は天帝萬物を執斷日なれば執と號く。家造、井掘、種蒔、婚禮とうに吉日なり。移徙、出行、藏びらき等には大いに凶し。

破

此日は月建から七ツ目の日なり、正月の建寅なれば七ツめは申なり、物相向は戦ひ、たかかへば必ず破る、故に寅と七ツめの申を破といふ義也。此日は罪人を刑し、帥を出し、漁獵し、藥を飲み初むるに吉、其餘皆凶し。

危

○因に曰く俗に七ツめの支とて、申の年は寅を重んじ卯の年は酉を愛するは相向ふて争ひ闘支なれば是を愛し重じて身にあらそひごと怪我過ちなきやう、且つ人と争ひたかかふべからずとの誠なりと知べし。前險とて七ツ目の相戦かふて破るゝの次なれば、其意險しき山に登るが如く、危きゆゑに危となづく、家造、婚禮、種蒔、酒造

○凡そ毎月朔日の夜半に北斗を窺ふべし。若し雲ありて北斗をおぼへば其雲の色を見て各々風雨らなひ驗むべし。○雲の色青きは其月大雨あり。○黄なれば其月風吹ことおぼし。○赤色なれば其月旱なり。○白き雲ありて潤ひ有るは其月雨多し。若し明かにしてうんきなれば晴多しと知るべし。

彗星の説

彗星朝に東方にあらはるゝ時は芒西にさす夕べに西にあらはるときは芒東にさすなり。是れすなはち芒は日の光りを受けてうつる影也。前にも云ふが如く月星とも日の光を受けて明かなるものなり。然れども餘の星は白きかげなし、此星のみ白き影をなすは何ゆゑぞと云ふに月星は鏡の如くなれば日のひかりをうけて明かなるのみなり。彗星は水晶の如く透明ゆへ日の光を照せば裏とおもて白き影の如あらはるゝものなり。芒に長短あるは日をさることの遠近正斜によるなり。○一説に彗星皆圓なり、只彗星ばかりは扁圓目がねの玉のごとしゆゑに、日の光を右より受ければ影左の方へさし又左より受ければ白影右へさ

し、何れも芒は長し、若し正面より日光を受ければ芒四方へ出て彗星となる謂へり。此星天理の巡りによりて顯るゝ年と顯れぬ年と有り、然るに天學に疎き徒は彗星出づれば兵亂起といふ、太非なり。今太平の御代久しく續けども、此星數度あらはれ、天下益々昇平にして萬民徳澤に浴す。彗星百千度出ても何の恐れかあらん。俗を惑す族の詞信すべからず。

流星の説

流星はもと星にあらず、これ地中火土の散氣なり、火氣下より土をさしはきみ空中に昇りて陰雲にあへば、是にすまされて出づることあたはず、すなはち雷電をなす、もし空中に陰雲無きときは直に中天に衝上り、忽ち曇く燥きて煤の如くに成り、火と土と一體になりて燃ゆる是れ流星なり、夏秋の間は多く、冬春は陽氣微くして偶々火氣土をさしはきみ上ぼる物はまだ中天に至らずして其氣散亂するゆゑ流星とならず、夏秋は陽氣旺んなるゆゑ火氣尖とく直に中天にのぼり、縦横上下にとんで其ひかり星のごとし。

神祭等には吉日也。高きに登り、馬船等に乗るなどは忌み憚るべし。○此日は天の主記として諸の事を記録して、萬事成就する日なるゆゑ成と號く。家造、婚禮、立願、入學、出行、移徙、種蒔等に吉日也、訴ごと争論などには惡日なり。

納 此日は天帝、寶庫に物を收むる日なり、ゆゑに納と號く入がく、婚禮、家造り、移徙、萬の物を買ひ納む等に吉日なり。葬禮、出行、はりさう等には凶日なり。

開 此日は天帝使者をつかはして險しき道を開き、諸道を通ずる日なり、依つて開となづく、諸藝を學び、出行、わたまし、下人を抱へげんぶく、婚禮、庫開等は吉日なり。葬禮其ほか不淨のことに用ふべからず。

閉 此日は天地陰陽閉塞といひて、陰陽の氣をとおち塞く日なるゆゑ閉と名づく、堤をさづき、池を埋め、穴をふさぎ、墓をたつる等には用ふべし。其外萬の事には用ふべからざる大惡日なり。

土公神の解

曆に「春はた、夏はかど、秋は井、冬には」と記せり、抑 土公

神は土を守る神なれば是を敬ひ祭るなり、家内にとりて竈を土公神と祭り、土の徳を崇む、是を竈神とも荒神とも、申せり、決して猛惡の神にあらず、五穀百菓土の徳によらずして生ずる謂れなし、人間の生を保つもひとへに土の賜なれば、曆の始め右の如く記されたり。年中松神を立て清らかに祓ひ清め、朝暮燈明を捧げ家内安全、商賣繁榮を祈るべきなり。刃物をけつして近づけず不淨の物をおくべからず。

天一天上の説（日遊神の事）

○天一天上へ昇給ふ日なり、則ち地星の靈也。其臣下に日遊神と申すあり天一天上の間は日遊神地を守る、此神人間の家に住するゆゑ、天一天上十六日が間、家内掃除して清淨にすべし。家を毀ち造作することを忌むべし。天一神癸の巳の日に天上し戊申日まで十六日天にあり、此間は天一神の方位障りなし猪狩、鷹狩、川狩等を深くつゝしむべし。己酉の日より下界へ下り四十四日間四方を廻り、此方にむかひて軍陣をいだせば弓折れ産婦はむかへば死するといへり、おそれつゝしむべし。天一神地をめぐる方は庚戌日より甲寅日まで五日が間良の方、乙の卯の日より巳未日まで五日が間東とあり、庚申の日より

○上よりくるもの流星といひ、下よりのぼる物を流星といふ、横にはしるものを奔星といひ、最も大なるものを流火といふ。其實は一體の火土の氣なり。

流星の雜占

○流星東より西へ飛ぶ翌日雨あり○東より南へ去るもの晴なり○東より北へとぶもの曇なり○南より北へ移るは明日霧なり○南より西にうつれば秋霜の降ること早し○南より東へうつれば旱なり○西より東へとぶば二日の内に風あり○西より東へ飛べば明日大風大雨なり○西より南へむかへば其とし水旱す○北より南へうつれば明日曇りて雨なし○北より東へうつれば連日雨あり○北より西にうつれば雨田地を濼といふ○按ずるに夏は流星しげく四方に奔走一ツの流星をもつて晴雨を定めがたし、其専ら飛ぶ方向をもつて占ふべし流星多ければ大體旱なり、又流星ある翌日はかならず晴るなり。

天漢の説

天漢の説さまざまあれども信じたし、熟考

ふるに是れ小屋の集り隠れて顯はれざるものなるべし、其星のかず無數恒河砂にして極めて微なるゆゑ形をあらはすことあたはず、衆星日の光をうけて並び合ひ其光合して一線の白練の如く又河水の流るゝが如くみゆる故に天河といふ、後世水の精といふ、附會の説なり。

虹蜺の説

異名、蜺、蜺、長橋、天弓、虹蜺は日の光、雨の脚を射るなり。ゆゑに朝には西に立ち夕には東に顯はる、試みに東にある時、人西に向ひて水を噴きて霧の如くすれば日の光を射て虹となる、日西にある時東に向つて同じくすれば吐水は小なゆゑ、虹も又小ながら顯はる、朝に人西山の麓より虹の起るをみる、其山を過ぎて後の山にいたれば又後の山麓より虹起るを見る、然れば虹の定所はなく只人の目に隨ひ、雨の脚に日のうつるものなり。凡そ虹の東西にあらはるゝは常なり。然れども冬十月頃時南北方に降るとき南に有る日の光を照すゆゑ、人日と雲との間に居て虹を北方に見ることあり。然れども

甲子日まで五日が間巽にあり、丙寅の日より庚午日まで五日が間南にあり、辛未日より丙子日まで五日が間坤にあり、丁丑日より辛巳日まで五日が間西にあり壬午日より丁亥日まで五日が間乾に有り、戊子日より壬辰日まで五日が間北にあり。

犯土の説

犯土の事、説々あれど只土を犯すことを忌む、庚午の日より、七日が間大犯土なり、戊寅の日より七日が間を小犯土とす。中の丁丑日を間日なりとす。

社日の説

二月八月二度あり、唐土にては二月を春社といひ、八月を秋社といひ田の神五穀のかみを祭り同志の人々集會して酔ひてかへること詩文におほく見えたり。春社は春分に近き戊の日、秋の社は秋分に近き己の日に有り、本朝にては畿内にては野社講或は春事秋祭として祝ひ祭るは野社神稷神を祭る也、按ずるに詩歌連誦の友を結ぶを何某社といふも、社日集會する中華の風に倣ひしならん。因に曰ふ、春の社日

去來するものなり。

八專の説

八專といふは、十二日の間に比和とて木と木、水と水、重るは八日あり、故に八專といふ、壬子日より、癸亥日まで十二日の間を八專といふ、此中丙辰、戊午、壬戌、癸巳、此四日を間日とす。是れ比和せざる日故なり。餘は上の十干と十二支と同氣なり。たとへば壬(水)子(水)甲(木)寅(木)かくの如くに干支の五行重なる日八日あり、間日は干支の五行異なり、たとへば丙(火)辰(土)戊(土)午(火)かくの如く五行一ならず、依つて間日といふ。陰陽交泰するゆゑ多くは雨天なり、一年に六度ありて七十二日なり、照入八專、降八せん、ふりりり八專、照八せん、八專の入の日照ならば、雨とし、八せんの入の日雨なれば日和とすれども、八せん次郎とて二日目が日和定めなり。二日め雨なれば果して霖雨なり。

十方暮の説

十方暮は十干と十二支の五行と相尅するものなり。八專の裏にて甲申

春夏秋冬の如く冬東西に虹なきは冬は太陽の行くこと甚だ早し。故に大地の間の遊氣を帯びること殊に厚きゆゑ雲を照らす力いよく微なるをもつて虹なきなり。

虹蜺の雜占

およそ虹あらはるゝ時は陰雨あり、もし西の方に虹あれば早とす、其色若白きは多く雨なり。若し赤色なるは早なり○にし東に下より上るるよに見ゆるは翌朝に雨降るなり、又西に虹上るよに見ゆるは翌朝雨なり○雨久しく降つて晩に虹を見れば必らず晴なり、はれ久しくして朝に虹を見ればかならず雨降るなり○正月に虹あれば八月に至りて米の價高し○二月に虹を西に見れば五穀の價高し○五月に虹あれば大豆小麦ともにたかし○六月の虹は麻の價高し○七月の虹は米の價高し○八月の虹は來春に至りて粟の價高し○

九月の虹は麻或は五穀の價高し○十月は吉凶なし○十一月の虹は大豆高し○十二月は吉凶なし。

雲の説

それ雲は山嶽の水氣なり、山の地に有るは木に濃霧凝結有るが如し、即ち地中陰陽の結ぶる所なり。故に地中の氣を是より吐き出し吸ひもし雲風もみな是れより出ること猶人の身中の氣を口鼻より吐出し吸込むが如し、水氣にて遠く望めば形あるに似て近視見れば際々として霧の如くさらさら形なし、大體雲に雨水多きは暗く重くして昇ること低く、雨水なきは白く軽くして昇ること高し、故に黒雲高き嶺にかゝるは雨の徴とし、白雲青天に行き晴のしるしとするなり。雲の色も形もさまざまあり、凡そ雲薄く輕きは日の明り通るゆゑ白くして高きにあり、厚く重きは日の光通らざる故黒くして低きにあり、試に朝日に向うて湯氣を立て見るに五色あると全く同じ、是を以ても雲は水氣にて日の影をうけてさまざまの色を見ることが明かなり。

の日より癸巳の日まで十日の間を十方暮といふは、十干十二支暗尅して陰陽の氣和合せざる日なり、たとへば甲(木)申(金)是れ金克木なり、又癸(水)巳(火)これ水克火なり、此の如く八日まで相克す。たゞ丙(火)戌(土)是れ火生土と相生し、己(土)丑(土)是れ土旺土にて十日の内わづかに二日相克せずと雖ども、是れ又平なる日にはあらず、陰陽不和の時候なれば結納ををさめ、相談事など忌むべし、十方暮の終りは癸巳の日にて天一天上の日なり。

彼岸の説

彼岸は曆家の選し日にあらず、故に唐山の曆にはひがんと記さず、佛家より言ひ出せし説なり、彼の極樂の岸に至るとの義を執りて彼岸とは記されたり、此時候は天氣和暖にして晝夜等分にて萬人際ある時なれば、方便の説をもふけ、慈悲心を勸むる教化の一ツなれば、曆家になき日として看破るべからず。春は二月節より十一日目を彼岸の入とし秋は八月の節より十五日めを入とす、各七日づゝなり。○或人の曰く明曆の頃勢州渡會の御師より初めて民家へ曆を賦りしに

殊の外入用かゝりしゆゑ、兩三年にて相止めたるが、農家には彼岸に種物を蒔きて大に利潤を得しかば、農家より御師に頼みて今に民間へ曆を御師より賦ることゝなりしとぞ。

庚申の説

庚申は神道にては猿田彦大神、佛家にては青面金剛其道々にて名を立るといへども、神佛と名は變れども本地は庚申を祭る。故は萬物の濁りを革むる日なるゆゑに男女交合なさしめざるは精をもらさず、靜に陰陽の氣を革め變るをまもらしめんととの教なり。庚申待とて酒宴を設け、よもすがら飽食大酒をなし、不養生をせよとの教はなし、此類の思ひ違ひ多し、能々慎むべし。

八十八夜の説

立春より八十八日目なり、世に餘波霜とも別れの霜とも云うて此節に至りて降止とす。又八十八は米の字の形なれば農家には此日苗代を管み綿種をまろし、殊に此日を祝ひ重んずるも穀雨の節なればなり。

半夏生の説



雲の雜占

○雲の形魚の如く又は龍の如く其色青く或は黄にして潤ひ日輪をおほひ暗き物雨風おしるしなり○雲の形輪の如くなるは大風あるなり其雲折々消ゆるは風少し吹くなり○空にいたの如き雲有りて動かざるは霰降なり○雲の頭あかき色あるは晴のしるし也○雲の色火の如くなるは早のしるしなり○雲みだれて集るときは其方より大風吹くなり○雲に五色の色あるは雷電又は雹の降るしなり○雲黒雲牛の如きは暴風なり又馬の如く走るは大風なり又舟の如きは雨なり○晴天に白雲魚の鱗の如きは三日の内に雨あり。

風の說

莊子に曰く大地の嘘氣其名風とす、唯是れ作ることなし、作れば即ち萬の竅を怒號云々、天地の間氣充ち塞がりもし大地の嘘氣起らざる時は静にして只氣のみなり、然るを陰陽の策箭をもつて此氣を吹揚れば天地の間に充塞ぐところの氣是れがために押壓されて山川草木千の穴萬の竅およそ形質あるものに中り、

風の雜占

○春風熱く夏風寒く秋風冷え冬風暖かなるは皆疫癘流行す○冬風土烟を立て空へ上り雲と交り、色黄又は紅紫なるは吉兆なり、黒色又は赤色なるは火災の兆なり慎むべし○夏の南風風晴なり○秋の西風は雨の徴なり○冬の南風は二日漸降るしるしなり○潮又は水温むときは大風のしるしなり、其故は寒熱たむかひ風生ず地中より陽氣上るゆゑなり○海水

半夏生は五月中より十一日目なり。藥種の半夏は春生ず、別に半夏といふ。艸、此節葉白くなるなり、濕陰生ずる頃なれば病を得んことを恐る、故、此日男女交合を忌み葎を食せず、不淨の事をつゝしみ、縁談の約束すべからず○因にいふ、畿内の民半夏生には餅を搗き團子を製して半夏生の祝とす、是れ稻なへを植ゑをはり、登りを願ひ祝ふなり。

入梅の說 (并に出梅の事)

入梅の說甚だ多くして、いづれを正説と知り難し。今の曆は本草綱目の説を用ひ、五月節の後、始め壬の日を入梅とし、六月の節の後壬の日を終りとす。前後三十一日目に明なり。此節梅の實熟するをもつて梅雨と號く。又は此頃の雨に物皆徴だすゆゑに徴雨とも書く。按ずるに四月に純陽昇り極まり、此頃に至りて變化し、陰雨となつて降り是れ陽極めて陰生ずる天地自然のわざなり、たとへ霖雨なく乾入梅なりとも芒種げしの間は地に雨濕行はるゝの時候なれば、物みな徴を生ず、人の身にも濕氣の病を受けざるやう、養生すべきことなり。梅雨に徴たるものは梅の葉を煎じ、其汁にて洗へばおつる物なり。

土用の說

夫れ四時三百六十五日有り、奇を四ツに分くる時は各九十一日餘り、此内十八日二十六刻は土を主とるこれを土用といふ。殘る七十三日五刻づゝを春木夏火秋金冬水と四ツに分けて主とる、木、火、金、水、の四ツは土より出て、又土にかへる、土は五行の根本なれば、四時に分ち春夏秋、冬、の終に皆土用あり。土用は土の氣さかんにして變化する時節なれば、此間土ををかすことを慎み鍼灸をいむべし。若し土用中病ありて鍼灸をせて叶はざる時は間日を用ふべし。

春の土用の間日 巳、午、酉 夏の土用の間日 卯、辰、申  
秋の土用の間日 未、酉、亥 冬の土用の間日 卯、巳、寅

右土用の間日を今の曆に記さざれば土用の間日はなしといふ説あれども、古代の曆には是を記せり。周天の數は一年三百六十五日有奇なり、日の廻りは是に後れて三百六十日、月は又日より後れて三百五十日餘なり、かるがゆゑに月に大小あり。土用も十八日となる理なり。詳しくは後の閏月の所を見て知るべし。四時土用の中別して夏の土用を專一とする、故に人々の身に害

泡多きは大風の微なり○人の頭熱あるは大風のしるしなり○朝夕の外に蒸頭に暗くは風あるしるしなり○牛地をかき或は空むかひて首を上ぐるは大風のしるしなり○獸の皮を敲き其音より唯しきは風吹くしるしなり○蜂の群り飛は風吹くなり○大風忽ち吹き止むは必らず吹き返し風の有り、おのづから止むは吹き返しなし○東風急に吹くは夜晴るなり○東南の風は雨なり、未申の風は雨なり、戌亥の風は雨なり○南風熱して萬物を長ず、しかれども温かすて魚肉を損ず、北風は寒にして萬物を押ゆる、東風は温にして萬物を生ず、亦南風は温にして萬物をかびるなり○南風向ふ國は乾より地風を吹き出す、北に向ふ國異より地あらし吹くなり。

### 雨の説

雨はすなはち陰陽の氣和し結んで雨をなすなり。其原は大地の水氣にて雲となり昇り、半空にいたり上天の日温氣に冷降る中にて凝りて蒸立てられ、非々と沸き千萬の螺蟻の如くなり。變じて忽ち雨となり降るなり、故に地氣上騰の雲は天氣下降の雨なり、朱子の曰く雨は陰陽の氣の蒸してなるなりと。たとへば飯飯に蓋あれば其氣蒸騰して霧となり下ること淋瀝たるが如し、又夏日の驟雨の如きは炎熱山の陽土を照らす、その氣山中に鬱集してよく山陰の水を吸へば水氣熱に乗じ風雲を發して上昇し、須臾して夕立となる。此熱氣の鬱集して水氣を吸ふの理は今試みに紙を小桶のうちに燃し、これを盤水に蓋へば火氣内に迫りて其水を吸ふこと生氣有るが如し。又夏の雨の田の畝を隔て、降ると降らざるは夏の冷降高きゆゑに炎熱の水氣を吸ふこととするは冷降高きゆゑに炎熱の水氣を吸ふこととするべく雲氣地中より昇るかたち細く長く、雲の頭尖りて雲の脚狭く龍の昇天するにひとしく直に立昇る、此雲すなはち雨と變じ雨も又狭く且はげし、故にすこしの間に降る所と降らざる處と有り、又秋冬の間は冷降低ければ、水氣の上ることゆるやかなり、故におのづから雲も平かにひろく此雲雨と變ずる故、雨もおのづから廣く降りて夏のごとく烈しきことなきなり。

### 雲霧の説

あらんことを恐れ諸國の官社に名越の祓とて六月晦日に芽輪の作り人形を流して祓をするなり。名越は夏越の略語なり、夏より秋へうつ時候なれば、身をつゝしみ房事を禁じ、身の養生をなすべきなり。

### 三伏日の説

夏至に入つて第三度目の庚の日を初伏といひ、四度目の庚の日を中伏といひ、五度目の庚の日を末伏といふ庚の金氣故夏の火伏せらるゝ故。此三日を三伏と云ひ、恐れ慎しむなり、此日物の種を蒔き病を療じ、旅立、男女房事、和合相談事に用ふべからず。

### 二百十日の説

二百十日は立春より二百十日めなり。此節暴風吹く事あり年の遅速により二百十日前に大風の吹く事有り、七月、月は申酉にて金氣つよく旺の時にて、處暑の残火白露の節金氣を尅し、火と金と闘うて怒撃の風を生ず、是れにより海上の舟人も此頃を深くおそれ慎めり、農家にも二百十日頃中稻の花盛り、二百二十日頃は晩稻の花盛りなれば大風にて稻の花を散さん事を憂うるなり。此節より放生會頃迄の風を深く恐るゝなり。

深く恐るゝなり。

### 冬至一陽來復の説



十一月の中を冬至といふ。夫れ十月に六陰きまり、十一月にいたりて地に一陽生ず、是を一陽來復といへり。冬至は日輪行道の初めにして唐土にては此日先祖を祀り、大に祝すとかな。日本にても尊貴の御家に冬至を祝ひ給ひ、又儒者醫師の輩其鼻祖を祀り、朔日に冬至あれば公に於ては分けて祝ひ給ひ、非常の大赦行はるゝ事あり。茲に不思議の一術あり。冬至に一陽來復のいたるを試るには冬至より二日まへに堅炭と乾きたる土とを等分に紙に包み、少しも輕き重きなきやうに木の兩端にうけ木の真中に糸をつけ、風のあたらし簷下に釣りおくべし。冬至にいたり一陽生ずる時節には炭の方おもしろくなり、四月の夏至にも此の如くすれば一陰生ずるには土の方おもしろくなり、是れ天地陰陽の不思議ををしるべし、

雪は冷物なれども寒き時は降らず、季春より仲夏に至る間に降ることあり、是れ如何となれば既に雨の居に説くごとく地中の水蒸気となり、昇るは是れ炎熱の地の地蒸気を故なり。天地の氣三際あり中に下は地の温に近く、上は日の熱きに近く、中を冷際と號し、極めて冷えるなり。此の冷際秋の季より冬春の初までは至つて低く地に近くして地中の温氣を冷すにより、上昇する雲も力微くして雲の脚ひろく遅し、ゆゑに此雲雨となりて降る時も又緩かなり。夏は冷際高く地より遠に遠し、故に地氣を冷すこと能はず、日の炎熱地中に鬱がりて地下の水氣に迫り、雲となり昇るときは、雲頭尖り細く勢ひするどくなり、儲て春の季より仲夏の間冷際高からず、山下の雲も未だ解けず、然れども雲氣は春夏と昇るを得て鋭くなり、氣勢是從ひ雲氣纏りて石を飛ばし木を抜く斗りにて山谷に飛る所の雪水是れが爲に巻き上られ飛びひるがへる間に破れくだけ降るものは雪なり。故に山の遠き所も風是れを載せれば何國にても雪降るなり。又嚴は冬月雨と雪と雜り降るものなり、凡そ陰氣壯なれば雪とな

り、適々陽氣來りて雪に迫る時は、雪半はとけて雨となりて降るを嚴といふ。

### 雪の説

異名、六出、雪花、玉屑、六英、雪はもと雨なり、寒氣甚だしき時は空中に寒風雨を結び凍りして雪となる、然らば寒氣甚だしき時は雨なくして皆雪なるべきに却つて雨のみ降りて雪の降らざることあるは是れ寒氣の中に火氣を含む故凍らざるなり。朱子曰く雪は唯雨を結んでなるや、雨は寒氣に遇うて凝物なりといふに北國日光の溫暖に遠き處は早く雪降るなり。周伯曰く雪は雲の水れるなり、雲は地中の水氣温氣に蒸されて立昇るなり、日に映すれば五色をなす、ゆゑに旭に向ひて湯氣を見れば五色に見ゆると同じ理なり、此湯氣を子細に見れば微細なる水の粉なり、これをもつて推量するに雪も又微細かなる白き粉にて雲の水たるなりとの説宜なり、按ずるに冬の日月々暖なる日陽氣地を蒸して水氣立昇るもの天上冷寒の處に至り、凍りて雪となり再びふるなり。此故に雪の日は雨の日と同じく多くは暖かなれど其嚴しく寒は寒

今日天晴、長閑なれば來年麥作よし、南風吹くは翌年早なりといへり都べて祝ひ事に用ひてよろしき日なり。

### 節分の説

節分は立春に入る前日なり、冬の陰氣終り、春の陽氣きたる意なり。故に除夜ともいふ。此夜菽を打ち悪鬼を拂ふ、是れを追儼といふ。禁中には節分の季節に拘はらず、大三十日の夜此事を行はるゝなり。昔は陰陽寮祭文をよみ、上卿以下是を追ふにおそろしげなる鬼の面を被り手に循矛を持ち四門を護り、殿上人は桃の弓蓬の矢にて御殿より射はらふ。是等を象り菽を打つて鬼をはらふこと始まれるにや。又追儼の事周禮論語にも見えたり。按ずるに陰氣を鬼とし、陽氣を福とし、大豆は壯健の義に表して節分の夜に菽を打つて陰氣を退け陽氣をひかへる意なるべし。

### 閏月の説 (異名、歸路、成歳、積分、陽餘)

それ周天の廻り二百六十餘度を日輪一年の間に一周す。此日數三百六十五日有奇なり。これを十二ヶ月にわれば一ヶ月の日數三十日半強となる、三十日半強を一ヶ月とすべけれども、日月合朔する朔日をもつて月の初と定むるゆゑ、月に大小出来るなり。一年の定め大七ヶ月小五ヶ月合して三百五十五日、是を十二ヶ月にわれば一ヶ月の日數凡二十九日半なり。此故に一ヶ月に凡そ一日強づ、餘る、此日數つもりて閏月となる。故に三十三ヶ月めに一度閏月あるなり。尤も閏月は別に節なし〇閏月を早くしらんと思はるゝ曆の冬至の日を見て其日より後の日數ほど其月よりかぞふべし、是れ則ち閏月なり。

### 曆の下段日並吉凶の解

(〇吉日の印●悪日の印●半吉半凶日の印)

〇齒固めには正月の鏡餅を食する祝言なり、齒は齡と同じ義にて、正月三ヶ月の中大吉日をえらび鏡餅を食して齒を固め、齡を延ぶる事をいへり。  
〇着衣始とはあたらしき衣服装束を着始める日なり。右二ツの事は殿上の御行ひなりといへども、食服は人間肝要の道なれば平人たりとも祝ひ壽くなり。  
〇ひめ始め。説さまざまあり一説には姫はじめとて女の縫績をはじめ

風交るゆゑなり。

雪の雜占

冬の雪三尺に滿れば來年豊年なり(但し京一  
般にて云所)凡て冬雪降ること多ければ年美  
しく人和すといふ。○正月に雪ふつて三日の  
内に消えれば其年豊作なり、若し七日の内消  
えざれば秋穀みのらず。○二月に雪降つて七日  
消えざれば百葉實のらず。秋穀實らず。○三月  
に雪降つて日を凝て消えざれば秋穀熟せず。○  
朱子曰く雪は豊年をなす、其故は陽氣を凝結  
んで地に在り來年いたりて萬物を生ず、又  
冬の雪地に布けば潜み居る蝗寒氣に堪へず死  
す、故に來年豊年なり、されば雪を豊年の貢  
ともいへり。○熊深山を出づれば雪降る兆なり  
○天黃ばみてどみるは雪のふるしるしなり。

霧の説

霧は雲と同じ物にして質重ければ立昇らんと  
欲して昇ること能はず、只山の隈、谷の間に  
充滿して霧となる、遠く望めば煙の如く近く  
みれば濛々として咫尺を分たず、只衣服を  
沾らす風あれば霧とならずして吹き散る故に

深山幽谷の風氣の通らぬ所に多くあるものな  
り。○霧あれば多分雨なり、夕霧は晴れか風  
なり。

露の説

露は水土の濕氣の上昇するなり。此氣至つて  
微なり、日の中に昇るものは風或は陽氣の爲  
に迫消され露をむすぶこと能はず、夜に至り  
昇るものは冷露にいたり、變じて露となり降  
るなり、雨露は萬物を生じ育つるものなり。  
尤も露ふべし。

霜の説

異名、天花、天英、鏡華、靑女  
霜は秋の季初めて降るものにして其元は露な  
り、秋の夜の間に地氣昇り露となりて降り、  
清冷の氣を結んで霜となるなり。  
○夫れ萬物を育て養ふは露、又萬物を枯し傷  
ふは霜、元是れ一物たりと雖も其所爲此の如  
く雲壤のたがひあり。性は善なる人間も或は  
善人となり、又は悪人となすこと露霜の變態  
と同一理なり、慎みずんば有るまじきこと

る日とし、一説には馬を走らして産神へ參る日なる故に、飛馬始めと  
書くといひ又陰陽家には糶糶始めまたは火水始めとかく、馬に乗る儀  
にはあらず、糶糶とは粥のことなりとて何れが是なるやしりがたし。

但しひめ始めは馬乗初とは別なり。  
○種かしは稻の種を水にひたす事なり。  
○さびらきとは田へ植をむることなり。  
○穂かけとは稻を刈りはじむる時に先づ初穂を結び田の神及び五穀を  
植初めし元祖を祭るなり。  
○大明日禮記に曰く、大明生於東一月生於西一陰陽之分夫婦之位也。  
此義をとりて大明日といへり。但し大明とは日輪のことなり、陰陽和  
合の大吉日ゆゑ造作、移徙、出行、衣服を裁ち嫁娶等によし。たとへ  
滅日没日往亡天火狼藉地火などの惡日にあたるも此大明日にあへば  
少しも恐るゝ事なく用ふべし。是れ最上の大吉日なるゆゑなり。  
甲 子 乙 丑 丙 寅 丁 卯 戊 辰 己 巳 庚 午 辛 未 壬 申 癸 酉  
己 丑 庚 子 辛 未 壬 申 癸 酉 甲 子 乙 丑 丙 寅 丁 卯 戊 辰 己 巳 庚 午 辛 未 壬 申 癸 酉  
○鬼宿日、此日は二十八宿の中においても最上の吉日なり、萬よし、  
最も毎月一日づゝあり。

Table with 2 columns: Date (e.g., 正月 十一日) and Day (e.g., 九月 九日). It lists various dates and corresponding days of the week or lunar calendar.

右よろづに障りなき吉日なり。  
○母倉日、萬よき日なり。天より萬物を恵み育つること母の子をあは  
れむが如きゆゑ母倉といへり。  
春 亥子 夏 卯寅 秋 戌巳 冬 酉申

霜の雜占

○春の霜は草木をよわらす○夏の霜は草木の葉を破る○秋冬の霜は草木の根を破る○諸木再び花咲くは來年の春霜大に降るなり○三日續きて霜降らば必ず雨降るなり朝霜俄に消えれば雨ふるなり朝霜多くして漸々に消ゆるは午後温かなり

霞の説

霞は日輪の出入する時うすき雲の日の光を斜に受けて色を顯はすものなり、されば時の早き遅き或は寒暑に依つて日の光を受くることの厚き薄きに依つて色も又種々と替るなり霞は雲と同物同種にて地中の氣もつとも薄きものなせるなり、但し此薄き雲も正面より日光映ずれば透き通つて色白くし、前の雲の處に説きし理と同じ、見合して其理を知るべし、又歌によむ春霞は地上の遊氣にして山陵原野より昇る所の陽炎なり、右の霞とは別種なりと知るべし

霞の雜占

たとへば春は木なり、木の母は水なり、故に春三月は亥子の水をもつて母倉とす、夏は火なり、火の母は木なり、故に寅卯の木を母倉とす、十千を用ひずして十二支を用ふるは十二支は地なり、地は萬物の母なり、故に地の十二支を用ふ、倉はくらとよむ、萬物は地より生じて地に藏るにより倉に藏むる意にて母倉といふなり。母倉十日の中、亥の日は重日なれば婚禮、葬禮、佛事には忌む、其外にはさわりなし。  
○天赦日、最上の大吉日なり、萬よし。  
春 戊寅 夏 甲午 秋 戊申 冬 甲子  
右毎年の天赦日なり、通鑑綱目に曰く、天萬の物を養ひ育て、其罪を赦す日なりとぞ。何事に用ひても咎めなし。皆干支相生の日なれば吉日とすること宜なり。此日悪日にあたり逢事もまれなり、六月の中にあたるときは黒日にあたるといへども天赦のちからにて黒日にさはりなし。  
●五墓日、此日は十二運の中の墓の運にあたる日なり、前にいふ如く五行皆生死有り、其葬る所を墓とす、右に五墓日といふ。店開き、商ひはじめ、其外末の榮を祝ふ事には用ふべからず。又土を動かすべからず。

○節○季に交へる日の平旦霞の氣あつは其節の内風雨順なりと知るべし、朝霞は雨なり○夕霞は晴なり○霞の色青く明かならざれば其年洪水有るなり○霞短く彩なれば三日の内大雨あり○霞牛の形たる形如きは翌日辰の時頃より大風あり、蛇の形の如きは飢饉のしるしなり

地震の説

凡そ地は原氣の流注なり、衆りて形質をなすものにして、天の中央に東が元然として空に浮みて落す、北極南極中心にわたりて鐵め定むるなり、或人の曰く天は靜にして動かず、地は動いて轉ず、たとへば舟に乗りて往くに舟は行けども、ゆくとも覺えず却つて岸を見れば岸移りて行くが如し、天の動くが如く地の動かざる如く見ゆるも此理なりと西洋の説にも是を言へり、其説に曰く日輪は地球の中心となり是をつむ、扱て地の巡ぐる道は金花二星天の間にありとも右へ旋ぐり一息も停まることなく、日の外を一周する如く、三百六十五日四分日の一其間に自然轉ずること一回百刻にして晝夜をなす、其運速く疾

戊辰日 壬辰日 丙辰日 辛丑日 乙未日  
●歸忌日、曆例に曰く、歸忌は天棊星の精なり、此星天より丑寅子の日に地にくだり人家の門に居て人の家に歸りきたるを妨ぐるといへり依つて此日は出行、移徙、婚禮、國入等にいひ、旅より家に歸るも此日を忌むべし。  
●復日、復はかへると訓みてなせし事の重なる日なり。故に吉事には大いによし、惡事には大に凶るし。よき事にも嫁娶り掣とり、其外縁談には大にさらふ日なり。此日葬禮を出すべからず。  
●重日、是も復日と同じく重はかさなると訓みて、嫁娶り掣とり、葬禮など重なる事には忌む。曆にはちう日と有るゆゑ中日と心得るは誤りなり。  
●血忌日、梗河星といふ惡星の精なり、鍼灸を忌む、活ける物を殺し其外血をながすことを大いに忌むべし。  
●凶會日、孤陰、孤陽、相闘うて衝破り、陰陽の徳を失ふ日なれば大惡日なり。婚禮、神事、佛事、種蒔、金銀取引、其餘萬に忌むべし。  
●十死日、曆には十……と書けり、大殺日とて大惡日なり、善惡とも用ふべからず。たとへば葬禮、婚禮、佛事、醫師をむかへるなどには

なりと。按ずるに此説はなほ奇怪なり、も  
し此の如く地の旋ぐるこゝ速かならば何んぞ  
人知らざることあらんや、假令岸は動く如く  
見ゆるとも又船の動くも知らざることなし、  
風波荒きに船をやるに千里一瞬、人恐怖せざ  
るはなし、抑も天は軽くして清し、故にうご  
くこと速なり、地は重くして濁る、故に静か  
くして動かず、これ不朽の論にて故に變ずべ  
からず、今地體を仔細に考ふれば一大塊りに  
して、例へば胡桃子の如く其低き所は河海と  
し、高き所を山嶺とし、平らかなる所を平地  
田圃として人住居す、此間透間あつて水火氣  
の三行交々通じて止まず、偶々此氣中に閉  
閉伸んと欲して伸ぶること能はず、互に相迫  
りて怒り激む故、地是が爲に震ふ。是れ地震  
なり。凡そ地中火道の多き所あり、火道とは  
地中に火脈あり、此火脈に水觸る、時は湧水  
湯となる、是れ温泉なり。越中立山、筑紫阿  
蘇山の如き地獄と稱ふる所は火脈の地上へあ  
らば、是に硝石硫黄の交りて自然神遊なり  
又水脈多き地あり、又山多く或は海多く、堅  
土軟土の差別ありて地震も又地によりて變れ  
り、堅土の地は閉閉の氣堅土の爲に固鎖られ

かたく忌むべし。  
●天火日と地火日、兩日とも五行の氣互に克殺する日なれば大惡日と  
す、天火は棟上げ、家根葺などを忌み地火には礎をすゑ、柱を立て種  
蒔など其外萬事に用ふべからず。  
●黒日、一名受死日ともいふ、曆には●此の如く記したり、よつて黒  
日といふ、曆の中にも取分けて惡日なり、病人に醫師をひかへ、又  
は醫師をかへ、鍼灸などにゆめく用ふべからず、其外萬事し。  
正月戌 二月辰 三月亥 四月巳 五月子 六月午  
七月丑 八月未 九月寅 十月申 十一月卯 十二月酉  
●没日と滅日、此日は天と日と月との巡りのおそきと速きより出でた  
る惡日なり、萬に忌みはかるべし。此兩日がつもりく閏月とな  
る。(口傳)  
●往亡日、天の荒神の守る日なれば大惡日なり、此神に三つの名あり  
往亡、天門、天從、是なり。立春より七日目と三月の節より十四日目  
十二月の節より三十日目往亡日とす。往いて亡びると訓めば此日遠  
く旅に出て軍を出だすに忌むべし。しひて用ふる時は往いてかへるべ  
からずと謂り、宋の武帝慕容趣といふ者を攻めるとき往亡日に出陣せ

伸んと欲して伸ぶること能はず、怒激益勵しく  
一旦は發怒して震裂くにいたる、依つて堅土  
の地は地震烈しく多し、軟土の所は氣通じ安  
く閉閉すること少なきゆゑ地震も又少し、火  
道水脈多き地は地震おほくして川塞り難埋り  
或は山を崩し、海を湧し、石を降し、人家を  
飛ばし、近くは弘化四年末三月二十四日雷州  
善光寺大地震ありて其邊り十有餘里人居多く  
損じ、犀川塞がり一ツの大湖をなし、三十日  
に又々大に震ひ、それより大小の地震翌年  
までも震ふ人皆な珍事とす、是れ堅土の地は  
地震烈しく甚だし、水火の氣十分壯んにして  
相激すること尤もつよきゆゑなり。又北極に  
近き地は寒冷にして火道壯んならず、ゆゑに  
地震少く、赤道の下は大陽の氣勝ところ  
して地中の氣常に吸はれて閉閉すること少なし  
故に地震も又少し、周伯子曰く地震の常なる  
もの多く晴雨のかけりめの際に有つて、これ  
を驗みるに震音雷の遠く地中より起るが如き  
物は其音大なりと雖も地表の動くこと却つて  
弛し、是れ伏陽の地中に發し盡すこと能はず  
地中に止り水氣を蒸し雲をなさんと欲するな  
り、此故に地震の音轟々として雷の如きもの

んと有るを諸將危み怕れて進み兼ねるを、武帝曰く朕往いて敵を亡ぼ  
すなり。是朕がための吉日なりとて遂に出陣し敵を攻亡ぼしたり。其  
外本朝にも日を選まず勝利を得たる例多ければ一概になづむべからず  
されども賢王名將の行ひと凡庸の者と同日には論すべからず、先づ忌  
むべきは忌みてよし。  
●滅門、大過、狼藉、是を三箇の惡日といふ、貧窮、飢渴、障障とて  
三惡神の守る日にて禍ひの根本とす。萬に用ふべからず、別して佛事  
に忌むべし。  
●地子日、此日半吉半凶なり。事によりて吉日となり惡日となる日な  
り。  
●歲下食日、此日は天狗星といふ惡星ありて、六十日目に一度づゝ人  
間界へ下り食する日なりといへり。奇怪の説なれども古くより言ひ傳  
ふれば忌むも可なり。  
子年 うしの日 丑年 とらの日 寅年 ひの日の日 卯年 たつこの日  
辰年 むすぶの日 巳年 むまの日の日 午年 つじの日の日 未年 さるの日の日  
申年 とりの日 酉年 ひのえの日 戌年 かの日の日 亥年 ねの日の日  
右毎年歲下食日なり、此内十干十二支相生して餘の惡日にあたらざる

は雨なりあるひは變じて風となる、又紛然として大に地震するものは震氣直に地表へ達して猛し、是れ伏陽發し盡すゆゑ地中を蒸すべきの氣絶えて雲を起すの緣なし。ゆゑに地震張く震ふは晴なりと。此説千古未發の確論なり。先頃京都大地震は文政十三寅年七月二日より大に地震し晝夜七八度より十度にも及ぶ其年より翌春も震へたり。諸人恐怖せしに、又信州の大地震は誠に未曾有の珍事なり、是等は地震の變なれば理を以て推し難しと雖も堅土礫土の生氣有るなれども、天地の間のごと一概の論は柱に膠のことはならん。○世に地震の圖として餘の脊に日本の圖を畫せ、餘の頭動けば東國地震し、尾動けば西國地震すと謂へり。是れ文殊伏龍の説によりしものにて論ずるに足らず但し或人の曰く大餘は雌有つて雄無く、雄は雌のみ有つて雌なし、故に雌は雄と交はる、地震は大地の變動にして至陰の動くものなり、故に至陰にして、雌ばかりなる餘を畫く、地震の神に象し者と謂り。地震の時咒のうた  
ゆるぐともよもや抜けまじ要石  
香島の神のあらんかぎり

地震の雜占

○大抵春夏溫暖の時節却つて連日寒く、或は冬寒の時却つて暖氣などは地震するしなり、春の地震は草木榮ふ○夏の地震は五穀を傷ぶる○秋の地震は疫病流行す○冬の地震は來年豊年なり、又子午の時病、丑卯未酉の時風、寅辰申戌の時雨、巳亥のときは旱すといへり。又昔より地震の歌として  
九はやまひ五七は雨に四ツひでり  
六ツ八ツなればいつも大風

雷の説

異名、天鼓、天瓢、霹靂  
雷は陽氣にして火に屬す、又秋の氣と冬の日は南にありて地上の遊氣日の光を覆ふこと多く厚くして日の光からうすく、地氣を蒸すこと少なし、故に地も又寒氣に閉塞して只水氣のみ蒸されて昇るゆゑ雷なし。春分の頃は日北へ行き赤道を巡り、地上の遊氣日の光をおふこと薄し、故に日地中を照すこと甚はだし、炎氣の下るもの、地中に止まり、一旦地中の水おして雲となし、昇らしむるにあ

日は障りなし。  
●時の下食、是は髮月代沐浴などを一時の間忌む時なり、一日忌むにおよばず。

Table with 2 columns: Month/Day and Hour/Direction. Includes entries for 正月未の時 (二月戌の時), 七月巳の時 (八月申の時), 神吉日 (上吉とも書けり), 入學吉日 (入學は學問の事に限らず), 歲徳日 (諸事に用ひてよき日なり).

曆の外日取吉凶

今の曆に日の吉凶記しありといへども、事しげければ悉く記さず。因つて諸書を參考し、今の曆に申したる日の吉凶を左に記し其要に備ふ。○歲徳日 諸事に用ひてよき日なり。

- 正五九の日のえ 二六十の日のえ 三七霜かの日 四八極みづの日
徳合日 是も萬に用ひてよき日なり。
正五九の日のえ 二六十の日のえ 三七霜かの日 四八極みの日
月徳日 これも萬に用ひてよき日なり。
正五九の日のえ 二六十の日のえ 三七霜かの日 四八極みの日
吉慶日 ○幽微日 ○萬徳日 ○活幽日
此四日は十二星の内の四星なり、諸事に用ひ十倍の勝利あり。
正月二月三月四月五月六月七月八月九月十月霜月極日
吉慶日 とりとら むたつうしむさうさる みいぬひつじね とりとら
幽微日 むたつうしむさうさる みいぬひつじね とりとら
萬徳日 とりひつじたつとりむさる むさるうしいぬう ねみ
活幽日 みいぬひつじね とりとら むたつうしむさうとり
儀日 ○保日(儀は上をせうじ保は下をたもつこの日萬よし)
儀日 つちのえね きのえたつ かのえとら ひのえとら みのえとら
保日 つちのえとら きのえとら ひのえとら みのえとら
三寶吉日 此日佛事心願祈禱等大吉日、壬午、庚寅、甲午、丁酉、巳酉を三寶上吉日といふ。丙寅、丁卯、辛未、庚辰、癸酉を三寶

たつては地中に有る處の硫黄硝石の氣もとも  
に吸はれて上昇し天火にうつりて雷となる  
なり。夫より日漸々に北へ行くなり。夏至大  
暑の時節には、日輪頭上より直に地をてらし  
日々炎熱の氣地中に鬱閉り其雲をおこし昇ら  
しむる時は、地中の硫黄硝石の氣を吸上ぐる  
こと殊に甚しく此硫黄硝石の火氣と同物とな  
りて衝きて雲中に迫り或は重なる雲に圍ま  
れ、或は冷濕の氣に束ね追められ一塊の火  
團となり出でんと欲して出づること能はず、  
陰陽磨滅して音を發し空中を迸りせまり、或  
は火氣雲の隙を發越て電となり、雲間に映  
じ、其形金蛇の走るが如く激怒のあまりに重  
雲を破り、烈擲擊聲して終に落る、其聲縮を  
裂くが如し、是れ則ち雷なり。故に雷のおち  
し跡には必ず硫黄硝石の臭あり、其雷と雷  
聲と一度に發するものは必ずおつる、其故  
は電は雷の用、硫黄は雷の體なり、體用一體  
となり火團となりて重雲に包まれ、激怒して  
雲を破りおつる時は其體用の見ゆるなり  
○又曰く電光ありて後にしばらくして音をば  
つするは雲氣の包む事微がゆる激怒もゆるく  
落ることなし。雲氣のつむこと薄きがゆる

に電光はやく雲霧を超えて雲に映するなり、  
又雷なつて電光なきは爆火の氣雲氣の包むこ  
と厚きがゆる電光の發すべき透間なく只雷聲  
のみ發す、又雷電とも同時に發すれども落さ  
るものは、或は上へ飛びあるひは横へさけ、  
或は斜にはつして、其氣空中にて消え散る物  
なり○又鑽雷といふものあり、是れは光こま  
やかにして火煙の如く空を響つて過るなり。  
○又霹靂といふものあり、是れは落ちて物に  
ふれても響ず、たい焼ちらすばかりなり。  
○法苑珠林曰く雷は元かたちなし、家の如き  
物有つて雷を好み地より出て、雷に従ふと  
此說據所あり、山嶽の陽に近き土地に怪獸ひ  
そみ居て、雷鳴の時雲氣に乗じて空に昇り、  
雷に従ひておつ、又雲に包まれ昇る、其故に  
雷のおちし跡には爪痕又は脱けたる毛などあ  
るなり。されども是をさして雷とするは非な  
り、又雷鳥といふ禽ありて雷鳴を喜ぶと云ふ  
こと古書に見えたり。

雷の雜占

春の雷始めて起る時其聲猛く烈しく、はため  
くものは雄雷なり、其年早多し、其音依々と

中吉日といふ、庚午、丁丑、辛巳、戌寅、丙午を三寶下吉日といふ。  
壬午は釋尊祇園精舍を建立したまひし日なり、庚寅は釋尊王宮を出  
で、檀特山に入りたまひし日なり。甲午は成道し給ひし日、丁酉は迦  
葉尊者に心印を傳へ給ひし日、丁卯は妙嚴王惡心を讎へし佛道に歸し  
給ひし日、丙寅は舍利弗誕生の日、又阿闍世王太子惡心を讎し佛弟子  
となり給ひし日、故に壬午の日は堂塔を建つるによし、庚寅日は出  
家得道によし、甲午日、丁酉日は佛法傳授五重相傳などによし、丁卯  
丙寅兩日は入戒するに吉日、其餘いはれ有れども略す。  
○小土吉日、四季ともに天赦日をはじめとして其後六日が間小土吉日  
として吉日なり。  
○天牢日、天牢神は帝釋の右の方に在す神官なり。故に此日奉公人を  
定め諸役を命ずるによし。  
正月み 二月ま 三月ら 四月み 五月つ 六月ら  
七月う 八月じつ 九月り 十月ら 十一月う 十二月ら  
○和合日、五和合として五つあり、耕作、船乗、和合の事によし、國家  
和合は家造、移徙等によし、人民和合は婚禮、娶取、養子するによし  
天地和合日 きのえとら 日月和合日 ひのえとら 國家和合日 つちのえとら

山河和合日 かのえとら 人民和合日 みづのえとら  
○天福日、天より福を下す日なり、種まきによし。  
正月、五月、九月 とらの日 二月、六月、十月 ゐの日  
三月、七月、十一月 さるの日 四月、八月、十二月 みの日  
○地福日、井掘、種蒔、土地神を祭るによし。  
正月、五月、九月 さるの日 二月、六月、十月、みの日  
三月、七月、霜月 とらの日 四月、八月、極月、ゐの日  
○七難即滅日、立願、或は出家得道によし。  
正月み 二月ま 三月じつ 四月さ 五月り 六月ぬい  
七月み 八月ね 九月しう 十月ら 十一月う 十二月つた  
○生家日、商ひ始め店開き等によし。  
正月み 二月ね 三月しう 四月ら 五月う 六月つた  
七月み 八月ま 九月じつ 十月さ 十一月り 十二月ぬい  
○如意日、如意日は意の如く成就する日なり。如意寶珠とて龍宮に罌  
粟ほどの珠あり、よく無量の財寶を湧き出だしむと、かるがゆゑに神  
佛とも寶として持ち給ふと謂へり、按ずるに是れ方便の説にして如意  
寶珠とは人々の善心を指して云ふなるべし。人善心をいだく時は萬寶



して大に震はざるものは唯雷なり、其年雨多し。○諺に曰く未だ雨降らずして先づ雷をきくものは船に乗る事を慎むべし必らず暴風起ること有りといへり。○雷聲烈しく鳴るものは雨大に降るなりしかれども晴早し。○雷聲終夜あれば雨三日雨止まずとぞ。

電の説

電は雷と同物にして其音あるを雷とし音なく光る物を電とす。前にもいふ如く春分の時分には未だ陽氣甚だしからず、ゆゑに硫黄硝磺の氣十分吸ひ昇る能はず、其氣薄きがゆゑ雷鳴をたさず、散じて雷光となるなり。されどももし重雲あつて是を包むときは陰陽相迫りて雷となるなり。

電の雜占

電を占ふに其光りの色黄なるは電ふるなり。○白きは大風のしるしなり。○晝夜閃きて三日を過ぎて止まざれば其土地宜しからず。○正月元日の電は人に災あり。○夏は電する方より風吹くなり、秋はいなびかりする方に向ひて風ふくなり。○夏秋の夜はれて遠く電する

は早の徴なり。○大暑の前後に電あれば早稲にわろく晩稲によし冬に電あれば大風吹くなり東にあれば大雨なり、南にあれば晴なり、西にあれば晴なり、但し早す、北にあれば雨風のしるしなり、四方にあれば大風大雨なり、空曇りて電あれば其光る方より雨風なり。

風雨の雜占

○冬寒じて群鳥とぶか、或は大に寒じて俄にあたふかなるは皆雪の降るしるしなり。○鳩鳴き鳥舞ふはみな雨の降るしるしなり。○鴉雀かけりとんで天に騒ぎ舞ふは風雨のしるしなり。○朝高啼げば雨又夕方に鳴けばはれなり朝夕の外に高なれば風吹くしるしなり。○鳩ないてかへす聲あるは晴を主どり、又返へす聲なきはあめのしるしなり。○鳩は空くもれば其雌を追ふ、又空晴れば呼びかへすなり、又雨ふらんとすれば雌を追ふなり。○鳩仰ひてなくははれなり、うつむいて啼くときは雨降るなり。

意の欲する如く來との教へなるべし。

正月、五月、九月、二月、六月、十月

三月、七月、霜月、四月、八月、極月

○長壽日、病を療し薬を飲み鍼灸などによし。

正月、五月、九月、二月、六月、十月

三月、七月、霜月、四月、八月、極月

○息災日、是も長壽日とおなじ。

春、夏、秋、冬

○延命日、是も右におなじ。

春、夏、秋、冬

○加護日、祈禱立願するによし。

春、夏、秋、冬

○吉祥日、婚禮、嫁入、其外祝儀によし。

春、夏、秋、冬

○所求必得日、求る事必ず得る日なり、望み事によし。

春、夏、秋、冬

○大願成就日、祈禱立願するに大吉日なり。

春、夏、秋、冬  
○最上日、萬よき日なり。

正月三月、二月九月、四月十一月、五月

六月、七月八月、十月、十一月

○萬倍日、一粒萬倍の日なり、此日物の種をまき財寶かす等によし。

他より財寶うるには凶し。

正月、二月、三月、四月、五月、六月

七月、八月、九月、十月、十一月

○厭日、厭對日

正月、二月、三月、四月、五月、六月

七月、八月、九月、十月、十一月

○厭對日

正月、二月、三月、四月、五月、六月

七月、八月、九月、十月、十一月

右の日太夫以上の官人は用ふとも咎めなし、それより下の人用ふべからず、註あれども長きゆゑ省く。

○無翹日、是も厭日の翌る日なり、獨位を定めずして吉凶厭日に従ふをもつて翹なき鳥の如しといふ意にて、無翹日といへり。此日神を祭

○鶏の脊に鱗を負へば雨の降るしなり。  
 ○水鳥木にとまれば必らず雨降るとしるべし。  
 ○諸鳥とんで家に入るは其鳥の口の中に物が立つて有るなり。其鳥の口の中をあげ立つた物をぬき放ちやるべし。また諸鳥來りて草木の實をはむ時は人の髪を其枝にかけ置くべし。鳥近づくは、これは因に此所に記せり妙なり。  
 ○熊深山をいづるときは必らず雪ふるしるしなり。  
 ○牛地をかき天にむかひて首をあげるは大風吹くしるし、又吼ゆるは天くもりて風吹くしるしなり。  
 ○猫前足をなめて其足をもつて顔なでるに耳を越すは客人の來たる徴なり。又越えざるは晴なり。  
 ○猫の子青草をかめば雨のふるしるしなり。  
 ○犬草をかめば晴天の徴なり。  
 ○大土をかく時は陰雨を主どる、又土の高き所に伏せば雨の降るしるしなり。  
 ○蟻穴を出ておぼく往還りするは大風のしるし、又あなをふさぐは大風のしるしなり。  
 ○蠅刺路に横はり或は羽蟻出づる時は風雨のしるしなり。

り軍を出し嫁とりに忌むべし。  
 ●八龍日、●七鳥日、●九虎日、●六蛇日  
 春のきのえね 八龍日也 夏のひのえね 七鳥日也  
 秋のかのえね 九虎日也 冬のみづのえね 六蛇日也  
 右の日萬に忌むべし、是を四季の悪日といふ。  
 ●百鬼夜行日、曆に夜ゆかずと記したる日なり、此夜九つ時に隣へも往くべからず、必らず禍あり、但し子の時のみ忌む、其餘は障なし。  
 ●甘露日、是は其日の二十八宿と七躍と五行と相旺する日なり、佛事をなすによし。  
 ●金剛部日、是も佛參佛事に用ひて吉日なり。  
 ●神内日、此日家造普請失物たづぬるによし。  
 正月四月七月十月 二月五月八月霜月 とりさる  
 三月六月九月極月 うちひつじ  
 ●神外日、此日は右の事どもにわるし。  
 正月四月七月十月 うちひつじ 二月五月八月霜月 とり  
 三月六月九月極月 うちひつじ  
 ●徳日、此日財を收むるはよし、財を出すは凶し。

しるしなり。  
 ○魚とんで水の上へ躍るはかならず雨なり。  
 ○魚水をおよぐは口を上にむけておおよぐは雨の降るしるしなり。  
 ○みどの水たちまち濁り又は夏日炎氣甚だ蒸すこと有らば雹のふるしるしなり。又春至りて天に寒じ夏に氣なし、秋にいたりて忽ち涼しく、冬忽ち温かなるは皆雨の降るしるしなり。  
 ○雨降んとすれば、氣溢れて礎のしめり潤ふものなり、雨降れば氣散じて土かわくなり。  
 ○湖に泡大きく浮く時は必らず大風吹くしるしなり。  
 ○人の顔熱し一切の腫ものなかゆきは雨の降るしるしなり。  
 ○琴三絃の音清からず、又は鼓、太鼓の音あしきは雨なり。  
 ○雨降らんとすれば山近く見え晴なれば遠く見ゆるは、たとへば茶碗に水を入れ一錢その中へ入れて四五足退きて見れば錢うきて見え水を捨れば錢見えざる此理にひとしく、山の近く見ゆるにもあらず、水氣を得れば見ゆるなり、雨の降らんとする時山を近く大きく見するなり、茶碗の中の錢にて會得すべし。

正月七月	二月六月	三月九月	四月十月
五月霜月	六月極月		
●參勝日、家建、出行等によし。			
正月 廿九日	二月 二日	三月 廿三日	四月 十五日
五月 十五日	六月 十四日	七月 初日	八月 廿七日
九月 廿二日	十月 四日	十一月 廿七日	十二月 廿五日
●參負日、悪日なり、争論事に殊に忌むべし。			
正月 廿一日	二月 廿七日	三月 廿五日	四月 晦日
五月 廿五日	六月 十四日	七月 十日	八月 三日
九月 八日	十月 十六日	十一月 六日	十二月 廿五日
●三國一吉日、大吉日なり萬よし。			
春 みの日	夏 みの日	秋 みの日	冬 みの日
●三國一悪日、此日萬に用ふべからず。			
春 みの日	夏 みの日	秋 みの日	冬 みの日
●伐日、上を尅する悪日なり、萬に憚るべし。			
甲 巳	乙 未	丙 申	丁 酉
戊 戌	己 亥	庚 子	辛 丑
壬 寅	癸 卯	甲 辰	乙 巳
丙 午	丁 未	戊 申	己 酉
庚 戌	辛 亥	壬 子	癸 丑

○堅炭と何なりと金の物とおなじ目方にして竿の兩はしにかけ、中に糸をつけ、天秤の如くにして家におくべし、雨ふらんとすれば炭の方おもく晴んとすれば金の方かるくなるなり。

掌中にて日和を繰法

日和を手の中にて繰る法は圖の如く小指より親指早半と次第に指にわり附けおぼゆべし、



霧はながあめなり、照はてりなり。早はばらばら雨なり半日或は半夜ふるなり、たとへば子の時に降り出たす雨はながあめなり、又丑の時より降り出たす雨は晴のしなり、寅の時より降り出たすはばら雨なり、卯の時に

降り出す雨は半日ふると知るべし。其餘は皆四本の指に十二支ならびに霖照早半の四ツを割附け、そらにおぼへおけば旅行又は他行の節甚た便利よし。

灯花の占候

事林廣記に曰く家内の灯は照燈の主にして、花を開き蓋をむすび、燭をはき光を噴くときは、おのづから人事の吉凶を考へ、又は天の風雨をうらなふに驗あり、凡そ灯に花を生じなど其開き落るまゝになしおくべし、灯花を剪すて、又は吹き消すべからず、かへつて禍をなすといへり。  
○灯を消すに三度吹いてきえざれば其儘におくべし。吉事ありといへり、消せば吉事もきゆるなり。  
○灯に花生じ初更に至りてきえざれば、近き内に悦びあり。  
○灯に花生じて夜明にいたりて消えざれば五日の内よるこび有るべし。  
○灯に花をひらき東に向へば、必ず貴人より書を得るなり。  
○灯に花ありて東へ向ふこと、香つゞけば、

●制日、下を制する悪日なり、萬用ふべからず。

甲 いぬたつ 乙 うしひつじ 丙 さる 丁 とり 戊 ね

己 む 庚 とら 辛 う 壬 むま 癸 み

●五離日、最も前に記せし五和合の裏にて悪日なり。

天地離日 乙と丙と 種蒔耕作國入和合に忌むべし。  
日月離日 丁と戊と よろづにわろし。  
國家離日 己と庚と 右にあなし。  
山河離日 辛と壬と 右にあなし。  
人民離日 癸と甲と 婚禮嫁娶相談和合にわろし。

●滅忘日、開淨日、減衰日、三箇の悪日なり。

滅忘日 正月う 二月つた 三月つた 四月つた 五月ね 六月さ  
開淨日 正月ま 二月らと 三月ぬい 四月つた 五月り 六月ひつ

減衰日 正月う 二月み 三月ひつ 四月り 五月み 六月う  
七月う 八月み 九月ひつ 十月り 十一月み 十二月う

●保呂風日、此日とりわけ悪日なり、用ふべからず。  
正月つた 二月ぬい 三月ひつ 四月ぬい 五月り 六月さ  
七月らと 八月らと 九月らと 十月らと 十一月らと 十二月らと

●四鈎日、十絞日、七惡日、此三日は大惡日なり。  
但し人々によつて違ふ。たとへば酉の年の生れは酉より四つ目子の日四鈎日なり、十日目午の日十鈎日、七つ目、卯の日、七惡日なり、餘は準じて知べし、萬に忌み用ふべからず。

●善滅惡増日、此日萬に凶し別して佛事に忌むべし。

正月 廿一日 二月 十九日 三月 初五日 四月 廿五日  
五月 十五日 六月 廿七日 七月 廿三日 八月 廿五日  
九月 廿六日 十月 廿四日 十一月 十二日 十二月 六日

●赤舌日、赤舌神は大歳神居所の西門の番神にして衆生を惱亂せんとする荒神なり、故に恐れ慎むべしといへり、萬の願ひ事はす。

●不成就日、此日事をなし初むべからず、何事も成就せず諸の立願などここに忌むべし。

正月七月 十九日 廿八日 二月八月 十二日 廿八日 三月九月 十七日 廿五日  
四月十月 十九日 廿七日 五月十一月 廿一日 廿九日 六月十二月 廿二日 三十日

其家の主人官位す、み祿をますことあり、商人なれば大に利潤あり。

○灯三吹して消えず却つて花を結ばば近き内によることあり、但し花久しくあつて消えざれば大吉事ある徴なり。

○灯の煽たちまち二つにわかれ、此の如くなれば祿をまし、官位す、又貴人の引立によりて吉事あるしなり。

○灯花に珠をつらぬき下の方へたるものは家内に旅立する人ある徴なり。

○灯に花を結びて豆の如く四面花なれば酒食にあふべし。家内に孕女有れば貴き子を生まむなり。

○灯花上へ向つて丸く大なる物は明日來客のしるしなり。

○灯ものもあたらず風も吹かぬに、ゆゑなくおのづから消ゆれば、不幸のあるしなり。

○灯の光短く暗くして光なければ憂ひごと煩ひごとあり。

○灯を點じて火の中連々と爆き出で、火勢正まらざるものは口舌ごとのしるしなり。

○灯に花を生じ爆くものは百事よろこびごとを主とするなり。

●不成就時、此日暮六つ時より夜九つ時迄忌むべし。  
毎月 四日、十一日、十八日、二十五日、又 八日、十五日、二十九日、此日は卯の時より午の時まで凶し。

●空亡日、人々一代用ひざる日なり。  
假名にて、きのとね、きのとうし、など記したるは人々の生れ年なり是を横にあて、見るべし、眞名にて乙亥甲戌など記したるは空亡日なり。きのえ午年生れなれば其所を横に引みれば甲辰、是れ空亡日なり。

きのとき えきのとき のとき えきのとき のとき えきのとき のとき えきのとき のとき  
うし ね ね えひの えひの えひの えひの えひの えひの えひの えひの  
ひのと ひのと えひのと えひのと ひのと えひのと ひのと えひのと ひのと えひのと  
うちの つちの つちの つちの つちの つちの つちの つちの つちの つちの  
とみ えたつ とう えとら とう えとら とう えとら とう えとら とう えとら  
かのと えかのと えかのと えかのと えかのと えかのと えかのと えかのと  
みつのみづの みづのみづの みづのみづの みづのみづの みづのみづの  
ととり えさるとり えさるとり えさるとり えさるとり えさるとり えさるとり  
乙亥 甲戌 乙酉 甲申 乙未 甲午 乙巳 甲辰 乙卯 甲寅 乙丑 甲子  
●大空亡日、此日は旅行商ひ初め金銀を人に貸すに大に忌むべし。  
正月九月 廿二日 廿四日 二月十月 廿一日 廿九日 三月霜月 十九日 廿七日  
四月極月 十九日 廿七日 五月 月 十九日 廿七日 六月 月 十七日 廿五日

○灯平日より明かなるは大風の徴なり、又晴天には灯の先長く雨天には灯の先丸し。

○火ひかり動きて光俄にばちんとはねる音あるは雨風のしるしなり。

○早ひさしく續きしとき、忽ち灯さきに赤き花生じ、しきりに點滴る如くなるは三日の内雨降なり。

○雨天つゞきに忽ち灯に赤き花を結び、光明あるは近き内に晴天となるしなり。

○灯に黒煙上に生じ光り下へ垂れて暗きものは近日雨ふるしなり。

○灯に煙なく只だ煙左右へふるひ動きて定まらざる時は近き内に大風あるしなり。但し烟東に向ふときは東風ふくなり、西に向へば西風吹き、南に向へば南風ふく、北に向へば北風吹くとしるべし。

○灯短く暗く、しきりに垂滴ものは、近き内にあめふるしなり。

○灯に煙少くなく、ひかり動き揺動かざるものは晴天に風吹くしなり。

伊勢參宮利生有歲の事

○子年の人は丑寅の年參宮すれば富貴する。又寅の年參宮すれば福を得る、申酉の年參宮すれば命長し。

○寅卯の年の人は子丑の年參宮すれば富貴する、又寅卯の年參宮すれば大によし、申酉の年參宮すれば大に福を得る。

○申酉の年の人は子午の年參宮すれば大によし、卯辰の年に參宮すれば大吉なり、午未申酉の年參宮もよし。

○丑辰羊戌の年の人は子卯己午酉戌亥の年に參宮すれば大に福を得るなり。

○己午亥の年の人は子申亥の年參宮すれば大によし。

有卦無卦の事

世に有卦無卦のことを詳しく記したる書物甚

伊勢參宮せざる年の事

だ稀れなり。今初學のため茲に記す。それ右有封無封は十二運の廻る年をさしていふなり。有封に入りてより七年の間は能き運めぐるなり、故に吉とす。又無封に入りてより五年の間は、悪しき運めぐる故に凶とす。尙詳しくは左の圖にて知るべし。

以上七運を有封というて萬に吉なり。以上五運を無封というて萬つゝしむべし。木性 酉の年 此としより入りて七ねんが間うけなり。火性 子の年 此としより七ねんが間うけなり。土性 午の年 此としより七ねんが間うけなり。金性 卯の年 此としより七ねんが間うけなり。水性 午の年 此としより入りて七ねんが間うけなり。以上五運を無封というて萬つゝしむべし。木性 辰の年 此としより入りて五年が間うけなり。火性 未の年 此としより入りて五年が間うけなり。土性 丑の年 此としより入りて五年が間うけなり。金性 戌の年 此としより入りて五年が間うけなり。

十歳、十三歳、二十歳、二十六歳、三十歳、三十八歳、四十二歳、四十七歳、四十九歳、五十二歳、五十三歳、五十六歳、五十八歳、五十九歳、六十歳、六十四歳、七十歳  
右の年いづれも參宮するに忌むべし

伊勢參宮忌服の事

○父 母 十三月 ○養父 母 五月 ○嫡子 九十日  
○高祖父母 三十日 ○養子 三十日 ○繼父母 三十日  
○兄弟姉妹 九十日 ○舅 姑 九十日 ○夫 十三ヶ月 離別しては忌服なし  
○妻 九十日 ○叔父叔母 廿日 ○異父兄弟 廿日  
○嫡孫 三月 ○末孫 七日 ○從弟甥姪 七日  
○主君 十三月 ○師匠 五月 但し場所により  
○七歳までの子の死去には服なし、父母は三日遠慮すべし、若し又父母死去の時は七歳未満の子にも五十日の服あると知るべし○他國に居て父母の死去を聞けば聞き附けし日より十三ヶ月參宮はかるべし。其餘の親類は聞附けし日より残る服を受くべし○父の服果ざる内母の死去を聞かば聞附けし日より十三月の服かゝるとするべし○月の障り

水性 丑の年 此としより入りて五年が間うけなり。右有封に入りたる時は胎の運なり。二年目は養の運、七年の間次第に運めぐるなり。又無封に入りたる年は養の運、二年目は病の運と次第に悪しき運めぐるなり。無封五年が間何事もひかへめにして慎みてよし、僅て有封無封ともに入日人時あり、たとへば木性は酉の年酉の月酉の日酉の時より有封に入るなり。子の年に有封に入るは子の月子の日子の時と知るべし。餘は皆是れに準じて察知すべし。

十二支月わり刻わり

正	月、寅	二	月、卯
三	月、辰	四	月、巳
五	月、午	六	月、未
七	月、申	八	月、酉
九	月、戌	十	月、亥
十一月	子	十二月	丑
夜の九ツ	子	夜の八ツ	丑
夜の七ツ	寅	夜の六ツ	卯
朝の五ツ	辰	朝の四ツ	巳
晝の九ツ	午	晝の八ツ	未

は十一日○相火同座は其日ばかり、浴すればさわりなし○妊婦は三月目より參宮を憚かるべし、産の穢れ夫は七日、女は百日、小産も同じことなり、されども三月よりまへの小産は月の障り同断なり○家の内に死人有らば一日其家に居合すも一日踏合のけがれは行水をすればよし○抱瘡は七十五日○疵は癒るまで○炙七日○獸の肉を喰ひし者は百日參宮はかるべし、同火も同断、夫れ伊勢兩宮は恐懼も吾朝の宗廟にして平人輕々敷參るべき宮居にあらず、もし參宮せんとおもはば身を清淨にして道中にて假にもけがれたることをなすべからず、又人の息嬢など又主ある身にて主親にも告げず抜參して參宮するは甚だ心得違ひなり、參らんと思はゞ主親に告げて許容をうけて後參るべきことなり。

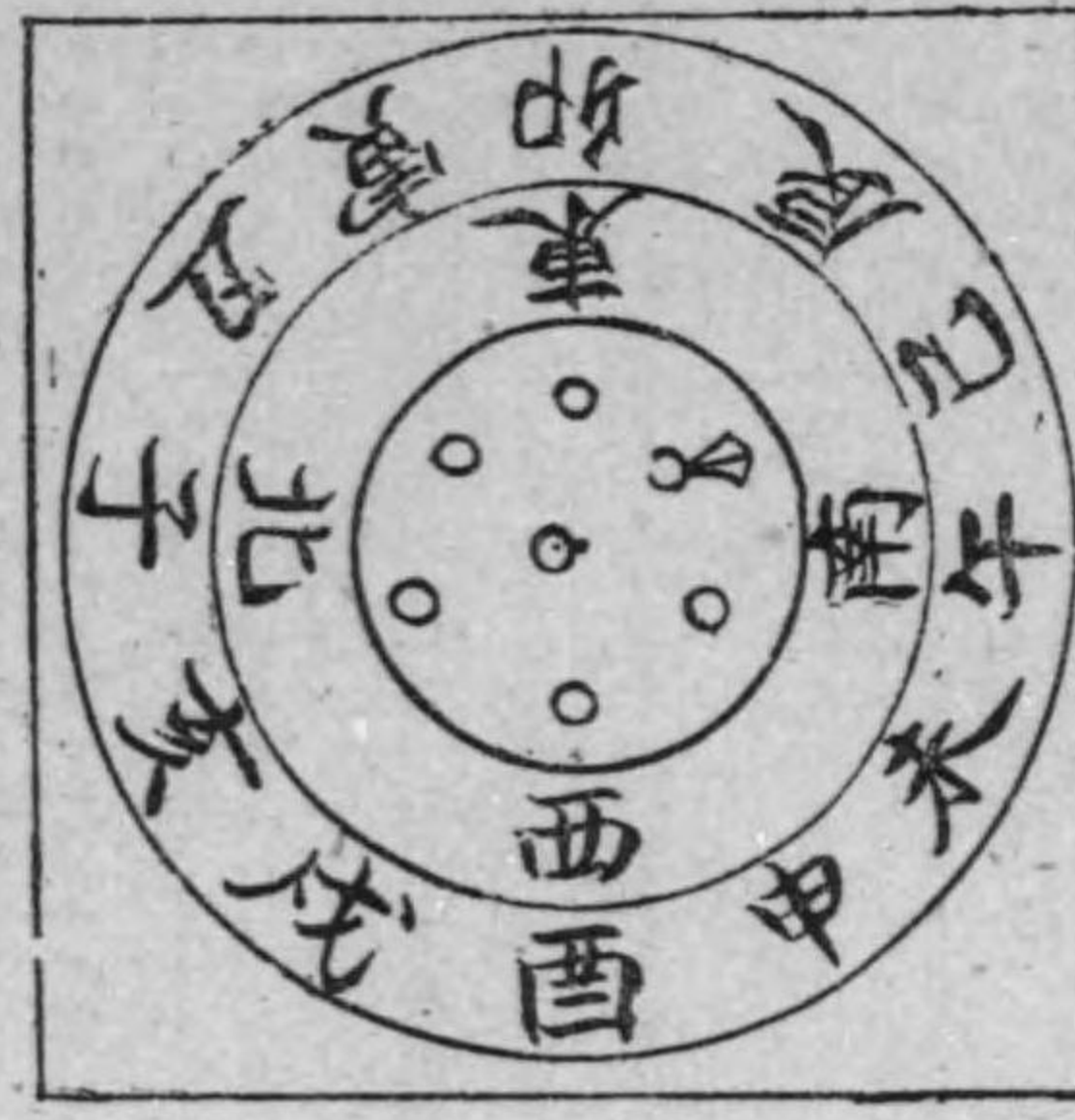
本命的殺早繰祓傳

本命的殺の眞に怖るべき事は世のよく知る所なり。たとへ鬼神鬼門の方是用ふるとも此的殺の方は決して犯すべからず、若し犯せば祟り甚だしく殃害靚面に來るなり。年々的殺の方位左を見て知るべしたとへば三歳十二歳などは東の方的殺なり、餘は準じて知るべし、又た中宮

晝の七ツ、申 夕の六ツ、酉  
夜の五ツ、戌 夜の四ツ、亥

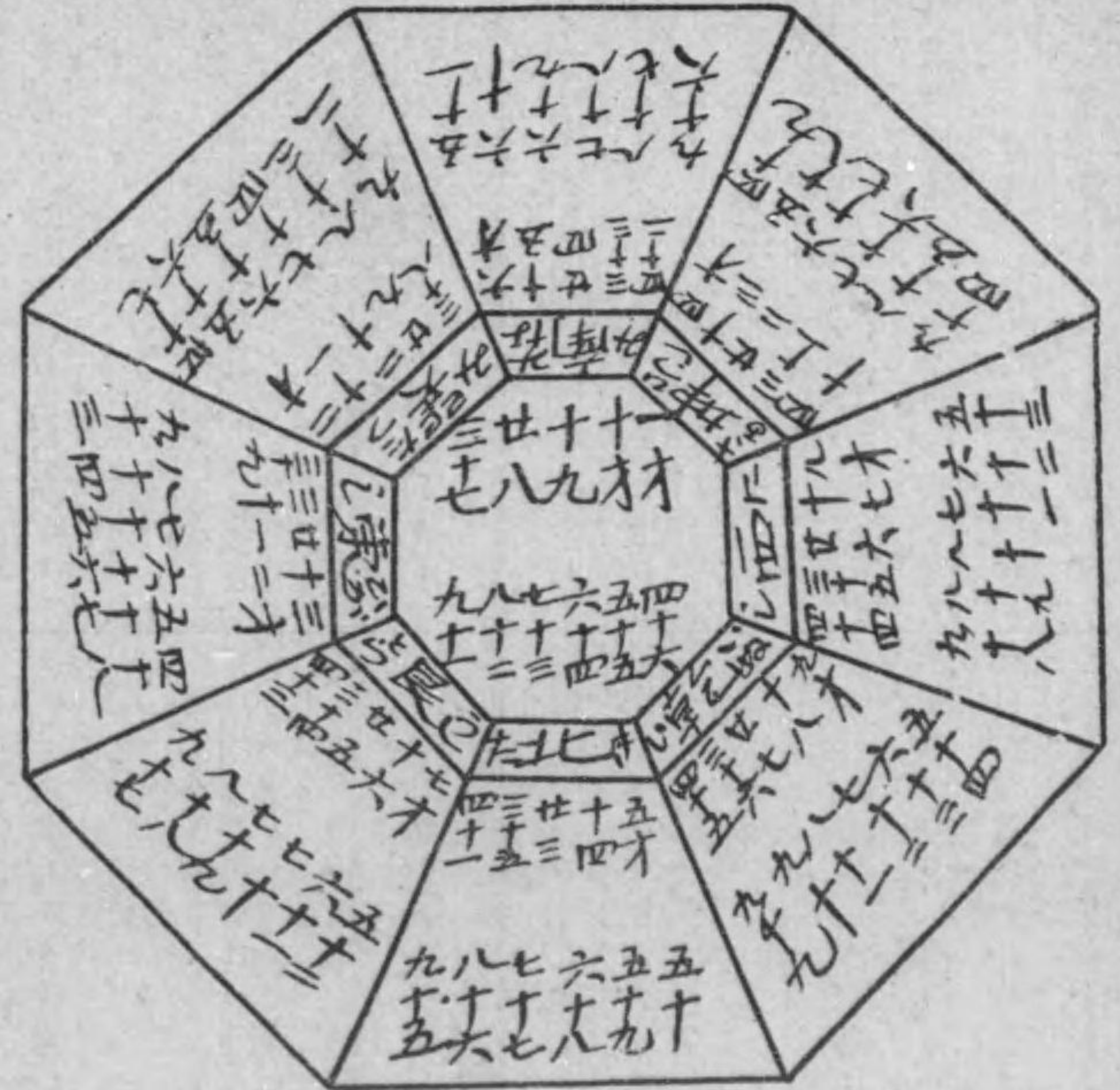
破軍星くりやう

破軍の星のくりやうは四時たつて月の數とて  
たとへば正月子の時ゆゑに時は、北の子の方  
より數へそめ子丑寅卯、是を四ツさり、扱て



其月は正月なれば一ツめ辰の方先なり、  
又二月午のとさくる時は、午未申酉の四ツを

本流の論的殺の早の緑の之の圖



きり、二月は二ツめ亥の方けんさきなり。軍  
陣始めすべての勝負ごと、かけ合ごと應對、  
このけんさきの方にむかふ時は勝利なく、其  
身あやふし、劍光をうしろにしてか、れば、  
勝利を得る也。後にする時は劍先亥の方に向  
へば亥の方に向うて行くなり。

- 正月、五ツめ。 二月、六ツめ。
- 三月、七ツめ。 四月、八ツめ。
- 五月、九ツめ。 六月、十め。
- 七月、十一め。 八月、十二め。
- 九月、十三め。 十月、十四め。
- 十一月、十五め。 十二月、十六め。

六曜星日取の考

●先勝日 正月、七月  
うましはやくするにあり、ゆゑにせんかち  
といへり。八ツときより六ツまでわろし  
●又引日 二月、八月  
あさゆふ大によし、午の時計り大にわろし、  
せびきとてせうぶなし。  
●先負日 三月、九月  
朝より午のときまであしく、午のこくより酉  
のこくまでよし

に記せしは一歳十歳などは八方的殺なれば右的殺に向ひて家造り、移  
徒、婚禮、開店、入家、奉公、旅立、出行等に至るまでかたく恐れ忌  
むべし。

晴明流太乙定分の事

五歳、十一歳、十七歳、二十三歳、二十九歳、三十五歳、四十一歳、  
四十七歳、五十三歳、五十九歳、六十五歳、七十一歳  
右の如く七年目にまはるなり、此年をよく心得、何事も慎み信心祈禱  
すべし。怠らば一大事出来りて災難にあふといへり、小兒五歳より始  
まるなり。おそれつゝしむべき年なり。

六十の甲子五行の解 (並産性の吉凶)

▲甲乙は金氣の初め未だ幼稚なり、子丑は北陰の水にして幼稚金氣水  
底に沈む意あり、故に海中の金とす、此年の生れは心正しけれども短  
氣なり、とかくは時節を待べし、海川を漁するはわるし。  
▲壬癸は金氣の終りにて金を鍛ひて用をなさす寅卯は東を主とる。  
東は金氣において死絶の地なりゆゑに用をなせども、カウすき金箔の

●佛滅日 四月、十月、大あく日なり、此日萬事大いに思むべし。わづらひつけばながびくといふ。

○大安日 五月、十一月、大齊日なり、旅立、わたまし、よめとり、商ひ始め、店びらきによし。

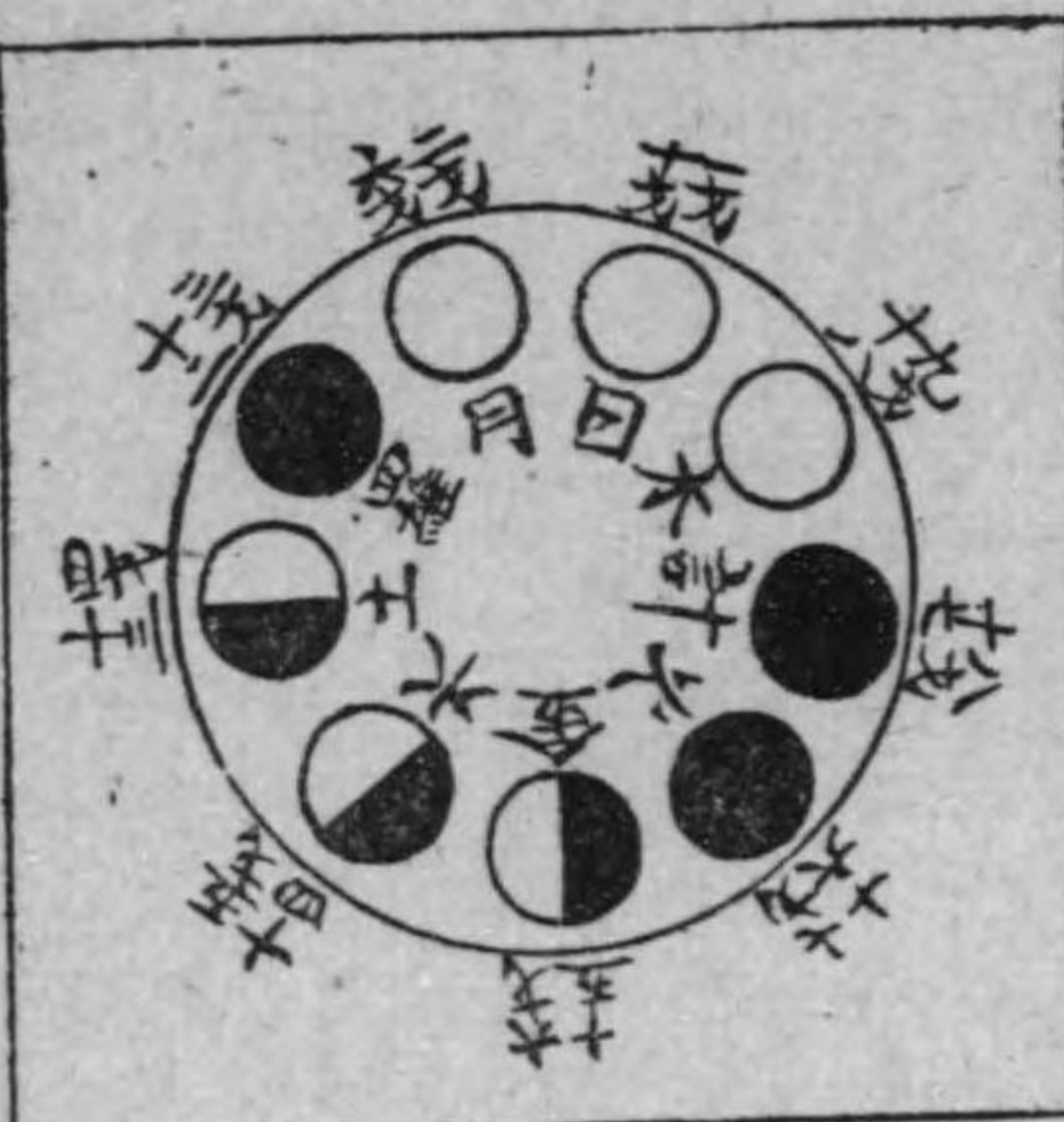
●赤口日 六月、十二月、あく日なり、何れにも用ゆべからず。但し午のときばかりはよし。

右六曜星のくりやうは、うらなふ月の星を朔日と定め、それより左へ二日三日と占ふべき日のかずほどくり、赤口日まていたれば、初めの先勝日に戻り、斯く順に數へて、止りたる星の吉凶にて、其日の善惡をうらなふなり。たとへば四月八日の吉凶をみると思ふならば佛滅日を朔日と定め、二日三日と順にかぞへ赤口日から元の先勝へもどり、漸次にかぞへるに八日は大安日なり。是れ何ごとをなしてもよき日なりと知るなり。又我心の中に望むことをうらなふには、右の如く日をかぞへて止りの星の次より、我としのかずほどかぞへる星にて、その事はやくしてよきか、おそくしてよきか、やめてよきか、爲

してよきかを定むるなり。よろづのこと皆この例にてうらなふてよし。

九曜星歳考

それ九曜星といふは、七曜星に羅喉、計都の二星をくはへて九曜の星といふ。此の星年々漸次に廻りて歳をつかさどる、尤も其年々の吉凶禍福を知らしむるなり。次に七曜星の吉凶は違ふれども、かれは一代の吉凶なり。是は年々に廻るとこみの吉凶なり。



【木】三世相雜書

六十の圖



金とす、このとしの生れは人に用ひらるゝ虚弱の生れなればよくく養生すべし。

▲庚辛は西を主どり金氣の正位なり、色は白し、辰巳木にて火を生ず金は火にあうて用をなす、又よく和らぐ故に白蠟の金とす。蠟は鉛りなり。此年の生れ心よくやはらかにして人と睦しく交はる、但し女色にまよへることあり、つゝしむべし。

▲甲乙は前にいふ如く金氣未だ弱し。午未は南を主どり火なり、金氣は火にかたず怖れかくるゝ意なり。故に沙中の金とす、此としに生るる人は才能ありといへども内氣にして進み出ること能はず、随分つとめ學ばゞ末にて名をあぐべし。

▲壬癸は金氣の終にて鍛ひ上たる金なり、申酉は西方の金の地に居て能く旺んに西は秋を主どり萬物を枯し殺すゆゑに劍の金とす、此年の生れは心烈しく正し、しかし短慮にて争ひを好む、よくく喧嘩口論を慎まば人の頭となる生れなり。

▲庚辛は金氣の成就するもの、戌亥は金氣の休息の地なり、金休息の地に居て其尖をととむ、乾は貴く頭圓くす、故に此の年の生れは藝能ありて愛せられ人の頭にたつ心ささく福ひあり、然し名高くして人に妬

圖の如く日曜星を一歳とし月曜星を二歳、羅喉を三歳と順にくり、年のかずほど数へめぐりてとまる星を、次の圖の所にて引合して其年の吉凶を知るなり。

日曜(大吉) 一歳、十歳、十九歳、二十八歳、三十七歳、四十六歳、五十五歳、月曜 二歳、十一歳、二十歳、二十九歳、三十八歳、四十七歳、五十六歳、羅喉(大凶) 三歳、十二歳、二十一歳、三十歳、三十九歳、四十八歳、五十七歳、土曜 四歳、十三歳、二十二歳、三十一歳、四十歳、四十九歳、五十八歳、水曜 五歳、十四歳、二十三歳、三十二歳、四十一歳、五十歳、五十九歳、金曜 六歳、十五歳、二十四歳、三十三歳、四十二歳、五十一歳、六十歳、火曜 七歳、十六歳、二十五歳、三十四歳、四十三歳、五十二歳、六十一歳、計斗(凶) 八歳、十七歳、二十六歳、三十五歳、四十四歳、五十三歳、六十二歳、木曜 九歳、十八歳、二十七歳、三十六歳、四十五歳、五十四歳、六十三歳、男女とも此の星にあたる年は萬よし、財寶を

嫉まることあり慎むべし。

▲壬癸は木の終にて老木とす、子丑は北の方を主どり水に旺して木の母なり、木北方の母に養はれ、繁茂して老樹となる、ゆゑに桑の木とす、此年の生れは心静かにして度量大なるゆゑ人と同意しがたし、これを慎しみ人にしたがつべし。

▲庚辛は木氣の壯なるもの、寅卯は東を主どり、東は木の地なり。其地にひとり秀て霜雪にも恐れず、松柏の木とす。此年に生るゝ人は正しき心にて人と約せしことを變ぜず、女は貞女なり男は勇氣あつて物の頭となり敬まはるゝなり。

▲戊己は木氣の化するもの、辰巳は東南にて木の長養する地なり、其地を得て茂り生ずゆゑに、森の木とす、この年に生るゝ人は心さかしく人に愛せらるゝ、しんぞくも多し家業繁昌なれども此人神につかへ佛を守れば大によし。

▲壬癸は木氣の終にて午未は南の火を主どり、老木火氣の爲に耗散せられ、中空虚にして枝弱し、ゆゑに楊柳の木とす。此年の生れは女はよし、男は柔弱にして心定まらず、とかく迷ひおそるゝ心たえず、正直に人にしたがひてよし。

▲庚辛は木氣の成就するものにして、申酉は西を司さどり、金氣の地の居る金克水の理にて木の死絶の地なれども金は秋なり。草の熟する時なり、實の多きをとりにて柘榴とす。此年の生れは人に愛せられ子も多し。財寶は乏し、神佛を祈らば富なり。

▲戊己は木氣の化するもの、戌亥は金氣休息の地なり。休息して木を克するの尖をとむ、故に木しづかなる地の安んずるをもつて平地の木とす。此生る人は人と争はず、こゝろしづかなり、親の家督をつぐはよろし、所をかゆるはよろしからず。

▲丙丁は水氣の壯なるもの、子丑は北に位して水の源となり、水の壯なるは山より流れ落る澗の水にしかず。此年の生れは心さわがしく、量簡せまく、人と争ひ逆ふ性ありてあしく、よく學問し心しづかなものは末はよし。

▲甲乙は水氣の初めにて、寅卯は山卯は木なり。水寅卯の山中にありて未だ流れ出るいきほひなし、故に山澤の水とす、此年に生るゝ人は心静かにして思慮ふかし、しかれども人としたしからず、常に訪ひく人なく閑寂くらす事を好めり。

▲壬癸は水氣の終にて、辰巳は東南を主どり、地は東南を低しと

得て諸事心の儘なる年なり五六、七月、珠更よし、此の星にあたる年は順風に帆を上げて走る船の如くされどもおごる心あらば凶し月曜星此の星にあたる年は萬よし、動き、働き、かせがは、財寶おほくあつたり、又旅をして福あるべし。されども諸事ひかへめにしてよし、火難、水難のおそれある年なれば船に乗ることを慎むべし。羅喉星羅喉は天の惡星なれば萬凶し何事も成はじむべからず、旅に行けば財寶を損するが盜難あるべし、災厄來たる年なれば、病氣には別して心を用ひ慎みて養生すべし。土曜星土星は地を主どる星なれば、土を動かす、變宅家作りふしなど見合してよし、又半よしの星なれば順事などはすべからず、又夏秋の間に病事あれば、大切に慎むべし。水曜星此星は吉なり、貴人目上よりの引立ありて悦び事多し、他國商などして、大に利あり、春夏は諸事ひかへめにしてよし、秋冬は萬によし、南に向ふてすること一切成就しがたし。金曜星此星も半吉なり。家を買ひ田地を求め又刀脇ざしを買ふべからず、此年は物事争





男相性名づくし

木性 又、半、五、宇、彌、文、武、唯、圭、茂、源、仁、梅、吉、菊、平、芳、百、兵、久、彦、辨、門、權、房、李、九、萬、火性 吉、松、寅、龜、森、佐、元、彦、加、助、磯、文、牛、金、計、虎、義、角、幾、廣、菊、勘、實、岩、定、久、貞、五、只、三、源、勘、實、岩、定、久、貞、土性 治、仁、理、二、長、傳、龍、利、忠、仲、德、六、太、恒、伊、猪、林、順、友、常、竹、多、壹、米、倉、八、金性 豐、與、伊、嘉、喜、吉、友、頼、好、熊、道、由、虎、喜、乙、爲、萬、品、猪、安、和、幸、米、秋、石、宇、文、萬、品、猪、水性 三、止、甚、清、善、歌、惣、松、市、次、辰、小、佐、宗、勝、四、新、七、千、良、女、辰、貞、初、淺、常、政、金、北、五、

女性字づくし

木性 梅、國、百、貞、良、房、萬、茂、伴、茂、包、蘭、栗、留、頼、大、林、米、勤、達、類、路、澤、菊、品、大、火性 岩、吉、倉、國、後、猪、麻、中、極、高、今、花、玉、源、鶴、延、益、土性 長、傳、秋、竹、金、臺、楠、徳、千、龍、仲、六、鳥、金性 初、琴、瀧、波、福、好、峯、阪、末、龍、仲、六、鳥、金性 初、琴、瀧、波、福、好、峯、阪、末、水性 岩、秋、霜、村、才、宮、元、谷、京、石、崎、大、三、常、千、讚、齋、善、勝、松、種、常、千、讚、齋、

五性の魂の数の辨

世上の人五性のたましひの數といふことを附會の説と嘲けりわらふは其かなもとをしらざる故なり、あながち木性の人の身に魂九ツあり、水性の人の身にたましひ五ツありといふにはあらず、是は木、火、土、金、水の五行の魂のかずをいふなり。木の魂は九ツ、火の

になる性ゆゑ、人に用ひられて一生安樂なり。  
▲甲乙は火氣の初にて辰巳東南の木母の木に養はる、されども弱き風なり。火の力よはく風を怕る、故、燈籠の火とす。此年の生れは學問筆道の藝あれども、生得虚弱にて臆病なり、商人職人は凶し。醫者か出家すれば大によし。

▲庚辛は土氣の成就するもの、子の水と丑の土と交はる是泥土のる萬物を生ずる土の効なし、ゆゑに壁の上の土となす。此年に生るる人は才藝つたなく人の下に就て世を渡る、尤も氣もく不性なり。能く學問をして發達を力むべし。

▲戊己は土氣の位なり、寅は山卯は木、是山林なり。戊己の土是に居る。山城の土なり、是も萬物を生ずる土の効なし。此年に生るる人は其氣象高く武士などは發達す。町人百姓はおもひ事たえず、他家目はらくに見えて心苦勞甚だおほし。

▲丙丁は土氣の壯なるものなれども、辰巳は木火長養の地にて土其地にあり。火のために乾されて潤なし。是れ五穀の爲にならず砂の中の土とす。此年の生れは才氣うすく人と交はることをいとひて隱遁の心あり、出家か醫を業としてよし。

▲庚辛は土氣の成就するもの、午未は南の火を主とる、火は土を生ずる、又よく土を乾かす、故に死の土とす、五穀を生ずるの力なしと雖も又よく水を防く効あり。此年の生れは智慧有つて萬事にさしく人を救く武家は心に發達す、さもなくても一生安樂なるべし。

▲戊己は土氣の化なり申酉は西を主どり西の発は卦にて澤とす、土氣の化同性の澤に遊ぶ、故に火澤の土とす。此年に生る、人は心和かにして智慧あり、人と争ふことなく、分に安んじて心ゆたかなり。學問をばげみ學ばゞ大に名を發すべし。

▲丙丁は土氣の壯なるもの、戊亥は金氣の休息する所なり。又戊は五行の墓とす、亥は絶なり、故に墓の土とす。此年の生れは其心す、むことを好まず、退きかくるることを好む、されども譽は高く人に敬まはる、なり。儒者醫者などは立身すべし。

五行相生相克の説

夫れ相性は夫婦のみに限らず、君臣父子兄弟朋友の間にも相性の善惡によつて和合すると不和なるとあり。親兄弟の事は是非もなし、主どりし朋友に交はるなどは其初めに相性の善惡を考ふべきことなり。五

魂は三ツ、土の魂一つ、金は七ツ、水は五ツのたましひありといふ、其源は八卦の奇遇のたましひなり。則ち天地自然の理にして、其の奇遇の數といふは、一を陽とし、二を陰とす、故に☰巽の卦は一を二つと二を一つと合して四なり、巽は木に屬す、又☷震の卦は二を一つと一を二つと合して五つなり、震も木に屬す、二卦の數四と五と合して九つなり、依つて木のたましひ九つなり、又☱艮は一つを一つと二つを二つと合して五なり、艮は土に屬す、☷坤は二を三つ合して六なり、坤も土に屬す、二卦の數を合して十一なり、十を去つて一となす。故に土の魂は一つなり、又兌は☱二を一つと一を二つにて四なり、兌は金に屬す、☰乾は一つを三つ合して三なり、乾も金に屬す、二卦の數を合して七つなり、依つて金の魂を七つとす、幣て坎は☵二を二つと一を一つ合して五つなり、坎は水に屬す、故に水の魂は五なり、倍て離は☲二を一つと一を二つと合して四つなり、離は火に屬す、然らば火の魂は四といふべきに、却つて火の魂を三といふは、木、火、土、水の四卦とも魂はみな奇の數を用ひ、所謂木

行相生すれど主人と家臣と和合し、朋友の中も睦し、又相克すれば主從の中和合せず、朋友の交りも終には絶交に及ぶ。然らば夫婦の相性を専らとするは夫婦は人倫の本にして子孫相續是より初まる、故に夫婦の縁談には殊更相性の吉凶をえらみ、相性の善縁を求むべきことなり。  
抑も五行の相生相尅といふは凡そ木火土金水の五つ天に有る時、其形なく、寒暑燥濕風の五運なり。寒は水の氣なり。暑は火の氣、燥は金の氣、濕は土の氣、風は木の氣なり、此の五氣地に降れば木火土金水の五つの形を顯はす。是を五行といふ。天の五運の氣と地の五行の形と相感して萬物を生ず、是れ吉凶の源、善惡の始めなり。故に洪範に曰く相生せざれば通達せず、相尅せざれば裁制なしと。相性相尅の用偉矣哉。  
○水生木は水より木を生ず、是れ天地自然の理にて、冬の水より春の木を生ず、木は物あたれば動く、うごく物は陽なり。水は北を主どり木は東を主どる、水の精よどみ滯れば必ず草を生ず、是れ水生木の相性なり草木水を灌げば能く繁茂するも此理にて、草も木も同種なり。

(九)金(七)土(一)水(五)是れなり、奇は陽なり。魂はみな陽氣の精なり。然るに離の卦のみ四にて四は偶數にして陰なり、陰は魂とならず、ゆゑに火は木の數の三をかりて三を魂とす。元より火は形なく其の根本は木なり故に水生火とて火は木の精によつて形をなす。かるが故に木を火の母といふ、或人曰く五行の内、木、金、土の三つは二卦づゝありて水と火のみ一卦づゝなる如何と、答へて曰く八卦を八方に配りしは意味深重にして一朝に説き盡し難し。然れども近きたとへは、火は日輪の精、水は月輪の精、此二つのものは他のもの混じること能はず、俱に純一なるをたつとぶなり、されば水火を南北に配し、一卦づつとし、若し水火に二卦あらば天に二つの日、二つの月あるが如し。易の妙用至れり盡くせりといふべし。

唐尺の事

是れは一尺二寸を八つに割りて、一寸五分を一寸と定めたるなり、刀、脇差、又は門口をあくるにも、此寸法を選み用ゆ、門口をあくるには、財の字、刀、脇差の寸法は義の字、

○水生火は火は南を主どり、東の木より南の火を生ず、是れ春より夏を生ず、故に夏は暑氣酷だし。夫れ木と木とすれあふ時は火を生ずるなり、槍山の火は槍より出て、槍を焼くといふを以てしるべし。是を水生火の相性といふなり。  
○因に曰く、今の如く石と鐵とを磨りて火を出すは後世の工夫なり、昔は槍をすり合はして火を出せしなり、槍は火の木なりと云ふ。  
○火生土は土は中央を主どり、五行の母なり、夏の火より土用の土を生ず、故に四季の土用の中にも夏の土用を重んずる義は曆の部に記せり。凡そ萬物皆土より出て、土に歸へるといへども、火をよはくする時は、土にかへること殊更はやし。木を燃やし灰となす時は土となり石を焼いて石灰となす時は其儘土となる。是れ火より土を生ずる證なり。  
○土生金は金は西に配し秋を主どる、土用の土より秋の金を生ずるなり、金氣は萬物を死し殺す、秋に草木の枯れるも此理なり。又金は太刀、刀、斧、鉞となりて人を斬り、草木を伐る、其の金は悉く土中より出だす、是れ即ち土金を生ずるなり。  
○金生水は水は北を主どり、冬に旺す、秋の金より冬の水を生ずるなり。

佛の御長は官の字よし、其外萬の物をさすは吉の字の寸よし、是を唐尺とも玉尺ともいふ財はたからなり、此寸にあれば、その家實あつまりて、家業繁昌富貴なり。病病はやまひなり、此寸にあれば其家常に病人絶えず、禍おほし。難難ははなるなり、此寸にあれば家内兄弟とかく田畑山林にはなるなり。義義はよろしなり、此寸にあれば家内常によるこび事おほし、心の儘に繁昌するなり官官はつかさなり、此寸にあれば官はすすみ、百姓商人はふんべんよく、人に用ひらるるなり。劫劫はかすむると訓む、此寸にあれば損失大く、盗人にあひ、人に難をうくるなり。害害はそこなふなり、此寸にあれば死人出来、葬禮ごとたびありて悲みあり。吉吉はよしと訓む、此寸にあれば家内よきこと續き常に樂むこと多し。

曲尺、鯨尺、吳服尺の事

曲尺 尺匠の家用、商尺の營造に合せしなり。  
鯨尺 是れは尺匠の曲尺を四段となし、一段を加へ一尺とす、是れ商尺の例にならふ、曲尺にては一尺二寸五分なり。  
吳服尺 尺匠の用ふる曲尺を五段となして一段を加へ曲尺一尺二寸なり、是れ周尺の例にならふなり。

年中行事日次抄

正月(異名 孟春 端月、始月、律月、大旗) 當月を陰月といふは貴賤ともに往還りて新年を賀し、陰み合ふ、陰み月といふを略して「むつき」といふなり、又此月を一月と云はずして正月といふは、王者は正しきに居るといふ義をとれるなり。  
元日 雞旦ともいふ、又元三といふは、歳の元、月の元、日の始なれば彌いふなり。此日は四時初めなれば天地の氣もあらたまり、萬木千草何となく珍らかなり、諸人卯の時より起きて身を淨め、天地神明を拜し、君を賀し、父母を祝し、又は先祖の靈位を拜し、無事に新年を迎ふることを悦ぶべし。  
蓬萊 一名春盤、又「嶮積」とも云ふ、三寶に松、竹、梅、鶴、龜、海老、橘、柑子、櫻、蜜柑、串柿

り、元水は金より生ずるもの、其驗しには金銀や銅鐵ある所は皆水あり。諸國の金山を掘るには水の爲に妨げられて掘難きに及ぶ、故に金山を掘るには先づ水抜の穴をほりて水を避け而して後に金銀を掘りいだす、是れを以て金生水の理をしるべし。水にはいづれ金氣あり、是れ金より生ぜし物なれば金氣は是非有るものなり、只強きと薄きが有るばかりなり。

○相生の理は右にいへる如く又相克とは克はかつと訓みて敵し勝の義なり。水は火に克つ金は木に克つ、土は木に克つ土は水に克つ、火は金に克つ、是を相克といふ。最も相克せずんば裁制なしとて、世の家藏諸器にいたる迄造る事能はず、されば惡むべき義ならざれども男女の縁談には是をいふなり。

○水克火は水は火に克ゆゑ、はげしく燃ゆる火災も水の力にて消ゆるなり、家造るに用ふる準繩を水繩といひ、瓦に巴をつけ、あるひは立浪を象どり、其餘天井、鴨居、鴨居などすべて水に縁ある物の名をつけるも水克火の徳を表し、火災を防ぐ用心なり。

○火克金は火は金に克ゆゑ、金火に逢へば薄け鈍ける、然れども前にもいふ如く、火金を克する故、太刀、刀、釘、鏝も出来、其餘一切の金器を作るも火克金の徳なり。

○金克木は金は木に克ゆゑ、斧は木を伐り、鎌は草を刈り、宮殿屋室を始め船車を造り、櫓槓を過り、其餘諸の木器を製し、人用に備はるは金克木の徳なり。

○木克土は木は土に克ゆゑ崩れかゝる土も、木をもつて隔止め、あるひは木草は土を突破りて發生す。是れ木の土に克なり、百穀生じて人を養ふは皆木克土の徳なれば、仰いても尊ぶべきことなり。

男女相生圖說 (並四厄十惑の事)

前にもいふ如く男女縁談は相生をよしとす、然れども順の相生、逆の相生、或は順の相克、逆の相克とて、各々吉凶異なり、又五行の外に十二支の相生、相克あり、其中に四厄十惑とて縁談に忌むことあり、俗に四惡十惡とて十二支の自分支より四つ目と十目と忌む人あり、是れ甚だ心得違ひなり、四厄十惑とは十二支の相旺相克を忌むことにて只四つを嫌ふなり、其の四つとは巳午申酉なり、其餘は忌むことなし、右巳午申酉に限つて忌むわけは巳(火)午(火)申(金)酉(金)にて火克金火旺火、金旺金と成る、相克の中にも火克金は殊に甚だしきゆゑ

ころ柿、野老、栢、栢、栗、海藻、昆布、米、なんぞを盛りて年禮に來りし人にも勸め、自己も喰ふは皆な無病長命を祝する爲めなり。

○玉服とて煎茶に梅子を入れて服すれば、年中邪氣を受けずといふ。俗に大福といふ。

○屏蘇は紅絹に包み除夜より井中につりおき元朝に取出し、冷酒に浸し、是れを呑むときは温疫の病を受けずといふ。尤も歳若き者より呑み始む。

○今朝未明に井花水を汲むを若水といふ。此れを飲めば年中に邪氣を受けずといふ。

○齒固(唇の部に云へり)

○朝賀、朝拜とは禁中にて百司百官が元日の賀を奏し奉ることなり。

○四方拜とは元日寅の時、帝王天地四方を拜し給ふなり。

○水の試は朝拜すみて後、内辨大臣の陣の座に著し、去年の水を庫しを今日の節會につきて奏し奉つるをいふ。

○腹赤の鱈は筑紫より腹赤の魚を奉つる。はらかとは鱈のことなり、景行天皇の御宇より始まる。

○七曜の御曆を中格省より獻つる七曜とは日

縁談に忌み恐るゝなり。先づ女(巳)男(申)は支四つ目にて火克金なり。是四厄といふ、厄は厄難の義にて甚だ悪し、故に忌むなり。又女(申)男(巳)は同じく火克金にて、女より十う目なり、是は順の相克にて男より女を克するなれば、前の四厄ほどには有らねども金火の爲に薄け鈍りて争ひ逆らはざるゆゑ、火又金に惑ふの意あり。是を十惑といふ惑とはまどふなり、されば男より女に惑ひ溺るゝ故忌むなり。又女(酉)男(午)は順の相克にて十惑なり、女(巳)男(午)女(午)男(午)などは四厄十惑ならねども火と天にて火旺火と旺じて悪し。女(申)男(申)女(酉)男(酉)も金と金と金旺金とて悪るし、此外四厄十惑はなし、然るを何れの支よりも四悪十悪ありとて忌み避くるは惑ひの甚だしきなり。相生の良縁をあやまつことを慎むべし。

○男木女木 ○木旺木とて二つ並ぶれば林ともなる此理を以て吉といへども木と木とそつて火を生じ、常に口舌事絶えず。又病の恐れあり子は生れても短命なり、さもなくば不孝なるべし、氏神と三寶を信じてよし。歌に、

ちはやふる神もあはれとおぼすらん  
いかさのうちをたのみ我身を

月、火、水、木、金、土のことなり。(曆の部にあり)

以上三つの事を諸司の奏といふ。

○鏡餅を神前に供へる事は天照皇太神宮の磐戸に入り給ひし時、神鏡を磐戸の前に掛けて神樂を奏し、神を慰め奉りしより其例を學びしなり。

○門松を建つるは、松は千歳の節を保ち、竹は萬世を經るもの、共に長命を壽くしるしに立してものなり。

○商榘は深山にありて雪霜にやぶれず因つて祝して注連繩に飾るなり、又注連繩を左によるは天は左に旋ぐるに例へしなり。一切の蔓草の左にまくも天の理なり、故に注連繩も左よりなり、又端を揃へぬは上古の質素を示すなり、是れ萬事奢侈を用ひず、諸事質素にせよとの教へなり、又注連繩の足を七五三に造るは七五三皆陽の數にて天道は十五にして成るといふ儀なり。天照太神、天の磐戸より出でさせ給ひし後再び入らせ給はぬ爲め諸の神達、繩を引渡し給ふ。是れをしりくめ細といふ。七五三繩の起原なり、不淨をはらふものゆゑ神事の時には必らず是れを引き、町人

○男木亥火 ○木生火と順の相生に吉一たん産神のとがめによりて口舌事あれども後々は火福きたり命ながく牛馬に縁ありて富貴なり、子は七人あるべし。

いにしへの神のむすびしえにししかも  
おもふまゝなる身こそたのしき

○男木女土 ○木克土と克すれども元土は木をやしなふこと母の子を産むに辛苦するにひとし。されば此相克はよし、男土女木は逆の相克にして悪し、是は順にて夫婦中よく財寶ありて萬よし、但し常におもひ事有りて子に縁なし。

わが世こそおほくの人にすぐれたり

よろずのはたからともしからねば  
○男木女金 ○これも金克木を下より克すれども吉、此故は金は木にそうて用をなす、槍、薙刀、鋤、鐵なども木といふ柄がそうにより用を達す、克の中の相生といふ、但し女木男金は凶し、子三人あるべし、信心ふかく慈悲善根してよし。

あひそめしそのゆうべこそうれしけれ  
ちぎりたえせぬいもとせの中

百姓の家居も、正月は神在すゆゑに此れを引くは不淨のものを入れずといふ印なり。  
○元日に塵埃を掃き捨てざるは、新に來たる陽氣を拂ひ捨てずといふ意なり。  
○今夜天都の交合すれば壽命を損ず、慎むべし。

○破魔弓をもてあそぶは、弓箭の徳に妖邪を拂ふゆゑなり、魔を破る弓と云ふ意なり。  
○羽根をつきは、蚊にくはれざる禁なり、蜻蛉といふ蟲、蚊を取りくらふなり、ゆゑにむくろじに羽根を添へて蜻蛉の形に作り、羽子板にてつき揚ぐれば蜻蛉がへりに飛ぶさまに似るなり。

○手輪は渾天儀に象り、是れをつき回らすは日月星辰の滞りなく四時に旋りて安靜ならんことを表すなり。  
○二日、狗日といふ、此日武家には馬垂始め又鐵砲始めなり、農家は鋤めなり、其外四民とも夫れらの業をなし始むるなり。

○三日、猪日と云ふ、此日を三箇日といひ親族懸り相互に贈答の品を年玉といふは、年の贈もの、略語ならんか。  
○四日、羊日といふ、飛鳥井家の鞠始めなり

○五日、牛日といふ。此日千壽萬歳猿廻し來る。  
○六日、馬日といふ。  
○七日、人日といふ。今日武家にては門松を切り短くす。是れを若松と云ふ、七種の粥を食す、是れも疫邪を防ぐ禁厭なり、歌に、  
芹齋五行はこべら佛の座

○正月上の子の日若菜七種を禁庭へ獻つること古き故實なるなり、又禁庭には白馬を見給ふを青馬の節會といふ、至つて白きものは青く見ゆるゆゑ、爾か謂へり、馬は陽獸なり青きは春の色なり、今日白き馬を見れば年中の邪氣を拂ふといふ、小兒の歌ぶ春駒の唱歌も是れによりしものなり。

○又上の子の日、野邊に出て、小松を曳きて歸へり、宿に植ゆるを子の日の遊びといへり松は霜雪にも凋まず、千歳を経るものなれば春の祝儀にかくするなり。歌に、  
子の日する野邊に子松のなかりせば  
千代のためしに何をひかまし

○十一日、鏡に備へし餅を煮て食するを具足開きといふ、町家は此日祝ひとて祝するなり

○男木女水○水生木なれども下より相生なれば逆の相生とて半吉なり  
信心ふかく稼業怠らずば末ほど繁昌し田島牛馬に縁あるべし、子は三人あり。

ものおもひせしもむかしとはやなりて  
やすく世をふる事ぞたのしき

○男火女木○是も逆の相生にて半吉なり、女さし出づる心あれば悪し子は三人有りて難なし、はじめはおもひ事あれども末ほど繁昌し名もたかく人にしらるべし、女さし出て、又は夫婦不信心なれば仕合あしかるべし。

かぜに折るゝさし出の磯の松ケ枝を  
ためしにひきて身をつゝしめん

○男火女火○火旺火とて大に凶し、火を重さぬれば炎なり。むねをこがす理にて比和の内にてよろしからず。子はあれども不孝なり、夫婦常に争ひ絶えずよく身をつゝしみ信心すべし。  
あはが家にしほ來たりたく夕けふり  
すむかひもなきわが世くるしき

○男火女土○順の相生にて大によし、夫婦中和合し命長し、財寶あつたり官人は位たかく富貴すべし。子はあまたある中二人の力を得べし  
さかえ行く松の二葉の末かけて  
あひおひちぎる中ぞたのしき

○男火女金○火克金と克すれども順の克にて半吉なり、金は火にあうて光をます理にて、夫のかけにて世も譽れをあるべし、されども常に口舌絶えず子は二人ありて智慧かしこく、不信心なれば老は貧なり。  
みるまじのかくれのまね世に出て  
かひあるさきにあふぞうれしき

○男火女水○下より逆に克して大に凶し、夫婦常にいさかひたえず、女夫を敬まはず、嫉妬ふかし、衣食もとほしく貧にして子は三人あれども力になりがたし。よく身を慎しみ信心せば末にては安かるべし。  
ゆうげたく賤のなましばもへかねて  
なみだひまなき身こそわびしき

○男土女木○是も下より逆に克す不和の克とて大に凶し。やゝもすれば女より争ひを仕いだし、財寶乏しく貧なり。子あまたあれども育ちがたし、夫婦心を正直に持ち信心せば末にては安樂なるべし。

○十四日、門松、注連繩を今日去る。  
 ○十五日、上元といふ、爆竹は竹を焚いて聲を發せしめ、邪氣を驚かしむるなり。注連繩を焚いてほこらすを左義長といふ、此説さまざまあれども略す。  
 ○十六日、踏歌の節會あり、あかるばしり豊の明りともいへり、今日俗人の舞を御食あり又鶴の庖丁あり、大隅、高橋、隔年に勤む。  
 ○十八日、禁裏左義長、此外正月の式多けれど略す。  
 ○正月、中社及び民間の事を記す。  
 ○初寅、京鞍馬山多聞天へ參詣多し、ふごおろしといふことあり、詣人石を求めて土産とす。  
 ○初卯、江戸龜戸、妙義參り、大阪住吉參詣す。  
 ○元日、京祇園御掛の神事、寅の一天に松の木の前かけに新しき火をきりて大福雜煮の爲めに浴中浴外の家々より火を受けに參詣すること夥しく、其道すがら互に他事を誹謗し其喧しきこと言はん方なし、是をけづりかけといふ。大三十日の夜なりと言へるは非なり。

あらがねの土もまばらにやれかべの

すさめられたる我身なりけり

○男子女火○逆の相生にて半吉なり。女の力にて世わたりすれども思ひ事絶えず財寶に縁あれども子の縁うすし、慈悲善根し、神佛を信心すれば末ほどさかえ身安樂なるべし。  
 數ならぬうき身も神の恵みにて

その日やすらかにあくるうれしき

○男子女土○土旺土と比和すれども半吉なり、始めはよく後わるし、とかく病事たえず、子は三人あれどもちからになりがたし、能々養生をなし、神佛をいのり、慈悲施しをすれば仕合せなるべし。  
 氣力なき風の柳のみだれつゝ

そぞろにさわぐうき身なりけり

○男子女金○順の相生にて大いによろし、財寶おほく下人数家ありて田畑牛馬に縁あり、子五人ありてみめかたち能く、藝能ありて孝行なるべし、信心ふかく情をかけなば末ほど富貴なり。  
 ぬりこめに數さへまさる子だからに

たのしみつきぬ我身なりけり

○大阪天王寺今日種々會式あれども略す。  
 ○二日、近江竹生島つなぎの神事。  
 ○五日、京東福寺五百羅漢畫像を掛ける、天王寺太子堂生身供へ、同十四日まで其夕太子堂佛舍利殿かす、同六時堂にて寺領の百姓柳の枝に挟みし符を受んと數百人赤襦にて押合ひ其年の豊凶を試みることにあり、俗におし合といふ。  
 ○九日、攝州西ノ宮民家今日戸を閉ぢ出入せず居籠といふ。  
 ○十日、我として攝州西ノ宮又は大阪今宮に參詣す、京建仁寺町戎宮へ參詣多し。  
 ○十三日、住吉御弓。  
 ○十四日、俗によねんかうといふ。  
 ○十五日、河内平岡明神粥占の神事、和州信貴山福高。  
 ○十六日、京永觀堂大般若 朝朝公の世に始まるといふ。江戸増上寺山門へ諸人を登す、同淺草報恩寺開山親鸞聖人の木像へ鯉魚を獻供す、飯沼天龍宮より二尾づゝ贈る。  
 ○十九日、八幡厄神參り(十五日より今日まで)今日より二十五日まで法然上人御忌四ヶ

○男子女水○天刑とて順の克なれば半吉なり、女の心あらく男を輕んずる心あれば、はじめよくとも次第に貧になるべし、子二人あるべし萬をつゝしみ信心ふかければ後々は仕合なほるべし。  
 川の瀬のむもれてのみはすきさじや  
 また立のぼる浪もある世に  
 ○男子女木○是も天刑とて順の克なれば半吉なり、初めは貧なれども末はよかるべし、子は二三人あり、その内一人は病身なるべし。不信心なれば次第にまづしかるべし、一代の内よく天満宮にしんくしてよし。  
 深山路のそまのきるてふ松かしわ  
 世にいづる時のありもこそすれ  
 ●男子女火○下より逆に克して大にわろし、夫婦の中むつまじからず財寶たまりても又ともしくなり、男は病身と成るべし、子あれどもおろかにて力となりがたし、心を正直にもつて信心せば仕合なほり、末にてはよし。  
 むば玉のやみじにたのむとし火を  
 吹すさむなるかせぞつれなき

の本寺修行せらる。

○二十五日、初天神（京北ノ江戸湯島、大阪天満）

二月（異名、仲春、如月、令月、夾鐘律）

此月餘寒烈しく更に衣を重ねるゆゑ、衣更に著るといふを略して、衣更清月と云ふ。

○初午、諸所稻荷祭り。

○七日より十四日まで、南都新の能あり、四座の大夫替るゝ隔年につとむ。二月堂、水取會、大たいまつ。

○十五日、釋迦入滅諸寺にて勤む、京嵯峨釋迦堂柱たいまつ。

○十六日、盲人積塔、京高倉清光院にて行はる。

○二十二日、天王寺釋靈會俗人の舞あり。

○二十五日、河内道明寺祭り、京北野葉種の御供。

○上の申の日南都春日祭り。

三月（異名、季春、蠶月、彌生、姑洗、律）

當月は草木萌生しけるがゆゑ彌生と云へるを略して「やよひ」といふなり。

○二日、攝州天王寺縁の下の舞と、舞樂あり

○三日、重三又上巳ともいふ、上げ初めのこ

●男金女土○逆の相生にて半吉なり、女の威勢は男に勝さりやしもすれば夫をかるしむゆゑ、財寶たもちがたし、此心をつしめばよき子をまうけ末にては田島下人牛馬に縁ありてさかふべし、不信心ならばわろし。

常磐木をまきながらしそ藤かづら

かくてぞはなの咲くはるもあれ

●男金女金○金旺金と比和しながらわろし、金と金打ちあはす理にてあらそひ事絶えず、はじめはよくとも後凶しく家内に病事絶えず貧なるべし。よく心たゞしくして神佛をいのらばよし、子は三人あるべし。

世をわたる蟹の小舟のあやふしや

沖津なみ風たぬ日ぞなき

●男金女水○金生水にて大によし、財寶多く田畑牛馬に縁ありて願ひ望みこと悉く叶ひ、子は五人ありて命永し、慈悲の心ふかく人をあはれみ、信心ふかければ彌々富貴にて子孫ながく榮ゆべし。

みつ春に植てし庭の姫小まつ

枝葉さかふる宿ぞめてたき

●男水女木○是も順の相生にて大によし、金銀田畑牛馬に縁ありて下人多く、子は三人か五人あるべし、命ながくして何事も心のまゝなり

但し不信心にほこる心あれば、おとろふべし、つしみてよし。

わが宿のかきねの梅の咲にほひ

人にしらるゝ春ぞたのしき

●男水女火○相克ながら順の克なれば半吉なり、女の心あらく常に夫と不和なり、不信心なれば末ほど貧になりておもひばかゆかず命みじかし。よく身をつししみ、しんくせば仕合がなほるべし、子は一人か三人あるべし。

あさの野にありもはてざる女郎花

かぜにくねるぞあはれなりける

●男水女土○逆の克にて大にわろし、病事しげく、財寶なく口舌おほし、子は四人あるべし。夫婦じやけんなる心をつししみ、氏神福神をいのらばすこしは仕合せなほり、後々は世をやすくくらすなり。

いつの世にあだなる種をうへ初て

うさのみしげるわが身なりけり

●男水女金○逆の相生ながらよし、財寶多く眷屬等あり、子も多く、

波水屋祭り、桑田郡愛宕山陵を

と、初の巳の日といふ義なり、是れは古三月

は辰の月なれば、巳を除日として不祥を除く

意なり、故に祝ひ日とせり、漢十鏡の代より

巳の日に拘らず三日を祝ひ日とせり、重三と

云ふは三を重ねるといふ義なり、三は陽数に

て古なり、古中華には曲水の宴とて、流水に

流し詩作して楽しみしとなり、王羲之

が蘭亭の曲水世に名高し、本朝にては顯宗天

皇の御宇より始まり、今日禁庭雜合せあり

○難祭りの事は源氏物語にも見えたり、十歳

に餘りぬる人は難遊びせぬものとあり、古は

十歳までの女の童のせし事にや、又童子とて

太き人形に衣服を着せて遊ぶこと源氏物語に

あり、よろづの思み事を之に負せてはらふな

り、今の市松人形と云へるは多道子人形の

遺風なり○艾の餅は和漢久しく用ふること

見えたり、此日桃の花、酒に浸し、呑む者は

病を除き、顔色艶ふと云へり、但、花は一重

を用ふべし、千重け鼻血を用し、白桃は腹を

下す、思むべし○同日江、洲崎、大阪住吉沙

干、土佐磯石を海中に投る。

○六日より十五日まで京嵯峨、全佛○九日丹

波水屋祭り、桑田郡愛宕山陵を

【木】三世相續書



祭るなり。
○十日、讃岐金毘羅會式あり、市といふ、四日より十二日まで同日に京高維法花會
○十一日、今安樂花祭り、大和吉野會式
○壬生寺大念佛、十四日より二十四日まで種
○十五日、江戸隅田川木母寺梅若忌、下谷稻
○十五日、浅草第六天祭り
○十五日より二十一日まで攝州中山寺無縁經
○十八日、江戸浅草三社權現祭り(但し巳卯
○十九日、京畿の釋迦御身試
○二十一日、諸國大佛御影供、高雄女人詣て
○二十一日、山伏見稻荷社御あり
○二十一日、立春日より七十五日を期とす
○二十一日、一重は大體六十日を期とす
○二十一日、吉野は山中ゆゑ六十五日を盛りとし、山深
○二十一日、重櫻より十日ばかりおとし、深山高山は平地
○二十一日、より十日或は二十日ほどづゝも遅く盛りなら

四月(異名、孟夏、餘月、卯月、仲夏)
此月は卯の花咲くゆゑに卯花月といふを略し
て卯月といへり。
○朔日より五月四日まで拾を著るゆゑ更衣と
いふ、今日江州筑紫祭り、此里の婦人、夫を
持ちし數ほど銅を被きて神へ参りしが、其事
今は絶えたり。
○八日、灌佛とて寺々にて誕生佛を供養す、
推古天皇の御宇より始まりしとぞ。
○二日より今日まで河内野崎の觀音無縁經、
○同八日、叡山戒壇堂開帳并に花摘み。
○九日、清水寺地主祭り。
○十四日、和州富原寺練供養。
○十五日、僧侶結夏とて七月十五日まで九十
日の間、禁足安居して外に出でず。是れ地中
より出づる諸蟲を踏まんことを厭ひてなり、
足れを夏籠といふ。
○十六日、江州三井寺鬼子母神へ願ある人
團子千頭を供ふ、俗に千團子といふ、諸人ら
けて歸へる。
○十七日、紀州和歌祭り。
○二十一日、高野山花供。

末ほど繁昌すべし、信心つよく人のおちめを救ひほどこしせば、いよ、
いよよかるべし。

ちりもなき岩井の清水底さよく
さかゆる松のかげをとめたり

●男水女水○比和すといへども、水に水をそへ、洪水の世の害をなす
理にて大に凶し。なすほどの事心のまゝにならずして、苦勞おほく貧
しかるべし。子は五人あれども親にさからひ不孝なり。よくく信心
して福を祈るべし。

にぎり江に濁りをそゆる雨水の

なみにはうつる月かげもなし

右男女相生はいにしへより定めきたるものにて、生克順逆の理をお
うて吉凶をことたりたり、世上雜書には誤つこと多し。縁談は生涯の
禍福さだめなれば、妄りに定むべからず、互の氣立生れ立を再三聞き
繕ひ、生れ性を聞き糺し相性の理を考へ、縁邊を定むべし。たとひ家
富榮たりとも、富を恃みに心驕り身の行ひたゞしからず不仁無慈悲
なくば相生も相克の場にいなり、良縁も悪縁となり、さまざまの悲み
きたるなり、よくく慎まざるば有るべからず。

十二運産月善惡之解

Table with 12 columns: 金, 木, 水, 火, 土, 性. Rows list months and corresponding elements (e.g., 四月 木性, 五月 火性).

○當月八日より和州金峰山上 役行者へ參詣  
是れ開扉といふ、九月八日まで諸國より參詣  
人多し。

○上申日、山城松尾祭、中の子日、京吉田祭  
○中の卯、江州八幡祭、○中の申、山王祭、中  
の酉、京加茂の葵祭、○上の辰、向明神祭、  
○上の巳、江州多賀祭、同堅田祭、山科  
祭、○中の酉、梅宮祭、○初卯、江州磯洲  
淡路祭、○十六日同相の森稻荷祭。

○五月（異名、仲夏、草月、鶴首、養賓、律）  
當月を早苗を植ゆるゆゑ早苗月といふを略し  
て「さつき」といふ。又梅雨降るにより五月雨  
月といふ。

○朔日、加茂競馬足揃へ。

○五日、今日を端午といふは端午の午の日をい  
ふ。菖蒲を家根へ葺くは歳時記に五月五日艾  
を結び人の形に造り、戸上に懸れば毒氣を  
避くるといふに習へるものなり、禁中にも主  
殿寮内裡の殿舎に菖蒲を葺くとあり、又菖蒲  
の根を酒に泛めて吞めば邪氣を拂ふなり。又  
菖蒲とて「よもぎ」、菖蒲、其外雜花を五色の  
糸に貫き臂にかくる、又堂上には懸玉を簾御  
帳に懸けらるゝなり。又艾を採りて「もぐさ」

長

此運にあたる月の生まれは長生して夫婦むつまじく、家業繁昌し  
て萬よく、子も孫も無病にして命長し、東西をかけまはり、家業  
に精を出すべし、怠らば貧しかるべし。

○此運にあたれば兄弟ともによし、其内他所にて別々に家を建てよし  
同じ營みはあしく商賣をかへて世渡りをすれば繁昌するなり、奢をつ  
しむべきなり。

沐

此運にあたる月の生れは、夫婦の縁はじめかはり、男女とも二度  
目の縁定まるべし、さすれば家業繁昌して富榮え、何ごとも成就  
し、子孫も息災なり、兄弟は睦じからず。

○此運にあたれば、武家ならば兄弟虎狼の心をいだき、互ひにあらそ  
ひ絶えず、よく／＼慎みてよし。此運の人は藝術秀づるなり、威勢あ  
りて人の頭となるべし。

官

此運にあたる月の生まれは、夫婦中天理にかなひ、命ながし。二  
人とも威勢つよく能き子を設け、方々より縁を求むる人多かるべ  
し、然れども重縁の親類ならては縁談すべからず。

○此運の人は兄弟國を隔て、住居するか、又は海川を隔て、住居すべ  
ばよし。左なければ不和にして災おほし、又火災の難あり、神佛を祈

臨

此運にあたる月の生れは、夫婦仲よけれど、互ひにうたがひ隔つ  
る心あるべし、萬を慎みうたがひの、心なく夫婦和合すれば、家  
業さかへ子孫繁昌すべし。

○此運の人は兄弟運つよく、同じ家に住み又は近隣に住みて德行をな  
さば大にさかゆべし。兄弟不和の心あるか遠く隔て、住ば災あるべし

帝

此運にあたる月の生れは、男女とも半よしなり。男は入婿などに  
往いてよし、然れども稍もすれば災難來りて身の害をなすこと多  
し、心正しく家業出精すべし。

○此運にあたる人は兄弟とも運つよし。幼少の中は仲よからず十二三  
より五六迄に病あり、兄弟とも養子に行き他の家督をつがば繁昌する  
運なり。

衰

此運にあたる月の生れは夫婦の縁うすく、たま／＼縁ありても初  
めの縁は死別れるか離別して、二三度もかはりて後定まる、と  
かく病身がちなり、能々養生すべし。

○此運の人は兄弟中よけれども、とかく仕合悪しく浮沈たび／＼あり  
物事に辛抱つよく一心にかせがば後々は仕合なほるべし、信心してよ

此月炎熱にて水潤るゆゑ水無月といふを略し  
て「みな月」といふ。  
○朔日、賜水の節と號く、今日所々より去年  
貯へし氷室を奉る、禁庭にて是れを諸臣に分  
ち給はるゆゑ然いへり。氷室は仁徳天皇の御  
宇より始まり、民間にては舊臘製せし餅を  
貯へおき、今日食して氷を喰ふに准らふ。  
○今日より二十日まで駿州富士詣り○同日  
所々に富士登山○大阪藤原愛珠詣り○五日  
京祇園鉦の曳染○六日夜宵山といひ數萬の燈  
火をかゝげ稀代の賑ひなり○七日朝祇園鉦  
を曳き渡す、是を七日鉦といふ、十四日まで  
御旅参り、同十九日まで四條河原の納涼、賑  
ひ夥し○十四日、祇園鉦を曳き渡す、是を  
十四日鉦といふ、同日尾州津島祭り、近江竹  
生島祭り○十五日、江戸山王祭(子、寅、辰、  
午、申、戌の年なり)○十六日、伊勢山田祭  
り○十七日、藤州藤島祭り○十八日、祇園御輿納  
れ○二十日山城紀川原の納涼○二十日同宇津  
山竹切○二十二日大阪陣屋祭り二十四日京愛  
宕山千日祭り○二十五日京黒谷島拂ひ、同日  
大阪天満祭り拜見の家根船幾萬艘といふ數を  
知らず、其賑ひ天下に並びなし○二十八日同

生玉祭り○昨日京加茂水無月の能○攝州住吉  
御祇ひ、近江幸崎千日祭り。  
七月(異名、桐月、孟秋、涼月、夷則、律)  
此月七夕に文をかすといふことあり、故  
に女月といふ、略して「ふづき」とも云ふ。  
○朔日加茂後の日の能○六日北野御手水○七  
日飛鳥井家蹴鞠、今日牽牛織女の二星を祭る  
を乞巧奠といふ、原は武丁と云ふ人の戯言よ  
り起れども、和漢ともに古くなすことなり○  
十日京清水千日祭り、攝州中山千日詣り○十  
三日京本願寺燈籠○十四日禁中御燈籠、江戸  
王子祭○十五日八幡安居の頭、三井寺女人詣  
り、大阪天王寺千日祭り、今月十二日又は十  
三日より十五日まで精霊祭として種々の供物を  
亡き人の魂へ祭る、兩親ある人は先に酒  
肴を送り祝す、是れを生身魂といふ、昔は年  
の暮と兩度なりしを今は此月の魂祭りのみと  
なれり○今日を中元といふ、諸人父母の墓を  
掃除し、墓前に燈籠をかけ或は高燈籠を照ら  
すもあり、今夜より男女打雑りて踊をなすこ  
とは、木蓮尊者の母地獄へ墮ちしを釋尊はれ  
を救ひ給ひ、天上へ浮みしかば、木蓮の諸族  
歡喜踊躍せし餘風なりとぞ○十六日今夜京如

病 此運にあたる月の生れは、夫婦の縁おもしろからず、とかく無常  
氣になり、發心出家の望たえず。又妻を疎みうとまるゝ運なり。  
互に睦まじくせば末はよかるべし。  
○此運の人は男女とも兄弟仇敵のおもひをなし、和合せず、兄の心  
正しからざれば餘の兄弟も親切氣なし、能々慎み睦まじくすべし。  
死 此運にあたる月の生れは夫婦の縁うすく、死わかれの悲しみあり  
其身も多病なり。養生は元より、善根をなして神佛を祈らば末さ  
かゆべし。  
○此運の人は兄弟仲あしく心猛々しく、然し武家ならば武藝其餘の家  
業にても身をおしませず、とかく力業を好み人に敬まはるゝ運な  
り。

墓 此運にあたる月の生れは中人なしに夫婦の約束をすることあり。  
初めは中能けれども後には疎みうとまるゝ事あり、ふかく慎まば  
仕合なほるべし。  
○此運の人は兄弟運つよく家職もしかと定まり和合するなり、しかし  
氣轉のさかぬ性にて萬事まはり遠き分別多し、智慧ある人に相談して

絶 此の運にあたる月の生れは夫婦の縁大に凶し、口舌事多く、常に  
災難來りて身危く、夫婦離別するか、病身なるべし。深く信心せ  
ば、凶變じて吉となるなり。  
○此運の人は兄弟はやく死別すべし、さなくばとかく國を隔てゝ互  
に力になりがたし、其上常に仲悪しく他人の如くうとみあふ運なり、  
慎みて和合すべし。  
胎 此運にあたる月の生れは夫婦仲よし、然し中を隔てゝ居ることあ  
るべし、家業は繁昌し、人に重く用ひられ仕合よし。然れども若  
年の内災ひ多し、慎むべし。  
○此運の人は兄弟遠ざかり隔てゝ住むべし、互に助け合ひ力とならば  
仕合よし、随分神佛を信心し慈悲善根をなさば、思はぬ幸ひ來りて歡  
び事多かるべし。  
養 此運にあたる月の生れは夫婦同年の縁ならば繁昌すべし、始めは  
障あれども、後程仕合よく、何ごとも心になかぬ、不信心ならば  
大にわるし。  
○此運の人は人前をかざる心あるゆゑ、兄弟仲も實氣薄く、他人には

なすべし。  
○此運の人は兄弟運つよく家職もしかと定まり和合するなり、しかし  
氣轉のさかぬ性にて萬事まはり遠き分別多し、智慧ある人に相談して

意が獄におくり火とて大文字の火を焚く、弘法大師の作蹟なりといふ、其外松ヶ崎は妙法の二字船岡山は舟のかたち其外さまありあり二條河原よりの見物賑はし、○因にいふ盆の精霊祭りの送り火と二月の風は肥前長崎に次ぐものなきよし、九州の人の噂なり○十日京御霊祭り二十四日地蔵祭、京、大阪の町々の地蔵會甚だ賑ふ、河内八尾の地蔵市あり、菊市とて世に名高し○二十七日信州御射山祭、穂屋作りの御神事

八月(異名、仲秋、壯月、橘春、南月、律)此月は木の葉黄ばみ落ちるを以て落葉月といふを略して葉月といふ、又秋の咲くを以て秋月といふ

○朔日、たの實の節句といひて諸人互に進物し祝し合ふ、建長の頃より始まりしとかや、貝原翁は秋の田の穀物の登るを祝ふゆゑ田の實の朔日といふと言はれたり、此説正しからんか、今日禁廷へ御馬二匹を東都より獻せらる御迎ひの例にや○今日和泉三村祭、堺甲斐町開口の明神といふ、俗に大寺まつりといふ

○三日同所天神祭り○四日京北野の天神祭り○五日近江白旗開帳○十五日教養氣比宮祭り

八幡放生會、往古元正天皇の御世、大隅日向の逆亂を宇佐の神職伐ち平げ、多く人を殺せしかば、放生會をなすべきよし神詔ありしよし行はるとぞ、此日宇佐八幡、江戸深川八幡、筑前宮崎八幡、其外諸國八幡祭多し、今夜京深月見、其外諸所に月を賞するは秋の最中にて月々に清ければなり、秋の金氣月は水精にて金生水と相生すれば月の清き理なり

○今日播磨野口念佛す○十六日京菅太神祭り○伊豆三島明神祭り○十八日京御霊祭り○二十四日南都西大寺光明會、八幡太郎義家の御忌なり○十八日伊勢桑名春日大明神祭り○二十日長崎善隣祭○二十四日江戸龜戸天神祭り(子寅辰午申戌の年なり)筑前幸府祭○二十七日和泉蟻通明神祭り○二十八日京西院祭

九月(異名、季秋、玄月、菊月、無射、律)此月は夜長きゆゑ夜長月といふを略して長月といふ、又菊咲くゆゑに菊月ともいへり

○今日より八日まで拾を著る○四日京北、羊堂祭、木幡祭○泉涌寺舍利會○九日鞍馬祭、貴船祭、伏見御香宮祭○今日を重陽といふは九は老陽の數にて月も日も重なるゆゑ重陽といふなり、今日、禁廷には菊花の御宴あり、

愛せられ用ひらるゝなり、されどもとかく誠すくなき性なれば、末とげ難し、能々實意を盡くし人に交りてよし。

生年吉凶 (并守本尊の辨)

守本尊をしる歌

子は千手、丑寅としは虚空藏、辰巳は普賢、卯は文珠なり。午は勢至、未と申は大日よ、酉は不動に戌亥阿彌陀ぞ。

坎中連子

あり、此人常に閑静なる所に住むことを好む、又子は損蟲とて、人より惡しきを受くることあり、慎みてよし、夫婦の縁は始めの縁はか

艮上連丑

二十九歳にて禍ひあり、慎みてよし。丑の年の生れは一代の守り本尊虚空藏菩薩なり。此人前生は朱帝の御子なり。北斗のこもん星なり、米一石五斗と金子六貫目うけ得て今生へうまる、性才氣ありて辯舌能く應對事をよくす、萬事にさとく、細工事は器用なり、夫婦の縁始めは祟り、離別することあり、身上始めよく中年におとろへ又仕合なほり、老いて富貴繁昌なるべし。子は四人あれども二人は短命にて先立つことあり、老いて一人の子の力を得

民間にも粟を食し菊酒を呑む、是れ壽命を延ぶる薬なりとぞ、今日より製衣を著す、又美女子は雛祭をなす、是れを後の雛といふ、又美唐土にては茶葉を臂にかけ、高き岳に登り酒宴をなすとぞ、人日、上巳、端午、七夕、重陽を合して五節句といふ、其月みな陽數を向ふの意、是れにて祭すべし、此日より三月晦日まで足袋を穿く、○京醍醐祭、鹿ヶ谷祭、○十日近江四宮祭、五條天神祭、下鳥羽祭、○十一日伊勢奉幣使出御、○十二日太秦牛祭、○十三日白川祭、攝州住吉寶の市、今夜さや豆を食し月を賞すること仲秋十五夜の如し、是れを後の名月といふ、○十五日京栗田祭、江戸神田明神祭、丑、卯、巳、未、酉、亥、隔年なり、豊前小倉祭、○十六日山城岡崎祭、伊勢渡會神嘗祭、江戸芝神明生祭、○十八日攝州池田興福祭、○二十八日八幡花頭、○三十一日江戸根津權現祭、隔年なり、山城淀祭、二十四日近江湖明神祭、○中ノ巳午周防山口祭、○十月(異名、孟冬、陽月、良月、應鐘律)此月は陰氣満ちて雷全くならざるゆゑ雷名月といふ、又陰を鬼とし、陽を神とす、因つて神無月ともいふ、又諸木の葉ことごとく散り



べし、十八歳にて命危きこと有り、慎みてよし。命は七十三にて死すべし、釋迦如來は壽命を守り、普賢はふくとくを興へ給ふ、文珠は智慧を授け給ふ。何れも一代の内信心してよし。○一説に曰く丑の年の生れは父母に孝あり、貴人に近づき衣食つくることなし、生れ附き、ちから強く心しづかなり、十八歳の頃災にあふ。善事をなさば免がれ天命をたもつべし。寅の年に生れる人は一代の守本尊は虚空藏菩薩なり。此人前生は青帝の御子なり。北斗のろくそん星なり、米二石金子六貫目を受け得て此世へ生るゝなり前生にて殺生をこのみ多く鳥獸をころしたるゆゑ、今生にて災難多し、又病身なるべし。然れども三十過ぎて仕合よくなり、知行財實に縁有るべし。夫婦の縁度々かはること有り、夫婦同年ならば長く保つべし子の縁は前生の殺生の報ひにて育ちがたし、佛に祈り求むべし。又養子してよ

落つるゆゑ葉みな月ともいふなり。○朔日爐を開き初む、今日より十夜念佛を修す○五日妙心寺法華忌、○六日南都興福寺法華會○十日讃州金毘羅祭、今日より十六日まで南都興福寺唯摩祭、○十三日蓮宗御影供、○十五日下元といふ、嵯峨荒玉院靈法開帳、○十七日禁中内侍所御神樂、○二十日京、江戸、大阪とも戒講とて商家は大いに祝す、並に姪子宮へ参詣す、此日誓文拂ひとて商人の年中の空誓文を拂ふと云ふ、○當月初めの亥の日餅を製して食す、禁中にも内藏寮より御玄猪を奉つる、御玄猪とは亥の子の餅の名なり、又中の亥の子に攝州能勢より餅を禁廷へ奉つる、○中ノ亥の日、出雪の大社神事あり、○當月諸國中の紅葉二月の花より紅なるなり、高雄、山中の紅葉、初瀬など殊に美事なり。十一月(異名、仲冬、革月、復月、黃鐘律)此月は霜の降る月なれば霜降月といふを略して霜月と云ふ。○朔日中務より明年の新曆を奉つる、唐土周の代には子の月を以て歳の初めとす、されば今日は周の代の正月元旦なれば今日冬至にあたらば、朔旦の冬至とて日出度大吉日とす



し、三十五六にておほきな災難あり、五十八九にて命危し、命は十六か又は七十七にて終はるべし、毘沙門は壽命を守り、大日は福德をあたへ給ふ。不動尊は智慧をさづけ給ふ、よく信心すべし。○一説に曰く寅の年の生れは學問を好み、聰明にして貴とし、又手に藝ありて人に重んぜられ、衣食足るべし。卯の年の生れは一代の守り本尊は文殊菩薩なり。此人前生は青帝の御子なり、北斗のもんぎよく星より大豆一石七斗と金子五貫目を受け得て今世へ生るゝなり、此人富貴繁昌して智慧才覚あり、又學問を好み、諸藝を習ふこと多しといへども、末とげがたし。夫婦の縁はよし、子は三人ありて二人の力を得べし、三十五六にて災あり、四十九にて福來る、命は七十七にて終るべし。薬師は壽命を守り、虚空藏は福德をあたへ勢至は智慧をさづけたまふ。何れも一代信心すべし。

二十年一度ある○八日伏見稻荷御火燒、俗に賽幣祭というて吹子を使ふ樂人は殊に観ふなり○十三日空也上人忌、京極樂院にてつとむ、昔平の貞盛也上人の愛せし鹿を射殺し、後悔して僧となる、今の極樂院の十八家の鉢たゝきは其子孫なり、故に俗體にして妻帯なり、衣は貞盛の狩衣の遺風なりとぞ此十八家今日より冬中洛中洛外の墓所を廻り高聲に無常の文を唱へる、其聲いと哀れなり○二十一日より本願寺開山忌○二十四日智證大師講叡山、三井寺、愛宕等小豆粥を煮て食す○二十五日より二十八日まで南都春日御祭○當月甲子日大國神を祭るを子祭といふ、又諸社に御燎の神事あり、是れを夜神樂または里神樂といふ。

十二月(異名) 季冬、除月、嚴月、太呂、律臘月)

此月は精靈會に僧を迎へ佛名を讀ませけるゆゑ、法師東西に起り巡ぐる、故に削走るといふを略して「しはす」といふ。

○朔日、俗に乙子朔日といふ、唐土股の代には丑の月を歲の元とせしかば今日は股の正月元日なり○八日龜を祭るべし、今日臘八といふ。

○一説に曰く卯の年の生れは萬事をなすに一度は成就し、一度はやぶることあり、末に至りては安樂にして衣食たる、天性心うつくしく人に愛せらるゝ生れなり。

辰の年に生まるゝ人は一代の守本尊は普賢菩薩なり。此人前生にては黒帝の御子なり、北斗のれんてい星より米二石七斗と金子五貫目を受け得て今世へうまゝるゝなり、天性智慧かしこく友傍輩の交り親切なるべし身上繁昌して衣食餘りあり夫婦の縁は度々かはるべし、子は六人ありて三人の力を得べし、命は七十五にて終るべし、毘沙門は壽命を守り給ふ。薬師は福德を授け給ひ、龍樹菩薩は智慧を授け給ふ、何れも一代の内深く信心すべし。

斷下癸辰



行はゞ免かれて長命なり。

巳の年の生れは一代の守本尊普賢菩薩なり、此人は前生白帝の御娘なり、北斗のふぎよく星より大豆二石と金子六貫目を受け得て今生へうまゝるゝなり、此人前生は女人にて有りしゆゑ、前生の業深くして今生にてもおもひごと絶えず、人をそしり妬む心あるべし、能々つゝしみ心を正しく持つべし。子は二人有つて大に力となるべし二十五六にて福きたり、三十五六、四十八九にて災難あり、五十にて命危し、慎みてよし、命は七十四又は八十三にて死すべし、地藏菩薩は壽命を守り、虚空藏は福德を授け勢至は智慧を授け給ふ、一代の内よく信心すべし。

○一説に曰く巳の年の生れは始めは衣食足り中年に貧しく晩年には繁昌なり、此人四方に名を揚げ自ら家業を始め、三十六七にて災あり慎みてよし。

斷下癸巳



今日の水を貯へおき餅を製すれば蟲を生ぜず、又煎薬に用ふれば効驗あり○十三日事始め、正月式今日始まる○十五日八幡安居頭○十七、八、九日江戸淺草市○二十二日京大徳寺開山忌○二十八日京極樂寺針明忌○佛○十日夜に京祇園の神前にて大般若經轉讀○江戸芝明祭○豊前早瀬和布疋の神事○今夜を除夜とも除夕ともいふ○節分の夜厄祓ひすることは來年厄年にあたる者の爲に祝詞を述べさせ是れを除くなり、夫れ厄に七難九厄とて七歳より九を加へ六十一歳に至るなり七歳、十六歳、二十五歳、三十四歳、四十三歳、五十二歳、六十一歳

以上を厄年といふ、萬事慎むべし。此日終鰯の頭を斬にさすは開鼻といふ、鬼人を食はんとて來たるを防ぐ爲めなりとぞ

此月下旬親類、朋友互に進物を取りかはすを歲暮の慕儀とす。又年忘れの宴は、一年を無事に過せしを祝ふなり○又親族長の人に鏡餅を送くるは新年を迎ふるを祝してなり。

年中行事了

感通即座占

感通傳とは往古神代太古の餘意にして卜筮を用ひずして、當意即座に占ふ法にして、尤も心に邪念なく正直ならざれば當らず、此術を年來熟すれば應對萬事に大に益あり、宋の邵康節は是れを心易といひ、何部晴明が梅花易も此理にひとし、されども熟せずして猥りに人の爲めに判斷すべからず、愚人は假初めの詞にも迷ひ易く、却つて禍をひき出すものなり、先づ何にても見るもの聞くものにて吉凶を占ふなり、大體住宅の模様によつて主の心を察すべし、家居廣ければ何となく取締なく掃除不行肩きにて清具諸式の置きやうも素りがましきはその主の心しまりなく、萬事正しからず、信義うとき人と知るべし。又表がまへ店など狭けれども奥の間ふかく、掃除行き届きて道具の置きやうも細やかにて何となし、精麗なる家は、其の主の心おもては美服を飾らず、萬事質素にして打見には心賤しき人の如く見ゆれど内心正しく、檢約を守り、信義ありて約束を變ぜぬ人と知るべし、理を以つて老ふれば、大家小家と雖も分に應じて主の氣象は見ゆるものなり、誠に慎むべきことなり。



午の年に生るゝ人は一代の守本尊は勢至菩薩なり。此人前生にて赤帝の御子なり、北斗のはぐん星より粟一石と金子七貫目を受け得て今世へ生るゝなり。此人は父母の家に住みがたし、父母の家に住むことあれば祟ることあるべし、別に家を持つてよし、武家奉公すれば手柄をあらはし、知行威状をうけることあり、何れ衣食の縁あり、然れども若年の内は苦勞多し、年よりて仕合せよく、夫妻の縁は初め替り、二度目の縁定まり、子は三人あれば一人の力を得て老後をおくるべし、二十五六にて危きことあり、命は六十二三、又は七十八九にて死すべし、薬師は壽命を守り、毘沙門は福德を興へ、文珠は智慧を授け給ふ。一代の内能々信心すべし。

○一説に曰く午のとしの生れは三十五六にて衣食乏しく三十五歳過ぎて追々財寶集まる。但し妻子災ひに逢ふことあり、信心してよし。

○人來りて未だ坐せざる前に早や咄を爲かくるは、必らず心に思ひ迷ふことありて相談に來れるなり、されども斯様の人は人の異見又は分別を聞いても用ひぬことあり。

○坐するに才たち動き、手足何となく動き膝などふるふ人は、貧しき人と知るべし、俗に貧乏ゆるぎといふも偽りならず、福者又は心裕なる人は、體動かさず坐して裕りと見ゆるなり。

○手を組む人は思ひ事絶えず、首を傾くる人は心に憂ひあり。

○指を組み合せ膝に置く人は家内と睦まじく又は縁談などの相談に來たるなり。

○悦びある人は眉開き、悲みある人は眉をしまむ首を振る女は淫亂なり、騒がらしき男は心定まらず。

○人に怖るゝ如く身を縮め人の面を見上げて物いふ者は必らず求むること或は金銀の無心などを言ひに來りしなり。

○人に物を興ふる心あるは必らず高ぶる如く見ゆるものなり。

○人來りてとくと坐し便にして、靜かに咄す人は必らず住所安堵して福分ありて家屋敷も持



未の年に生るゝ人は一代の守本尊は大日如來なり。此人前生にて黄帝の御子なり、北斗のぶきよく星より米一石二斗と金子五貫目を受け得て此世に生るゝなり。此人は前生にて物の命を多く斷ちしゆゑ、其むくひにて今生に子の縁うすし、されば物の命を助け神佛を祈り養子をしてよし。二十六三十六にて財を得、四十過ぎて身上たゝることなり、五十過ぎて仕合せなほる、一生の内衣食に事を缺かず、六十三にて命危し、命は七十一にてをはるべし。阿彌陀は壽命を守り、摩利支天は福德をあたへ給ふ觀音は智慧をさづけ給ふ、一代の内よく信心してよし。

○一説に曰く未の年の生れは若きときは財祿定まらず、驚き怖るゝ事あり、三十八歳を過ぎて妻縁定まり諸事心の儘に成るべし。此人天性智慧深く人の爲めとなる生れなり。

申の年の生れは一代の守本尊は大日如來なり。此人前生は白帝の御子

て人なり。  
 ○萬の藝者儒者醫師など初めて達ふに此方より尋ねぬうちに自慢咄をし或は他の人の事を誇り笑ひなどして、多言なる者は誠の名人博學の人にあらざる言多きは品少なしと云へるは是れなり、譬へば陶器に物を入れるに十分なれば振れども音せず少し入れれば蓋しく音するが如く藝のあらぬは頼りに他を罵るものなり、また學才藝術に滿つる人は決して問はず語りをせず、人を罵らぬものなり。  
 ○人に逢ひて施しをせし咄を誇り顔にして又直ぐに情を掛けしことを繰返しといふ者は心しかく情をかねぬものなり。  
 ○至つて情氣ふかき女は必ず不貞心にて身の行ひ正しらかぬものなり。  
 ○人の許へ相談に行くに向ふの主行なるは再び行くとも其事熱せざるものなり。  
 ○人の許へ談合に行く道にて思はず醫者に往き合ふは、假令相談調はずとも人の助けを得て調ふなり。  
 ○丸く金きものを見れば願ひ事成前することなり、又缺けたるものを見れば望み事叶ひ難し、叶うても又破るゝなり。

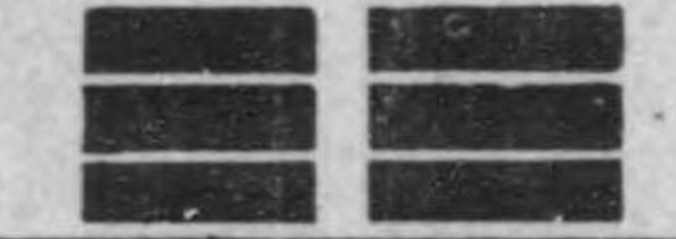
人相分解門

○人の許へ行くに賤路を横ぎるは先方の人必らず留守なり。  
 右の外萬事に心をつけよく考ふれば、自ら吉凶を知るべきなり。

頭並に鬘、鬘の論 それ人の頭は一身の尊き所なり、其骨ゆたかにして皮厚く中高きは富貴なり、頂の中高に光りあるは貴人なり、頂におち入りて皮薄きは貧賤にして短命なり、頂に肉瘤の如く出づるは大に貴し、出家なれば天下の大徳となるなり、頂の右の方陥くばみたるは母に早く離るゝなり、左の方陥くばみたるは父に早く離るゝなり、耳の後に骨あり鬘骨といふ、高く出でたるは命長し、陥くばみたるは短命なり、座する時頭らしるへ仰向くものは貧賤なり、首短く其體丸きやうに見ゆるものは貧心あり、瘦せたる人の首長きは富貴なり、肥えたる人の首長きは命短し、又先祖の家を毀る○首すぐれて細きは奸淫なり、又短く太きは根性わるし、頭の尖る者は物の頭となる、圓きは實情あり、額ととも油を塗りたる如く光あるは再縁孤獨として男女

なり、北斗のれんてい星より采十五石と金子五貫目を受け得て此世へうまるゝなり。前世にて人を多く殺したる其報にて今生にて目を煩ふことあり、又中風の病を煩ふことあり、能々善根をなして前生の因果をばらふべし。此人性質かろがろしく藝能ありて四方より金銀財寶集り來たる。又旅他國を駆け廻り辛勞することあるべし。子の縁うすく育ちがたし能々神佛を祈らば子あるべし。命は五十六又八十三にて終るべし、觀音は壽命を

坤皆斷



守り、勢至は福德を與へ給ふ。妙見は智慧をさづけ給ふ。一代の内能能信心すべし。  
 ○一説に曰く申のとしの生れは父母兄弟の力を得がたし。女は一生衣食に事かかずして能く夫に添ふべし、男は常に口舌事絶えず、五十六歳を過ぎて財寶聚まり身饒かなり。  
 酉の年に生るゝ人は一代の守り本尊不動明王なり。此人前生にては白

兌上斷



帝の御子なり、北斗のもんきよく星より白米二石と金子七貫目を受け得て今生へ生るゝなり、生質心ささく親に孝行なり、又君に忠を盡くし、學問を好み是非よく辨へ知る、然れども親兄弟に縁うすく、孤となることあり、子は三人あり若年の内は能く中年あしく老いて仕合せよく富貴繁昌なるべし。四十二三にて大に災ひあり、能々慎むべし。六十三にて命危し。命は七十七にて終るべし。毘沙門は壽命を守り、阿彌陀は福德を與へ給ひ、虚空藏は智慧を授け給ふ、能々信心すべし。  
 一説に曰く酉のとしの生れは一生財祿滿ち、人の爲に成ること多し。又身に病あり、能々養生すべし、二十二三にて災あり、善根施しをして免がれば命ながし。  
 戌の年に生るゝ人は一代の守り本尊阿彌陀如來なり、此人前生にて赤帝の御子なり、北斗のろくそん星より米二石と金子八貫目を受け得て



とも夫妻の縁かはりて子なく老いて苦勞多し  
 ○男の顔ひるく格好よきは惣領なり又顔ひる  
 くとも正面より見て格好あしきは次男なり  
 顔まへせまく後張なるは上に姉などありて親  
 の跡を繼ぐなり○頂の至みたる者は宜しから  
 らず、頂の後に溝あるは女は短氣にして才智あ  
 り男はわるし○頭小さく髪多きは男は他國し  
 るは流浪するなり○髪は山岳の草木に象る、  
 女の細く長く黒うして光りあり和かなる或は  
 髪ひきは富貴なり○髪の色黄にして縮みた  
 るは發達せず生涯勞絶ず○髪の色赤も災  
 に逢ふ○髪は内より白くたるは悪しく、老  
 なり○髪若年の内より白くたるは悪しく、老  
 いて黒くなるは命長し又仕合せよし○髪に油  
 氣なく縮みあるは人を妨ぐる相なり、よくよ  
 く慎むべし○頭の旋額にたれ又は頂に旋多  
 きは淫欲深し○髪結ばれ悪しき臭あるものは  
 貧賤なり○髪ながき人は心に毒ありて身に思  
 ひ事絶えず○髪額にかかりたるは男女とも母  
 に早く別れ妻子にたまる○髪髪とも油塗りに  
 も水をつけても早く乾くは苦勞たえず○四十  
 より前に髪白くなるは血氣衰ふるなり、極め  
 て命短かし。

面の部 面を覆せて身肥えたる人は性静かにし  
 て命長し○面月の如く清く秀て人を射るもの  
 は大に出世す、面何となく淋しく見ゆるもの  
 は發達せず妻縁かはる○面の若輩に見ゆるもの  
 のは貧窮なり○面黒く總身白きものは清貧な  
 り○面肥えて身瘦せたるは短氣なり○面の皮  
 薄く皺の皮を張りたる如く見ゆる女は夫を定  
 めず或は短命なり○男の眼の下黒く滯氣の色  
 あれば中年にて妻を絶す○年よりは早く顔赤  
 けて陽氣に見ゆるは散財の相なり○面の皮肉  
 ゆたかに血色濕はしきは一生安樂なり○顔色  
 よりも耳の色格別よきは大に發達す○怒れば  
 顔色火の如くなるは短命なり又は頓死す、慎  
 むべし。

額部の部 ○天庭高くゆたかに廣うして潤ほひ  
 髮際清く格好よきは官縁を主どる○缺陷ある  
 か又は疵痣などあらば貧窮難苦を主どる○上  
 唇せまく潤ほひなく髮際缺陷あるか又は肉高  
 く血色よるしからざるものは不運にして萬  
 るし○司空中正の邊に勝れて缺陷ある人は高  
 き所より落ちるか又は落馬の難あり、是れに  
 肩のかたち悪しければ必らず我家より火を出  
 す慎むべし○髮際天中邊に赤色あれば他人に

今生へ生る、天性心輕々しく、朋友の交りよし、若年の間は身上う  
 さ沈み度々あり、中年過ぎてより他人の財寶を招き得て繁昌すべし。  
 夫婦の縁ははじめは祟り、の  
 ちに智慧のある妻をもつべし  
 子は三人ありて一人の力を得  
 べし。又子孫に名をあらはす  
 者あるべし。此生れは手の藝  
 はなりがたし。故に商人とな  
 りてよし、二十八九にて大に  
 災難あり、六十八九にて命危  
 し、七十三四にて終るべし。毘沙門は壽命を守り、觀音は福德を興へ  
 給ふ、普賢は智慧を授け給ふ、一代の内能々信心して祈るべし。  
 ○一説に曰く、戌のとしの生れは勇氣心正しく財祿聚り徳なり。但し  
 思ひ事一度は成就し、一度は成り難し、商人職人は貴人に愛せられ、  
 福分つよし。

乾皆連



戌



亥の年の生れは一代の守り本尊阿彌陀如来なり。此人前生にては黒帝  
 の御子なり、北斗のこもん星より白米一石と金子六貫目を受け得て今

生へ生るゝなり。此人は前世にて慈悲善根をなしたるゆゑに今生に  
 て衣食に満ち、手に藝ありて財寶四方よりあつまりきたるべし。一生  
 赤き衣類か赤きものを持つてよし、子は五人ありて二人の力を得べし  
 二十八九にて災難あり、四十  
 五六にて公事沙汰あり、命は  
 五十八九か八十五六にて終る  
 べし。毘沙門は壽命を守りた  
 まふ。釋迦は福德を興へたま  
 ふ、彌勒は智慧を授け給ふ。  
 一代の内能々信心ありてよし  
 ○一説に曰く、亥の年の生れ

乾皆連



亥



は住所定まらず、四十二にて禍あり、六十五にて衣食足る、賊なんの  
 用心すべし。

生れ月吉凶の事

正月に生るゝ人は前生にて香花を佛に供養し、又人の縁を助けし  
 ゆゑ、今生にて天道より福德を下し、身上繁昌し、必らず名をあら

はすことあるべし。夫婦の縁始めかわり、後のえん定まるべし、但し惣領の子は力となりがたし。

二月に生るゝ人は前生にて御經百卷を寺へ上たる功德にて、人に愛敬せられ、貴人と交はり、衣食あまらあり、又前生にて牛を一匹ころしたる報いにて父母早く別るゝことあるべし、又子にもたゞり育ちがたしものゝ命をたすけ善根してよし。

三月に生るゝ人は前生にて寺より茶わん五十人前かりて返へさず老人の衣服を借りて返へさざる報いにて父母兄弟に早く別るゝことあるべし、寺へ家具をあげ貧しき老人に衣服を與へ、因果をはらふべし、さもなくば身代一度はやぶるゝなり。

四月に生るゝ人は前生にて寺の焼けるにかけつけ大藏經七部を出だしてやかず、又橋より落合せし老人を助けし功德にて、今生に於て財寶知行に縁あり、子丑の生れはいよく仕合よく、子もあまたありて年よるほど果報あるべし。

五月に生るゝ人は前生にて佛の臺基を寄進したる功德にて、今生は衣食に縁あり、又手に藝ありて四方より金銀財寶あつまり命長し、又前生にて持戒の僧に酒をもつて破戒させし報いにて、父母妻子にはなる

低く陥みたるは故郷を去る疵あるは萬事を妨ぐ○印堂に立致横紋入り亂れたるは難難の事それあり又肉腐なり、高く肉起れば貴人に愛せらるゝ、又肉落ち色枯るゝもの、或は陥陥あるものは官位にさはるゝ、平人は家業を廢す○額顛に肉おこるものは旅へ出て仕合よし、又陥陥あるか又は低きむききは他國の取引に損あり、官人は不首尾なり百姓は田畑に損あり○此所に肉おこるとも血色あしければ旅へ出て、日限延びる青色は驚きあり、黒色は災ひあり、赤色は争ひあり、白きは憂ひあり、黄なるは吉なり○邊地高く色濁ほへば住所よし、家業繁昌なり又陥陥あるか肉薄きは故郷を去るか住所につき心勞あり、この所より變際まで堅に登る骨あれば立身す又青筋登れば屋敷事または他の世話かゝると知るべし、○遷移(肩じり)の上一寸ほど肉うすき者は住所につき苦勞あり○交友(肩の中ほど)に疵あれば兄弟又は朋友と争ひ事あり○天倉(肩じり)の肉あつて濕ぼふは金銀自由なり、肉なきは散財の相なり○耳 此紋あるは聰明にして才智あり○眉の上に紋あるは悪し○目の下に涙の流るゝ如き紋あるは慈悲深し○目

ることあり、能々つゝしむべし。

六月に生るゝ人は前生にて杉十本を神の地に植ゑ奉らんと願をかけて植ゑず、又寺の油を九升かりて返へさず、其報いにて身上危く目を煩ふことあり、よつて杉の木十本神へ上げ、油九升寺へ寄進し、前生の因果をはらふべし。

七月に生るゝ人は前生にて主君より施行の錢車十兩をうけ取りて引残し私慾したるむくい來り、今生にておもはぬ損をすることあり、身上思ひはかゆかず、旅他國をかけ廻り苦勞多し、子の縁も薄し、慈悲善根をなしてよし。

八月に生るゝ人は前生にて身を投げ死なんとせし者をたすけし功德にて、今生にて衣食に縁あり、然れども前世にて僧に金を借りて返へさず、其むくいにて子の縁うすく、身上破るゝことあり、僧に銀を施し因果を拂らば、身上はんじやらすべし。

九月に生るゝ人は前生にてめづらしき花と菓子佛に供養し、又縊れて死なんとする者を助けし功德にて、今生にて衣食餘りあり、又寺にて油三升かりて返へさざること前世にて有りしゆゑ、父母に早くわかれ其身も目の病ひあり、随分ほどこしをすべし。

の下に横紋あるは貧賤にして子に縁うすし○  
額の上は眉の中へ入るは貧賤なり○口のした  
に紋ありて口へ入りたるは男女とも餓死する  
相なり○額骨に小といふ字のたたる紋ある  
は水難によつて死するといへり、よく徳  
を修め身を慎めば免かるべし。  
眉の部 眉は面の莊嚴なり、細く平かにて長  
きは聰明にして智慧あり、又太くして目より  
長きは福ぶんにありて命長し○眉ゆたかにして  
黒く光あるは富貴なり、眉と目の間高く毛  
長く生えるは位にのぼる○眉直にして四十過  
より白髪交るは至つて長命なり○眉と目の  
間廣きは貴相なり○眉さかかへて少なきは  
兄弟仲悪しく○眉の中骨高く現はるゝもの  
は悪相なり○眉の上に横一文字なる紋あるは  
一生貧なり○眉の中に陥き所あるは必ず刀難  
にあふことあり、慎むべし○眉うすくして産  
毛の如くなるものは憂ひ絶えず一代思ひ事あ  
り○眉細く毛短きは短命なり○眉の尻上りて  
角の如くなるは短氣にて慈悲の心なし○眉三  
日月の如くなるは智慧深く命長し○眉と眉の  
間狭く目の上に生えるものは愚痴にして賤し  
○髮厚く眉赤くして薄きは貧賤なり○眉の毛

上と下へ生え分りたるは兄弟の縁うすく又仲  
あしきものなり○周五日月の如くなる人は天  
下に名を揚ぐるなり○眉がしらに痣三つ並び  
てあるは名僧となる相なり○惣頭に田宅に痕  
あるものは親の譲りを請ざるか妻變るか故郷  
を離るゝかなり、女の此所廣きは縁附はやし  
又肉あつて高きは色情ふかし○此邊陥りたる  
は學才あつて發明なり。  
眼の部 眼は一身の日月なり、左の眼は日に  
象どり父に配す、右の眼は月に象どり母に配  
す、睡むる時は魂心に處し醒むる時は魂  
眼に處す、善惡吉凶悉く眼に顯はれずと  
いふことなし○目ながく光りて深ひあるは富  
貴にして智慧ふかし○眼の中黒く明かなるは  
文に達し能書なり○目くぼくして光りあるは  
福祿あり○目細く奥ふかく黒きは長命なり○  
眼の睛外へ出ばりたるは短命なり○眼の中ど  
よみ外背上りてキヨロつくものは淫慾ふかく  
しかも男女とも短氣なり、又男女とも不義  
にして生ずる所の子は左右とも目に不同あり  
○半眼の人は心入れよろしからぬものなり○  
目の短きは愚痴にして卑し○目の下給具の  
形したるは貴き子を産む○女の目の下赤きは

十月に生るゝ人は前生にて殺生を好みたるゆゑ、今生にて父母妻子に  
早く別ることあり、又老いて危ふきことあり、然れども前世にて油  
一斗錢五貫文僧にほどこしたる功德にて、衣食に富み手に藝ありて、  
四方より金銀あつたり仕合せよし。  
十一月に生るゝ人は前生にて酒肴をもつて僧に破戒せしめたる報にて  
腹病を煩ふことあるべし、又惣領の子にはなるゝこともあり、然れど  
も前生にて牛一疋農人に與へたる功德にて中年より仕合せよく年よる  
ほど家業繁昌して老樂になるべし。  
十二月に生れたる人は、前生にては出家にてありしが、隣の鶏をぬす  
み、又肉食をこのみたる報にて子の縁うすく育がたし、又佛前の火を  
吹き消したる報にて目を煩ふべし。故に持戒の僧を供養し、物の命を  
たすけ善根せば仕合せなほるべし。

生れ日善惡の事

太陽日	朔日	七日	十三日	十九日	廿五日
太陰日	二日	八日	十四日	二十日	廿六日
天父日	三日	九日	十五日	廿一日	廿七日
天母日	四日	十日	十六日	廿二日	廿八日
天帝日	五日	十一日	十七日	廿三日	廿九日
天皇日	六日	十二日	十八日	廿四日	晦日

天母日 四日 十日 十六日 廿二日 廿八日  
天帝日 五日 十一日 十七日 廿三日 廿九日  
天皇日 六日 十二日 十八日 廿四日 晦日  
太陽日に生るゝ人ははんじやうにして、知行財實に縁あり。物のか  
しらとなり、人多く引きまはし威勢あり、又此生れ諸藝を習ふといへ  
ども成就せず、又若年の内に父母にはなれ孤となることあり、能々信  
心をなすべし。  
太陰日に生るゝ人は住所度々替はるべし。又人の家へ養子に往くこと  
あり、此人衣食に縁あり、又藝能に達し人に敬まはるゝなり、若年の  
内は辛勞おほしといへども中年より仕合よくなり、年よるほど富貴は  
んじやうすべし。  
天父日に生るゝ人は命長し、若き間は苦勞多し、年よるほど金銀財實  
あつたり榮華なり。此人じひ心厚く善根をなせば惡事災難をのがれて  
子孫はんじやうすべし。能々神佛を信心してよし。  
天母日に生るゝ人は富貴の家に生まれ衣食満ち身上富み榮ふべし。此  
人ははれみ深く、善理を重んじ、大氣にて金銀をおしせず、ゆゑに金  
銀蓄へがたし。若し吝嗇の心あらば度々損をし、また患ひ事あるべし

藤産の恐れあり○上下とも腫の厚きは男女とも淫慾ふかし○秘訣に曰く目の長きは貴相なり○眼大きく豊に光りあるは田地多く持に縁あり○目ながきこと一寸にして狂しく威あるものは百萬の大將となり、人の尊敬する相なり○目三角にして白睛がちなるは悪相にて心に毒あり○眼の肉あかく黄なるものは一生災絶えず○眼の中白睛多き女は執心ふかく男を怨す、男は短氣にて女を怨す○眼大にして赤きは男女とも病絶えず○目の中塵の混りたる如くなるは貧賤なり○眼の黒きは男、女とも眼の如くなるは盗心あり○猿猴の目の如くなるは一度は狂氣する相なり  
 鼻の部 鼻は一面の表たる肺の臟を主とする、肺虚する時は鼻通ず、肺實する時は鼻塞がる富貴貧賤の四相、壽命の長短を主とする所なり○ゆたかにして光りあるは富貴にして長命なり○色黒く肉うすきは短命なり、大體鼻梁通り、頭圓く肉ありて光りあるをよしとす、骨あらはに角立あるひは缺陷み又は肉なく枯れ色なるは凶なり  
 口の部並に齒 夫れ口は一身の門戸なり、こ

れを我の門といふ、妄りに妄談をなし身の禍を招くの謂なり。口を守ること瓶の如く妄りに詞を發せず、言へば必ず信義あるを其の徳とす。其の形によつて富貴貧賤、命の長短あり○都て面大にして口小なるは福あり、面小にして口大なるは禍あり○口は常に目立たず、言ふとき大なるを發達とす○言ふ時口の角あがるは貴相なり○口の角を海角といふ、上がるはよし、下がるは味を失ふ、或は實情なく人に憎まるゝなり○唇あつく潤ひあるはよし、薄く尖るは貧窮にて誠なし○海角端正なるは信義貞明の人なり○唇の色紅く光るはよし、されども我をたかぶる黒く枯れたるは財を破ぶる○唇に黒子あるは衣食に縁あるなれども水難あり、女は淫亂なり○唇の出づるは虚惚なり、下唇出づるはよく理窟ばる○口の歪みたるは晩年に難あり○口の小さきは身代も氣も小さし○壯年にして齒の落ちるものは命短かし○物語りするに齒を現はさぬは富貴なり○上齒正しきは官位を主どり下齒正しきは祿を主どる○舌先尖るは偽詐をいふ○舌長く細きは心に毒あり○舌いたつて短きは天死す、横紋あるは口先

慎んでよし。  
 天帝日に生るゝ人は男はよき妻をもち、女は夫にたより、離るゝことあるべし。何れも氣立たゞしく賤しき心をもたず、又いとなみも賤しき業をすればふさはず、随分されいなる家業するならば身上よく繁昌すべし。  
 天皇日に生るゝ人は男はよき妻を持ち、女はたつとときに添ふべし。此生れは威勢つよき位ある性なり。但し親の家は立ちがたし。立つれば祟りあり、父母にもえんうすし。べつに家屋敷を持たば富貴はんじやう末さかふべし。

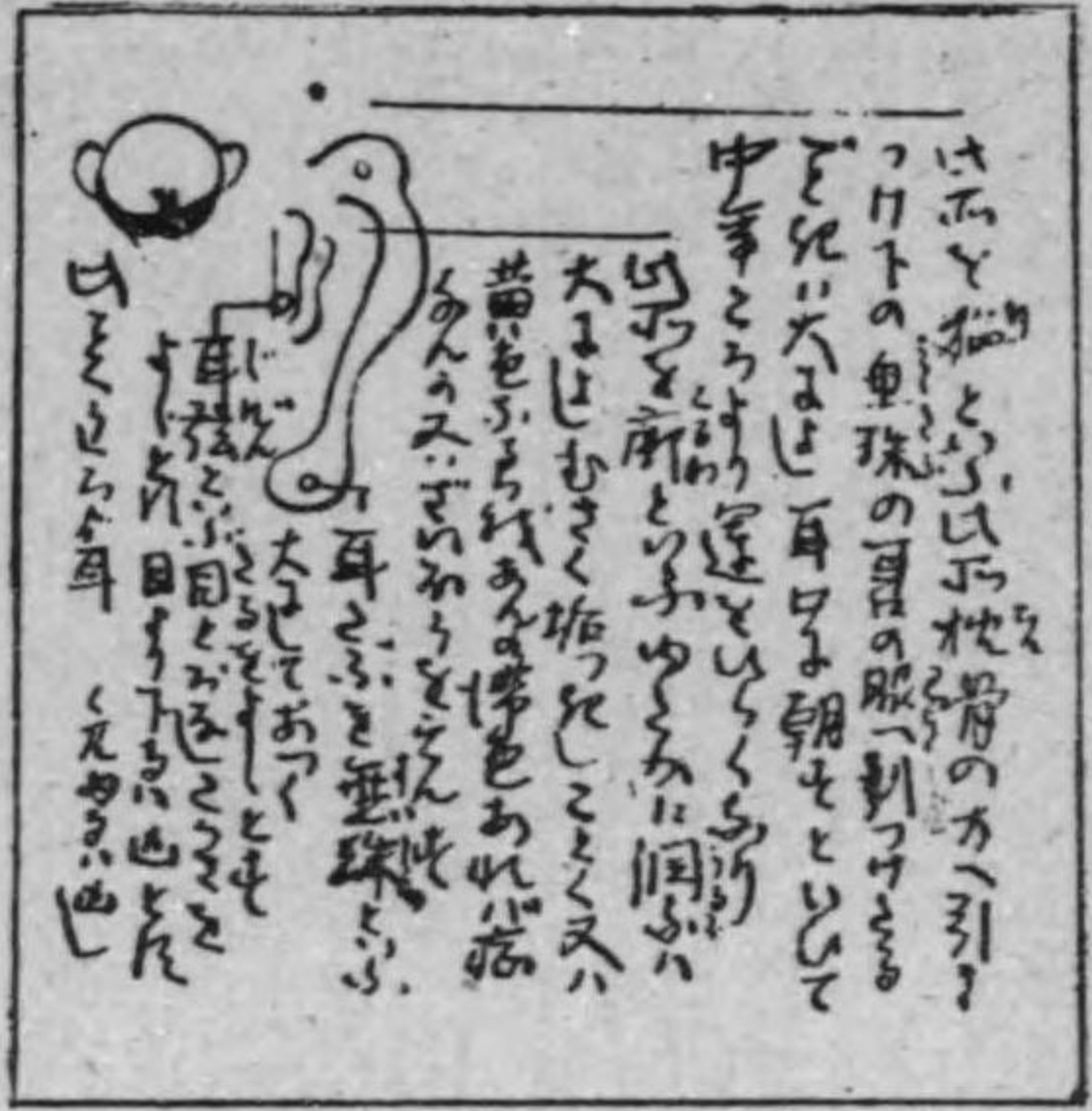
生れ時善惡の事

上 十日 中 十日 下 十日  
 朔日、二、九、十日 十一、十二、十九、廿日、廿一、廿三、廿九、晦日  
 三、四、五日 十三、十四、十五日 廿三、廿四、廿五日  
 六、七、八日 十六、十七、十八日 廿六、廿七、廿八日  
 ▲子の時に生るゝ人は命長し、しかれども父母にはやく別るゝ事あり又兄弟むつまじからず、互に力とならず、諸藝をならへども末とげが

たし。衣食には縁あり、しかし淋しき所に住むことを好む性なるべし  
 ▲丑の時に生るゝ人は、智恵かしく、學問を好み衣食乏からず、年寄ほど仕合せよかるべし。又武士は武藝に達し、譽を顯はし、子孫はんじやうすべし。此生れは大優にて氣おもく不性なるべし。  
 ▲寅の時に生るゝ人は若年の頃は彼方此方と駆けまはり、苦勞多し、年よるほど仕合せよくなり、はん昌すべし武家奉公の身は出世して知行、財實心の儘にて諸人に敬まはれ、威勢あり、尤も勇氣強し。  
 ▲卯の時に生るゝ人は心立卑しからず、但し生國には住がたく他國に住居してよし、しゐて生國に住まば病身にて又損失おほかるべし。商賣も旅を廻はる家ぎやうすれば仕あはせ能く、さんく財實こゝろのままなるべし。  
 ▲辰の時に生るゝ人は心廣く大氣なり。惡事にあへども吉事と變じ、兄弟のえんはうすく力を得がたし、妻の縁も度々かはることあり、ゆゑに慈悲善根をなし、神佛を信心すれば次第に繁昌すべし。  
 ▲巳の時に生るゝ人は心いらち短氣なり。しかし仕官の身は手柄を現はし、名をあげ、加増を得ることあり。又人の家督をうけて思はぬ福を得べし。ゆゑに親るゝの力をからず自分かせきて身上をしあくべし

にて人を害ふ、立紋はきはりなし○舌に黒痣あるは偽り多し○言ふに舌さき出づるは奸悪なり○舌の色は紅潤なるを吉とす、焦るが如きは悪し、しかく小判の如き吉とす、U斯なるは家をやぶる○齒の皓白なるは下賤なり黒き紋あるは妻を冠す青きは災難あり○頤は肉ゆたかにむつくりとしたるは大いによし、俗にやりおろがいといふものは住所につき苦勞あり命ながくとも愁ひごと多し○かくの如く跡へ引きこみたるは發達せず、疎忽なり○此の如き他の名跡をつぐ、又二重にかきなりたるは晩年ほどよし○頭骨、耳の後へ張り出でたるは邪氣ありて物を殺す○腮の骨尖りて頤突き出でたるものは理窟ばかり言ひて人に憎まるゝなり。

耳の部、耳は萬事を聞きて心胸に通ず、是れ腎氣を主どり腎氣壯んたる時は耳清らかにして聴くこと明かなり、腎氣おとるふ時は耳遠くなる、但し耳は別なり○耳、目より高きこと一寸にして輪郭あきらかなるは福壽あり、大に名を發す、垂珠厚く圓きは大に發達す、垂珠なきは貧なり○耳の色紅白を帯ぶるものは運つよし、染めたるやうにて汚なきは薄命なり○輪ありて麻なきか或は薄くして開くは氣性弱く住所定まらず、家内心勞多し○輪あり



り麻高く出づるは故郷を去り他の家を嗣ぐなり○耳の内毛の生えたるは長命なり○耳向ふより見え難きは大に名を發す○耳に赤き氣出づれば散財あり○耳は大いなるを吉とす、然れども勝ぐれて大なるは賤しき女を妻とす○耳の上髪うすく、間すきたるものは散財あり○女の耳、左大いなれば初の子なり○耳張なき如くなるは盜難または散財を主どる○

▲午の時に生るゝ人は智慧才覺ありて、誰藝學問に達す、併し父母兄弟妻子に縁うすくはなるゝことあり。又家にひきこもり居ては人の知ること少なくて仕合凶し、他所へ出て出世すべし。  
▲未の時に生るゝ人は、身代浮沈度々あり、若きときは苦勞多し年よるほどよし、貴人に近付き榮花なるべし。又田舎遠くをかけ廻りかせがば、金銀財寶心のまゝにあつまり、無病にて仕合よかるべし。  
▲申の時に生るゝ人は夫婦の縁はじめは變り、男は後に位高き妻に縁あり、女は智慧才覺ありて富貴の夫に縁ありて共に榮ゆべし。若年の間は爰かしかけ廻り心勞多かるべし。年よるほど段々仕合せなほるべし。  
▲酉の時に生るゝ人は衣食あまりあり、武士は文武に達し、出頭して知行財寶にとみ、諸人に敬はれかしづかるべし。但し常に家に居ては宜しからず、外勤して朋友と交りてよし、中年に父母に放るべし、外人も此理とひとし。  
▲戌の時に生るゝ人は身上繁昌して眷屬多し、又威勢高く諸人あがめ敬ふべし。武士は知行加増を得るなり、されども若年の間は諸方へ駈廻り、苦勞多し。年よるほど仕合よく身上ゆたかに富みさかふべし。

▲亥の時に生るゝ人は位高くして下人おほし。諸人あがめ敬ふべし、人の主君となる生れ性にして發明にて手跡學問を好み詩歌に達する才あり、天性心ゆたかにして慈悲心深く、萬心の儘にふうさなるべし

皇帝四季のうらなひ

○皇帝の頭にあたる生れは富貴なり、貴人に近付きて官位に進み、諸人に敬まはれ、物の頭となるべし。さもなくとも衣食満ち足りて不足なく、無病息災にて長命なるべし。又女は貴き人の妻となるか、さもなくとも人の上になつ威勢の有る夫にえんあり。  
○皇帝の肩にあたる生れは心しづかにして身上よし。萬の災難を免れて運つよし。さりながら若き時はくらう多し、年寄ほど仕合せよし。又耕作に縁ありて牛馬のかず多くもつべし。親るゝ兄弟の力を得がたし、貴人官長の引立にあひ、思はざる仕合せすべし。女はよき衣るゝ常に心の儘に出來、我より目上の夫に縁あり。  
○皇帝の手にあたる生れは萬の藝能にたつし、物をよく書き、細工事に器用なり、依つて人の愛敬をうけ、常によろこびたえず。但し色を好むくせあり、慎まざれば災ひあるべし。つゝしめば四方より財寶

此邊に徳あれば才智あれども、財たも難し  
○耳のあな横より見ゆるものは早合點なり  
頭より肩、眼、鼻、口、耳に至るまで各々圖  
解ありと雖も今茲に之れを略す。

家相圖説の解

家相のことは我が日本にては、素戔嗚尊八雲  
立つ瑞現を觀、其他の靈なるを察して八重垣  
を造らしめ給ふ。又神代の卷に天兒屋命、  
太古を以て仕へ給ふとあるも、強ちに大已貴  
尊の御行動を未審り占ひ給ふのみにあるべか  
らず、皇極の御爲めに御舎居地の設け、其  
の吉凶を考察し給ふ所なり。又漢土に於いて  
は黃帝より起りて巴に周公且洛陽經營の時中  
央八方位の理を審かにして宮室を設け給ふこ  
と尙書に見えたり。又日本紀に推古天皇十  
年冬十月百濟の僧觀勒來之仍貢三曆本乃天  
文地理書云々、然して上宮皇太子大和國斑  
鳩の宮に於いて陛下等に仰せて其貢する所の  
書傳を學ばしめ給ふこと太子傳曆に見えたり  
凡そ人の宅地、陰陽五行、相生、相尅の理  
自然に備はる、其の吉祥の理を布くときは  
富み、人昌んに忠心孝貞の道、自ら興る、又

あつまり、年よるほど榮華なり。女はぬい針にたつし、心ざとく琴三



絃を好み、女の師匠となるか、又は藝のある人の妻となり、一生おも  
ひごとなし。

○皇帝の腹にあたる生れは知行にえんあり、武士は文武にたつし、平  
人は笛を吹き謡、舞、音曲に器用にて、譽高く財寶求めずして聚まり  
富貴なり。但し常におもひごと絶えず、夫婦の事に就いて口舌ごと多  
し、能々慎むべし。女は聲やさしくして能く歌をうたひ、あいさやう  
ありてよき夫に縁あり。但し格氣妬みの心あらば凶し。

○皇帝の股にあたる生れは身上饒なり。下人多く身安樂なり。但し  
心定まり難くまよひ多し。又女に溺るゝことあり、女よりも懸慕はる  
る性なり、色のみちを能々慎むべし。知行財寶を持參する妻を持か、  
我より上めの女に縁あり、女は諸事内氣にして形容うるはしく、身上  
よき人の妻となりて召使ひ多し。

○皇帝の膝にあたる生れは心定まらず、住所に縁うすし、日々流浪し  
心勞すること多く、若年より中年迄は諸事心に叶はず、手にとるやう  
のこともはづれゝすること度々ありて思はしからず。此生れは親に  
不孝なるべし。能々慎み孝行をなさば、中年より後漸々に仕合せ直ほ  
り、老いては榮華の身となるべし。女は諸事心まめやかに然かも出過

土地を開く吉節の選み

土地を開くこと尤も吉節の撰みあり、小寒、  
立春、穀雨、小滿、小暑、立秋、霜降、小雪  
以上を地元といふ。假令は十二月節の日より  
十五日の間期ち小寒一季の中なり、餘は之に  
準へて十五日づゝなり、右を地を開くの良季  
とす。尙ほ此内に於いて地中に禁なき百辰を  
選み、地造りの鐵始めを成すべきなり。

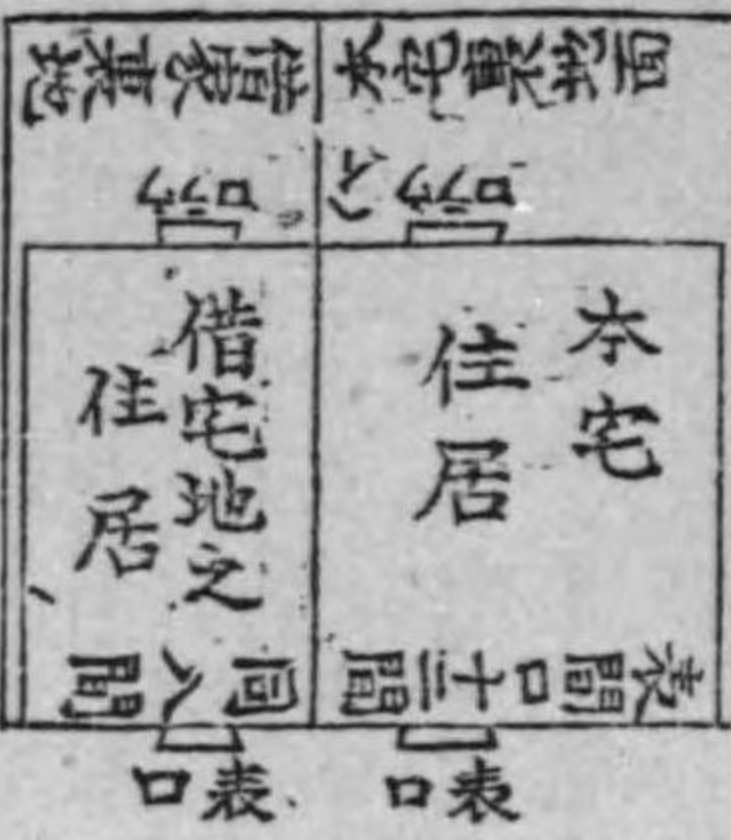
宅地吉凶の辨

左に圖する如く地形四方位廉直眞四角に備ふること凡そ神社、佛閣の設け、或は貴人官位ある人の住地には忌むことなし、庶人の宅地に此の備へを布くときは往々障礙あること多し、尤も地形方なるは洛書之法に則り、文王地理形體の規矩となし給ふ、理に相違ると雖も地體貴きの一致にして正直決定の備へ故に平人の宅地には斟酌ありて可なり。

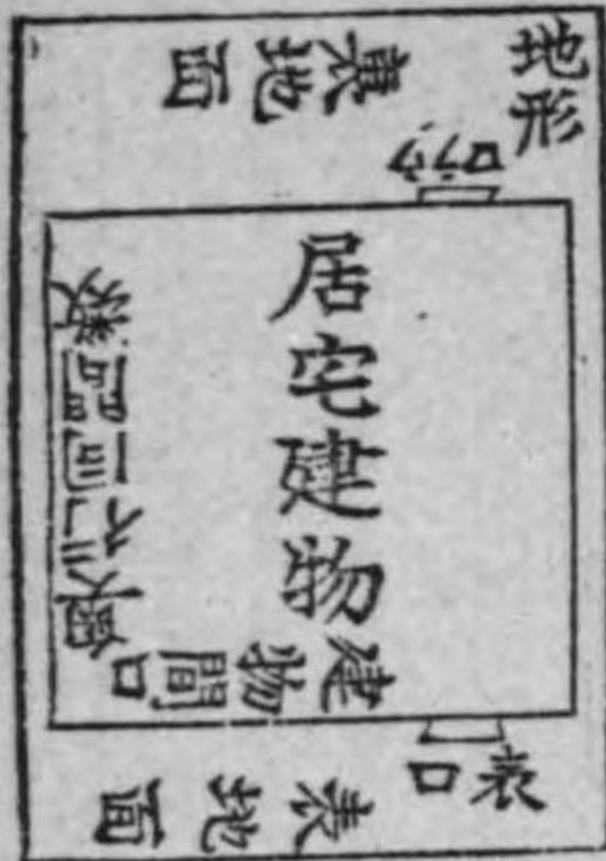
眞四角に備へたる地形の圖

○眞四角の地形たりとも、左に圖する如く假へば二十間四方の地面の中、本宅の間口十二間に構へ、残る八間通りを別宅、或は借宅となし置くときは、一人所持の地と雖も別宅又小天地の理を得て居住を布き、双方天地の循

環も分理を得るが故に元來方なる地理轉じて無難の宅地となるものなり、但し下の圖は其の一品を出すのみ、猶本宅他家とも間口の長短に拘はることなく、理同斷なりと知るべし



○地形は奥行長く或は間口中廣の備へにて建物の眞四角に構へたる住居、是れまた先の圖の理と同じく庶人の居宅には好まざる備へ



〔木〕三世相雜書

ず、人に愛せられる。但し腰より下の病あり慎みて養生すべし。  
○皇帝の足に當る生れは、親の家ふさひがたし、親の家に住まば萬事おもふに任せず、所をかへて別家するか、他國に住みてよし。産業も居ながらする商賣は凶し。諸方かけ廻はる商賣か又は旅商ひ等よし。財實心の儘にあつまり繁昌なり。但し親には縁うすく妻の縁も度々かはるべし。女は兄弟にうすく、身常に苦勞たえず、我より目上の人の妻とはなりがたし、身をつゝしみて能々神佛を念じ、身の福を祈るべし。

新補三世相明鑑

寄光枝 甲のとし。 乙のとし。  
千歳枝 丙のとし。 丁のとし。  
散高枝 戊のとし。 己のとし。  
五柳枝 庚のとし。 辛のとし。  
豐陽枝 壬のとし。 癸のとし。  
○甲奇光の枝にあたりて生ずる人は、耕作、交易、仕官してよし、但し此人男女とも遠國に往來することあり、上十日の生は縁になりて

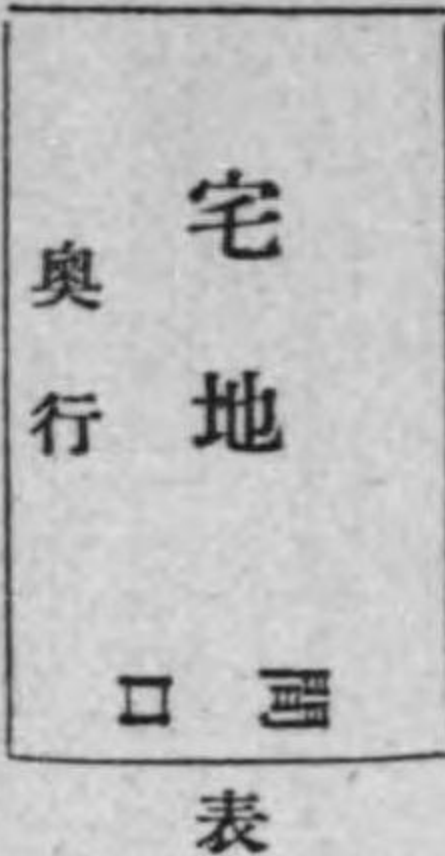
よし、中十日の生れは仕官に縁あり、下十日の生れは神職になりてよし。春の生れは大福あり、日の食豆五斗あり。夏の生れは無病なり、日の食米三斗あり。秋の生れは才智あり、日の食米五斗あり。冬の生れは藝能あり。日の食黍三斗あり。此生れの人若きときは貧なり、中年以後福ひきたる。前生は尾張國熱田の宮の鼠なり。そのしるしは肩の上、腋の下に黒子あり。是を穿りて綿にぬり、曉の明星を祭るべし。此人七八歳にて神の祟りあるべし。

産地の荒神を祭りて祈るべし。しからざれば成仁の上夫妻の縁うすく又十五六歳にて災ひあり、十七八歳にして男女相互に口舌事出来るなり。又家を出づることあるべし。二十六歳にて災難あり、三十八九歳にて大事あり、慎むべし。四十八九歳にて火事にあふ恐れあり。又財寶のあつまることもあり。五十六七にて病あり、命は七十六の十一月午未の日にをはるべし。常に三寶荒神を始め、普賢菩薩、地藏菩薩を念じ、慈悲善根を專とせば行末榮ゆべし。

○乙金財の枝にあたりて生る人は、上へは輕々しくみえて、下の心深し。福人にて命長し。但し短氣なり。若き時は貧なれどひ、老い行くほどよく、才智ありて人に愛せらる。但し僧となりてよし。春夏の

○開口より奥行ゆたかなる地形これを縦方の備へといふ。前の隅、眞四角健剛の地形より寛和を得て、而かも正形を失はず、且つ堅横長短あるは則ち陰和して陽に従ふのかたちなれば、貴賤ともに居住まつたきの備へなり、圖左に記す。

縦方の地形



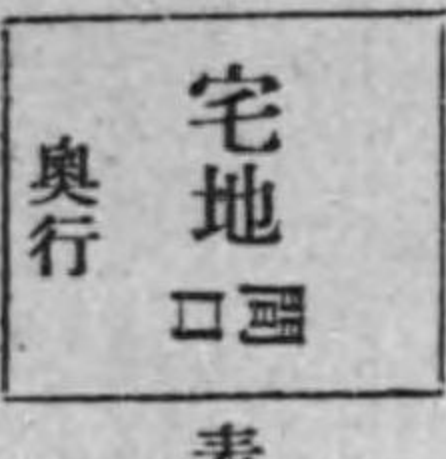
宅地

奥行

表

○奥行より開口廣き地行これを横方の備へといふ。右縦方の備へに大いいて繁榮の兆あり、しかし横方の地よりは長久の理すくなく、且つ吉凶種々あること凡て建物の傳へと課し合せ考へ察すべきなり。

横方地形



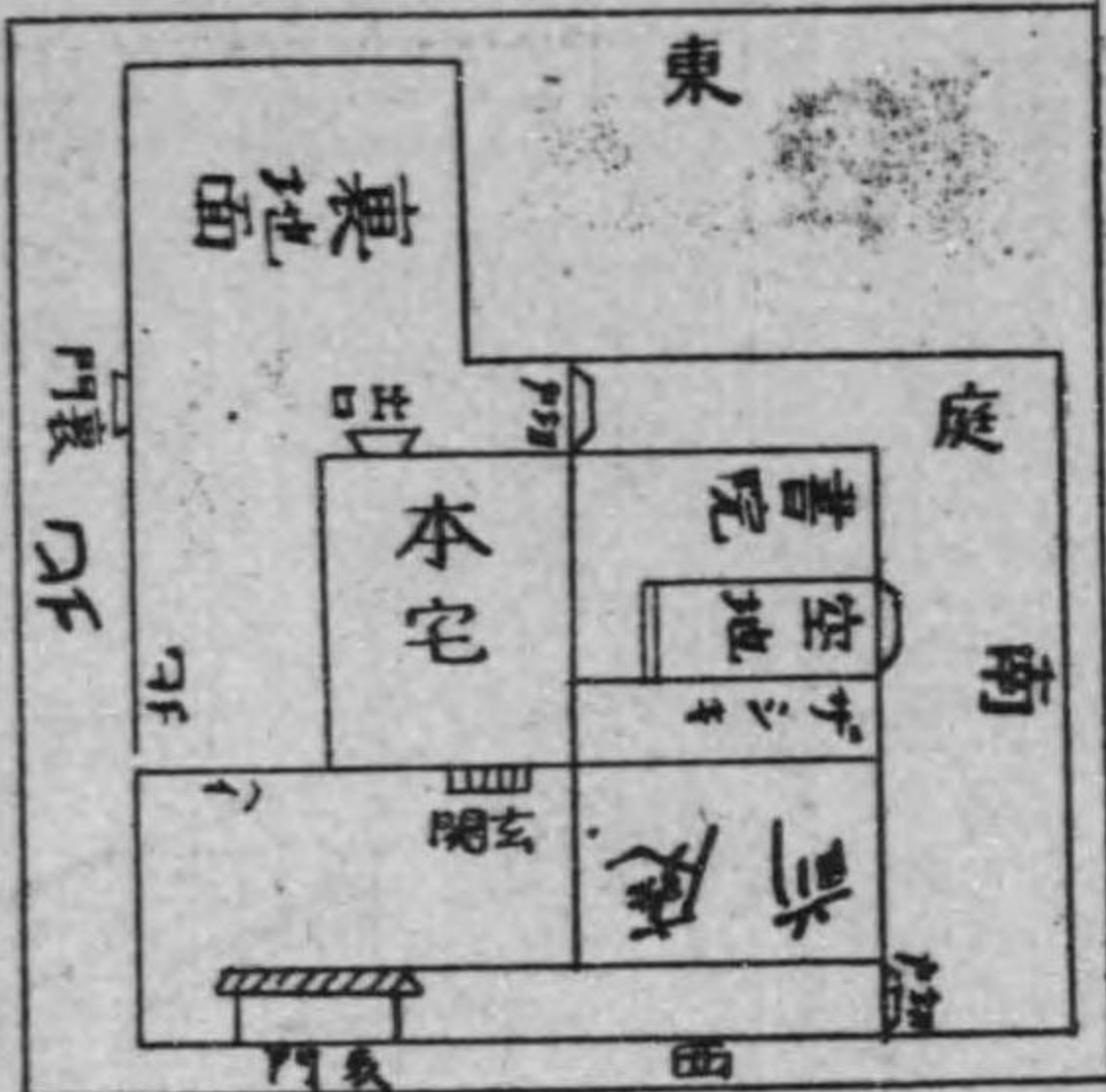
宅地

奥行

表

生れは果報あり、しかし父母のかとは嗣ぎがたし、神佛に仕へてよし。秋冬の生れは運弱し、何れも日の食米一斗あり、前生は越後國頸城郡の牛にて、備中國吉備津の宮へ法華經をつけ送りしゆゑ人と生まらるなり。來世は高位の人に生まるべし。能々三寶を信心し、産業を出精せば仕合よかるべし。此人は六七歳にて病あり、八九歳にて大病にあふ、十三歳にて親の心に違ふことあるか。又別ることあるべし。十四五歳にて弓箭の難あり、慎むべし、十七八歳にて男女互に心勞あり。二十一二歳にて大事あり、二十四五歳にて男女難あり、女は夫の不興を受くるか、又怪我過ちあるか慎むべし。二十七歳にて口舌あり但し遠く旅へ行けば財を多く得るべし。三十三歳にて病あり、三十三歳にて少福きたる、五十五歳にて福あり、又官位に進むことあるべし。五十三歳にて大福來たる、七十五歳か又八十一の十月乙の日に命をはるべし。藥師如來を常に念じ、心正しく、奉公の人は主人に忠を盡し、親を持つ人は孝行ならば必ず富貴にて發達すべし。

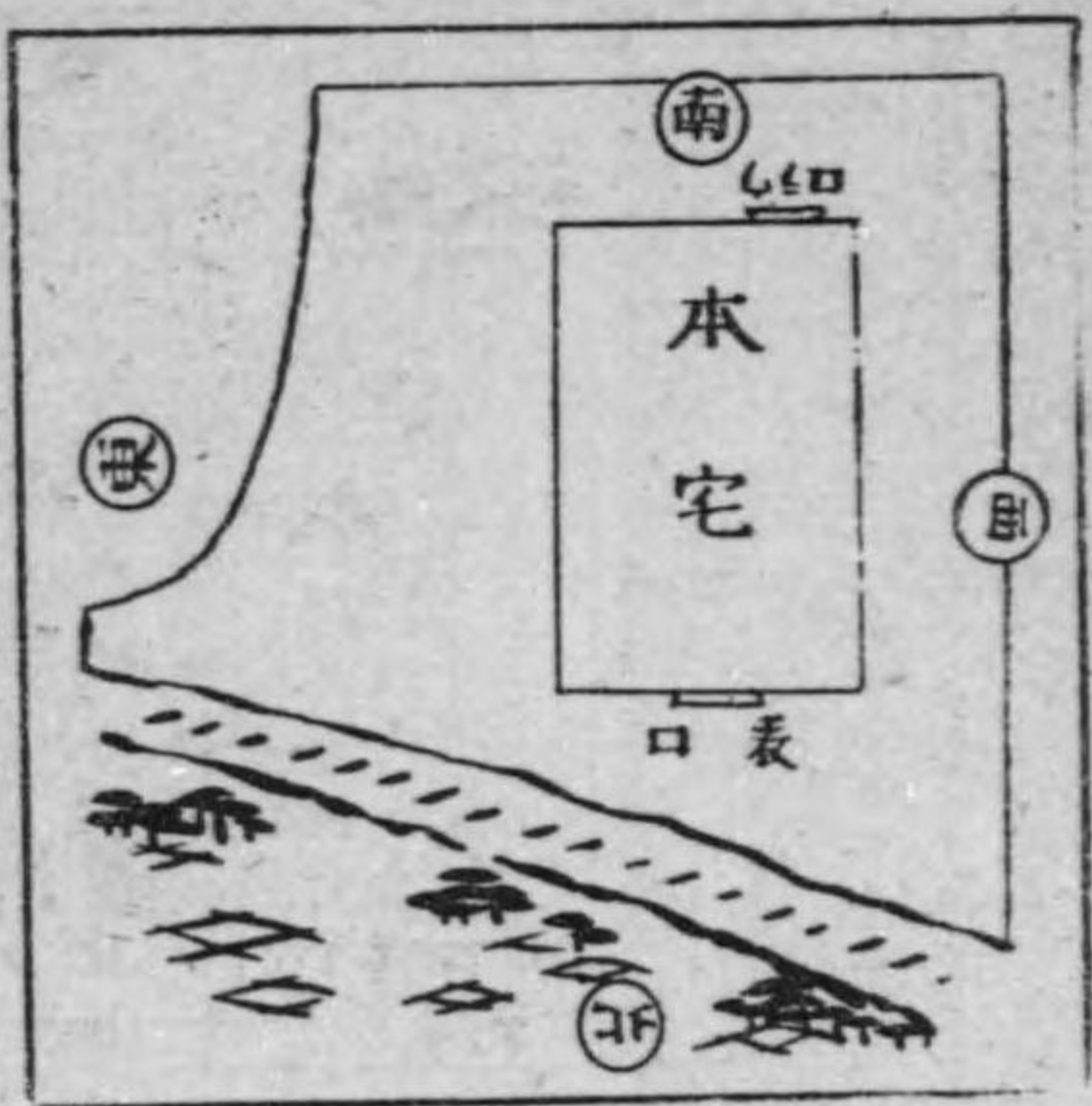
○宅地長兩寅によりて次の圖の如く張出づるの標は陽氣發生の方に張出づるの理によつて住人繁昌を成すと雖も災病の兆を兼ね合みて吉凶兩斷の標る所なり、且つ本宅を地面の底に寄つて構へるときは尅害至つてつよし。



○同所の張りと雖も次に圖する如きは吉祥の標へなり、伏陽初めて見はるゝ寅の領を専らにして正綱を除けて張出づること至つてよろし、併し本宅の構へ所に依つて凶相となること

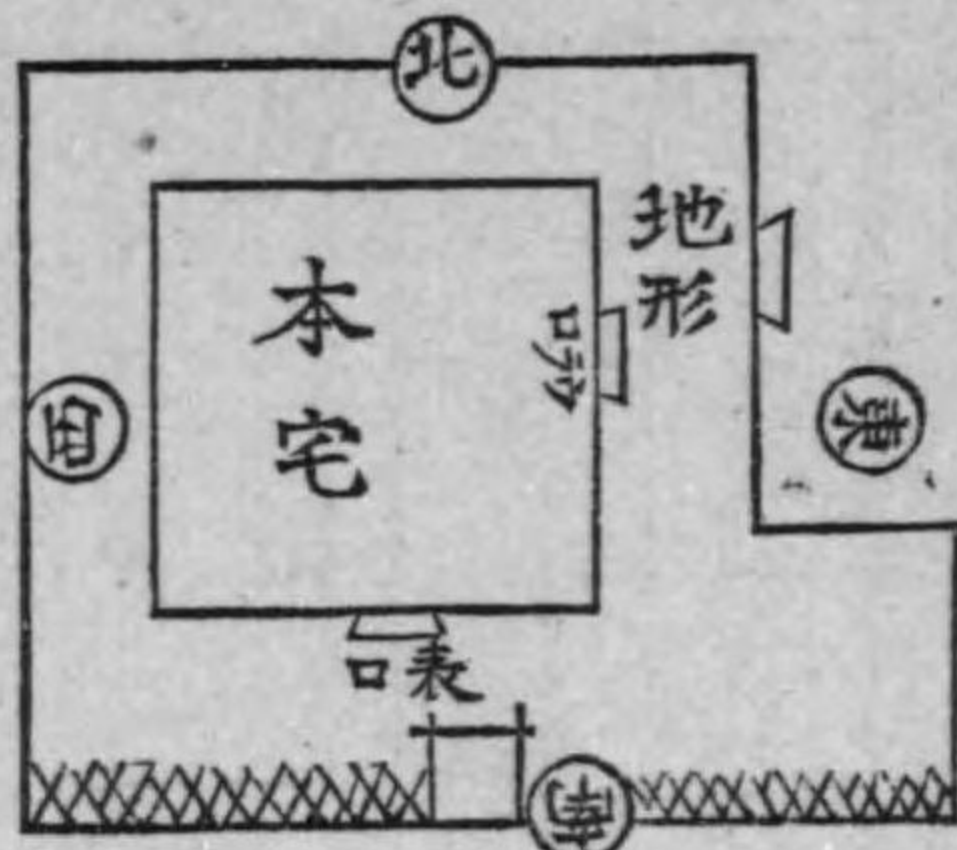
不孝なり、色白ければ富貴なり。丈高ければ貴人に仕へる。春の生れは病身なり、夏の生れは大福なり、秋の生れは貧なり、冬の生れは神佛へ仕へてよかるべし。日の食何も白米三斗あり、前生は信濃國淺間ヶ嶽の熊なり、來世は犬と生まるべし。常に道を知る人にたよりて仁義五常を學ばば來世は人間に生まるべし。此人は水難の相あるべし。能々慎みてよし、若きときは住所定まり難し。年をとりにて定まるべし。十七歳にて男女とも病あり、三十七八歳にて病事あり、又住所を變はるとあり。四十二歳にて火事の怕れあり、四十八歳にて大病を煩ふ。能々保養すべし。五十歳過ぎて福來たる。此人は産神より東の方低き地に住みてよし、命は六十一歳又は七十三歳の壬の日か庚の日に終るべし。金毘羅大權現を常に信心すれば災難をまぬがれて行末繁昌すべし。





○同方缺けるの備へは至つて凶なり、萬物の生氣一旦收斂せるを致し初めて伸び強なる場所なり、然るを缺け失ふの構なれば何ぞ住者の全きことあらんや、都て此隅の曲直意味深長の辨あり、東門開けの故實を辨へずして漫りに最要の地を缺け失ふこと世間に多くこれを見る、誠に掉ましきことならずや、向は此方位吉凶の圖說丑の方缺け張りの所に至つて委しく之れを著はす。

○宅地辰の方張出たる備へは住人富榮ふるの相にして難する所なく、こゝに遠方に掛合つて家業利潤を得べきの理あり、或は官家武家等の館地にて右に等しく福慶あり、尤も寺院の備へ此の如きは深き辨ありて不吉の相なること右に異なり。



○宅地次の圖の如く辰の方より東手寅の領ちかく張りたる備へは前の圖面に類して見ゆれども、其の意味異なり、住人不幸の災禍多く領に困乏におよぶものなり、元來此の備へは辰の方より東手に張つて反つて東北より災を

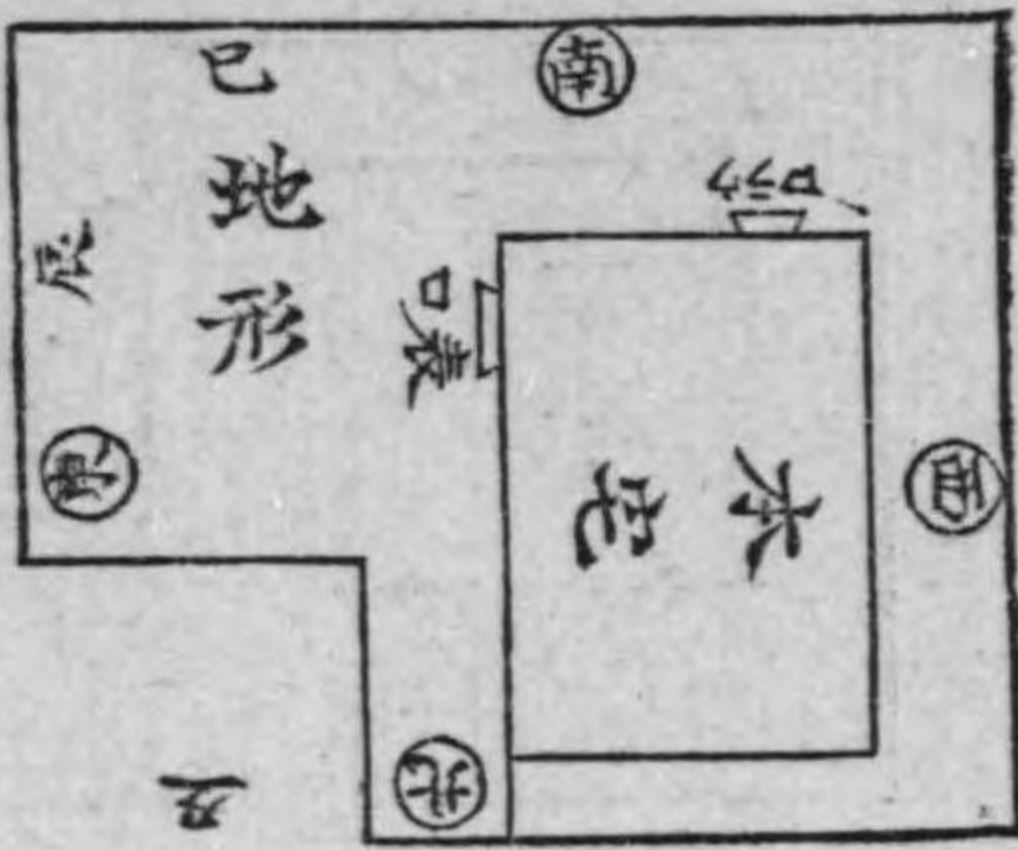
りし印あり肩の廻りに黒子あり、來世は福人に生まるべし。前生にて鳥獸を多く害ひし報いに、今生にては常に思ひ事絶えず、故に右黒子をほりて絹に塗り、宵の明星を祭り祈らば今生後世安樂なるべし尤も若き時は貧なりとも年よるほど福來たる、子三人か七人あるべし但し此枝の生れの人は親の氣に背くことあるべし、能く慎み孝行すべし。七八歳にて病あり、十四五歳にて災ひあり、十七八歳にて男女とも口舌あり、二十八九歳にて家を出づることあり、若し然らずば病事あるべし。三十一歳より三十三歳にて福來たる。三十四歳にて目を病むことあるべし。三十七八歳にて風邪の病より大病にうつる。五十二三歳にて火難の恐れあり、命は七十八歳の正月乙の亥の日に終るべし。常に觀音菩薩、妙見宮を祈りて心正しく善行をなさば、身上よく富み榮ふべし。

○皮散高の枝にあたりて産るゝ人は、十方より財あつたり、人に敬まはれ、貴人に愛せられ、賜を得るなり。心立氣高くして子五人又は七人あるべし。年たけて女子を設くべし。田畠に縁あり、但し住所に就いて常に物思ひ絶えず、前生は大和の國分寺の蟻なりしが、世の爲に惡木の枝を喰ひ折りたる故に人に生れ、來世は天上に生まるべし。春

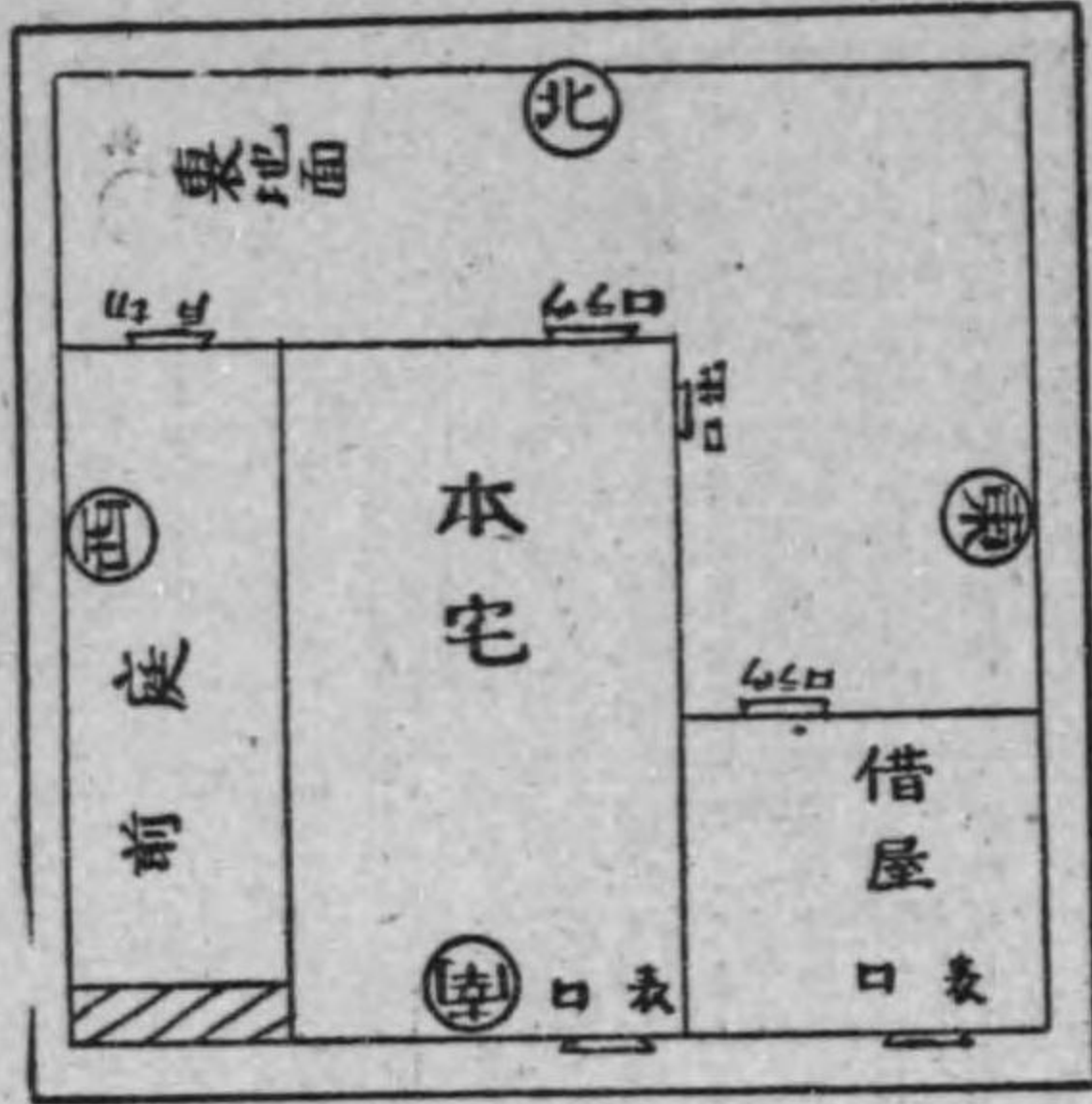
の生れは大福あり。但し住所定まらず。夏の生れは命長し、身貧なることあれども末にては富む。秋の生れは無病にして大福なり。冬の生れは仕合せよし。しかし短氣なり。何れも日の食白米三斗あり。六七歳にて病あり。十三歳にて大に災あるか親に放るゝか身の上の大事あり、十七八歳にて口舌あり、二十二三歳にて一門のことにて苦勞あり二十四五歳にて負債にて口舌あり、二十八歳過ぎて商賣定まり、三十三歳にて少し吉なり、三十五歳にて財寶ますか知行加増を得べし。三十七歳にて病あり、又家を出づることあり、四十歳にて福來たる。四十二歳にて口舌あり、五十一歳にて大福來たる。五十三歳、六十四歳にて病あり、命は七十三歳の八月壬癸の日午の時に終はるべし。常づね玉を祭り、大日如來、藥師如來を信心し、金、銀、鐵、すべて金道具類の産業をして繁昌すべし。

○巳天高の枝にあたる生れの人は、表は心靜かに見えて心裏烈しく、詞少なく虚空を言はず、福ありて命ながし。貧しき人に物を施して惜まず、此人先祖は位ありし人の血脈なるべし。他人より財を得ること多し。但し若き中は福ありと雖も老いて貧になることあり。色白ければ子なし、ありても育ち難し。福あれば子なし、子あれば貧なり、

ひくの難相となること深き説ありと雖も、相  
學初心の人の了解なし難き場所なれば、先づ  
凶相とのみ心得て可なり、尙ほ詳しきは口授  
にあり。



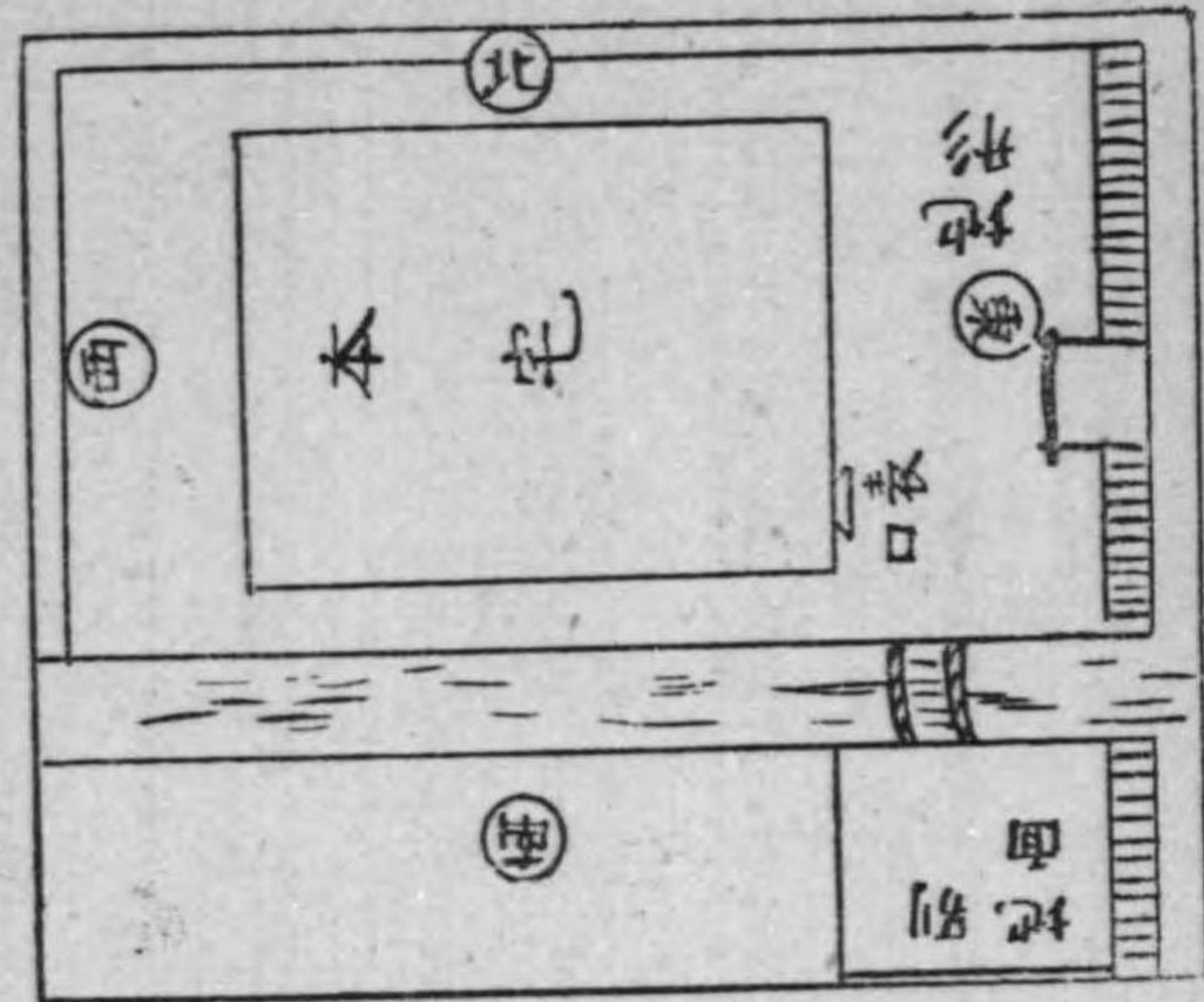
○次の圖の如く本宅の東に隣り地地面の辰の  
額に小家を構へ、これを借宅となしたること  
則ち缺の地形と理同斷なり、此備へは住人遠  
方の一族と不和になり、且つ福分全からざる  
の相也、尙ほ其の小家を借りて住む人も長く  
得がたき相なり。



○宅地より巳の方に小川を隔て、別地面ある  
も巳に張りたる地形と理、相似たり、この備  
へは住者の職業繁榮して福力全く、又よき  
家來出來て安心を得る相なり。

三人より九人まであるべし。春の生れは福あり、日の食豆五升あり、  
夏の生れは無病なり、日の食米一斗あり、秋の生れは心清し、しかし  
短氣なり、日の食白米六升あり、財寶は畜へ難し。冬の生れは耕作に  
縁あり、日の食豆三斗あり、前生は越中の國立山の牛にて國分寺へ大  
般若經を負いて登りたる功德にて人間に生まる。其時の印には肩のわ  
き、腋の下に黒子あり、來世は天下に名を揚ぐる人と生るべし。三歳  
にて病あり、七八歳にて災難あり、十三歳にて神の祟りあり、十八九  
歳にて家を出づることあり、二十一歳にて大福來たる。又知行田畑に  
あり附くべし。二十四五歳にて男女とも互に煩ひあり。但し弓箭に就  
いて悦びあるべし。二十八歳にて住所に就き口舌あり。海川にて災難  
あり、慎むべし。三十四五歳にて口論に就き危難あり、若しなくば目  
を煩ふべし。四十四歳にて口舌を慎むべし。四十七八歳にて財寶を得  
る。五十一歳にて大によし、五十三歳にて眷族につき驚き事あり、宇  
賀神を祈りてよし、六十三歳にて位をます。命は八十三歳の春甲乙の  
日に終るべし。地藏菩薩、藥師如來を念じてよし。此人一代の内竹の  
枝をつくことを思む。

○庚五柳の枝の生れは、仕官又は靈室に縁あり、此人うはばは優にし  
て不心深し、但し短氣なり。又學問に志あり、財寶は集まれども身  
に附かず、人の貧を身にかへ、慈悲の心深し。依つて財寶は保ち難し  
若し恪く有福の心あらば短命なるべし。春の生れは貧なり、夏の生れ  
は腹の病あり、秋の生れは不孝なり、身を慎み孝行にせば富むべし。  
冬の生れは僧になれば位す、む。春夏の生れは日の食米三斗あり、秋  
冬の生れは日の食大豆二斗あり。前生は駿河の國富士川の大蛇なり、  
來世は貴人となるべし、其時の印に肩の上に黒子あり、常に祇園午頭  
天王を祭り、仁王經を讀誦し、現富貴なるべし。さもなくば靈の祟  
りにて財寶保ち難し。此人生れは百日の内に瘡の病あり、二三歳にて  
危きことあり、六七歳にて腹の病あり、十六七八歳にて眷族に就いて  
災厄あり、慎むべし。又男女とも色情にて心勞あり、二十四五歳にて  
火事の怖れあり、又口舌ありて財寶を失ふことあるべし。三十三歳に  
て病あり、又思ひ事あるべし。四十二三歳にて大に福來たる。四十六  
七歳にて又火難あるべし。財を失ふこともあり、四十九歳、五十三歳  
にて財をます。六十一歳にて腰の病を煩ふことあり、命は七十六歳又  
は八十三歳の五月庚辛の日終るべし。常に三寶荒神、阿彌陀如來を  
祭りてよし。



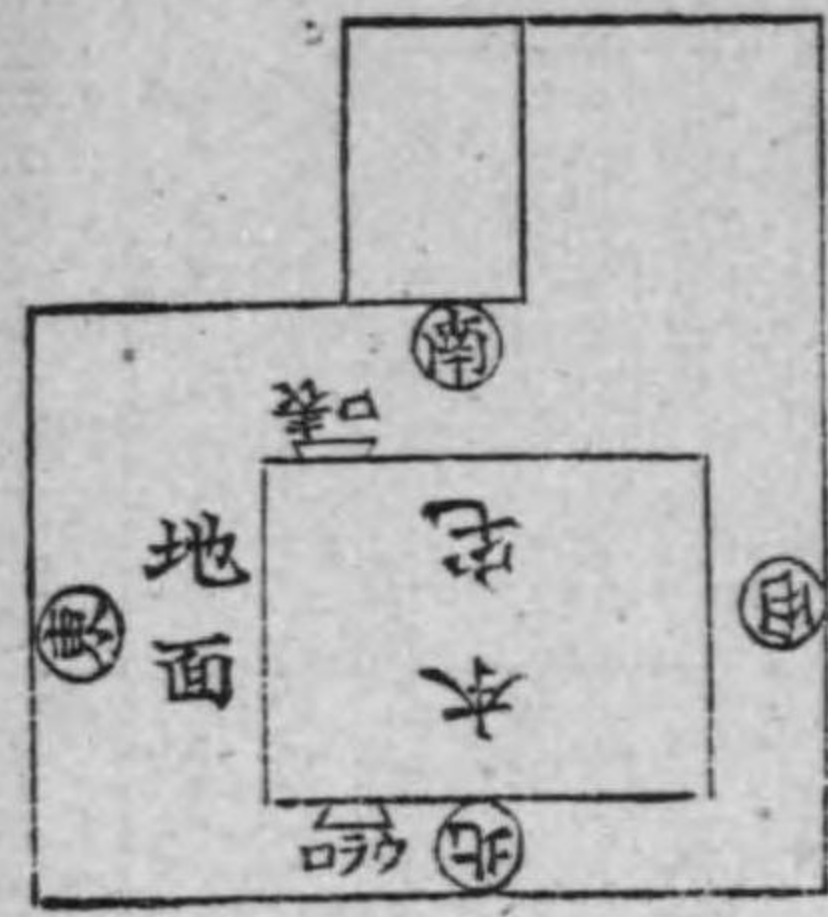
○同方地形缺け込むときは住主財福衰への兆を發す、尙ほ此方つよく缺け入りたる住地は公訟の難發し又不貞の女子出來くることあり思み察ふべきの凶相なり、すべて地形辰巳の方へ張りたるは住人興衰を主とする備へに於て好む所なりと雖も、其宅地一帯の備へと不都合に程を失うて張るときは住主衰微に至り

○辛虛部の枝にあたりて生ずる、人は正直にして心猛く内心は深し、人に愛縁ありて衣食ともに満足なるべし、但し此人は人の言ふことを用ひず、常に住居につき煩らはしきことあるべし、夫妻定まらず、買置室に縁あり、子三人か又は十一人あるべし、春夏の生れは貧なり神佛を信心してよし、秋冬の生れは福あり、土公神を祭るべし、春夏の生れは日の食米三斗あり、秋冬の生れは日の食黒米五斗あり、前は武藏國淺草寺の蝸なり、其ときの印には右の乳の上に黒子あり、來世は藝能ある人と生るべし、此生れは男は親の氣にそむき、女は孝行なり。何れもの、上に立つべし、三歳にて神の祟りあり、七八歳にて怪我あやまちあるべし、十三歳にて命あやふし、十九歳または二十歳にて龍神の祟りあり、二十七歳にて男女とも口舌あり、三十五歳過ぎて財實に縁あり、四十二三歳にて災難口舌あり、五十六歳にて大福來たる、藏を建つることあり、命は八十三歳又は九十三歳の九月甲丙の子の日に終るべし、觀世音菩薩、地藏菩薩を一代よく信心せば、福壽ともに全く目出度かるべし。

○壬豐陽の枝に生る、人は心靜かにして才智あり、福分は多からず、春秋の生れは大によし、夏冬の生れは貧乏なり、子五人又は九人あり

災禍起るものなり、唯だ其相應を得て張り出でたるをよしとすべし、或は又此方缺けたるにも吉祥の理に叶ふこと稀れに之れありおよそ此場は曲直吉凶深長の辨論多き所なり。

○宅地末の方に強く張り出でたる備へは土氣の尙害を受くること甚だしく病難を主とする相なり、此地方人の五臓中に於いては即ち脾の臟に屬する故に住主脾の氣衰へ後に種々に病體を變ず、これ土の場張り充ち反つて缺け衰ふの理なり。



其内女子は孝行なり、出家する子もあるべし。日の食はおのゝ米一斗あり。前生は近江の國八幡の赤狗なり、常に經文を聞きし功德にて人と生まる、其の印には右腹に黒子あり、來世は勇士と生るべし、常に心正しく諸事慎み守らば武家となるべし、三四歳にて病により危きことあり、十三歳にて又大病を止む、又海川の難あり、深く慎むべし、二十四五歳にて人の事により大に災厄あり、二十九歳にて福來たる、三十四歳にて口舌あり、又火事に逢ふか家を出づることあるべし三十七八歳にて盜難に逢ふか商賣のことにつき損失あり、四十四歳にて福來たる、四十六歳の春病あり、秋三月の内盜難に逢ふとあり、四十七八歳にて夏三月の内妻子眷族につきて災難に逢ふとあり、五十一歳にて福來る、命は七十五歳の五月酉亥の日に終るべし、一代八幡大菩薩、阿彌陀如來を好く信心すれば無病長命にて財實不足なかるべし。

○癸柳復の枝にあたりて生る、人は耕作に縁あり、此人容貌はしく心正しければ常に人に妬まらざることあり、先祖は由緒ある人の血統なるべし、但し短氣なり、春の生れは日の食米三斗あり、夏の生れは日の食黒米一斗八升あり、秋の生れは日の食大豆三斗あり、冬の生れは日の食黍二斗あり、此人神の祟りありて財寶聚まれども散じ易く貯へ難

○宅地次の圖の如く未の方を對めに缺けたるは至つてよしとす、住人無病平安の理なり、しかし深く缺け入るときは反つて凶相と成るなり、然るに世間家相を弄ぶ人、未申の方を強ひて缺くことを好み、利一良の方と双方を強く缺け入るの差圖をなしたるを見ること毎毎あり、これ深き意味を辨へざる僻事なり、元來この方位は五行中土に屬す、土は則ち萬物の母と稱し、もろく發生の徳を保つ、此故に居住の地土氣大に衰ふるときは住人榮盛の氣を失ふ、尙ほ土は土生金と金の母たるに其の母空うして命氣を生ぜず、よつて脾金不足の症出來し、又財寶も乏しく、また金氣不足するときは憤みを失ふこと巳に土金傳に説くところにして、此理住人必らず行跡を亂し、惰弱にして職業を破るの意あり、殊に未の方つよく缺けて此土不足の理を現はすとすは、丁の方より火生土と土を養ふべきの火行はれず、依つて火徳も全からざるの理なり故に住人の性質自然と和を失ひ、不和論争のおもむき常に絶えざるなり。

し、前生は伊勢の國阿根が郡の馬にて太神宮、御供米を負うて運びしゆゑ人と生まる、來世は福人に生まるべし、佛神を祈り長く畜生の困しみを脱るゝやう能く信心すべし、六七歳にて災難あり、八九歳にて病あり、十三歳にて腹を病む、二十六七歳にて男は女、女は男に ついて口舌あり、又火事の怖れあり、慎むべし、三十一歳にて災厄あり、三十七八歳にて家を出づることあり、四十三四歳に住所につき患ひあるべし、又火事を慎みてよし、四十七八歳にて財を得る、五十三歳にて悦びあり、六十一歳にて火事の怖れあり、命は七十三歳又は八十七歳の五月癸亥の日終るべし、一代の内地藏菩薩、藥師如來を信心して未よかるべし。

○生産し年月日時によりて終身貧賤に暮し、また苦勞絶えざるやう記しあるとも是れを歎くべからず、吉凶禍福は糾へる細の如く、唯だ恐れ謹み神佛を深く信心なし、假にも人の害とならざることをのみ心懸け善事のみ行なはゞ生涯安樂なるのみならず子孫繁昌せんこと疑ひあるべからず、出誕の日時善事を多く記しあるとも、彼の人相の良き人も倭惡の行ひあらば忽ち禍の來たる如く、却つて身貧にして苦勞多かるべし、唯々深く恐れ慎み信心をなさば吉事のみ來るべし。

男女一代八卦上段の生れの部

酉未巳卯丑					戊申午辰寅子						
分の男					分の男						
艮	坎	乾	兌	坤	巽	震	艮	坎	乾	兌	坤
上	中	皆	上	皆	下	下	上	中	皆	上	皆
連	連	連	斷	斷	斷	連	連	連	連	斷	斷
虛	千	八	ふ	大	ふ	文	虛	千	八	ふ	大
空	じ	まん	どう	に	げん	じゆ	空	じゆ	まん	どう	に
藏	ゆ			ち			藏				ち
四	五	六	七	一	七	六	五	四	三	二	一
歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲
十	十二	十三	十四	十五	十五	十四	十三	十二	十一	十	九
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
九	二十	廿一	廿二	廿三	廿三	廿二	廿一	二十	十九	十八	十七
十	廿七	廿八	廿九	卅一	卅一	卅零	廿九	廿八	廿七	廿六	廿五
一	卅五	卅六	卅七	卅八	卅八	卅七	卅六	卅五	卅四	卅三	卅二
二	四十四	四十五	四十六	四十七	四十七	四十六	四十五	四十四	四十三	四十二	四十一
三	五十一	五十二	五十三	五十四	五十四	五十三	五十二	五十一	五十	四十九	四十八
四	五十九	六十	六十一	六十二	六十二	六十一	六十	五十九	五十八	五十七	五十六
五	六十七	六十八	六十九	七十	七十	六十九	六十八	六十七	六十六	六十五	六十四
六	七十五	七十六	七十七	七十八	七十八	七十七	七十六	七十五	七十四	七十三	七十二

亥		子寅辰午申戌		丑卯巳未酉	
震下		巽下		離中	
斷ふげん		連文じゆ		斷せいし	
二歲	三歲	四歲	五歲	六歲	七歲
九歲	十歲	十一歲	十二歲	十三歲	十四歲
十七	十八	十九	二十	廿一	廿二
廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十
卅四	卅五	卅六	卅七	卅八	卅九
四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七
四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四
五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二
六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十
七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八

右の年數を見て上の卦と見合はし、中段の生れ、下段の生れ、何れも男女とも奥の年八卦の所にて考ふべし。

男女一代八卦中段の生れの部

亥		子寅辰午申戌	
震下		巽下	
連文じゆ		斷せいし	
三歲	四歲	五歲	六歲
十歲	十一歲	十二歲	十三歲
十八	十九	二十	廿一
廿六	廿七	廿八	廿九
卅四	卅五	卅六	卅七
四十二	四十三	四十四	四十五
五十	五十一	五十二	五十三
五十八	五十九	六十	六十一
六十六	六十七	六十八	六十九
七十四	七十五	七十六	七十七

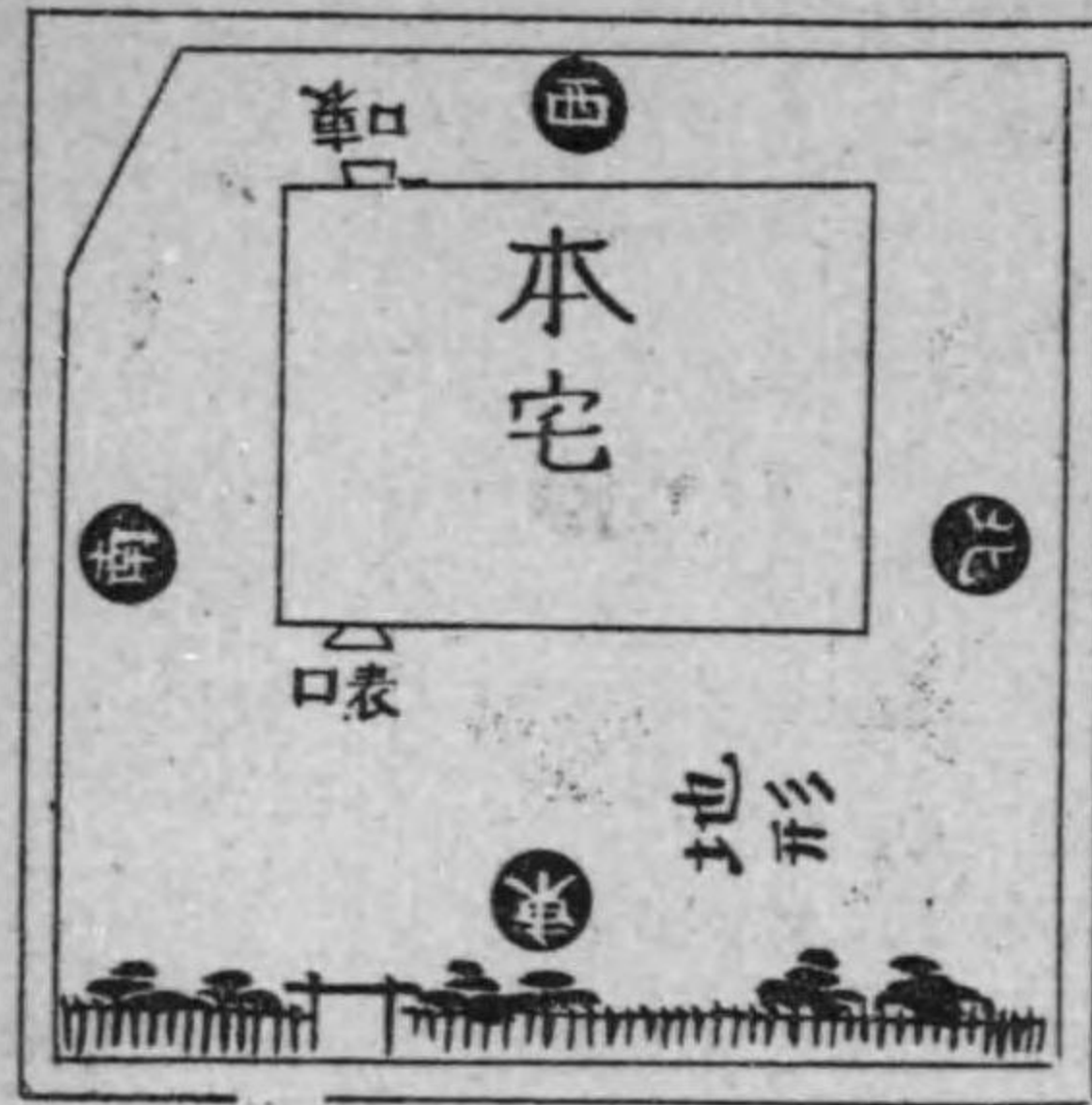
子寅辰午申戌	
男の分	
巽	震
下	下
斷	連
ふ	文
げ	じ
ん	ゆ
六	五
歲	歲
十三	十二
廿一	二十
廿九	廿八
卅七	卅六
卅九	卅八
卅七	卅六
四十六	四十五
五十三	五十二
六十一	六十
六十九	六十八
七十七	七十六

男女一代八卦下段の生れの部

丑卯巳未酉亥	
女の分	
巽	震
下	下
斷	連
ふ	文
げ	じ
ん	ゆ
五	四
歲	歲
十二	十一
二十	十九
廿八	廿七
卅六	卅五
卅八	卅七
卅六	卅五
四十五	四十四
五十二	五十一
六十	五十九
六十九	六十八
七十七	七十六

子寅辰午申戌	
女の分	
巽	震
下	下
斷	連
ふ	文
げ	じ
ん	ゆ
五	六
歲	歲
十二	十三
二十	廿一
廿八	廿七
卅六	卅七
卅八	卅九
卅六	卅七
四十五	四十六
五十二	五十三
六十	六十一
六十九	七十
七十六	七十七

丑卯巳未酉亥	
男の分	
巽	震
下	下
斷	連
ふ	文
げ	じ
ん	ゆ
一	二
歲	歲
八	九
十六	十七
廿四	廿五
卅二	卅三
卅四	卅五
卅二	卅三
四十一	四十二
四十八	四十九
五十六	五十七
六十四	六十五
七十二	七十三



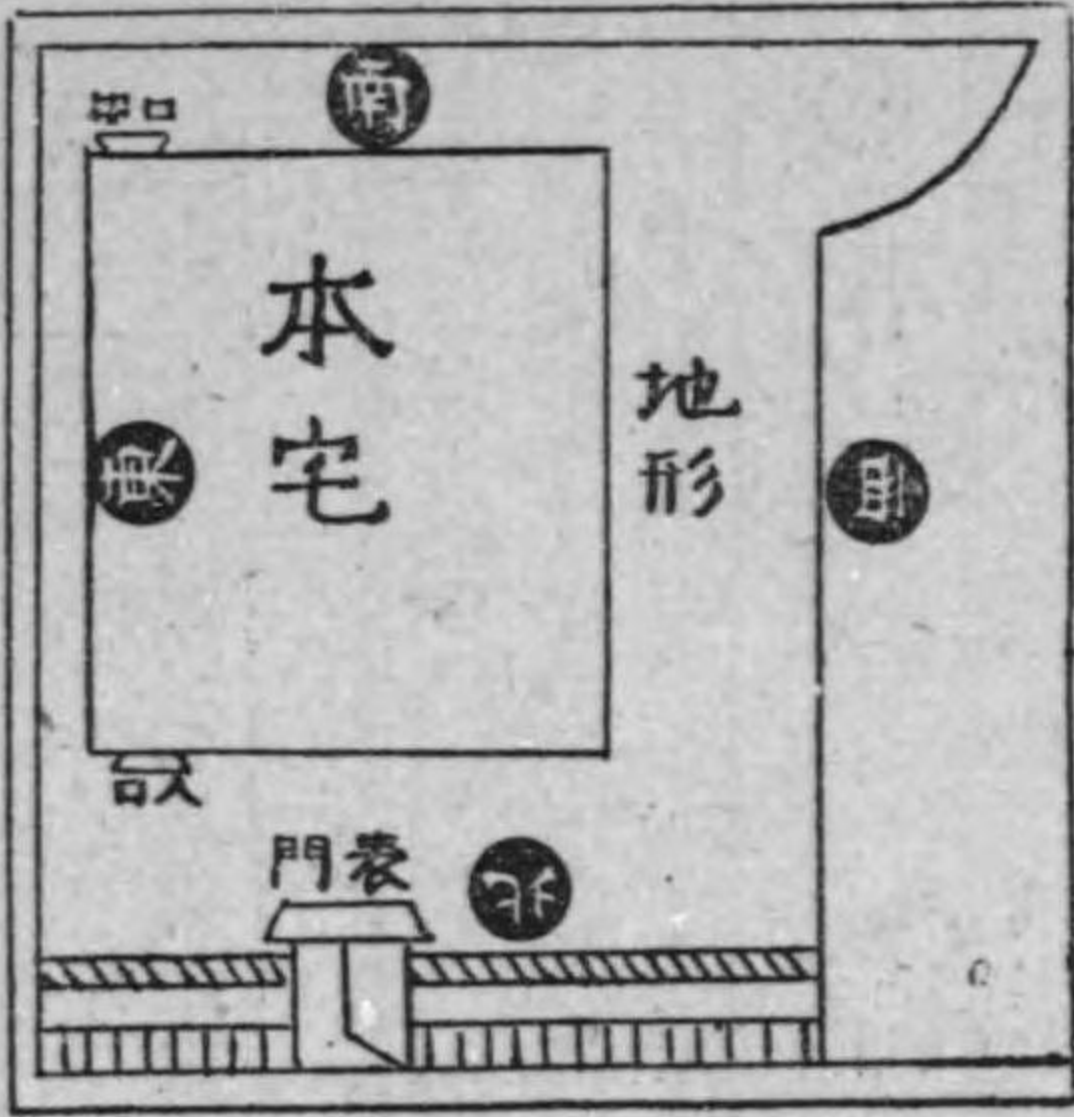
亥酉未巳卯丑							
分の女							
巽	震	艮	坎	乾	兌	坤	離
下	下	上	中	皆	上	皆	中
斷	連	連	連	連	斷	斷	斷
ふげん	文じゆ	虚空藏	千じゆ	八まん	ふどう	大にち	せいし
二歳	一歳	七歳	六歳	五歳	四歳	三歳	十歳
九歳	八歳	十五	十四	十三	十二	十一	十歳
十七	十六	廿三	廿二	廿一	二十	十九	十八
廿五	廿四	卅一	卅	廿九	廿八	廿七	廿六
卅三	卅二	卅九	卅八	卅七	卅六	卅五	卅四
四十二	四十一	四十七	四十六	四十五	四十四	四十三	四十二
四十九	四十八	五十五	五十四	五十三	五十二	五十一	五十
五十七	五十六	六十三	六十二	六十一	六十	五十九	五十八
六十五	六十四	七十一	七十	六十九	六十八	六十七	六十六
七十三	七十二	七十九	七十八	七十七	七十六	七十五	七十四

年八卦線やうの解

上元、中元、下元、此三つの年代を考ふべきこと右に記せし通りなり  
 六十年を一元といふなり（上元の一酉を略す、これは年久しき右中元より左に記す）  
 ○中元の生れは延享元年甲子年より始まり、享和三年癸亥としまで六十年の間なり。  
 ○下元の生れは文化元年甲子年より始まりて、以後六十年の間を下段とも下元ともいふ。右一元六十年上中下合して三六八十年を一周來

戌申午辰寅子							
分の女							
巽	震	艮	坎	乾	兌	坤	離
下	下	上	中	皆	上	皆	中
斷	連	連	連	連	斷	斷	斷
ふげん	文じゆ	虚空藏	千じゆ	八まん	ふどう	大にち	せいし
一歳	二歳	三歳	四歳	五歳	六歳	七歳	十歳
八歳	九歳	十歳	十一	十二	十三	十四	十歳
十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	十八
廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十	廿六
卅二	卅三	卅四	卅五	卅六	卅七	卅八	卅四
四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十三
四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十
五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	五十八
六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	六十六
七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十二

○宅地の方張りたるは住人弱にして又身  
上も衰ふ相なり、尤も家主金氣はげしく尖る  
の氣性にして僕を育し難きの象なり。



○同方缺けたるは吉凶交あり、少し缺けた  
るは忌まず、強く缺け入りたる宅地は産業不  
利にして又妻縁に障りあることを主とするなり  
○宅地成の方に通り出て、備はりたるは住人

といふなり。此の如く三段は次第々々に何年までも繰り返して来るべし。然らば下段六十年過ぎて又元の上段へ繰り戻す時は下段の中に生れたる人を何時までも下段の卦より數へ初むべし、上段の生れの人中段にもあり、又長命なれば下段にもあるなり、以下此の如く心得うらなふべし、故に上男、中男、下男、上女、中女、下女といふあり譬へば上段の男をば離の卦より數へ始め中段の男は巽の卦より一と數へ下段の男は兌の卦より數へ始むるなり、又上段の生れの女は坎の卦より一と數へ中段の女は乾の卦より數へ下段の女は震の卦より一と數へ始むるなり。

### 八卦順逆めぐりの事

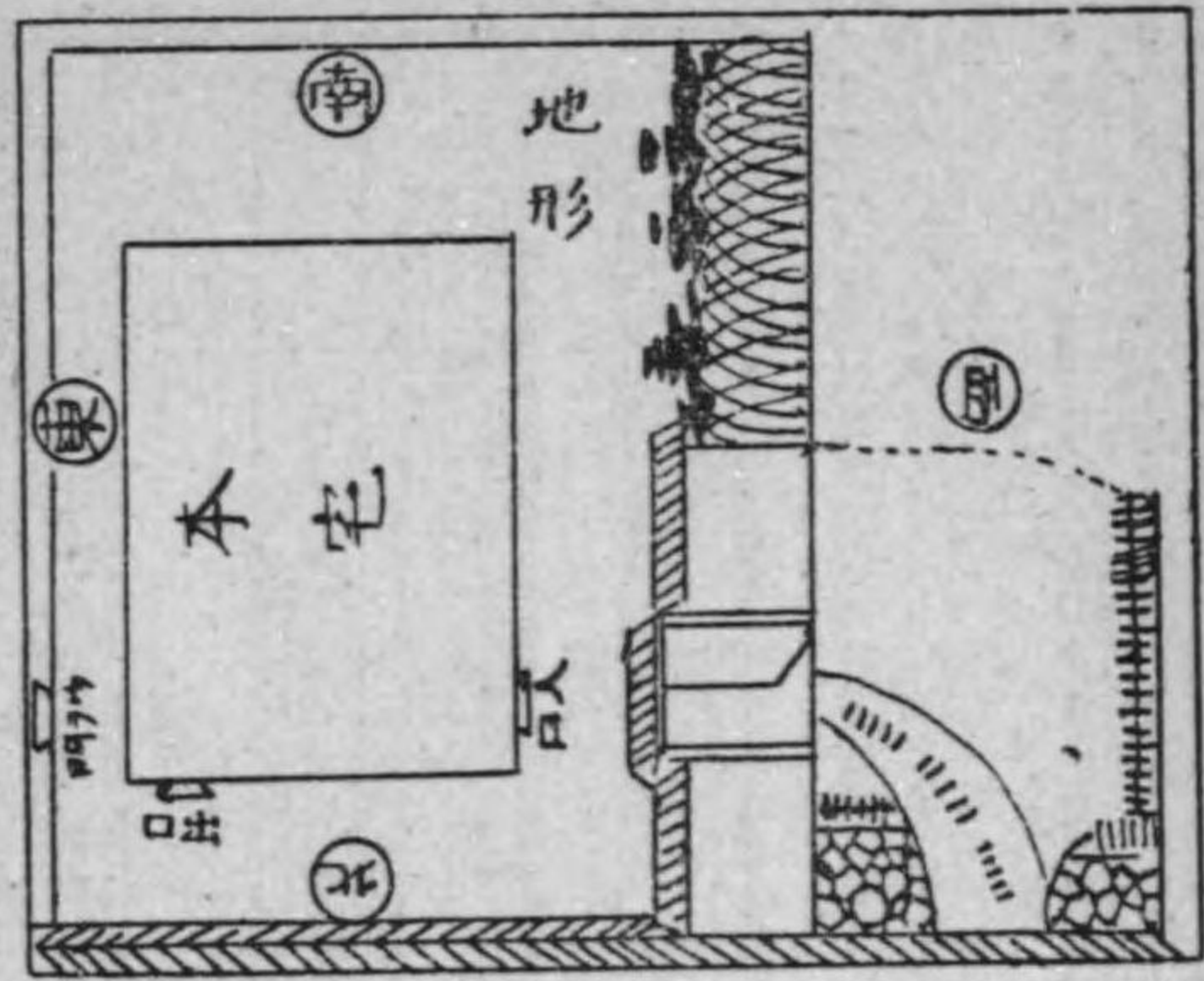
男はエ順といひて甲、丙、戊、庚、壬の子とし、寅の年、辰の年、午の年、申の年、戌の年の男は皆順に數へる順なり。  
離(一歳) 坤(二歳) 兌(三歳) 乾(四歳)と左より右へ數へるなり  
又男はト逆とて乙、丁、己、辛、癸の丑、卯、巳、未、酉、亥の年の男は皆逆に數へるなり、逆とは右より左へ數へるなり、女はト順とて乙、丁、己、辛、癸の丑、卯、巳、未、酉、亥の年の女は順に數へるなり。

### 八卦數へやうの事

有福にして威權全きことを主とする、尤も家宅倉庫の備へ地勢のかこみ或は門戸の構へ等すべて心得多し、且つ右戌張の地面ある上本宅建もの、戌亥もまた張り充つる備へあらば、かへつて凶なり、住主繁榮の時を過ぎて已に當時は衰へ財寶乏しくなること必定なり、殊に此備へによつては重代の刀、脇差の中に其の形、意味深長の趣旨いろ／＼判断あるなり先づ其の一を云へば、古作上品の劍にして種物、或は梵字あるたぐひ、新上刀にて目釘穴三つ前りある道具家に傳ふるべし、此劍の由緒ありて傳來すと雖も凶相ある劍にして重來家に災災を兆すことあり、又家人毎々眼病を患ふこと顯然たり、右の如く地形家宅の備へによりて所持の劍刀によつて其凶相を察することは是れまた家相に兼ねこもる所の病なり。

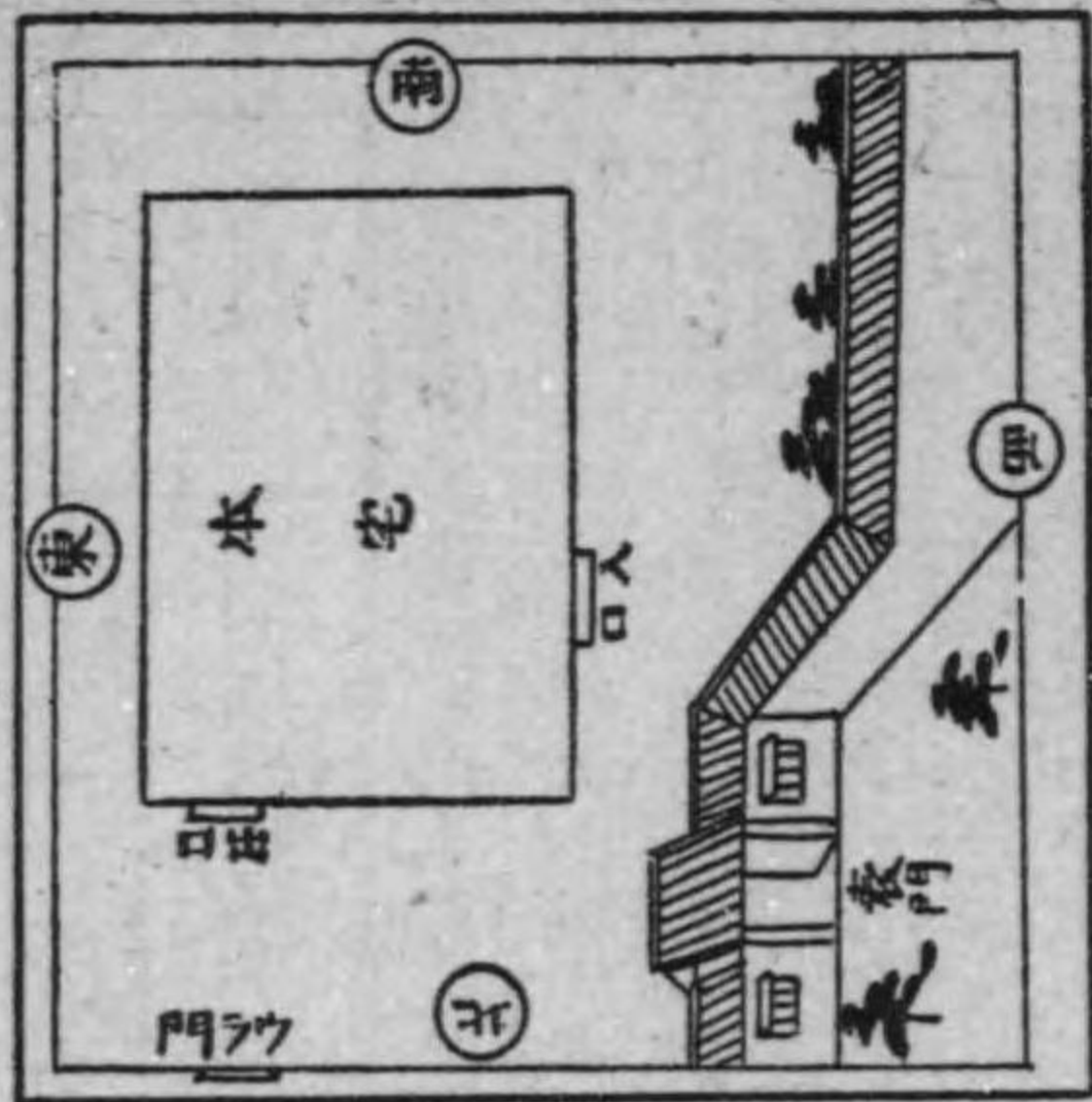
是れは初八を越えて四十一をどり、四十八を越えて八十一をどり、八十八を越えて百一をどるといひて、例へば上段の生れの男エ順には離の卦を一歳とし、坤の卦を二歳、兌の卦を三歳、乾を四歳、坎を五歳、艮を六歳、震を七歳、巽を八歳と數ふべきを一卦飛ばして初めの離の卦を八歳とするを初八を越ゆるといふ、離を八坤を九兌を十と數へめれば離の卦四十にあたる、直に此離を四十一と二度讀むゆゑ四十一をどるといふなり、扱て坤を四十二、兌を四十三とぐる／＼數へめぐり、震の卦四十七にあたる、次の巽を一卦こえて離の卦を四十八と數へる、是れを四十七を越えるといふ、八十一をどり八十八を越ゆるといふも皆な此の例にて推して知るべし。  
男のト逆、女のト逆も皆な是れに準じて知るべし、口に記したるはエ順ト逆エ逆ト順を繰りて當る年を下に記せり、是れを女子小兒の八卦を繰るに取違はんことを慮りて見安からしめんがためなり、





○地形は四方全きを次に圖する如く、園園成の方にて入り込みたるは、成缺の地形と理あるなり、財右乏しき處へにして、貧州の一端なり。夫れ成の方は九月の季候を保ち、萬物成就の氣ある場なるにより、張り出づるを好とす、先に出だせる園の如く、張り連なるときは、兌の方、中秋穀物みのる時にあたり、草木も形を成しお

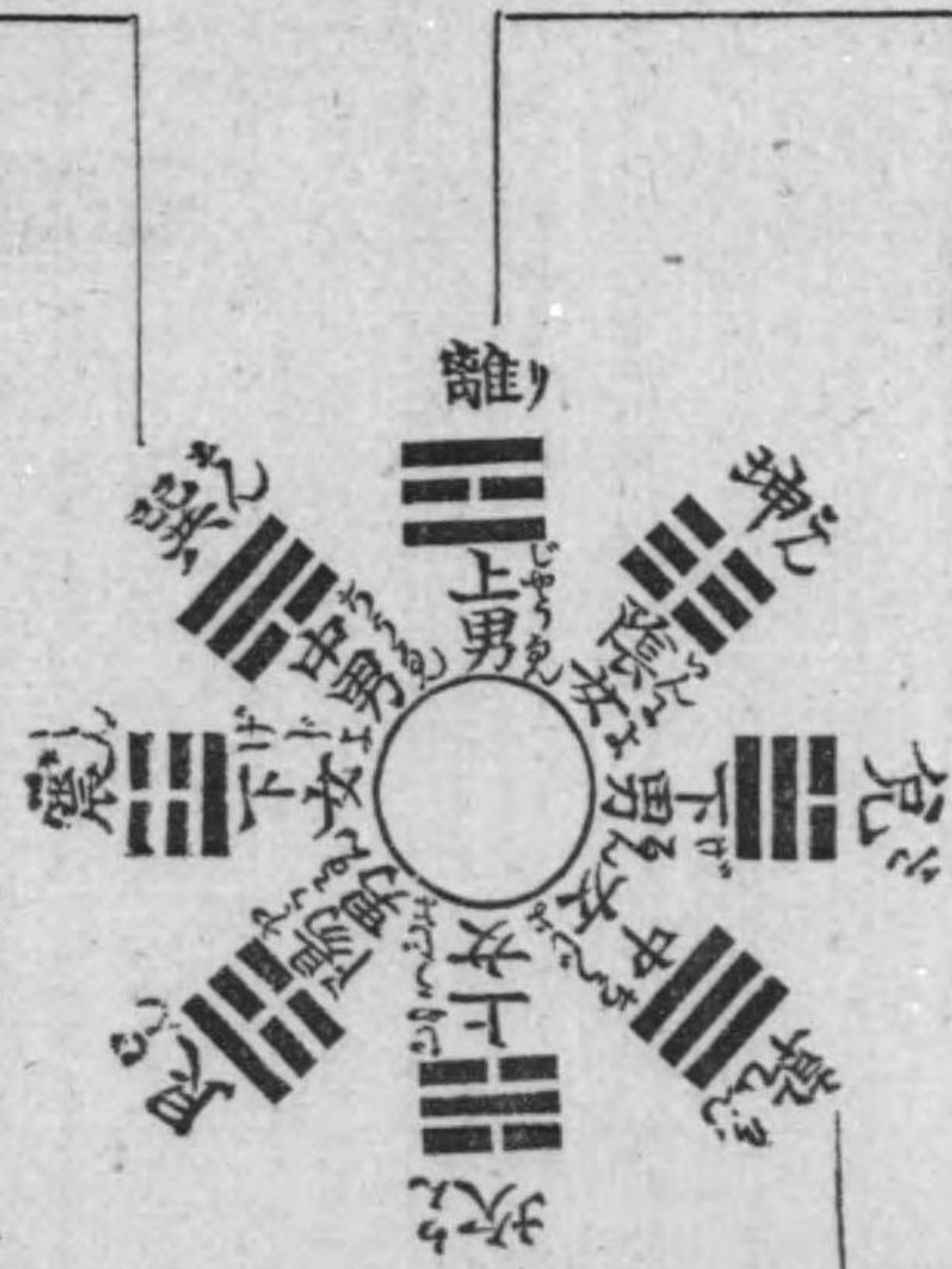
ほせ、氣充ちたる場より地勢張り調ふ、故に住人も、氣力を生ずるの理まへなるに、かへつて此の如く、地形不足なすは、穀物とりいれの時を失ふかたち、正に、民飢饉の凶年に返へるが如き理に相あたるの凶相なり。



○宅地、方張り出でたる備へは、成張りの地に、次いで、後年の興福を主どり、僕徒よく従ひ、殊に、聰明の婦女出來する相なり、尙ほ、又此所に、圍する如く、北手川に添ひたる、居宅ならば、いよ、住人繁榮して、追年富強に至るべき也。

上段の生れの男は、離の卦より、くり初むるなり。ト逆は、右より左へくり、エ順には、左より右へくるなり。

中段の生れの男は、エ順には、巽の卦より右へ順にくる、ト逆には、左へ逆にくるなり。



下段の生れの男は、順にて兌の卦より、右へ順にくり、ト逆は、左へ逆にくるべし。

中段の生れの女は、エ逆には、坎の卦より、左へ逆にくるべし、ト順には、右へ順にくるべし。

下段の生れの女は、エ逆には、震の卦より、左へ逆にくるべし、ト順には、右へ順にくるべし。

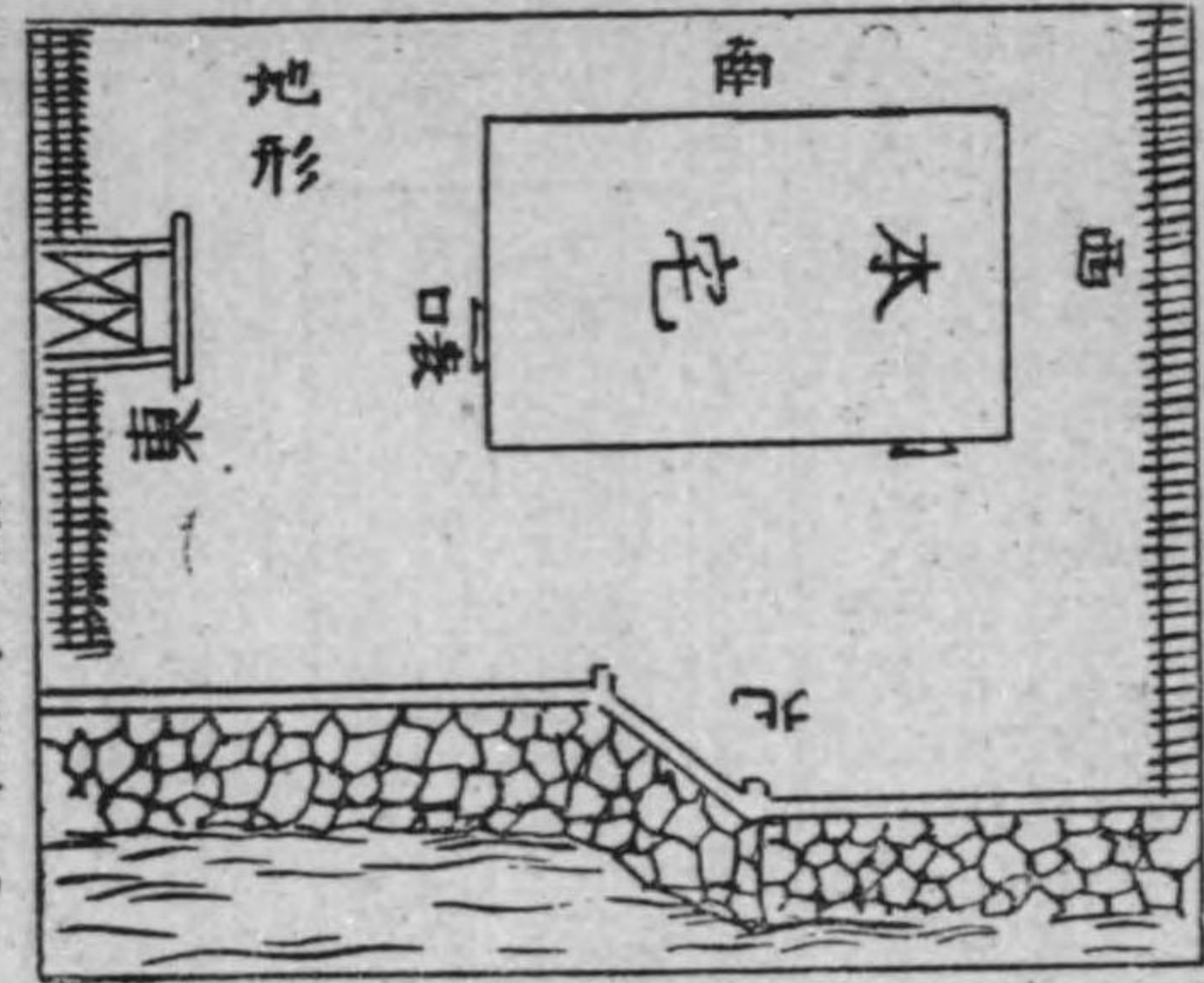
離 中 斷



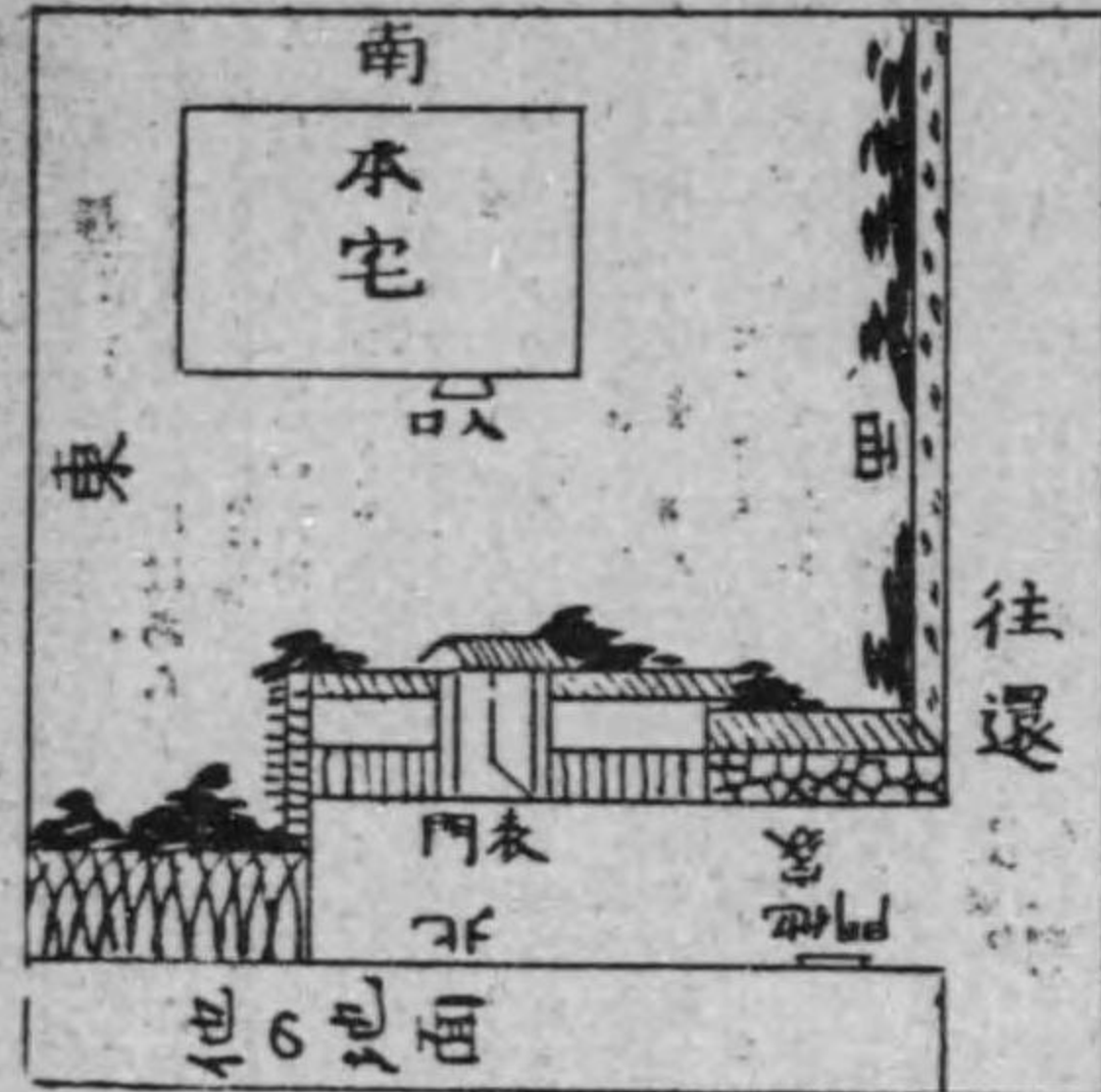
木性	土性よし	水性	金性あしく
火性	大吉	あさなひ	半よし
つかひ	日さ	らひ	日
たつみ	う	ら	日
う	ま	ら	日
ひ	じ	い	日
さ	る	ぬ	日
此日	萬吉	此日	萬凶
此方	萬よし	此方	萬よし
此方	萬よし	此方	萬よし

この卦に當る年は、親子兄弟主人、其外朋友に、從ひ親みてよし、離はものに、離るゝ意あれば、親族に離るゝか、又は住所を退くなどの苦勞あり、或は罪をうけ、咎めを蒙るゝなどあり、慎むべし。さりながら、邪の心を持たず、誠を盡くし、深く神佛を信心すれば、初め悪しくとも、後には、目上の人の恵みにあひ、或は位高き人に、引き立てられ、立身出世することあるべし、商人は、金銀財寶に、損失あるよしなり、深く慮かるべし。女は、貞實の心を持たねば、災の來ること、眉の附くが如し、學者出家は、立身して、大に名を發する年なり、二十三夜の月と、觀音を信心すべし。

おのゝ上段中段の内に、引合し見るべきなり。



○同方缺け込みたるの地形は福力薄きの理に  
して臣下奴僕に不忠不義の輩出づる相なり  
凡そ乾の陽は秋より冬至に至るの境にして陽氣  
初めて兆さんとし、陰あつまりて職ふ氣味あ  
ること巳に易の啓蒙にも帝乾に職ふと云へり  
別して亥の方は陰氣盛んにおこなはれ、風も  
稍を枯らすの時にあたる。然りと雖も地形張

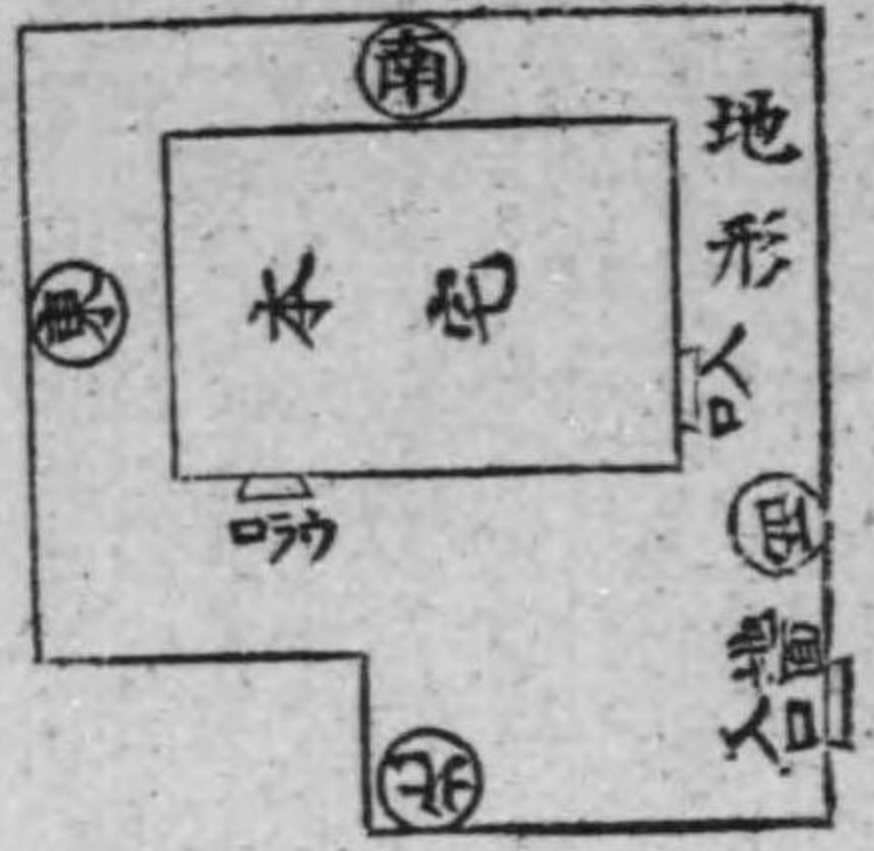


り備はるときは微陽勢を得て陰惡を掃する  
理を生じ、吉祥の地理となるなり、然るに此  
所缺け入ること右に反して惡敵を生ずるの地  
勢となる、ゆゑに前文の如く穰かならざるの  
住地なり。  
○宅地丑の方強く張り出づるの備へは住人疾  
病の非常に絶えず或は衣食乏しく尙百物消滅  
の氣の行はるゝ宅地なり、故にこゝに強く張  
り出づる備へあるは平生勞瘁の氣奮發して禍  
あること繁く終に家名危きに至るものなり。

年	遊	德	福	家	生	害	禍
あ水金 ろし性性	吉土木 性性	わ土火 ろし性性	よ金木 し性性	凶金土 性性	吉水火 性性	凶木水 性性	よ火金 し性性
五月	火・離	四三月	風・巽	二月	雷・震	十二月	山・艮
此卦の月は萬よし、家内和順して潤ふなり、旅 立ちして障りなし、女は孕むことあり男女とも 色情を深く慎むべし、初め心にまかせずとも人 の親みを得てよし。 此卦の月は萬よし、今までなしたること も此に用ひられぬは速かに新に改へてよし、願 望成就すべし、とかく女難を慎むべし、女は縁 附とふべし。 此卦にあたる月は無實の難を受け間違にて災難 にあふ月なれば萬事慎むべし、短氣を持つべか らず、殊に刃物の扱ひを忌むべし、身に應ぜぬ 望は難あり。							

體	絶	命	絶	醫	天	魂	遊
わ金火 ろし性性	よ土金 し性性	凶火吉土木 性性	性性	あ木火 し性性	よ土水 し性性	わ木水 ろし性性	よ火金 し性性
十一月	水・坎	十九月	天・乾	八月	澤・兌	七六月	地・坤
此卦の月は物事一たん成就すとも破るゝの意あ り、坎は水なり、水はよく従ふ、是れ妻子に事 あるべし、女は産にうれひあり、其外海川水邊 によるべからず。 此卦の月は人我と同じく親み深き意あり、ゆゑ 絶命に及ぶ、女は殊に嫉妬を慎むべし、待人は 來らずとも便あり。 此卦の月は内明かにし外悦ぶ意あれば願望よし 仕官は立身す、女は衣類を得、男は財を得る。 但し兌は口の象あれば、口論と争ひ事を慎むべ し。 此卦の月は物の分明にわからぬ意ありて思ひよ らぬ疑ひをうけ難儀迷惑あるべし、女難の慎み 又人と隔意事あるべし、仕官は宜しからず。							

○同方地形缺け込みたる備へを好む人多し、然れども強ち好む所にはあらず、右に云ふ如く丑は萬物減する方なりと雖も、其領分を心得なくして缺け失ふときは萬物生ずるの氣もまた空し、五行造化丑に終り止まるの理ありばこそ又寅に初まり生ずるの理あり、終り止まらずして何ぞ生氣を發せんや、此理に依つて左の備へは住人百事終りをよくすることなく又志を發して初め誓むこと竟に利を得ること難し、或はまた建物此所の備へに凶相を重ねるときは家督相續全きを得ることなし此隅の地を缺き除くには甚だ辨へあり、又田張らず缺け入らぬは常相にして平全の備へなり、尙ほ此方位吉凶の辨四門曲直の圖説に至つて復た之れ述ぶべし、依つて茲に之れを略す。



宅地四仲曲直吉凶の辨

○宅地東方張りたる備へは至つて吉なり、凡そ東方卯の方は日昇る地氣にして四時の中春萬物發生の兆強く、草木萌動く時候に當る然るに此方張り出づることよく、陽氣進む備へにして住人繁榮の氣を得、追々立身發達する意味を含む地相なり、尤も其地倉庫、厩等の備へを以て尙書の理を説くるときは其の甲斐なく、相生の吉相を重ねるときはますます貞祥幸善あり、此等の心得あること總て四方四隅とも同断なり。

坤 皆 斷

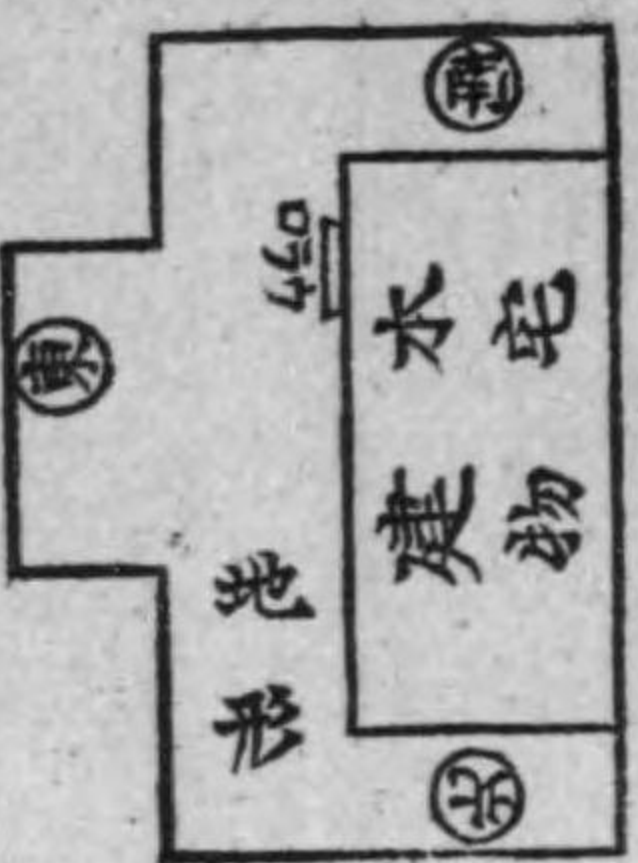


金	性	火	性	土	性
と	り	う	し	い	ぬ
と	ら	ひ	つ	じ	ね
さ	る	む	ま	た	つ
此日萬よし	此日凶なり	むま	たつ	み	み
と	り	う	し	い	ぬ
と	ら	ひ	つ	じ	ね
さ	る	む	ま	た	つ
此日萬よし	此日凶なり	むま	たつ	み	み

此卦の年は奢移の心をやめ温順柔和に身を持つべし、坤は土にて女にかたどる、女は人に従ふものなれば、たとへ男たりとも一己の了簡を出ださず、人にしたがふべし、又土は物を生ずるに養ふものなれば願望も草木の成長する如く、次第々に調ふべし、たとへ人より妨げらるゝとも、うれひず、怒らず、信を盡くせば却つて其の人我力となるべし。女は夫によくしたがひ、子は親に孝を盡くし、主人持は忠義を勵み、目らへにつき心よからざる事ありとも、うらみ怒るゝるなくよく誠を盡くしなば、諸事さいわひを得て、こゝろのまゝになる年なり。

遊	天	禍	生
凶火水	凶土火	凶金土	凶水木
性性	性性	性性	性性
五	四	二	十
月	三	月	正
火	風	雷	山
離	巽	震	艮
此卦の月は住所の變はる意あり、身代に就き、心配あるなり。又男子の事に就いて吉事あり、孝子忠臣は旭の昇る如く次第に繁昌すべし。	此卦の月は住所など變ることあり、巽は風の物を動かす理なり、されども人に貴まるゝ意あり、盜難女難あり、孕み女は産は安けれども少し惱みあり。	此卦の月は望み事叶はず、雷の天より落つる如く災あり、慎みてよし。武士は吉、出家は寺に就き口説あり、婚禮は整ふ、待人は中途に滞りあり。	此卦の月は身の上安堵ならぬ月なり、思案定まらぬ意あれば此方より諸事仕かけるは悪し、萬事慎みて速かにせぬがよし、女は産にうれひなし。

東張の地形



○同方缺け進みたる宅地は元來其地に永住なし、併し此地に疾病の氣を排する地理にして住人無病なり、然りと雖も陽氣發用の地を缺けたれば吉相の部にはあらざるなり。  
○南の方に右圖の如く張り出たる宅地は陽勢旺の備へにして家業繁榮なすことを主とする。然れども午の方には中夏にして草木も十分に茂盛する時にあたり陽勢大に昌にして萬物満足の意あり、故に張り充つることを欲せず、唯だ程よく張り出づるをよしとす。  
○同方缺け入りたる宅地は凶凶兩斷の備へなり、深く缺け入る備へは陽勢至つて陰氣百事を破る兆を生ず、故に代を重ねて住する

人を必らず五體不足なる子孫出來し、又侯好の輩集まり家財を分散するの愁ひを免くことあり、何分住人安心ならざるの地相なり。  
○西の方に右の圖の如く張り出たるは、前に戌缺けの地に吉凶を違ふる如く、西の方には中秋を主どり、穀物専らみの時に値る、然るに此方張り出づる理は萬物成就の氣を備ふるが故に住人福祿全きの地相とす。  
○同方缺け込みたる地は右に説く所の地相を以て考ふれば不祥の象に當ると雖も風水の一傳に金水を生ずるの象なるに依つて福を主とす、説をなす、故に住人富に至ることあらば必ず色欲不義の禍發ることありて吉凶交あり。  
○北の方に右の圖の如く張り出たる宅地は人貴く富足り難する所なし、已に此地は一陽來復するの場にして一年の森羅萬象の氣より受け將かるの理を以て知るべきなり。  
○同方缺け込みたるは至つて凶なり、夫れ子の方には帝座なり、其の座空しきときは國政怠り、民を扶育なし難きの意味あり、四民の宅地と雖も其理ひとしく災あること顯然たり。

命	絶	絶	福	遊
凶土火 性性	吉木金 性性	わ土火 ろし性性	凶火木 吉土水 性性	あ木水 し性性
十一月	水 坎	九月 天 乾	八月 澤 兌	七月 地 坤
<p>此卦の月は人のことにつきて苦勞あり、是れ坤は土にて萬物を養ふ意ある故なり、人に迷はざることを心得べし、妻を求むるは吉、仕官の人は誠を盡くすべし。</p> <p>此卦の月は金銀財寶は心の儘に集まり、女は衣類を得る、百姓は田地を得る月なり、病人婚禮各々よし、但し争論と人に憎まるることあり、慎みてよし。</p> <p>此卦の月は物事ふさがりて上の人の咎めにあふ夫婦の中に口説あり、病難を防ぐべし、待人は來らず、失せ物は出でず、深く信心すれば後よかるべし。</p> <p>此卦の月は人と親しむこと深し、されども女難を慎むべし、女色を恣にすれば其身絶命に及ぶべし、又病難あり、信心してよし。</p>				

断 王 兌

不動明王

廿八日

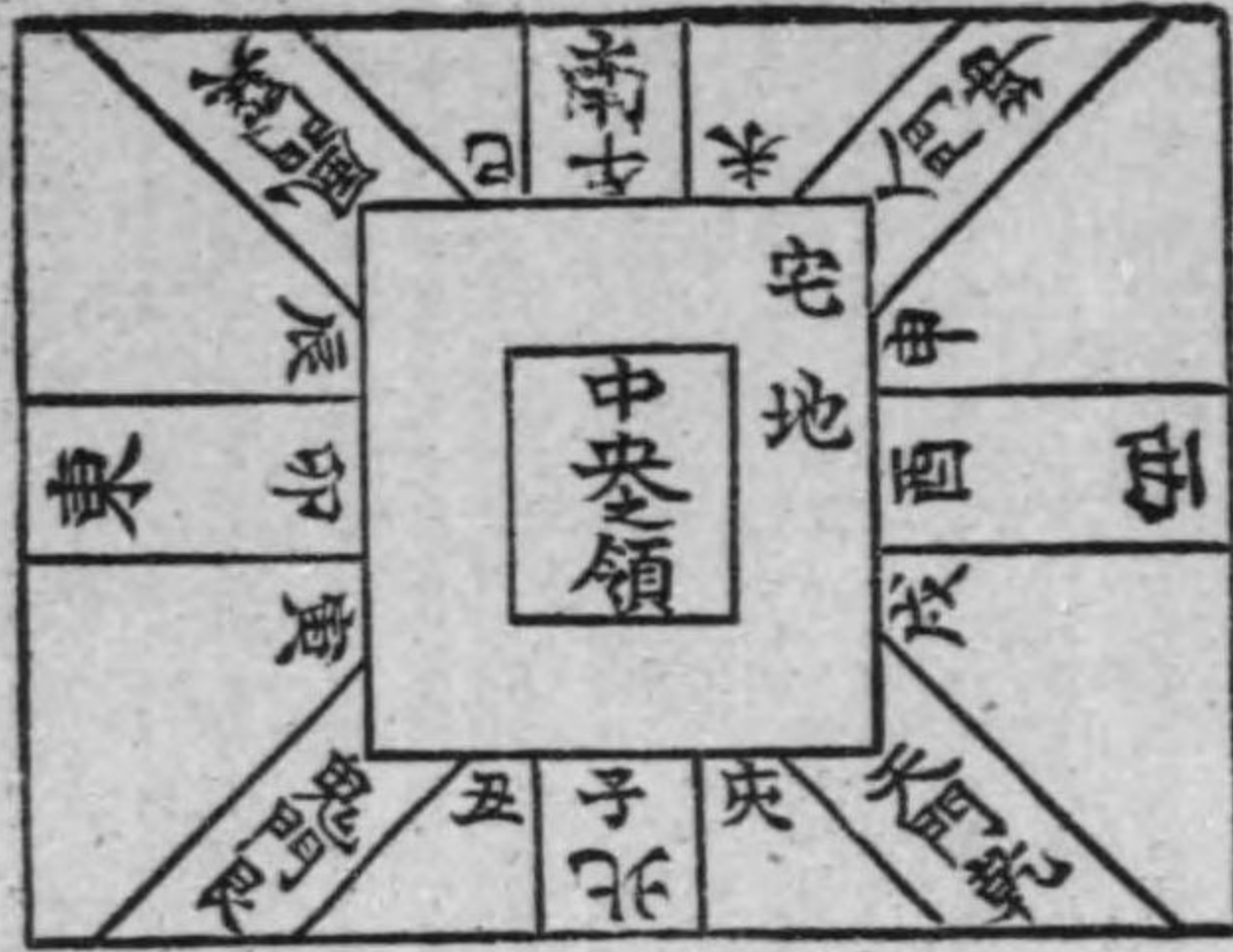
水 性	金 性	木 性	火 性
ひつじさるうしとら	ひつじさるうしとら	ひつじさるうしとら	ひつじさるうしとら
とりにぬねう	とりにぬねう	とりにぬねう	とりにぬねう
むま たつみ	むま たつみ	むま たつみ	むま たつみ
此日萬よし	此日萬あし	此方よし	此方わるし

此卦の年は、悦び現はれて萬事よけれども、兌は澤にて水の上よむ意あれば、萬事滞りて埒あかず、又た口論争ひ事を慎むべし、本尊不動明王は火徳の尊體なれば、信心して患ひを免かるべし、面柔和にして、篤實を守るべし。兌は口に象とれど、辨佞の人を遠ざくべし。色欲に迷はば災難來たるべし、よく慎みてよし、病は重けれども本腹すべし、望み事は半叶ふ、縁談は障りあれども後にはとのふ、よろづ始めは思ふにまかせざれども、何事も末にては苦勞のなき年なり。

宅地四孟曲直吉凶の辨

左に圖を設け配當する如く乾の隅を天門といふ、乃ち天に位し萬物を慈む意にして貴福を主どり陽の長たり、故に此隅の備へは全からんことを欲す、此所成亥に連り張り出たる地形澤龍天の地勢と謂うて大によし、若し缺け備ふるは右に反して大に凶し。

地形四門驅列の圖



○同坤の隅を人門といふ。大地に位して萬物を育し百物を載せて陰の長たり、此地も備へべきことを欲す、張り出づるときは疾病を主どり、少し缺けたるは好することありと雖も強く缺け入りたるは大に凶なり。  
○巽の隅を風門といふ。乃ち風木に屬し、其の性陽なり、萬物生長の氣事なりと雖も又總敵の意を含めり、此隅地形全きは常理にして張り出づるはいよ／＼吉なり、若し缺け入り備へけ右に反して散財の理を生ずるなり。  
○同艮の隅則ち鬼門なり、山土に屬して其の性微陽たり、此隅萬物牛減の間にありて常に百害の氣尖なること普ねく世人の知る所なり、然るに宅地の備へ此隅張り出たるは任人身体陰陽の通利を閉ぢ病を發し又子孫相續に順を得ること難し、又缺け入りたる備へも吉に似て凶なり、唯が斜めにいさゝか缺けたるは無事とす、尙ほ此隅の備へによつて鬼門柱を用ひて災の氣を防ぐ法あり、或は此隅土氣充滿の氣くるところ故に缺け入つて反つて危害を受へる構へなり（甲俗に返り鬼門の備へといふこと）と相似たるものなり、凡そ其の意味深長にして技に遠く蓋すこと難し、尤も

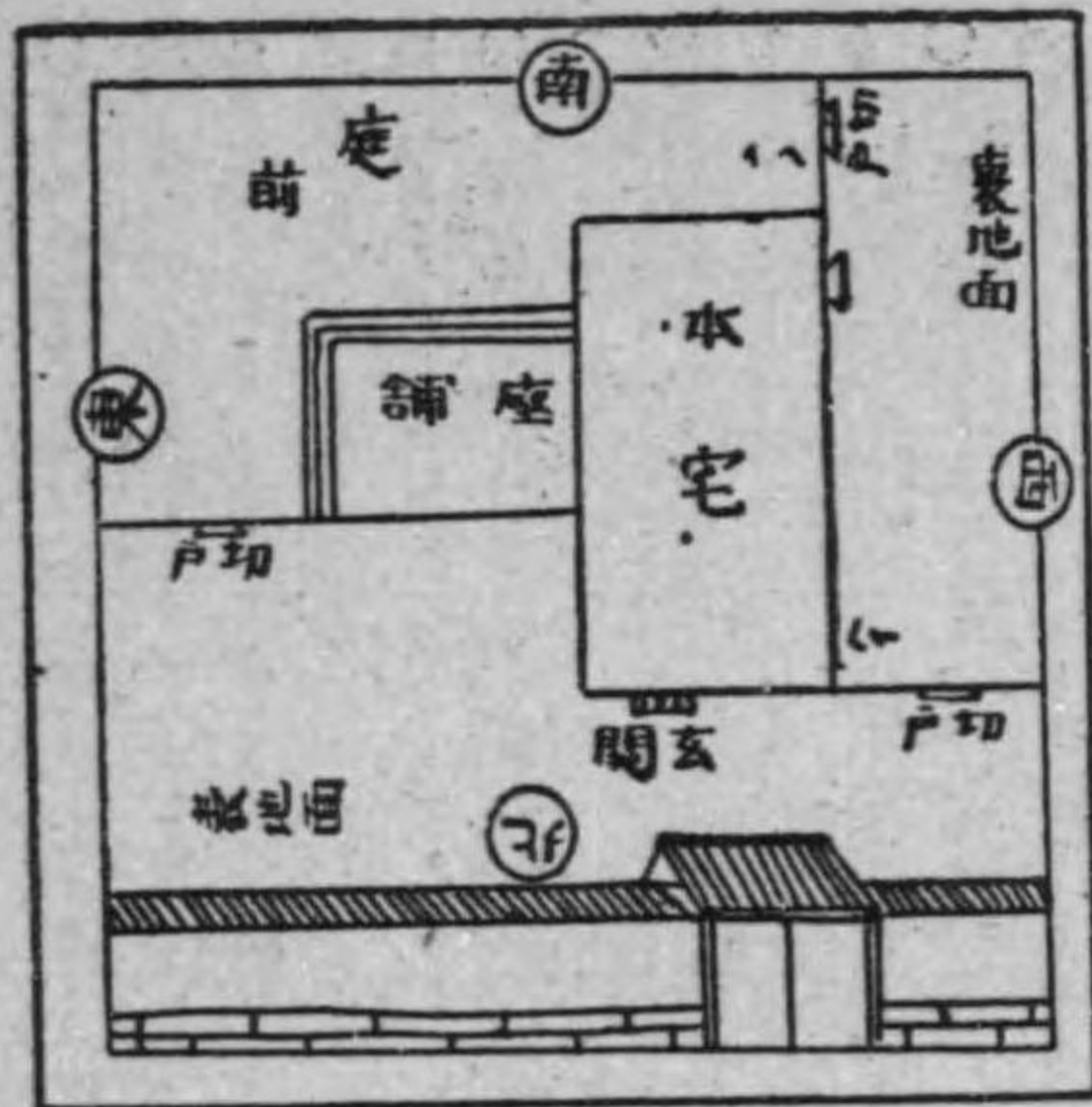
害  禍	家  生	年  遊	徳  福
わ火土 よ木金 ろし性 し性性	わ火木 吉土水 ろし性 性性	凶火木 吉土水 性性 性性	凶木水 よ火金 性性 し性性
十一月 水 坎	九月 天 乾	八月 澤 兌	七月 地 坤
此卦の月は物事滞りて妨げあり、信心あればと一のふ、商人は手廣くするはあし、不意の災難あるべし、旅行は難あり慎むべし。	此卦の月は初めおどろくことあれども、後喜びとなる意あり、夫婦の内遠方へ行くこと出て來るべし、争ひを慎むべし、産人はなやみなし、孕は病なり。	此卦の月は萬よけれど物事取締りなく埒あかず、外目はよく見ゆれども内心は滞る體なり口説色欲のなやみあり、信心すべし、後こよかるべし。	此卦の月は貴賤相集まりて親しむ意あれば萬よし、心柔和にすべし、剛氣なればあし、外より難題を云ひかけられ苦勞することあり、氣かくべからず。

醫  天	魂  遊	命  絶	體  絶
凶水金 吉土木 性性 性性	凶土火 吉金土 性性 性性	凶土金 吉水火 性性 性性	わ木水 よ火金 ろし性 し性性
五月 火 離	四三月 風 巽	二月 雷 震	十二月 山 艮
此卦の月は人の心に背くことなし難し、女難あり慎むべし、口説争ひ事あり、人に憎まる、月なれば柔和にしてよし、女は此月大にあし、慎むべし。	此卦の月は心中正直になし、我邪をなし遂げんとせば禍忽ち來たるなり、物に退屈せず一心なれば願ひ可はずといふことなし、縁談整ふ病人あし。	此卦の月は不意の禍あり、よく／＼慎むべし望み事妨げあり、諸事相談約束事其期に至りて食ひ違ふ意あり、女難を慎み、信心してよし。	此卦の月は物事損失多し、親子兄弟に附いても損あるべし、然れども堪へ忍びさへすれば此の災を脱るゝを得ん、故に怒ることなく何事もそなへすれば成就すべし。

此圖に於いて東門社殺の凶地を事に缺け除くことは故實の辨へこれある所なり。

家宅の備へ吉凶の辨

居宅の四仲四隅とも缺け服りなく廉の備へは常相なりかし、住者の分限によつて斷的あること宅地の所に説くが如し、或は開口廣く裏行短きの宅は榮昌の氣あれども長久の理微なし、又開口より裏行ゆたかな備へは有福にして長久の理あり、然るに下の圖の如きは本

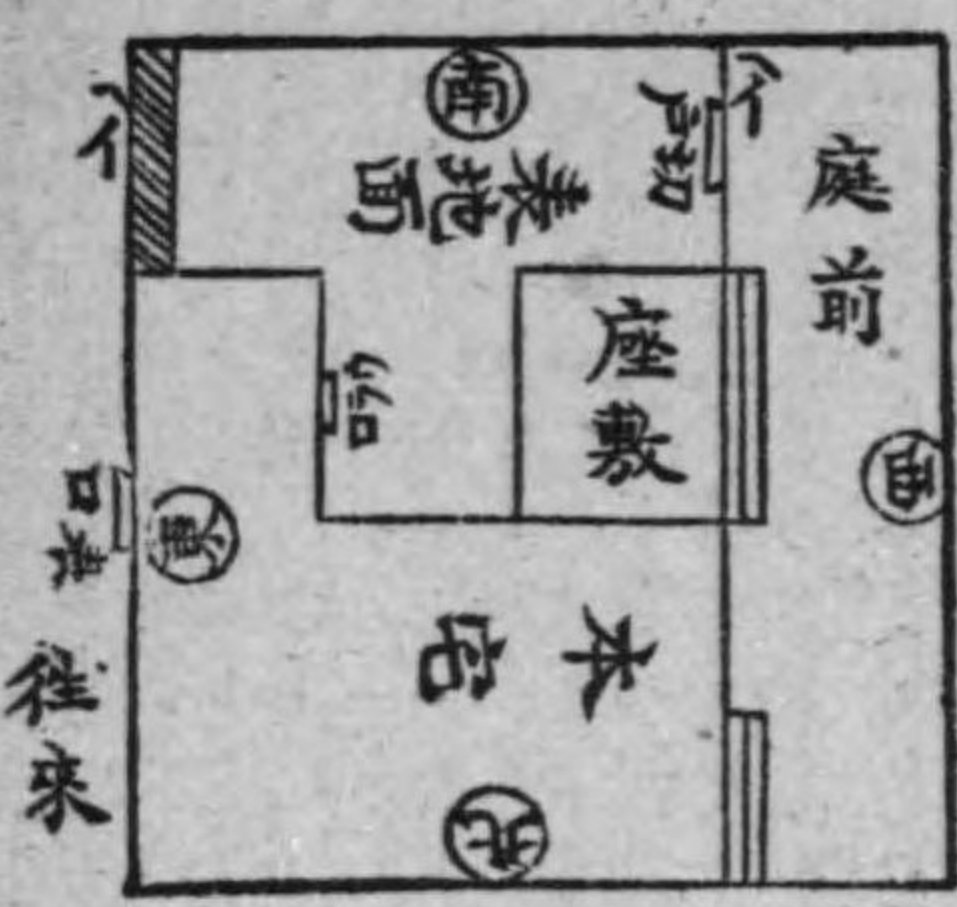


乾 皆 連  
何弥陀如来  
十五日

水性 土性	よし	火性 木性 妻子又下人に就きくろうあり
うし とら	たつ み	うし とら
うし とら	むま ひつじ	うし とら
いぬ む	さる ね	さる ね
此日萬よし	此日萬あし	此日萬あし

此卦の年は平人は物事隔たり滞ふることありてうれひ事絶えず、住所安からず、思ひよらぬ災ひあり、或は劔難又は盜難、水火の災ひ又は女難ありて心の中うろくと思ひわずらふべし。少しにても不義の心あれば、災害忽ち來たるべし、信心を第一として信をいだき、篤實にして人をあはれみ、恵み施さば、天の加護ありて災ひ反りて福となり何事も心のまゝになるなり。婚禮はいそぐべからず、産はやすし乾は健にしてすこやかなれども、非道の行ひあれば禍ひ速かに來たるべしよく慎み正道を心懸べし。

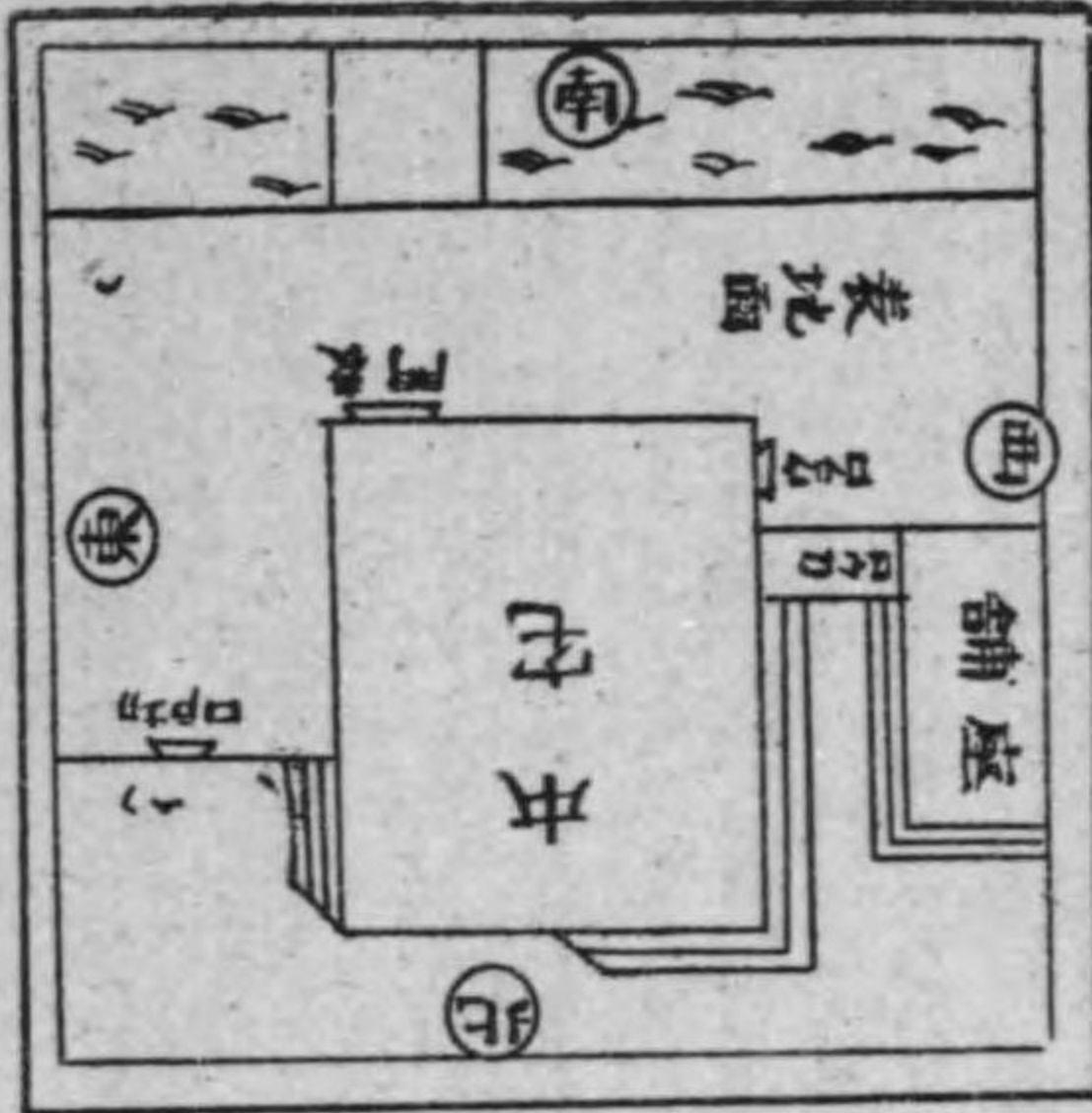
宅東の方に張り出でたる備へにて吉相の一箇なり、住人産業繁榮なることを主とし、且つ其の張り出でたる座敷にても臺所にても理同断なりと知るべし。  
○同東の方缺け込みたる備へは住人後年榮ゆべき兆あれども母子不和合の理を兼ねて吉凶交なり。  
○南の方張り出でたる備へは強く満ち備へざるをよしとす。住者富裕を主とし、大に張り満ちたるは榮昌の理すく、又常に論争絶えず或は又家人怪我過ちをなすことあり。  
○同南の方缺け入りたるは住人一旦繁榮すと



【木】三世相雜書

命  絶	害  禍	醫  天	徳  福
わ水金 よ木土 ろし性性 し性性	わ土火 よ金木 ろし性性 し性性	凶金土 吉水火 性性 性性	わ木水 よ火金 ろし性性 し性性
五月 火 離	四三月 風 巽	二月 雷 震	十二月 山 艮
此卦の月は時を得たる月なれども位負けして却つて悪し、金銀に就き損あり、若し奢る心あれば禍ひ忽ち來り絶命に及ぶべし、信心してまぬかるべし。	此卦の月は物事ふさがり止る意あり、萬事急に調ひがたし、時いまだ到らずと心得て心ながく待つべし、夫婦の争ひを慎むべし、懷妊は流産し安し、服薬すべし。	此卦の月は何事も短慮を慎むべし、夫婦中に争ひある月なり、男の勢ひにまかせ女をむごくすれば大に悔むことあり、金銭事に心配あり、よくよく慎むべし。	此卦の月は物の集まり増すの象あれば、四民とも心に誠あれば金銀財寶あつまり家繁昌すべし、されども邪の心を持たば禍も又聚まり増り身を亡し家を敗るべし。

雖も後年衰へて終に乏しきに至る。長久の理  
 少なし、然れども少し缺けたるは難なきか。  
 ○本宅の西に離れ座敷あるは、居宅西張  
 りの備へと大抵同じ理にて住主繁榮の兆あり  
 殊に下の圖の如く廊下を通じて建物連りある  
 構へは婦女のことに依つて幸ひを得る一相な  
 り、且つ本宅西に張り出づる備へは住人有福  
 を主どり果年人口を増して家道榮昌なす良相  
 なりと雖も、強く張り満つるときはいさゝか  
 不吉の意味を兼ねて婦人健かならざるの理と  
 なることあり。



○同西の方缺け込みたる備へは財あつまる  
 雖も聊か不祥の意味を兼ねて家内口舌絶えず  
 尚ほ強く缺け入りたるは不慮の災起りて終  
 に困窮に至る、且つ此所缺け満つる住居其形  
 に依つて靈佛を所持することを相し、尚ほ其  
 の佛號を察する傳説ありと雖も之れを略す。  
 ○本宅建物北の方張り出づる備へは家主無病  
 壯健を主どり財を興し富足り後年多福に至る  
 の吉相なり。  
 ○同北の方缺け込みたる備へは至つて凶なり  
 住主虚弱にして産業不利なることを主どり、  
 尚ほ十分に缺け入りたるは其の凶禍増にして  
 疾病繁く或は天壽をなし、婦人夫に代りて家  
 事をなす象にて後年衰微を主どりこと勿論な  
 り、且つ下に圖するが如きは北缺けの備へと  
 等しく其の理也しと雖も聊か心得の趣あり  
 丑の方の座敷は本宅より連なり出で、建物の  
 力剛し、是れ病災盛き理なり、女の方の離れ  
 座敷は坪と廊下と左右にありて本宅建物と繋  
 ぎをなすと雖も空地を隔て、其の力微なり、  
 これ福勢薄き理なり、茲に依つて前文の凶難  
 發ること彌々急なり、此備へに限らず總て此  
 心得を以て吉凶を分別すること肝要なり。

絶 絶  
 水 土 火 金  
 ろ し 性 性 性 性

生 生  
 火 木 吉 土 水  
 性 性 性 性 性

遊 遊  
 年 金 水 火 土 木  
 ろ し 性 性 性 性 性

遊 遊  
 魂 火 土 木 金  
 ろ し 性 性 性 性

六月 地 坤

八月 澤 兌

九月 天 乾

十一月 水 坎

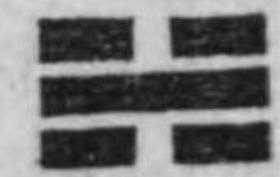
此卦の月は貴人はよろしく、平人は凶し、心中  
 なやみ多く女難等ありて苦勞するなり、物事噴  
 ひ違ひ或は身代につき心勞あり、失るものは老  
 人に附いて尋ねべし。

此卦の月は何事もよし、然れども性急にすれば  
 仕損じ多し、柔和にして少しこらゆれば金銀を  
 得、人の頭となるべし、證文などに付き心苦あ  
 り、旅立大にあし。

此卦の月は平人はあし、萬事進むは利なく退  
 く方よし、住所に附いて苦勞あるべし、盜難等  
 あり、物の患ひ人に憎まるゝことあり、慎むべ  
 し。

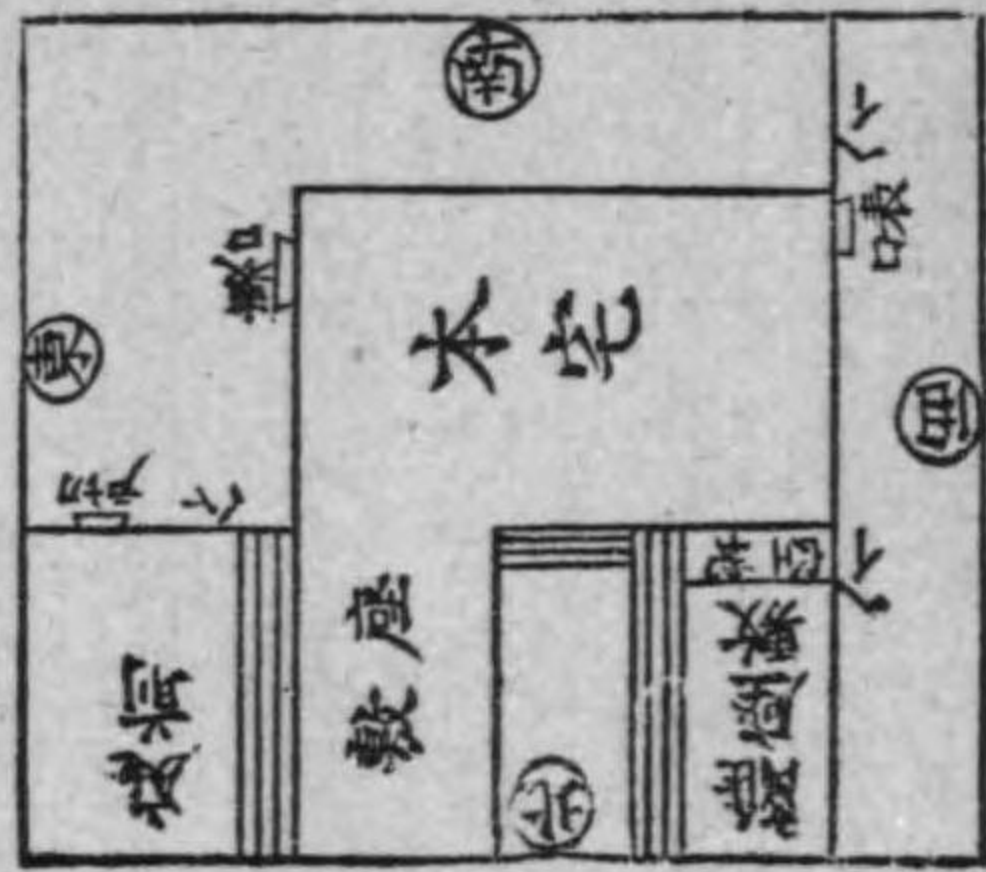
此卦の月は物事にせず時の到るを待つべし、  
 住所につき心苦あり、旅立せば盜難を防ぐべし  
 産は安けれども後なやみあり、縁だんは調ひが  
 たし。

連中坎

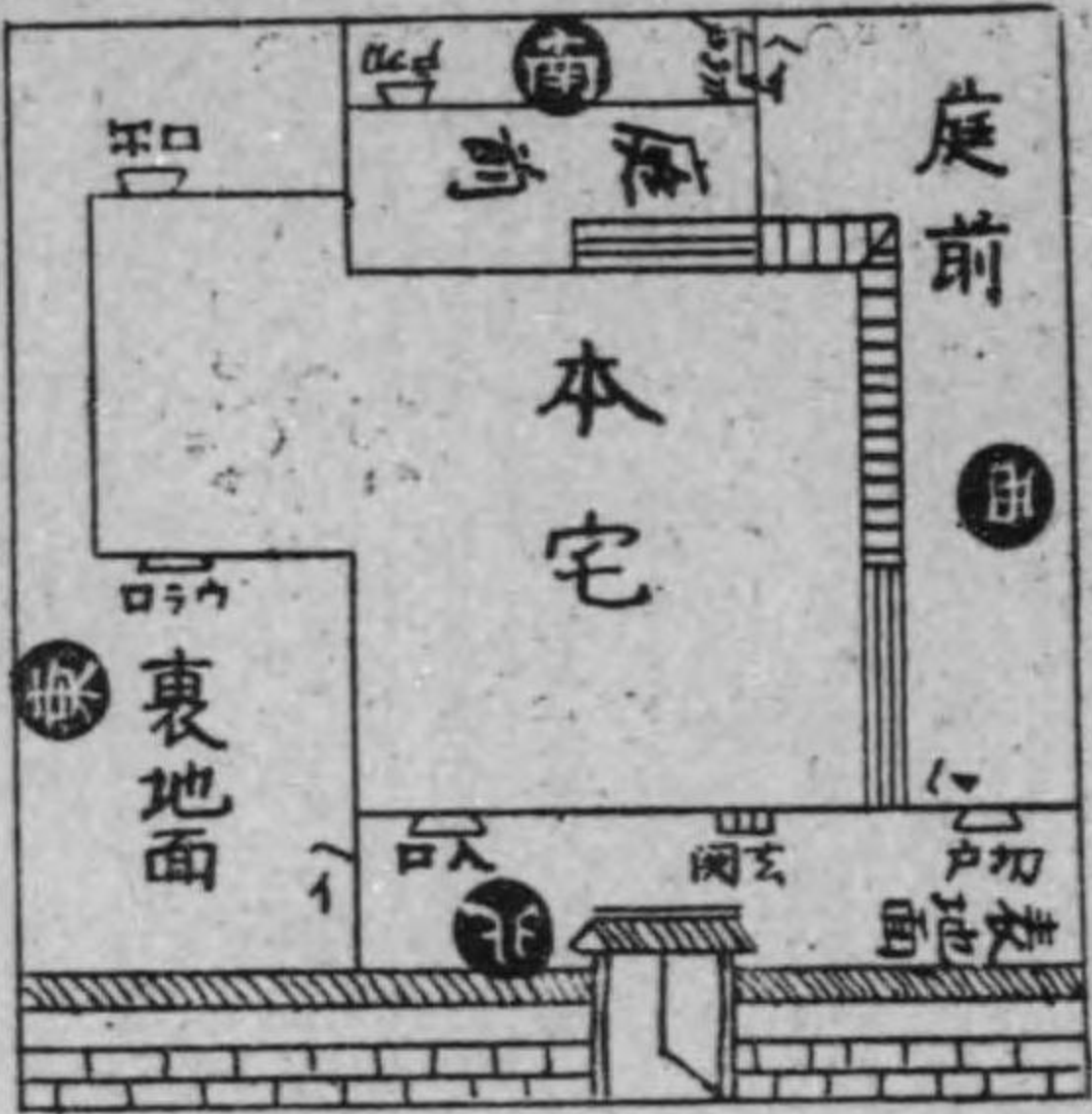


木性	金性	水性	土性	火性
う	た	ひ	た	ひ
み	つ	つ	つ	つ
ね	さ	さ	さ	さ
と	ら	ら	ら	ら
ら	ら	ら	ら	ら
ら	ら	ら	ら	ら
ら	ら	ら	ら	ら
ら	ら	ら	ら	ら
ら	ら	ら	ら	ら

此卦の年は萬事よろしからず、苦勞多かるべし、住所安からずして思  
 はざる災ひ來たるべし、坎は嶮なりといひて、嶮難の場なり。故に此  
 卦に當れば、する事なす事、皆なやみとなり、難儀困窮す。此難を急  
 に出でんとししてしなれぬ商賣、或は相場事にかゝれば困窮いやまし、  
 家も身も亡ぼすにいたるべし。嶮難の地を出でんとして、路もなき所  
 をかけ廻り、深谷へ落ち入るが如し、觀世音を信心し、時の至るを待  
 つときは、自ら右嶮難の地を脱るゝときに逢ふべし、心をいくらあせ  
 るほど艱難すると思ひ、ふかく慎むべし。



○本宅辰巳の方張り出でたるは職業繁榮を主とする良相にして眷族に安心を得、又遠方より幸を來たすの理あり、最も好すべき備へなり併し地形建物重々こゝに張り満ちたるは右に反して大凶相とす、必らず凶暴の子孫生じて災禍を招き頗る凶険之しきに至る、かつ住人の家業に依つて凶災あること判然異なり、總て此場の備へ口傳之れあり。



○同興の方缺け入りたる備へは住主忠誠薄くして君意を損じ威權を失ひ祿を減ずることを主とする、商家は常に散財して不吉の相なり、尤も其の備へ深く缺け入りたるは凶理強く、少し缺けたるは凶兆なり。○本宅坤の方張り出でたるは至つて凶なり住人不幸にして衰微に至り別して妻子に災禍あること繁し、且つ右の備へある住所いさゝか禍分を保つときは疾病災害やむとみなし。

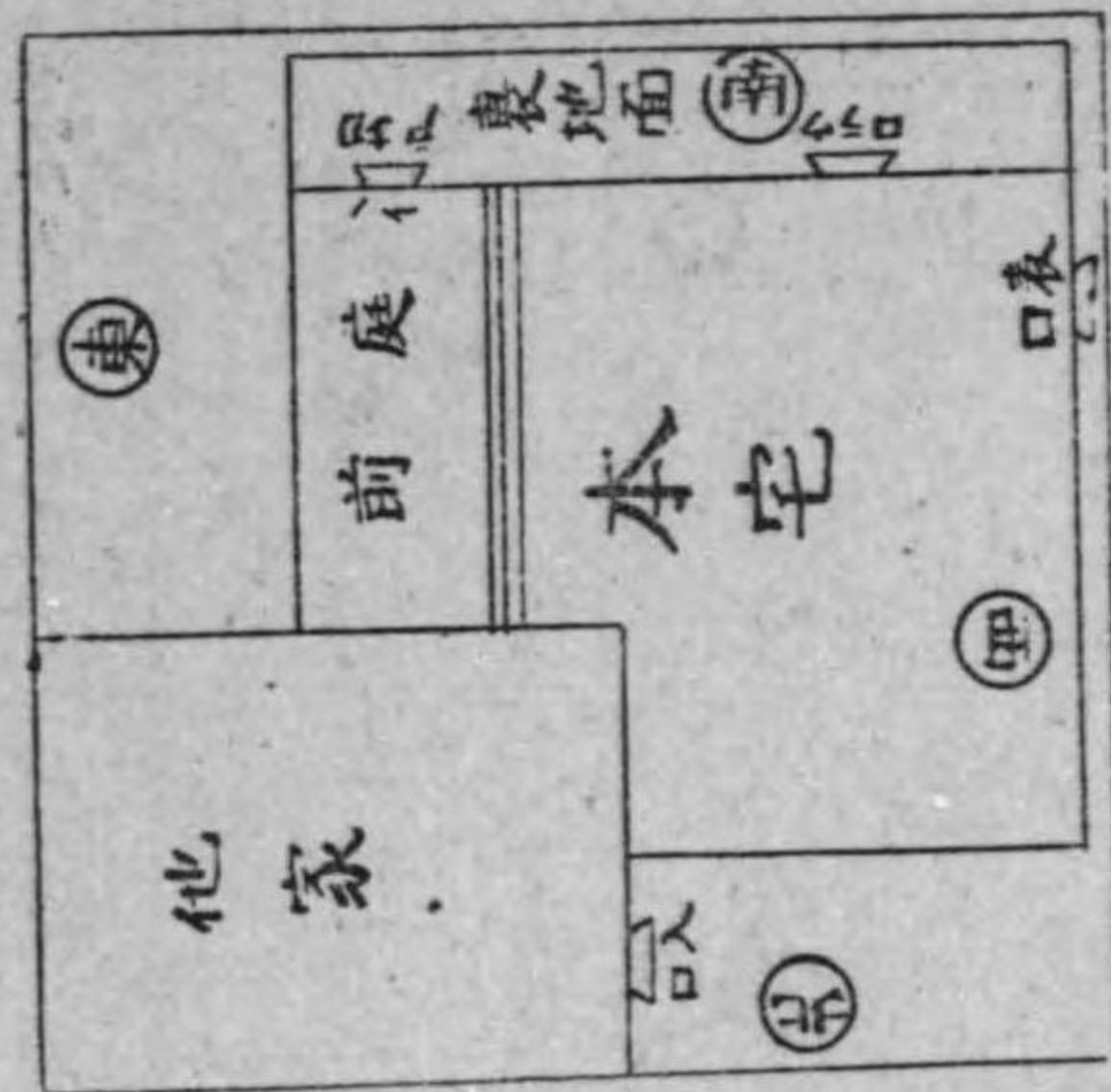
年	遊	魂	遊	害	禍	命	絶
わ火土 ろし性性	よ水金 し性性	凶金水 性性	よ木土 し性性	凶火木 性性	吉土水 性性	わ水木 ろし性性	よ火金 し性性
十一月	水 坎	九月	天 乾	八月	澤 兌	七月	地 坤
此卦の月は萬事繁昌すべし。但し女難を慎むべし、年寄りの縁談はよけれども其餘は悪し、水難あり心懸くべし。	此卦の月は上下別れくになりて背き争ふことありて諸事調ひがたし、争論公事沙汰を慎むべし、目上の人に従ひてよし、盜難あり又人より疑はるゝ意あり。	此卦の月は困窮難儀のこと多し、物事不自由に於て苦勞多き月なり、住所に離るゝ程の心配あるべし、よく信心すれば外より救ひを得て免るゝなり。	此卦の月は住所又は身のうへにも苦勞多く旅立ち悪しく人を害ふ卦なれば口論争ひ事を慎むべし、物事入り組み分りがたきことあるべし、時節を待たば自らわかるなり。				

體	絶	家	生	徳	福	醫	天
凶水金 性性	よ土木 し性性	し性金 わ性 ろ土	よ水火 し性性	凶金土 性性	吉水火 性性	し性木 わ性 ろ水	よ火金 し性性
五月	火 離	四月	風 巽	二月	雷 震	十二月	山 艮
此卦の月は風にて物をちらす心あれば邪心散りて吉事來るなり、凡そ此卦にあれば邪の心なく、忠孝を行へば立身出世うたがひなし、奢る心あれば貯への物散り失せるなり。	此卦の月は萬事深く慎まざれば大小あしく、心正直にして行ひ正しなれば望み事初は叶はずとも末にてはかなふべし。縁談、かけ合、商賣初めなど見合してよし。	此卦の月の心の儘に物事行へば大に損あり、誰事ひかへめにしてよし。信心深く心ながく行へば福を得るなり、旅立も人に従ひ行けばよし、女は帯下の病あり。	此卦の月は物の決斷明白にしがたく萬事次第にすれば終に望み事成就すべし、諸事了簡達ひのことあり安く、物事急にすべからず、懷妊は障りなし。				





或は又家人に病難少なきときは諸事に散財業  
 大に貧窮に及ぶものなり。  
 ○本宅良の方左に圖を設くる如き形に缺け  
 入りたる備へは家人無病にして百事全きを主  
 たる好相なり、然るに又物に圖するが如く  
 東北に隣る他家建物の坤を右缺け込みの所へ  
 受くるときは反つて凶相となり疾病災害ある  
 ものなり、總て此圖のみに限らず他の住宅の  
 一隅を我が住居の隣近き場所より其他面建物  
 とて缺け込み、これを受くること各々好ま



ざるところなり、或は居宅良の方缺けたる  
 所に凶相あり、凡そこの開け入りたる備へ  
 は意味深長の辨説多し。

宅外の備各吉凶の辨

門戸開き所の辨  
 ○左に出せる圖は總て宅外に備ふる品物おの  
 の吉凶を斷んがために設くるなり、就中門  
 戸は宅舎の外口にして所謂五祀三祀の一箇な  
 り、構へやうに大に利害あり、圖の如く乾の  
 方門戸を開く備へあるは吉凶兩説之れある  
 なり。  
 先づ風水の理を以ていふときは此陽秋冬の間  
 にあたつて萬物成就の氣ある方なり、依つて  
 こゝに門戸を開くは彌々其氣を受くる理にし  
 て専ら有福を主とするなり、備また五行順逆  
 の理を基として考ふれば所謂火星乾宮に建す  
 の備へにして火尅金の象を含み門戸不祥の理  
 となるといへり、然れども前に述ぶる風水の  
 吉を受くること其眞詳の理強ければ吉相の  
 部にとるべきなり。  
 右門戸の開を越へ南へ寄りて構へること西の  
 正當を門の眞中とすること勿れ、餘は吉事な

此卦の月は初めはわろし後よし、萬ひかへめに  
 すべし、己が一分に事をはからへば悪く、人に  
 したかひへり下れば福を得るなり、謙くだると  
 諂ふとは大に違ふなり。

此卦の月は何事も速かに調ふ卦にて、思はざる  
 吉事あるべし婚禮養子都てよし、此卦は物に  
 感じあへば心善にもてば吉事來る、惡意あれば  
 絶命に及ぶなり。

此卦の月は住所に就いて苦勞おほく思案定まら  
 ず、諸事間違ひの出來る卦なり、又人にそねま  
 る、意ありて望み事に邪魔する者ありて急には  
 調ひがたし。

此卦の月はいろく困窮する事ありて住所につ  
 き苦勞あり、物事窮屈にて伸びざる意あれども、  
 時のいたらぬと思ひ心長くすれば福來たるな  
 り。

德  福	醫  天	體  絶	家  生
あ土火 しし性性	凶土火 性性	わ木火 るし性性	あ水木 しし性性
十一月	九月	八月	七月
水	天	澤	地

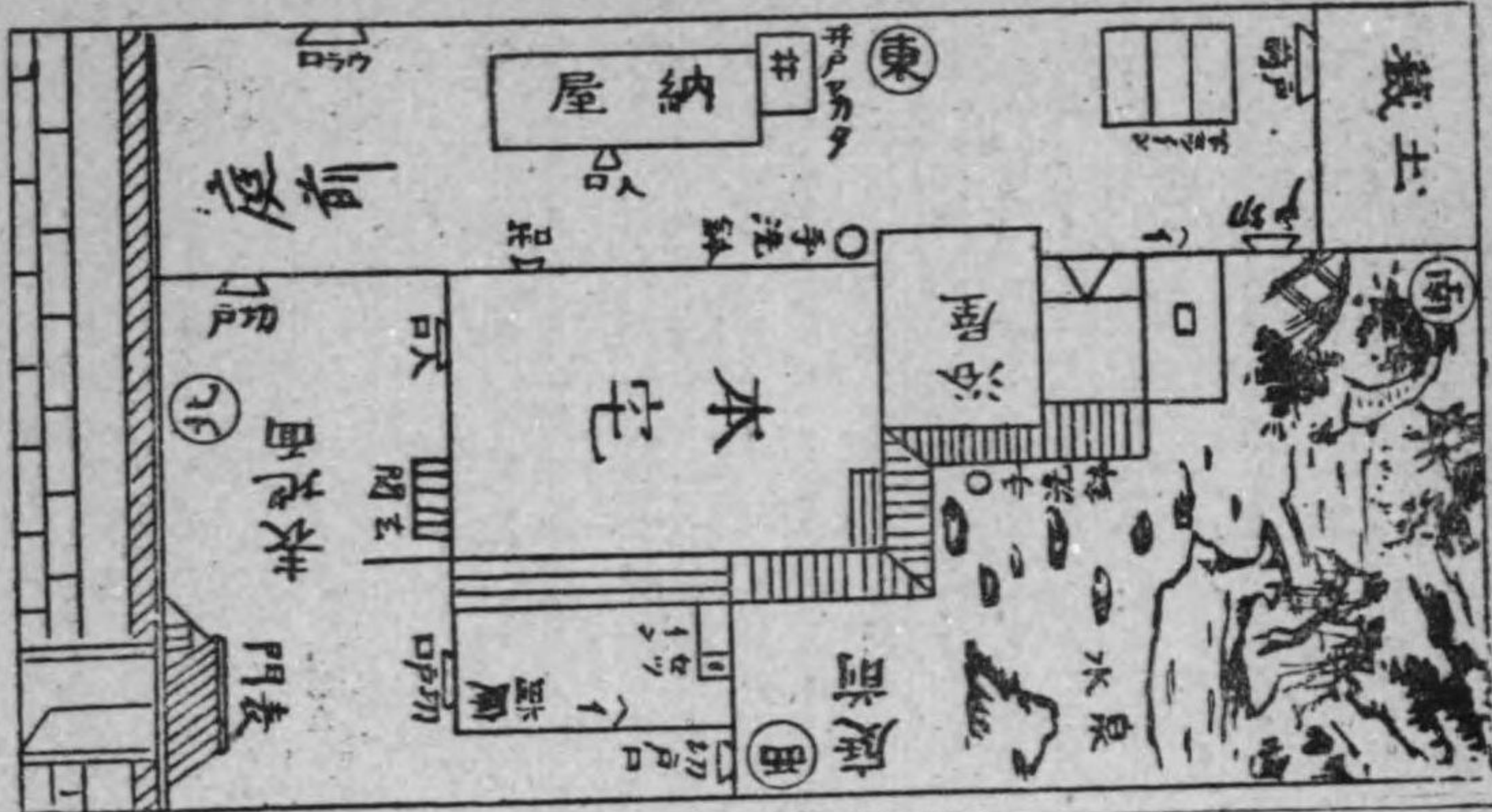
震下連

文殊菩薩

廿五日

火性	水性	木性	金性	土性
う	む	た	い	ひ
ね	ぬ	ひ	さ	さ
此日萬よし	此日萬よし	此日萬よし	此日萬よし	此日萬よし

此卦の年は身上なほり住所定まり萬の望み事叶ひ威勢ありて名高く諸  
 人に敬はれ仕合せよき年なり、しかし震は雷にてやゝもすれば怒り  
 て物をやぶるの意あり。喧嘩口論公事沙汰等を慎むべし、奉公人を遣  
 ふにも、よくあはれみをかけて使はざれば下より事を起すべし。勢ひ  
 ありて騒し象なれば、我威にまかして下をあはれさせざれば君子親子  
 兄弟夫婦の中悪く、遂に滅亡におよぶべく、されば短氣をつししみ諸  
 事柔和にして主親によくつかへ下人をあはれみなば家富み繁昌し、其  
 名四方に輝き大いに發達すべし。



り、また東によつて開くこと子の正當は半吉なり、餘は大概無事なり。  
 ○坤の方に門戸あること疾病の氣をひき受くる備へにして別して婦女に惱みあり、此門戸北に寄ること吉、東へよりたるは無事なり。  
 ○巽の方に門戸あること繁榮を主とる、同じく西へ寄りたるも吉、北に寄るをもよしとす併し東の真中に構へたるは榮昌の氣あれども又女難の理を兼ねるなり。  
 ○艮の方に門戸あるは尅害の氣を受くること甚しく家督相續全からざるの難相あり、同じく南に寄りたるはよし、西へ寄りたるは深き辨へありて無事ならざる構へなり。  
 ○右に知らず所表門のみを論ずると雖も裏門とでも吉凶かはることなし、且つ又本宅の出入口、或は塀等なき家は表裏門口各其理異なることなし、故に推して察すべきなり。

土藏備の辨

前に出せる圖は異隅の地に土藏あり、此れ至つて吉、往人産業榮ふる吉相なり、尙ほ此所の地張り出て備へたるも彌よ吉、然るに餘り強く張り出て土藏を備へたるは住主一旦

徳  福	醫  天	命  絶	害  禍
凶土火 よ木金 性性性 し性性	わ水火 よ火水 ろし性性 し性性	わ木火 よ土水 ろし性性 し性性	わ水木 よ火金 ろし性性 し性性
十一月 水  坎	十九月 天  乾	八月 澤  兌	七六月 地  坤
此卦の月は住所につきなやみあり、其外危ふく安からざることあまたあれども慎みて物を大切にすべし。運ひらけ後よし、水難あり、旅立遠行はあし。	此卦の月は大方は悪しけれども信ありて行ひ正しき人は萬事よろし、己が欲に迷ふべからず、病人は危ふけれども後よし、神佛の事につき心を以て世話すべし。	此卦の月は人に敬まはるゝなり、又物の變る意あれば住所變るか故郷を離るゝことあるべし、信心すれば大によし、我慢なれば忽ち絶命に及ぶなり。	此卦の月は今まで悪しきことも吉事にひかふ卦なり、然れども悪を更め善に移らざれば、何時までも災ひ脱れがたし、婚禮養子よし、住所に就き苦勞あれども後吉し。

家  生	體  絶	年  遊	魂  遊
わ水金 よ木土 ろし性性 し性性	あ火土 よ木金 ろし性性 し性性	わ土金 よ水火 ろし性性 し性性	わ水木 よ火金 ろし性性 し性性
五月 火  離	四三月 風  巽	二月 雷  震	正月 山  艮
此卦の月は物事人に隔てらるゝことあり、しかれども後はよし、又口論公事沙汰多く利なし、短氣を慎み柔和なれば萬よし、婚禮よし。	此卦の月は上下とも騒ぎ動き安堵しがたき月なり、故に住所定まらず苦勞ある月なり、思ひよらぬ損失あり、深く慎み信心すれば絶體を通るべし。	此卦の月は望み事叶ひ勢あるにまかせ心の儘に行へば上下不和となり災ひ來たるべし、藝ある人は此月より名を揚ぐべし、但し物におどろくことあるべし。	此卦の月は物事成就すれども時節未だ早し、性急にするは悪し、又公事沙汰女難等を慎むべし、待人は來らず失せ物は出でがたし、腫物を加ふことあり心得べし。

繁昌と雖も後年困窮に及ぶなり、此等すべ  
て辰巳辰の土蔵備へ本宅の構へと不相應を  
なし、程を失ふによつて備はれば欠くるの理  
となる禍ひあり。  
○眞南の地に土蔵あるは吉凶交へある備へな  
り、凡そ間敷勝れて長く大ならざるは無事と  
し、或は間敷南北に長く東西短き構へはよ  
しとす。若し棟高く間敷至つて廣きは不祥の  
備へなり、又東西に間敷長く已より未の地連  
なるはいよ／＼不吉なり。  
○坤の剛に土蔵あるは大に凶なり、家内疫ひ  
多く子孫遺弱を主とす、或は此剛の地面に土  
蔵を建て閉ぢの住所は災病發すること頻りに  
して殊に妻女に無事を得ること難し。  
○眞西の地に土蔵あるは至つて宜しき備へと  
す、元來西の方は萬物の氣形悉く満足の氣  
ある場にして百物を儲くるの庫藏あることを  
好ましき理に當り殊に方位と相生を得るの良  
き備へなり、併し本宅と程を失うて備はる備  
へは反つて家徳を減少すべきの理を生じ、不  
祥を兼ねる備へとなるなり。  
○乾剛の土蔵は財祿まつたきの吉相なり、凡  
そ萬物造化の氣、坎に兆し兌に至つて形を成

就す、故に此地に土蔵あるは住者百事業に  
して富貴なることを主どり、相生を布く良き  
吉相なり、然るに重々構ゆるときは反つ  
て不吉の備へとなり大に災禍を招くことあり  
○眞北の地に土蔵あるは大無事の備へとす  
凡そ北の地理に於いても山嶽あるを好しとし  
宅地の理も北に原丘あるを可なりとす、故に  
此所に藏あること所謂玄武の備へに意味近う  
して住人無慮安穩を主とす、且つ此方の土蔵  
その構への廣狭に依つて秘訣の趣き繁しと雖  
も述ぶるに違あらざれば略す。  
○艮の剛に土蔵あるは疾病災害絶えざるの難  
相なり、住地中艮の方は萬象の初めを發し  
また終りを受けとむる地氣なるを以て最要  
たる領場なり、故に人居の吉凶禍福専ら艮  
宮の地の備へは非單の謂ひ多し、然るに此場  
に土蔵あるは土氣の尪害を蒙むること甚だし  
き凶備にして住人横災多く無慮を得ること難  
し、凡そ此方を布く備へ多しと雖も就中土蔵  
の凶相その尪害重しとす。  
○眞東の地に土蔵あるは家業繁昌する良相な  
り、凡そ東方は陽氣發生の地勢なるが故に土  
蔵を建て備ふること大に榮盛の氣を保つ理な

巽下 断

普賢菩薩  
廿四日

水性	火性
土性	土性
金性	木性
木性	火性

此日萬よし  
此日萬わるし  
此方萬よし  
此方萬凶し

此卦の年は篤實律義なる人なれば、たとへ少々愚なる人と雖も仕合よ  
かるべし、若し我慢にて奢る心あるか輕卒にて口やかましき人なれば、  
才智ありとも禍ひ忽ち來たるべし、萬事一己の了簡を立す、よき人に  
從ひて萬事をなしてよし。此卦の年外より金銀或は巧み事等にて利を  
得ることを云ひ來る者あるべし。龜忽に取合ふべからず、多くはかた  
り事なるべし。巽は風にて吹き動かす意あれば、住所をはなる、か又  
は旅立のことあるべし、土農工商とも持まへの業を守り、信心して禍  
ひ脱るべし。とかくに諸事を慎しみ人にしたがひ事ははからは大によ  
かるべし。

絶命	絶命	遊年	福徳
性水火	性水火	性木金	性木土
性性	性性	性性	性性
二月	十二月	三月	五月
震	艮	巽	離
此卦の月は萬事に就き難儀迷惑すること多し、 望み事叶はず、親子の中に口説あり、病難争ひ 事を慎むべし。何事も成がたき月なれば萬慎 みてよし。	此卦の月は物の散失せることあり又は聚まるこ ともありて定めがたし。金銀財寶も同事なれば 儉約を本とすべし、禍福心より迎ふる意あれば 諸事慎むべし。	此卦の月は萬事思ふことを遂ぐる月なり、然れ ども横合より障りありて事を仕損ずること多し 住所に苦勞多し、望み事半は成就す、婚禮はよ ろし。	此卦の月は萬事更めてよし、不孝を改め孝を盡 し、不忠をあらため忠を勵めば、萬福來るべし。 住所は少し障りあれども困しからず。

然るに問敷ひろく構へ、或は數ヶ所連り備ふることをのく辨へあり、安りに建て連ねて東方の地を閉ぐ時は住人望みを妨げ時を得るの理を失ふなり、猶ほその備ふる形によつて種々の判断を兼ねることあれども、いちいち記すに盡きざれば之れを略す。

納屋物置構所の辨

○同圖面の納屋東の方にあり、此構へは至つて好しとす、或は南西北ともに四仲の方は何れも忌み厭ふ所なし、且つ又隅の地に寄つて構へたる土藏は吉凶の解にならざらへて知るべし、尤も土藏と納屋と考へかた差別ありと雖も大較理は似たるものなり。

井水有所の辨

○同圖面辰の方に井水あり、是れ至つて吉相なり、住主榮昌を主とす、又巽の隅にあるはいよく好し、巳の方に寄りたるも相次いでよし。  
○眞南の方に井水あるは大凶なり。  
○未の方に井水あるは吉凶兩斷の備へとす  
○午未の間に井水あるは無事なり。

○坤の方に井水あるは婦人に災多くして凶なり、同申の方によりたるは聊か有福の理ありと雖も是れまた疾病あるなり。  
○眞西の方に井水あるは福分全きの良相なり、同戌の方にあるは家人よく和合して宅主安心を得る相なり。  
○乾の隅に井水あるは貴人の恵みによりて食祿を倍す吉相なり。  
○北の方に井水あるは無事の備へなり、併し正子の方にあるは不吉の理なきにあらず、同丑の方にあるも吉凶交りある備へなり。  
○艮の隅にあるは尅害するどき難相なり、同寅の領より東の方によりたるは好しとす。  
○眞東にあるは家道隆昌を主とす、住主心望を達するの意味あり、凡そ井は人の居の根元一本種と唱する場にして所謂天一水を生ずるの位なり、勿論忽せにすること勿れ、將また宅内場井の構へ所も前文の理と同斷なれば、なぞらへて察すべきなり。

浴屋構所の辨

○同圖面巽の隅に浴室あり是れ好き構へなり、家主好く嗜愛あて上達の名を發すべき意味

家	生	害	禍	魂	遊	醫	天
わ土火 ろし性性	よ木金 し性性	わ金水 ろし性性	よ土木 し性性	わ土火 ろし性性	よ土木 し性性	あ水土 し性性	よ火金 し性性
十一月	水 坎	九月	天 乾	八月	澤 兌	七月	地 坤
此卦の月は己が仕来りより外の事を新規にかゝるべからず大に損あり、又他國へ行くことよろしからず、但し歸るはよし、病重けれどもよし。		此卦の月は争ひ事相談事は人にたのむ方よし、物の集まりて散る象あれば、人もその如く分別定まらざるなり、妻をもとめなばよく吟味すべし。		此卦の月は往くことも歸ることもならず、中途に迷ふが如し、萬事慎みて信心すれば後よかるべし、女の病氣は月の滞りなり、待人は來るがたし。		此卦の月はあひく立身出世する運なり。住所につきて苦勞あるべし。心の内安からざれども漸々に吉事あり望み事叶へども氣永くしてよし婚禮よし。	

秘傳十一占の考

此十一占の考へやるは何事を占ふにも、其占を頼む人の當卦を定むべし。當卦のことは前の年八卦の所にて定むるなり。上段、中段、下段とも其年の上に記せしが當卦なり、それくの占ひについて立つる數あり、左の如し。

○見物三	○聞事八	○得物二	○待人
○他言二	○失物おち七	○願事望四	○出行五
○疾病しるす	○夢		

右いづれも占ひに用ふる數なり、是れを覺えおくべし、精しくは奥に註解あり、又十二支の數は左の通り。

子 六	丑 七	寅 七	卯 四	辰 五	巳 五
午 三	未 八	申 八	酉 二	戌 一	亥 一

是は年の數、月の數、日の數、時の數、方角の數なり、又は卦の數は

金	一 乾
金	二 兌
火	三 離
木	四 震
木	五 巽
水	六 坎
土	七 艮
土	八 坤

あり、同辰の方に寄りたるも、巳の方に寄りたるも吉なり。

○真南にあるは凶なり。眼病を患ふる人絶えず、坤の隅にあるもあし、同未の方に寄りたるは無事、申の方へ寄りたるはよし。

○真西の方にあるは吉凶兩断なり、左右へ置き構へたるはよし。

○乾の隅にあるは不吉、同戌の方に寄りたるは無事、亥の方に寄りたるは吉なり。

○真北にあるは吉凶兩断なり、左右に寄りたるは可なり。

○艮の隅にあるは至つて凶、同丑に寄りたるは障りなく、寅に寄りたるは吉なり。

○真東にあるは大抵無事なりと雖も聊か不祥を兼ねることあり。

雪隠の構へ所の辨

○同圖而本宅の辰巳の隅に上下の雪隠あることは好まざる構へなり、凡そこの隅は東の方春の陽長じ、南方の夏の陽行はれんとする際にあつて専ら繁榮の氣を含み、又清潔ならんことを欲す、然るに廁を構ふることに米糞糞へ多きことを主とする不吉の相なり、これに依つ

て右の圖中、辰巳に吉相の土藏あれども、此凶相の廁あるゆゑに藏備への有徳いさゝか薄きなり、又圖中、申酉の間に廁あり、是れ無事の備へなり。

○坤の方の廁は下部に冷寒を含む病發して凶相なり。

○乾の方にあるは偏分に障りあるなり。

○艮の方にあるは大凶なり。

○東西南北の四仲は何れにても不祥の構へとす、四仲四隅の正當を除きてその間にあるは無事なり、且つその向け方には強ひて好惡の選みなきなり。

池泉水有所の辨

○同圖坤の方に泉水ある是れ不吉の構へなり尤も疾病の兆ありてまた不孝の女子出て來べき意味あるなり、借てまた正南艮の方にあるは大に悪しく、正北にあるは半吉半凶、正東の方にあるは吉、正西にあるはよし、乾の方、巽の方にあるは大に吉。

壘間取の辨

○間取吉凶の考へはその連なる所をして相生

見物 是れを占ふには先づ見物の定數三を立て、又その人の當卦乾と定めおき、扱て見たる時を問ふに、酉のとき見たりと言はゞ、前に記せし十二支の酉の定數二を加へ、初めの三と合して五となる、五は巽の卦なり、是れを占ふ人の當卦の乾の所にて引合して見れば、巽は禍害とあり、即ち奥の禍害の所にて見物の部を見て判断すべし、又見たる時申のときなりといはゞ申の數は八つなり、見物の數三つ合して十一となる、いつにても八つより上の數は八はらひにすべし、十一の内八を拂はゞ残り三つとなる、三は八卦の中離の卦なり、占ふ人の當卦乾皆連の年八卦にて離は絶命にあたり、奥の絶命のところ、見物の部を見て判断するなり、餘は是れに准じて知るべし。

○又善惡を如何にと問はゞ残る數五つなれば巽三つにて離なり、此卦の性と占ふ人の性を合して相生するは凶なりと判断するなり。例へば残る數三つなれば巽は木性の卦なり、占ふ人の性火性ならば是れ木性火と相生して吉なり。又占ふ人土性なれば是れ木尅土にて凶と知るべし。相生尅の事は前に記せり、餘は是れにて知るべし。

聞事 是も前の例と同じく、當卦は其人の年は卦の所にて定めおき聞くことの數八つとその時の數を加へ八つ拂ひにして其残り數を三と

見れば離の卦なり、年八卦の所にて見れば何の卦と見るときは其部にて聞くことの所を見て判断するなり、吉凶は見物の所と同じく相生尅を判するなり。

得物 是も前に同じく占ふ人の當卦を立て、得物の定數二を立て得物の用を云ひかけたる時の數四なれば四、八つなれば八を加へる。但し時の數知れざる時は、日の支の數を入るべし。(子の日六つ、丑の日は七つ、巳下は前にしるせし如し) 數を合して八つより上は八つ拂ひにし、残る數の卦を年八卦の内にて引合せ占ふなり、調ふか調はざるは相生尅にて見るなり、相生は得物、尅は得物なし、又嫁娶、聲取、金銀を人より借るも皆得物の所にて考ふべし。

待人 是れも前に同じく占ふ人當卦を定め、待人を占ふ定數を立て占ふ日の支の數を加へ、八より多きは八拂ひにして残る數の卦を當卦の年八卦の中にて引合はし、奥の待人の所にて判断して考ふべし、日の支の代りに方角を入るゝこともよし、譬へば卯の方(東なり)より來る人を見んと思はゞ、待人の數一の上へ四を加へ五となる、五は巽なり、當卦の内巽の所を見て奥にて占ふなり、又歸へるは得物に同じければ、得物の所にて見るべし。又待人は遠きは方角の數を入れ、近き

なるを好しとし、相尅なるを惡とす。譬へば九疊八疊の如きは、土生金の吉相なり。九疊五疊の如きは、金尅木の凶相なり。又一間毎に吉凶を備ふるあり、六疊半は吉にして五疊半は凶なるが如し、又相生して不祥を兼ね、相尅して用ふる場もあり、譬へば八疊土生金の相生なれども、東居間に備ふれば母たるは女子に對して愛に溺るゝ意あり、又宅の西南隅すこし張り出づる儀へあるは八疊四疊の相尅をよしとす、此の如きこと猶ほ深き辨ありと雖も先づ大抵は相生相尅に基きて専ら備へを布くとも更に謬まりあるべからず。

一間限りに吉凶ある分

○一疊半、二疊半、各無事。  
○三疊半、四疊半、五疊半、各凶。  
○六疊半、七疊半、八疊半、各吉。  
○九疊半、十疊半、各無事。  
右は相生相尅の理に基き一應の吉凶を斷ずるなり。就中七疊半深き意味あり、心得なくしては用ひ難し。

疊數五行執法

○一疊は金、二疊は金、三疊は火、四疊は木、五疊は木、六疊は水、七疊は土、八疊は土、九疊は金、十疊は土。  
右五行執法の例に依つて其連なる所の吉凶を考ふべし。尙ほ十疊より上は十を除きて殘る數を以て右の數に準ふべきなり。

龜の辨

龜は水火木金土の五行集會して飲食を炊ぎ、五味を調熟して生命を養くる靈所凡そ人居の根本なり、尤も大に吉凶の辨あり、その向ふ方の好惡を斷はる則は東向、辰巳向を吉とし、南向もまた可なり、西向、北向は口舌争ひ事絶えず、戌亥向は失墜多し、丑寅向は大に惡しく、未申向も嫌ふなり、或は又數により吉凶あり、四つ五つ八つは吉、三つも又可なり、二つ九つは破財の氣あり、六つは婦人血分の病を兆す、七つは吉凶兩斷なり。

は日の數を入るゝなり。又他國に居る人の安否を知るは其人の當卦を定め、待人の數一の上へ占ふ日の數を加へ(エトノかずなり)、其卦象、生家、福德、遊年は吉なり、天醫、遊魂、禍害、絶體、絶命は凶なりと定め、相生相尅にて考ふべし、(相生相尅のことはまへにしるす)○胎内の子の産るるも待人と同じ理なり、是れは母の當卦にて見るべし生れ日を指すには母の當卦の内にて生家を生れ日とするなり。例へば母の當卦坎中連なれば其の處の生家は巽なり、巽は五つなり、故に五日、十五日、二十五日と指す、又母坤皆斷の卦なれば生家は艮なり、艮は七つなり、七日、十七日、二十七日の内なりと知るなり。  
恠事 是も前々と同じく八拂ひにして殘る數の卦を年八卦の内に見合はし、與にて判斷するなり。恠事とは家鳴、釜の鳴、鶏の宵啼、そのほか常になきことは皆あやしきことなり。  
失物 是れも前と同じく失物物の定數七つに時の數を加へ八はらひして占ふなり、失たる時知れざれば日の支の數を入れて考ふべし。他國へ便する使ひ又は手紙などの届くかとゞかざるかを占ふにも失せ物と同じく七つと立て使ひ又は手紙を出だせし日數子の日なれば六つ、丑の日なれば七つを入れ八はらひして考ふべし。

願事

望み事もおなじ、定數四つを立て願望する方角の支の數を加へ占ふべし、方角なきことにて占ふは日の數を入れて考ふるなり。

出行

是れも前と同じく出行の定數を方角の數を加へ八はらひして考ふべし。

他言

是れも同じく定數二を立て時の數を加へて占ふべし、他言とは人より我を譽めをしりするか、又は人より物を云ひかけられたるとの吉凶を占ふなり。

病の治不治

是れは前の例と違ふなり。

子月	坎	水	丑月	艮	土	寅月	艮	土	卯月	震	木
辰日	巽	木	巳日	巽	木	午日	離	火	未日	坤	土
申日	坤	土	酉日	兌	金	戌日	乾	金	亥日	乾	金

右の如く覺え、病人の當卦の所にて病附きたる日の八卦の性と病人の當卦の性と相尅にて治不治を見るなり、若し日の知れぬときは月の八卦にて考へべし。たとへば病人の當卦艮上連なれば艮は土なり、病着たる月の日が辰なれば、辰は巽にて木なり、是れ木尅土にてわろし。又艮上連當卦の内にて巽は絶命なり、即ち奥の絶命の所にて占ふなりされども人の生死は大事なれば妄りに判斷すべからず、此の上に十二

窓開所の辨

宅中窓のある所は東の方を吉相とするなり、  
 所謂青龍眼を開くの備へなり。又辰巳の方き  
 湯氣を受くるまへにて吉なり、南の方にある  
 もよし、坤、西、乾、北、艮の五方は各その  
 正當を思むべきなり、神棚は東向か南向をよ  
 しとするなり、佛壇も同断なり。  
 右家相の要とする所を擧げ其の煩はしきを省  
 く、此書に依つて備へをなせば誤りあるべか  
 らず、誠方位を思むこと故あり、其の徳な  
 く其の道を知らずして妄りに破すべからず、  
 西陽雜俎に曰く萊州即墨に百姓王豊といふ者  
 兄弟三人あり豊、方位を思むことを信用せず  
 會て大歳のうくに於いて坑を掘りしに一つの  
 肉塊を見る、大き斗の如し、蠕々として動く  
 依つて其の肉を填む、填むに随つて出づる故  
 に豊、之れを捨て、其の儘に置き一宿を経て  
 其の塊長じて庭にふさがる、豊、ますく怖  
 れて家に逃げ入るに兄弟奴婢に至るまで暴に  
 病みて死す、只一女のみ存へたりとあり、人  
 恐れ慎しむべきことなり。

了

運九曜の星などを繰りよく考へ判断すべし。  
 夢 是れも前々の例と同じ、當卦を定めてゆめを占ふ、定數二つを  
 立て枕する方角の數を加へて占ふなり、たとへば東枕なれば卯の六  
 を加へ南まぐらなれば午にて三を加へ、其餘はこれに准ず、又枕する  
 方を用ひず、夢みて目の覺めたるときの數を用ひてよし、猶ほ夢の占  
 かたは上の頭書に委しければ是れを見るべし。

性相と骨相運命學大要



性相と骨相運命學

大要目次

一 總論	一	一二 眉を論ず	八	二七 齒を論ず	一九
二 觀相の着眼	三	一三 耳を論ず	〇	二八 乳	〇
三 觀相着眼の面相	三	一四 鼻を論ず	二	二九 胸と腹	〇
四 面相	四	一五 唇を論ず	三	三〇 首	〇
五 五行相	四	一六 頤	三	三一 頸骨	〇
六 五行相の解説	四	一七 頤骨	三	三二 背骨	〇
五臟の相	四	一八 印堂	四	三三 足	二
五長短	五	一九 淚堂	四	三四 體	二
大小	五	二〇 法令	四	三五 骨	二
六 大	五	二一 臉	五	三六 皮膚	二
六 賤	五	二二 頂	五	三七 毛髮	二
頭を論ず	五	二三 眼を論ず	五	三八 肩	二
面相を論ず	五	二四 人中を論ず	七	三九 爪	二
面相總説	六	二五 口中	七	四〇 言語	三
三停總説	六	二六 舌を論ず	八	四一 音聲を論ず	三
天停	六			四二 音聲五行	三
中停	七			四三 着意看相	三
下停	七			四四 手骨を論ず	三
	八			四五 手相八宮	三
	八			四六 手	三
	八			四七 指の案排	六

【一】性相と骨相運命學大要目次

【八】性相と骨相運命學大要目次

四八	掌中三紋	三
四九	三紋合説	六
五〇	三紋混合	九
五一	掌中理紋	九
五二	黒子を論ず	三
五三	黒子	三
五四	指先渦紋	三
五五	竹齋山人秘傳數言	三
五六	面相	三
五七	音聲の相	三
五八	死相	三
五九	貧富善惡總括	三
六〇	士農工商逸民總括	三
六一	人相總論	三
六二	男子の部	三
六三	壽貴威富	三
六四	貧窮の相	三
六五	下賤の相	三
六六	名を起す人の相	三
六七	聰慧の相	三
六八	愚痴の相	三
六九	艱難の相	三
七〇	破財の相	三

女子の部

一	淫亂の相	三
二	根性惡相	三
三	背力相	三
四	出字相	三
五	盜賊相	三
六	天死相	三
七	長壽相	三
八	貧窮の相	三
九	下賤の相	三
一〇	聰慧の相	三
一一	子の有る相	三
一二	子なき相	三
一三	胎兒の男女を知る	三
一四	根性惡相	三
一五	艱難に逢ふ相	三
一六	嫉妬深き相	三
一七	淫亂の相	三
一八	骨相の部	三
一九	一 骨相と性相と人相の差異	三
二〇	二 骨相とは如何なるものか	三

性相と骨相運命學大要

粟根竹齋述

(一) 總論

相を論ずる根は器物即ち物質的組織にして、質は氣、即ち質氣であるが此種類大凡六種に區別することを得る。即ち頭頂骨、眉骨、鼻梁骨、人中骨、唇骨、顎骨、これら六種の骨は、是れである百部の珍、一身の貴一に曰く、人の頭頂は氣氣結胎するものにして賢愚貴賤皆骨法に定まるものでありて骨節中頭頂より貴き者なし頭蓋を覆うたるが如く額は龍角の如く、眉骨三稜なるときは鬢へ兩目佳ならずと雖も亦貴たるを失はず二は目なり眼中真あり猶靈寶、車に盈つるが如きの美あり陽は左にして陰は右なり、眉龍睛大にして光明備の如く神、收斂にして澄清なれば即ち其他の諸部、缺陷あるも亦昌ゆべし三は眉と鼻は貴く彩、彩ある可とす濃淡を論ぜざるなり彩るもの濃、中細なるもの淡内秀麗々起伏すれば即ち三、停合はざるも亦榮華あるべし四に曰く鼻、口

【一】性相と骨相運命學大要

は乃ち天柱星なり眉梁鼻柱連なり準たる懸、眼の如く縮義美なるものは即ち是れ形體、稱はざるも亦貴相とす五に曰く聲なり人は聲、氣を取ると雖も然れども聲は氣を以て根と爲す、氣は聲に出で聲は音に換す故に貴相は聲あれ



ば音あり韻あり大にして濁らず小にして能く、彩はれ細にして亂れず剛にして能く鳴る除響、流韻は即ち國士たるべし六に曰く手なり面は、即ち根本にして手は乃ち枝なり幹或は好所あ

額に至る迄其左を視復た其右を窺ひ畢止前に、見後ろを瞻視し富貴は其眉目を論じ貧賤は其、願額に智慧は其皮毛に察し苦樂は其手足を見

れば面に鑰せず又好處ありて手に鑰するもの、は面に鑰せず故に掌紋細秋縮の如く一約直起、して三紋皆透れば即ち五官刑傷ありと雖も、貴とするを妨げざるものである。辨骨の質は頭骨に取る骨聯する者は貴く偏、なるは之れに次ぎ、砕くるは最下なり、ゆゑに頭は圓きを、宜しとす圓なれば、聯なる偏撮合せざ、るものは貧しから、ざれば天す色は紫、青を以て貴とす白、は下とす故に青け、れば氣清く紫なれ、ば氣秀づ白きは氣、なく則ち寒薄の微、をやとす故に相人、の法先づ髮際より

一



〔八〕性相と骨相運命學大要

外なる有様浮ぶ。災相 對して何となく眼神定まらず曇り一。天にあり。吉相 何となく對して賑々歡喜ばしく見ゆ。一福相 對して温かにして自然勞なきが如し。一短命相 對して何となく花のしほれたるが如し。一惡相 對して何となく惡感を生ず。一威相 氣高きは貴相何となく威嚴あり。一貧相 隱心起り孤相は寂然たり壽相は豊かに見ゆ。

(四) 座相

一座して疊におちつかざるものは家に苦勞あるなり。一座して足を重ね體の浮むものは志又は家定まらざるなり。一座して何となく寂敷「しほむ」人は身代衰へ辛勞あるなり。

(五) 五行相

一木形 形延びやかにして腰正しく上廣きを

云ふ。一火形 肉薄く骨立形さわがしくするを云ふ。一土形 骨大にして節短く、すくみたるを云ふ。一命形 體がつくりとして形正しく行ひ利。一水形 口腹尻大にして水氣あるが如きを云ふ。一木形 物事を破るとも身分再び榮ゆることあり。一火形 物事を破る又貪心あり常に心に不足ありて悦び少し。一土形 人を育てる人の世話多し去れど身は安樂なり。一金形 才智あり物を能く破り又物を育つ。一水形 恵み心あり愛嬌あり破れても悔まず。

(六) 五行相の解説

人の本原は精を水に受け氣を火に受けたるものである水火合して後神生ず神生じて後形全故に金木水火土を得て而して後漸く形を成すのである故に此五個は身體の中に在り其一を得て行ふもの必ず福相となさず五行中の一形を得て其性に合するものは亦盛んならず

靈臺論に曰く五行は肥瘦長短を分つと雖も亦必ず五行に合するを要せず青黃赤白黒の本原に合して精神氣の清濁を辨ずるを最となし故に木色は青とし火色は紅とし土色は黄とし水色は黒とし金形は白を帯ぶるを喜ぶ各般の顔色相同しからず金形は方にして白、水形は圓にして黒、木形は尖にして赤、土形は厚なり金は方を嫌はず木は瘦たるを嫌はず火は肥たるを嫌はず金は尖るを嫌はず土は厚くして定するを嫌はず故に金形は方を主とし其の五方を得氣色は精神亂れず動止規模坐すること久しくして端重なり木形は長きを主り其五長を得たり氣色雜らず精神亂れず動止溫柔久しきに涉りて挺直なり水形は圓にして其五圓を得れば氣色雜らず精神亂れず動止寛容久しく行ふて條達するなり火形は明を主り其五露を得るときは氣色雜らず精神亂れず動止發揚して聰明敏捷なり土形は重にして實するを主とす其五藏を得るときは氣色雜らず精神亂れず動止持重久して安泰なり五行の相五行の形五行の性を根本となし眉目の清秀口鼻の端詳精神の榮暢氣字の廣大等

は之を枝葉として斷するを要す。

五露の相

一眼。鼻、齒、喉、露はれ耳そりたるは頑愚なり。

五長 短

一頭、面、耳、手、足、長きは凡て豊かにして貴し。足長く手短きは貧手長く足短きは富貴なり。

大 小

一頭、眼、腹、耳、口大、額小なるは六親離散す。

六 大

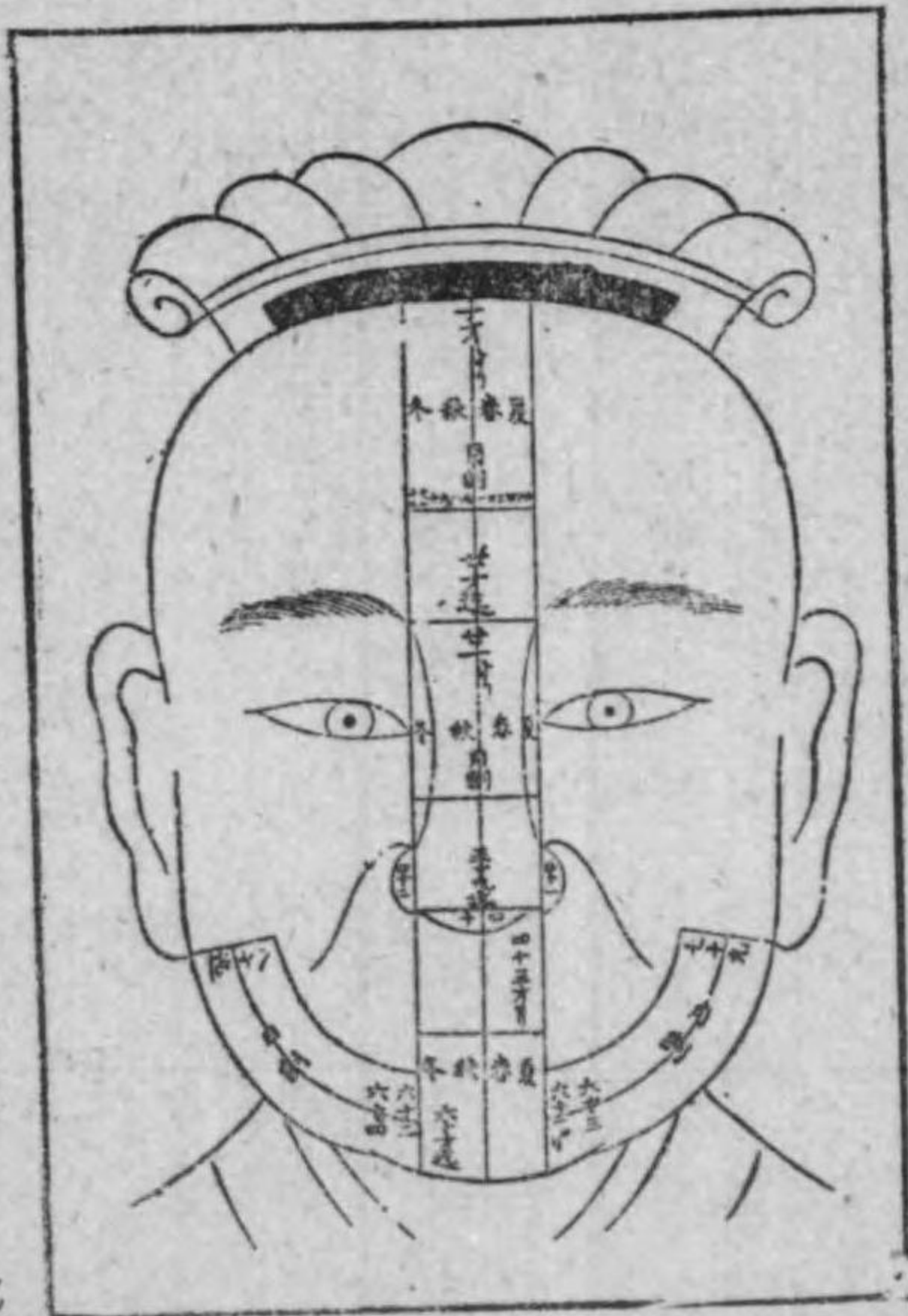
一頭、目、額、鼻、口、腹大なるは貴人なり。

六 賤

一額缺け、胸腹薄く、聲散ず、偷視、斜視、鼻齒、低く眼光小さきは賤人なり。

(七) 頭を論ず

〔八〕性相と骨相運命學大要



頭は諸陽の會する處る面は五行の宗にして五脈の靈居五臟の神路三才の成象なれば一身の得失を定むる處である(麻衣相法)。生理學に於て頭は大脳小脳ありて小脳は者を受くる處大脳は之れを善へ其の理非を判斷

あるものなり扁交此に至て必ず災難あるものなり。骨は乃ち精成、肉は乃ち血就、凡そ人體の一組織中には精神氣血を得て其の形を爲し正氣を得て成らざるものなし故に其の骨秀づるものは氣清し邪氣を得て成るものは其の骨、粗にして氣濁る故に其の人の貴賤を觀る先づ其の骨氣を辨ずるものなり骨秀づる小きもの弱肉勝て骨小きもの弱肉勝て骨一坐の神分は唯頭骨にあり骨は山石の玉あるが如く肉は江海の珠あるが如く一身の

する處でありて其の外物の刺戟は一旦大脳中傳達するの號令を發する處である云ふてある高味麻曰く頭面に虧處あるものは不足の病

精神は兩眼にあり一身の貴相は頭骨にありとす。一頭の皮は厚く堅く實したるを吉とす和らかく薄きは貧なり

【八】性相と骨相運命學大要

- 一頭は大なるものは心定まること運し
- 一頭は角又は丸きは仕合せよし
- 一頭小なるもの又は髪多きは發達せず流浪す
- 一頭奥行あるものは意思深し
- 一頭中低きは生涯辛勞す妻なく孤なり
- 一頭高きものは心鋭く家を破り妻子に縁なし
- 一頭の皮厚きは吉、薄きは孤なり
- 一頭額共に油を塗りたる如きものは再縁又は孤獨なり
- 一頭髪縮み及び黄色のものは生涯辛勞す赤きは災あり
- 一頭の旋、額に垂れ又は頭上に多くあるは淫亂なり
- 一頭の尖りありたるは物の頭となるも辛勞多し
- 一頭圓きは實意あり正直なり
- 一頭髮額に生えたるは母に早く分れ妻子に祟り辛勞す
- 一額前狭く後張るは相續せず弟が相續する
- 一額狭く肉薄きは目上と心合はず運劣なく苦勞多し
- 一額狭くとも肉厚ければ福分あり

一頂に旋を垂るは他所にて論をして歸る者なり

一四角なるものは發達する目上と合はず

一額狭きは弟なり皮膚に肉あれば身内の上に立つ

一額廣きも皮膚に肉薄ければ苦勞多し家を破る

一額出でたるは目上と心合はず破財辛勞す

(八) 面相を論ず

面相は人の儀表にして面部の靈居五臟の神路である神氣を貫ぬき三才配合有精なるべし其氣魄其血脈乾潤其清濁晦明淺深にあり色の白きこと凝脂の如く黒きこと漆光の如く黄なること蒸栗の如く紫は凝縮の外く而して神満ち氣厚きものは榮貴の資なり其部位傾斜不正傾側反勢色褪せ氣弱精浮び神乏び色塵埃に似たるものは貧困天壽の聖なり

(九) 面部總說

(一〇) 三停總說

一額は天停といふ圓にして潤なるを吉とす鼻を人停といふ豐隆なるを吉とす頤を地停といふ方潤なるを吉とす三停平等豐滿なるを吉相とし缺陷あり瘦せたる又は痣あり疵あり骨を露はし何となく曇りあるを凶とす

一上停厚く豐なるは初年の運なり之に反するは苦勞あり

一中停豐なれば中年の運あり之に反するは人中停豐なれば家治まる之に反すれば老て苦勞あり

一天停尖り狭く缺陷あれば困苦すべし不運なり

二天中又は髮際の内薄く低く陥れば兩額の間縁薄く流浪す

一女の額は廣く髮際高きは夫を尅す男は之に反す

一日月角起るものは父母より金錢財寶を受く

天停

一堅劍堅(堅々四五本紋亂れ出づ) 戰場にて死す

一斜水斜(斜めに水の如くに出す) 船又は水中にて溺死す

一交加紋(十字の如き紋) 貧困にて横死す

一泰山紋(山の字の如き紋) 發達す

一指天紋(王字の如き紋) 勝強く人を助け一世を幸福に終はる

一三垂紋(三文下に垂る) 妻薄し病身にし

一婦は夫を尅す

一雜案紋(小散潭山あるもの) 貧苦にして世に思案絶えず

一川字紋(川の字の如き紋) 親孝行なれども常に思案絶えず

一十字紋田字(十字の形田字の形) あるは家富み長壽なり

一山字、乙字紋(山字の形乙字の形) あるは半凶官吏には吉とす

一大字紋(大の字の形) 此紋あるものは孝心深し

【八】性相と骨相運命學大要

- 一天庭の骸の上に赤き光りあるもの一旦破財して後家を起すなり
- 一額の文、眉の中に入れれば貧賤なり
- 一額の亂文は貧苦困厄す上停長きは福分あり聰明なり
- 一女の額三文雜文あるは夫又は子を尅す
- 一立文は官を失し眉の上下の横文は子に祟る貧なり
- 一男の一字紋は富貴なり曲りたるは憫隱心あれども横死す
- 一天倉に起肉あり紅潤の色あれば三日の中に福来る
- 一三紋揃ふものは發達せず去れど衣食に窮せず
- 一天紋切れたるもの又は力なきは目上に縁なし
- 一髮際又は天中に赤氣あれば人に權を奪はれ女は再縁す
- 一天紋の上に天文あるは身分及び商賈代はる
- 一天紋に横文あるは何事も成就せず子に縁薄し
- 一天紋小枝あるか短かきかは業代はり女は夫を代へ子に縁薄し

一天紋高くして右へ流るものは亦同し

一人紋切れ又は力なきものは失敗す

一人紋地紋より深きは先祖に不幸なれども獨り發達す

一地紋切れたるは家に縁薄し身定まらず

一地紋深きものは家早く治まる併世話多し

一地紋の下に地紋あるは住所代はる

一ヶ月紋(三文月の形に上に三つは) 自然富貴高名なり

一王字紋(王の字の形の紋) は柔和にして福分あり人に讒せらるることあり

一懸半紋(王字に二本の立線あるなり) 富貴榮達長壽なり

一天柱紋(中央に一本の紋あり) 天中より印堂迄の懸紋は福壽なり

一鶴足紋(中央に二本立線あり) 天中より印堂迄の紋短きは殺伐なり人の頭となる

一三横紋(三本の横文あり) 憂へあり發達せず早く父母に分かる

一六虛紋(三本の横紋皆中切れる) 萬事意の如くならず口舌辛勞多し

一破水紋(斜に流れの如く紋あり) 生涯開運せず故籍を去り流浪す

中停

一中停長きものは貴し



一眉の中に渦あるものは双子を生む。  
 一眉眼を覆ふもの散財するもの欠財あるものは孤貧破財す。  
 一眉毛入り交りたるは慈悲あり苦勞あれども食缺せず。  
 一八字眉は心強く一字毛は底智慧あり。  
 一眉の頭毛さけて逆毛あるは惣領とす女にても家を繼ぎ兒多し。  
 一眉眼濃未薄きは愚痴にして事を遂げず。  
 一眉濃きは子の縁薄し身内に縁なし。  
 一眉薄きは子の縁薄し身内に縁なし。  
 一眉太く短きは性急にして不仕合せなり夫妻難あり。  
 一眉豊なるは兄にして薄きは弟の相なり。  
 一眉中に立筋あるは子に縁なく身内に苦勞あり。  
 一眉中切れたるは郷を去り兄弟に分かる。  
 一眉上下より抱き合ひて生えたるものは短命にして心いらつく。  
 一眉頭上り下り尖分れたるものは姦通者の子なり賤心あり左は男より姦し右は女より姦す。  
 一眉の毛頭揃はざるものは家定まらず。

一眉頭毛四五本も分れて生えたるものは兄弟不和なり。  
 一眉毛間断陥陥あるは親に早やく離れ兄弟不和妻子離散す。  
 一眉一方は鼻に近く一方は遠きは別腹の子なり。  
 一眉眼と眼の間より生ずるは妻縁に薄く短氣なり。  
 一眉頭長き毛生えれば惣領なり。  
 一眉一文字の如きは忠義の下僕を得る。  
 一眉毛入り亂れたるは慈心あり辛勞す。  
 一眉南天の葉の如きは邪智にして不義不實の人なり。  
 一眉目を押し人中短きは孤獨にして短命なり妻子を尅す。  
 一眉陥陥あれば朋友に難あり災難來る劍難あり。  
 一眉尾又は邊地に立筋あり骨起るは立身す。  
 一眉の上の文は凡て惡し。

(三) 耳を論ず

七年なり耳は大小を論ぜず輪廓分明にして白く面に対して輪を見、廓堅く輪厚く紅潤色にして内に長毛あり風聞寛大にして眉より高き一寸なれば貴人にして輪廓反り低く小にして軟弱なるものは年少の時より六親を失ふと(神相全篇)  
 生理學に於て耳は腦に連りて心胸に通じ腎臟を司る者である故に腎氣旺なれば清く聰なれば腎氣衰へ又は腦に充血する時聲昏濁耳鳴り氣塞がる者なりと。  
 耳の高き一寸なれば貧ならず(宗全相法)面に対して耳を見ざれば高貴なり(大清初鏡)厚大眉に垂るは年壽八十なり(廣靈集)耳白くして霜の如きは實にして朝に立つ(水鏡)(柳莊相書)輪廓分明にして垂珠口に朝する者は財あり壽なり(萬全相法)耳反るものは祖業を失ふ(五總論)上尖るは殺あり下尖るは不良なり(麻衣相法)  
 耳は内耳あり外耳あり内耳は聽神經の終止する處なり外耳は一片の軟骨よりなりて其の外郭は介殼に類似する形狀を具し内部は恰も喇叭の管の如く外聽道は長さ八分ありて内端は鼓膜に終る。

耳

一内耳は常に一種の淋巴液を充て内に固形の小囊ありて浮遊せり其の小囊も亦淋巴液を含みて其の壁には聽神經分布せり(生理學)  
 一耳立ちたるは智秀て才智あり。  
 一耳和かにして低きは愚人なり。  
 一耳の輪短く縮みたるは物覺え強く風雅の心あり。  
 一耳の廓出でたるは家を出て家督を弟に譲る。  
 一耳堅きものは福分あり大なるものは徳あり。  
 一耳小なるものは心小にして才智あり深あり。  
 一耳大なるものは勇あり福分ありて人の下に附かず。  
 一耳目より高き一寸なり輪と廓と明なるを上相とす。  
 一耳に三文あるは才智あるなり。  
 一耳少にして輪廓正しきは吉なれど子に縁なし。  
 一耳厚きも和かなるは兄弟に縁なく他國に住す。  
 一耳下に付きて前に行は惡心あり人を毒す。  
 一耳薄く分明ならざるは若年流浪す。

【二】性相と骨相運命學大要

一耳脂なきは盜難散財す徳あれば智あり。  
 一耳の上髪薄くして疎きたるは散財す。  
 一耳に赤氣あれば散財す。  
 一耳向かつて見え難きは名を爲す。  
 一耳の中に毛生ずるものは長命なり。  
 一耳尖りて薄きは一世貧なり前に傾くは不幸なり。  
 一耳青きものは病氣あり光潤なるを吉とす。  
 一耳暗色なるは萬端心に任せず妻子を尅す。  
 一耳外に反りて薄きものは貧孤なり。  
 一耳の左右に大小あるは奸佞邪智あり。  
 一耳小にして孔指に入るは能はざるは孤にして短命なり。  
 一耳穴大にして大指に入るは智深く長壽なり。  
 一耳に黒子あるは聰明にして藝達す。  
 一耳うつむくは愚なり。  
 一耳助くは心中動き安し中年福を得る。  
 一輪廓缺け破るときは家内離散子孫絶ゆ。  
 一輪ありて廓なく廓ありて輪なきもの心定まらず辛勞あり孤獨となる。  
 一女の耳左大なれば初め男子生れ右大なれば初め女子生ず。

一垂珠大なるは心肝なり才なく發達せず。  
 一垂珠なきが如きは心いらつく才智あり。  
 一垂珠丸きものは發達す米を入るゝが如きは大福なり。  
 一貴人は貴眼ありて貴眼なし。識人は貴耳ありて貴眼なし相者は常に辨じて判斷す。  
 一虎耳 耳小にして潤あり安樂にして見三人あり。  
 一馬耳 眉より一寸高く大なり一度家を破るも回復す。  
 一猪耳 輪ありて廓なきもの中年後災あり不仕合せなり。  
 一垂眉耳 豊にして肩に達す平人は凶なり。  
 一金耳 眉より高く輪小さく色白く豊なり晩年妻子を尅す。  
 一木耳 廓輪反るもの六親を尅す貧にして孤なり。  
 一水耳 厚く丸く高く垂珠後に付くは富貴榮達す。  
 一火耳 輪尖り廓反る垂珠厚きも短命にして妻を尅す。  
 一土耳 厚く低く肉多く毛あり長壽福分あり





を受く。  
 一 頤は住所に苦勞あり命長きも憂多し。  
 一 頤の後に引たる如きは發達せず疎忽なり。  
 一 頤の重なりたる如きは晩年仕合せよし。  
 一 頤の骨突起するは理窟はる目上に背き家を破ぶる。  
 一 頤の骨耳の後に張り出たるは邪氣深し。  
 一 頤の骨平たく又は分かるは家を破ぶる。  
 一 頤なきが如きは意淺く短氣にして家を破ぶる。  
 一 頤出雲るものは柔和なり家を破ぶる。  
 一 頤に筋まくる人は開運すふくれたるは運氣閉づ。

(一七) 頤骨

一 頤骨に堅紋三筋あるは水難の相なり。  
 一 頤骨高く肉薄きは祖業を破る感んにして肉厚きは財を得る。  
 一 女子頤骨高きは夫を尅す。  
 一 頤骨高きは心いらつく權威を振り善惡に強く下賤儉食なり。  
 一 頤骨横に高きは勢なく深あり家を破る。  
 一 頤骨高く骨耳へ通するものは家を破り人の

師となる。  
 一 頤骨左右違ふものは心定まらず吝にして人に交り薄し。  
 一 頤骨なきものは望み事叶はず貧なり。  
 一 頤骨高く頤頰狭きものは孤獨にして辛勞あり。  
 一 頤骨目の處より高きは權あり下りたるは威なし。

(一八) 印堂

一 印堂断るは性修まらず多言にして怨みを招く交女なし。  
 一 印堂狭きものは家を破り涙弱し。  
 一 印堂に亂紋あるものは短氣にして親に早く離る。  
 一 印堂黒子あるものは諸事成就せず目上と心合はず。  
 一 印堂廣きものは病氣あり破れば苦勞し諸事は叶はず。  
 一 印堂の下、目の間つまみたるが如きは家を破り孤貧なり。  
 一 印堂の下、目の間廣きものは才もなく働みなきも福壽なり。

一 印堂の下、目の間狭きものは性急短氣にして短命なり。  
 一 印堂の下、目の間鮮かなるは中年財を散じ老て貧なり。  
 一 印堂肉起りたるは吉、陥りたるは兄弟に分かれ中年故郷を去る。  
 一 印堂陥れば養子に行き一家を起す。  
 一 山根下目の下枯れたるものは妻子を尅す。

(一九) 涙堂

一 涙堂しまりなきもの陥るものは子孫に縁薄し。  
 一 男は涙堂に黒滯氣あるものは妻を尅す。  
 一 涙堂陥陥あり疵又は亂文あれば子孫を尅し孕婦は流産す。  
 一 涙堂勢なきものは子に縁なし親屬不和にして能く人に疑はる。  
 一 涙堂涙の流るゝ如き紋あるものは慈悲心深し。  
 一 涙堂肉厚きものは子多し壯健の人なり。  
 一 常に愁へなきに涙を出す人は夫妻を尅す。

(二〇) 法令

法令は號令の端緒を主とする能く八部三憲に連接し下能く地閣仙庫に拱應し蘭廷分明清楚なるを貴とし兩傍根基長くして地閣に至るものは壽となす短にして口に入るものは騰蛇となす只紋圓長なるは米食少し法令中破、蘭廷、帶令、地閣、天に朝するは天壽を保ち青黒なるは災病來り横紋斷絶するは酒食身を亡ぼす(水鏡集)

一 法令は商賣を見る廣きものは商賣手廣し。  
 一 法令狭きは家狭く福あるも吝なり。  
 一 法令口に入るものは吝なり。衣食足るも又窮死す。  
 一 法令筋多きものは商賣代はる。  
 一 法令筋深きは殺伐なり紋内紅紫あるは福壽青黒は災あり。

(二一) 臉

一 臉深く陷るものは家を破り貧にして絶ゆ。  
 一 臉淺なきが如きも細く皺あるものは親に不幸にして家を破る。  
 一 臉高きもの養子に行くと狭く瘦せたるは損失す。

一 頂高く黒子あるもの低きものは妻子に縁なし。  
 一 頂狭きは生るゝ時親貧也富者も食となる。  
 一 頂廣きものは發達す女難多し。  
 一 頂狭く眉目を覆ふ者は根氣薄く辛勞多し。  
 一 頂赤きものは病難あり厚きは淫欲深く黒子あるは不仕合せなり。

(二二) 頂

一 頂中低きものは辛勞多し妻子に縁く身定まらず。  
 一 頂の頂丸く長きを吉とす男は瘦せたるは長く肥たるは短きを吉とす。  
 一 頂に大疵あるものは目上と心合はず。  
 一 頂の中高きものは貴人なり。  
 一 頂上の右の陷るは母に早く分かれ左陷るは父に早く別る。  
 一 頂上を上に仰ぐものは貧賤なり。  
 一 頂の形滑あるは男女は短命にして才あれ共發達せず。  
 一 頂骨は初年脚骨は中年枕骨は晩年の運を定む。

(二三) 眼を論ず

生理學に於ては視神經部は適地刺激に依て興奮せらお其の興奮は視神經を經由して視覚中樞に達し以て意識的感覺を起すものである吾人は精神的動作に因て視覚を應用す斯かる標象を視認と云ふ。  
 目窓は肝に通ず肝は血を得て能く物を見るなり肝絶れば眼枯ると(水鏡集)  
 天地の日月に托して明となす一身の榮枯は日月に托して光りと爲す日月は能く萬物を照すがごとく兩目能く萬情を知る左は日に托して父の象右は月に托して母の象なり(神相全論)眼長深く光り潤あるは貴(麻衣相法)眼睛を整へず及上下左右視するものは賤なり(カイルス骨相)眼大にして光りを露はすは刑死を犯すなり(柳莊相書)左小なるは長男にして婦を失ふ右小なるは女は夫を失ふ(水鏡集)眼光水の如きは男女多淫なり(神異賦)斜視は必ず狭み斜視は人其の毒に遇ひ痴視は自ら其の身を尅す(人倫統賦)瞳目は富貴にして眼牛眼は福多く象眼は富貴なり(神相全論)



一人中短きは意浅く人と交らず小心にして派  
一人中短きは意浅く人と交らず小心にして派  
一人中短きは意浅く人と交らず小心にして派

(二五) 口を論ず

口は唇及び頬は口腔の前壁及び左右壁を  
口は唇及び頬は口腔の前壁及び左右壁を  
口は唇及び頬は口腔の前壁及び左右壁を

口

一口の角上るものは食盡きず。  
一口の角上るものは食盡きず。  
一口の角上るものは食盡きず。

(二六) 舌を論ず

舌は主に筋組織より成り其根は頭の上界の  
舌は主に筋組織より成り其根は頭の上界の  
舌は主に筋組織より成り其根は頭の上界の

舌

一舌の色青きものは淫亂にて孤獨なり。  
一舌の色青きものは淫亂にて孤獨なり。  
一舌の色青きものは淫亂にて孤獨なり。

(二七) 齒を論ず

齒は百骨の精華にして一口の録なり萬物  
齒は百骨の精華にして一口の録なり萬物  
齒は百骨の精華にして一口の録なり萬物

【一】性相と骨相運命大要

一 向齒二枚屏風の如く引込みたるは人の世話多し。  
一 向齒左右先尖りたるは身内と交り悪し。  
一 向齒中の尖りたるは故郷を去り不幸にして妻に縁なし。  
一 上齒下にまがるもの愚痴にして執念深し。

(二八) 乳

一 色白きは貧にして天死す子育難し。  
一 乳房小なるものは子に縁薄く黒子あるものも同じ。  
一 乳房小と大と異なるもの又は下に向ふものは子に縁薄し。  
一 乳房上に向ふものは子に縁あり。  
一 乳は肉あり、しまりあり乳座大に潤ふを吉とす。

(二九) 胸と腹

一 腹は大なるものは運開く。  
一 胸骨露れ薄きものは物事滞り根氣薄し。  
一 胸落高きは腹小なり胸低きは腹大なり。  
一 胸狭きものは意淺く性急なり。  
一 胸落和かなるものは運自然と開く。

(三〇) 首

一 結喉浮筋あり鬚骨あるは貧 被せたる人の高きは他郷に走る。  
一 臍はしまりなきものは根氣薄く運悪し。  
一 臍深きものは意ろ丈夫にして福分あり。  
一 臍の上方に付くものは才あり下に付くものは意小にして發達せず。  
一 柳腰のものは商賈を意にかけず女に溺る。

(三五) 骨

一 骨細きものは命短し。  
一 骨細く堅く肥えたるものは身を樂にす去れど辛勞あり。  
一 肉瘦せたるものは子孫に縁薄し。  
一 俗に言ふ肥は物事調はず子に縁薄し。

(三六) 皮膚

一 皮膚は薄きもの運悪し厚きものは福分あり潤ひたるは運強し枯れたるは物事滞る。

(三七) 毛髮

一 女子は老毛禿げたるは壽なり。  
一 女子の額禿げたるは男を尅し辛勞あり。  
一 毛黒きは長壽なり半白も壽福とす。  
一 女子の毛濃きは淫亂なり。  
一 毛は黒き程多きものは家を破り子に縁薄し。  
一 胸毛多きものは體小なり。  
一 指に七ツ毛あり長きものは辛勞あれ共樂に世を送る。

(三八) 肩

一 頭大なるもの小なるものは初年凶にして目上に縁薄し。  
一 朋大なるものは身内の上立つ小なるものは根氣薄し。  
一 腰より下小なるものは家の苦勞多し正しきものは家治まる恐しきものは下賤なり。

【二】性相と骨相運命大要

一 頂きに重紋あるは大壽相にして一生凶を招かず。  
一 首短く體丸きは盜心ありて獄に入る。  
一 瘦せたる人の首長きは富貴なり。  
一 肥たる人の首長きは短命にして先祖を破ぶる。  
一 首細きは奸淫なり短くして太きは根性悪るし。  
一 首太きものは命長く細きものは短命なり。  
一 首筋太く後よりさみしく見ゆるものは難あり死す。  
一 首長きものは福あり短きは命長し。

(三二) 鎖骨

一 鎖骨高きものは命長し危きも助かる壽骨とす。  
一 鎖骨なきものは危難苦勞絶えず。  
一 鎖骨大疵あるものは災殃多し。

(三三) 害骨

一 害骨は高きは命長し陥りたるは短命なり。  
一 害骨高きは意深し目上に逆ふ去れど命長し。  
一 害骨無きが如きものは正直なれど發達せず。

(三九) 爪

一 爪厚きは吉薄きも根に白色あれば諸事を遂げず。  
一 爪堅筋あり又は内にそるは下相なり身弱し。  
一 爪丸きは愛嬌あり光あれば物事調はず。  
一 爪丸く瓦の如くそりたるは根氣強し硬く厚きは長壽なり。  
一 爪四角にて板の如きは不器用なり薄く和かきは短命なり。  
一 大指の爪左右違はざるは吉とす爪に申分なきは願望叶ふ。  
一 爪を深く取り口にて噛み切るものは不仕合せにて愚痴なり。

【一】性相と骨相運命學大要

一爪の色乾き又は青黒黄色なるは兇慎むべし。

(四〇) 言語

一言ふ時さわやかならざるは心勞多きなり。一言大なるものは大なる望み又は巧みあり。一言豊かなるものは心好俊なり女の辭の如きは發達せず。

(四一) 音聲を論ず

音聲は呼吸に當り肺より聲門を通過して併出する氣流に因り其聲帯の振動に依りて喉頭中に生ず喉頭は舌に酷似する可樂器にして肺は吹葉(風琴)氣管は風管聲帯は舌咽腔、口腔及び鼻腔は副管と想像することを得る凡そ音は彈性體の振動に依つて生ずるものなり(生理學)

て外に達するものなり、丹田は聲の根なり舌端は聲の表なり夫れ根深ければ即ち表はれて重く根淺ければ即ち表はれて輕し是故に聲根に發して表に見るを知るなり、若し夫れ薄らかにして堅くして亮、細くして烈、急にして和、長くして力あるものは男にして節あるなり大なること洪鐘の如く小なること玉水飛鳴の如く碎然として後動き其言久しくして後應ずるが如きは貴人の相なり、小人の言は皆舌端の上に發す促急にして而して遠く断絶にして遠く深くして滯り淺くして或は輕重均しからず或は散り或は即ち破る或は繁亂して浮ぶ或は破綻の響の如く或は發するが如く犬の吠ゆるが如く羊の鳴くが如きは皆賤薄の相なり男に女聲あるは貧賤なり女に男聲あるは亦妨げあり身大にして聲小なるものは凶或は乾渴齊しからざるを羅細聲と云ふ大小均しからざるを雌雄聲と云ひ或は先きに退くして後急に或は先きに急にして後退く或は聲止まずして氣先づ絶え或は心揚らずして色先づ變ずるは皆貧賤の相なり夫

(四二) 音聲五行

一木聲は高くして清し  
一火聲は叫ぶが如くして焦つく  
一土聲は重くして沈む  
一金聲は鐘の如くして響きなし  
一水聲は丹田より出るを吉とす舌端より出るは破財の動く  
一破聲は火聲なり破財を呼ぶ泣くが如きは孤貧なり  
一龜の鳴くが如きは銀玉青龜の蹠が如きは賤薄なり  
一聲ありて音なく音ありて響なきは平聲也  
一銅鐵聲は孤苦貧窮斷絶あるは破財なり  
一語終らず聲既に絶ゆるは貧にして天す一句

れ神内に定まり氣、外に和して而して後以て物に接すべし苟も神定まらず氣和かならざれば其聲先後の序を失なひ辭色拗むものにして是れ小人の相なり、夫れ人は五行の形を稟けたるものにして即ち氣聲亦五行の象の先だつものなり、故に左に聲音の五行を配當して之を研ふべし。

終らず一句早く来るものも亦同し。一語繁多にして分明ならず心中穢かならざるは成功せざるの相なり。

一聲鼻先きより出るは思慮薄く愚痴の人也。一聲前に大にして後に小、前に小にして後大なるは先に成功して後に破れ先きに破れる後に成るなり。

一聲猫の如きは心毒あり媚び佞ふの情を露はすは小人なり。

一君子は語少なく小人は語多し誠信の人は聲常に毒なし。

一男子女聲を發するは不倫にて破れを招く女子男聲なるは夫を尅す。

一人大にして聲小なるは貧賤孤獨、人小にして聲大なるは富壽の相なり。

(四三) 着意看相

一若き時天倉肉薄きは散財す。  
一若き時天倉より妻妾迄肉なく低きものは妻を得て運悪し。  
一咽の骨低きものは涙情あり意淺く心小也。  
一而豐かなるものは兄なり、せまかましきは弟なり。

一體小にして頭小きは女難多く目上に遊ぶ一髪厚く眉厚きは弟なり心いらつく(厚き髪は黒く硬きを云ふ)  
一髮薄く眉薄きは兄なり薄きは赤く細かなるは和かなり。  
一女鬘の内に黒子あるは夫薄く密夫あり。  
一山林より鬘へかけて陥るものは家を破る。  
一地間に黒子あるものは家定まらず建築の意あり。  
一足の甲薄きは家定まらず晩年福薄し。  
一女子始めて逢うて笑ふものは密夫を作る。  
一頬の肉こけたるもの額に濁あるものは親の家を取らず子縁薄し。  
一若き時白髮のものは親の家を取らず子縁薄し。  
一髮赤きものは家を繼がず縮毛あるものは家を破り子縁薄し。  
一生際厚きものは家を破り目上を尅す(禿げ)たるは運あり。  
一生際まだらになる者は運弱く目上を尅す。  
一顔なきものは心毒あり物業絶えず。  
一顔赤きものは災難あり散財す。

一貴人は手の節長く豊かなり下賤は短し貴人の短きは家を破る。  
一眼玉が眺の水平上にあは驕慢下なるは神細質小心なり。

(四四) 手骨を論ず

一 腕骨は手の節を形成せる八個の短骨  
二 掌骨は手の節を形成せる五個の長骨  
三 指骨は指を形成せる十四個の長骨  
腕骨は皆短骨にして各々上、下、掌、背及び尺桡側面の六面を有し四骨づつ二列に並び其前膊骨に接する一列を第一列或は上列と云ひ掌骨に接する他の一列を第二列或は下列と云ふ。  
腕骨は各々一箇の化骨核を具ふる者にして其發生時として生前に始まる者ありと雖も多くは生後第一歳間に在り其最も早きは有頭骨にして其より後第三歳乃至五歳に至りて始めて三稜骨半月様、船骨、大多骨及び小大福骨等化骨を始む又生後十二歳乃至十五歳に

【二】性相と骨相運命學大要

〔八〕性相と骨相運命大要

て始めて腕豆骨中化骨核を生ず故に此腕豆骨は全骨格中最も速く化骨するものなり...

胎生第三月にして骨幹の中部に之を生ず出...

唯手足は象木の枝幹の如くなり、掌の紋あり...

〔一〕性相と骨相運命大要

窮指硬にして疎なる者は破れ柔にして密なるものは蓄積す手香暖かき者は清華にして手臭冷なる者は下賤なり...

一坎宮は色難又は先祖を司る...

一巽宮は遠方の損益を司る...

【八】性相と骨相運命大要

一甲に墨子あるものは人情あり清らかなるものは放蕩す。  
 一人指一の節遙格別大なるものは出産の時母を難ましたるなり。  
 一明堂に角の紋あれば財を得るなり。  
 一掌中丸きは四指長きは篤實和かなるは福薄く硬きは凶夫なり。  
 一指先き太きは愚昧骨硬きは辛苦吝嗇なり。  
 一指の後厚くして光潤あるは志厚く長命なり中年妻に離る。  
 一指の後に黒子あるものは凡人にあらず。  
 一五指共に堅筋横筋あるは藝能ありて仕合せよし。  
 一五指を両手合せて中すきたれば學才ある夫縁なし。  
 一発宮の淵紋あるは縁死の相良宮も同じ他の紋へかれば死る。  
 一指の外節に堅紋多きは富貴にて才智あり。  
 一手は龍骨長くして虎紋短きを可とす有福なり。  
 一手首の外骨即ち腕骨高きは辛苦す内骨の高きは運速す。  
 一人紋の下に人紋あれば故郷を去る。

一手の甲は丸く肉あるを福とし骨露はるゝを貧とし好とす。  
 一発宮の下に十字紋あれば養子に行く。  
 一手の毛直きに生えたるはよし横に生えたるは運滞る。  
 一天紋人紋の間の廣きは老人の子なり。  
 一手首より甲へかけたる處ろに十字紋あれば發達す。  
 一発宮の横紋は子の故なり。  
 一手の甲小指の下に聖毛あれば博識多才又孤獨となる。  
 一腕骨の堅紋は兄弟の數なり。  
 一腕骨の中色白きは風流にして運速す。  
 一手は細くして長きは慈悲心あり物吝せず。  
 一手は短くして厚きは賤しくして慈深し。  
 一手は小にして爪大なるは心清し才智あり身は貧なり。  
 一手薄きは貧にして賤し天死の相なり。  
 一掌中荒く硬きは下賤なり。  
 一手薄くして鶏の胸の如きは智なし生涯辛苦あり。  
 一掌中は四方高く中低きは富貴にして吉也。  
 一手は紅色にして潤ふを吉とし黄白色にて

(四七) 指の案排

一 大指は先祖食指は父、中指は母無名指は夫

一 小指は子孫。  
 一 右配合にて曲り又は疵あれば先祖父母夫婦子孫に祟る不仕合せなり。  
 一 小指の長さ無名指の上の筋より長きは運強し短きは短命。  
 一 指の間透きたるは財を保たず指頭和かなるは亂心なり。  
 一 大指の外節の節三あり中の筋通るは物事達す。  
 一 爪短く平たきは下賤仰ぐは達し伏すは凶。  
 一 平たきは不器用なり。  
 一 親指の間開くものは親縁薄く不孝にして早く親に別かる。  
 一 人指と中指との間開くものは我力になる人なし敵人あり。  
 一 中指と無名指の間開くものは身内に縁薄し損失あり妻に縁なし。  
 一 無名指と小指の間開く者は實子に縁薄し。  
 一 五指共に開くものは心にしまりなし拙ふものはしまりあり。  
 一指をすくめるものは小心にして卑怯なり。  
 一指をそらすものは高慢にして事を破る。  
 一三指の間共にすくものは家を破る。

【八】性相と骨相運命大要

一 大指の根小なるものは器用なれども貧也。  
 一 中指頭仰げば意高く片意地なり伏せば小心なり。  
 一 中指の頭無名指に傾むれば身内と意合ず。  
 一 中指人指に傾むれば心高く人の上に立つ。  
 一 人指が中指の方に傾むれば他人の世話多し。  
 一 無名指が中指の方に傾むれば身内に世話多し。  
 一 中指が無名指の方に傾むれば便るべき身内あり。

(四八) 掌中三紋

一天紋薄く細きものは運弱く苦勞多く親縁薄し。  
 一天紋切れば短きものは 藝あれども商賣天紋高く右へ流るゝものは 女は男を代へ子に縁薄し。  
 一天紋の形は如きは強能あれども根氣薄く晩年凶。  
 一天紋が中指へ向ふものは人の頭となる。  
 一天紋の上に天紋あるは運強く脚業身を助け目上の引立を得る。  
 一天紋兩手を合せて一字形をなせば運強し之れは二男三男にはなし。

一 人紋細く弱きものは苦勞多く物事滞る。  
 一 人紋切ればつれあれば浮沈あり家を破る。  
 一 人紋の先き上るものは運速す下るものは運遅し。  
 一 人紋亂るれば萬事達げず住所定まらず不仕合せなり。  
 一 人紋繩の如きは物事定まらず思案多く器用なり。  
 一 人紋の先き二つに分かれるは二家を支配す女は再嫁す。  
 一 人紋一文字の如きは愚痴にして賤し。  
 一 人紋より散出て天紋をつなげば發達す切目あれば運速す。  
 一 人紋に多く枝あり草の如きは財を失ひ災難あり親屬にたまる。  
 一 人紋に小き袋の如き紋あるは萬事しまりなし酒食に縁あり。  
 一 地紋の本筋が多くある者は家の治り悪し。  
 一 地紋打切れるは切死の相なり無病者頓死す。  
 一 地紋に小紋まともものは母を尅す。  
 一 地紋人紋何れにても散あれば獨立家を起す妻に障る。

一 地紋がみ小紋横切りて貫くは家を破る。  
一 地紋大指の股の方を過ぐれば壽なり反すれば天す窮困す。  
一 地紋より坤宮に通ずる紋を外露紋といふ副業身を助く。

(四九) 三紋合説

一 三紋の一つに交るは發達す難るは財を散じ兄弟不和再三代はる。  
一 三紋共に亂るは男女共一生不幸短命也。  
一 三紋共水の流るゝが如くなるは望み事叶はず病氣す。  
一 三紋の中何れにても三つ横切紋あるは偽言をいふ。  
一 天紋人紋を貫く筋あるは家を破る。  
一 三紋鱗形の紋三つあるは男女共縁談の煩ひあり。  
一 三紋の間に横切澤山あるは親屬朋友交り厚し。  
一 三紋に横切掛れば男は痲症女は産厄あり。  
一 天沖乾宮より中指又は無名指に上る筋あれば立身す。  
一 線紋兌宮より坎宮を過ぎ大指の一節を貫く

筋は目上と衰す。  
一 盜賊紋大指の縫の界に上下を貫く筋あれば盜心あり賊難あり。  
一 九邊紋天紋の先き三つに分かれたるは業代はる人指又は中指の間に入れば業遂げず九度業代する女難あり心あり。  
一 一手より紋起り小指を貫くは藝能達す。  
一 一手の甲と掌の合する處を縫といふ。  
一 一手より三紋起り三紋を貫くは平吉。  
一 一手の右より紋出て中指に貫くは家業繁昌す。  
一 二筋天地紋のみなるは孤貧にて下賤俗に升かけ紋といふ。  
一 天紋縫に至らず横切る紋あるは邪魔ありて事を遂げず夫妻子に縁薄し。  
一 天紋が小さく右に流るゝは惡運なり左に流るれば中年より身じぶ。  
一 天紋が末に至りて分かれるれば先祖の業を繼がす。  
一 天紋上に引き附ける小紋あれば泣き事を云ふ不幸の人なり。  
一 天紋細の如く人指の方へ向へば物の頭となる。  
一 天紋細の如く大指と人指との間に入れば父

一 天紋が一つ「まけ」ば養子に行くか故郷を去る。  
一 天紋散亂すれば奇商にて人をたぶらかすなり。  
一 天紋が一字の如きは愚痴にして賤し。  
一 人紋結びたる人は才智ありて發達すれども家定まらず。  
一 人紋升かたければ發達すれども親に早く分れ他家に養子に行く。  
一 人紋地紋何れか一筋重きなれば婦は再嫁し夫は家を起す。  
一 人紋に丸がかゝれば早く名を出す男女共孤獨となる。  
一 人紋に丸が二つ袋の如くあれば樂み多し。  
一 人紋が枝になり手首に松葉の如き紋あれば敗れ夫又は親を損す。

(五〇) 三紋混合

一 地紋打切りあるは天死の相なり。  
一 地紋に十文字がかゝれば母を冠す。  
一 地紋ゆがみ又は小貫紋あれば家を破り流浪す。  
一 三紋を貫く紋あれば家を繼がず他家を繼ぐ不正直なり。  
一 三紋が水の流るゝが如きは病氣苦勞す。  
一 天紋が枝になりて枝先き横切紋あれば不正直にして家を亂す。  
一 三紋の間に亂點あるものは奢を好み家を忘れ色難あり。  
一 三紋の中何れにても二ツ三ツ小紋貫くは偽言者にして難を受く。  
一 三紋の尻が小指に向つて貫くは藝、發達し晩年成功す。

(五一) 掌中理紋

一 坎宮に玉柱紋として一線立ち離宮を貫き又は大指を貫けば大吉なり。  
一 指の節に花紋散亂すれば發達す。  
一 一手首に二筋の紋あれば長壽にて子孫多く財を得る。  
一 一手首に三紋亂紋あるは孤獨にして貧兒あれども有難し。  
一 大指の下良宮に井字の紋あれば諸藝に達し人の頭となる。  
一 手の甲の筋に青色の筋出るは金銀に事を缺く。  
一 手の甲又は指に女字の如き小紋出づれば幸福なり。  
一 一手の指甲何れの指にても三本横紋出で直なれば運強し。  
一 白板紋として明堂良宮に角形の紋出づれば不意の災あり傾死す。  
一 兌宮良宮に渦紋出づれば諸事遂ぐ去れど水難あり。  
一 坎宮明堂に階段の如く重なりたる紋出づれば官通む。  
一 乾宮に加環紋として御幣の形の如き紋出づれば公難あり。

一 坎宮に人字を重ねたる如く紋重なり出づれば目上の引立を受く。  
一 震宮に佛眼紋として目の形の紋出づれば立身す大指の節も同じ。  
一 小指の節より三線紋澤山葉り生ずれば外藝又は開業に達し人の引立を受く食指の下も亦同じ。  
一 兌宮に女字紋又は十字紋交り出づれば妻の爲め立身す女難あり。  
一 巽宮に横線紋の如き紋出づれば隠徳あるの人あり。  
一 大指の外に枝條の如き青筋あれば願望叶はず。  
一 五指に渦紋あるは誠實の人なり。  
一 坎宮に圓月形の線紋あれば他國に住す。  
一 大指より坎宮に一線の紋出れば目上の女に交りて其主人の妻を娶る。  
一 斯の如く同様の紋小指の方へ出づれば度々争論あり。  
一 一手首に井字紋又は圓月形又は「たんざく」形の紋出づれば難を遁る。  
一 無名指に川字形の紋出づれば開がしきを兼ひ術を好み富貴なり。



一掌中に三線の横筋あれば慈悲にして静かなるを好む。
一手首の井字形又は魚形紋あるときは富貴にして能く學問にて名を擧ぐ。
一手掌中間に渦紋あれば富貴なり大指中にあれば凶事を發す。
一手首に草字形又は花形の紋出づれば才智あり金銭に事を缺かず。
一掌中に花形及び雪花紋あれば諸藝に秀づれども淫欲多し。

(五二) 黒子を論ず

夫れ黒子は山の林木を生じ地の堆阜を出すが如きものである山に美質あれば即ち善木を生じ以て其秀を顯はす地に汚土あれば則ち惡草を生じ以て其濁を示めす善物の理皆然りてある故を以て人に美質あるや則ち惡徳を生じて以て其濁を顯はす濁質あるや則ち惡徳を生じて以て其秀を顯はす故に漢高は左の取に七十二の黒子あり則ち帝王の瑞相を現はすなり凡そ黒子の顯處に生ずるものは多くは凶にして隱所に生ずるものは多くは吉なり面上に生ずる者は此利あらざるなり且其色は黒きこ

と漆の如く赤きこと朱の如きものは善なり青黒調ひある者は又佳なり赤を帯ぶる者は口舌關礙を主どり白を帯ぶるものは憂鬱刑厄を主どり黄を帯ぶる者は遺忘失脱を主るなり。
凡そ掌中に痣の生ずるものは富貴にして上に近き者は尤も極めて貴し額上に七星ある者は大貴大中は父を妨げ天庭は母を妨げ司空中は父母を妨げ印堂は貴にして兩耳輪は聰明なり耳内は壽にして耳珠は財あり眉上は窮困眉中は富貴眼中は賊し眼上は吉山根は厄疾年壽は貧困、鼻側は私苦、鼻梁は屯聚、鼻頭は妨害、人中は婦を求め口側は財を聚める事強く口中は酒食を司り舌上は虚言、唇下は破財、口角は職を失ひ承梁は醉死し地閣は家屋少く左廂は横死、廣高は二親を妨げ尺破財、客死、軍門は兵死、邊地は外死、輔角は下食山林は盜賊、虎眉は軍亡、初門は剪死、太陽太陰の黒子は夫婦吉慶なり魚尾は亡び好門は死、天井は水死、林中は清慎、長中少男は冠し金銀は破敗、命門は火厄、學堂は無學、上唇は無職、奴僕は奴僕を妨ぐ三陰三陽は人を謀り田宅は家を破り大海は水厄なり。

黒子

一 天中にあれば願望叶はず 左の眉尻の黒子は男女共に尅す
一天庭にあれば父母に妨げあり 天中司空中正印堂は長子力とならず 夫を尅し惡兒を産む 額にあれば不幸の相
一天陽にあれば不意の難あり 魚尾にあれば妻代る
一 神光にあれば家を破る 人中にあれば病氣す 二子を生む
一 驪馬にあれば他國に行き苦勞す 土星にあれば苦勞あり
一 髮の生際黒子は男は散財女は離産す 日月角にあるは父母を尅し男を殺す
一 山林にあれば財を破る 交友にあれば損失の難あり
一 胎にあれば女の苦勞あり 人に恨まる 奸門にあれば女難あり
一 承梁にあれば知氣醒狂す 命門にあれば家を破る
一 食縁にあれば家度々代はる 主骨にあれば

一 目上に逆ふ
一 兄弟にあれば身内に縁薄し 法令にあれば孤貧にて商賈代はる
一 邊地にあれば他國に利なし 福堂にあれば財を散し家を破る
一 舌にあれば虚言を言ふ 颯骨にあれば苦勞す
一 奴僕にあれば目上に損あり 難産す 口角にあれば二三度嫁代はる
一 唇にあれば陰亂にて二子を生む 田宅にあれば男女互に尅す
一 後ろの髮生際であれば縁薄し 首筋にあれば短氣夫を尅す
一 咽喉にあれば夫婦尅す 胸にあれば吉赤色は短氣なり
一 乳より一寸下であれば物業し絶えず 鳩尾にあれば才智あり腹にあれば仕合よし

(五三) 指先渦紋

一 男子の左の渦紋は初年の運右の渦紋は晩年の運なり
一 女子の右の渦紋は初年の運左の渦紋は晩年の運なり

一 皆渦紋の人は苦勞損失多し
一 無名指に渦なく他四本にあるもの 人に引
一 立られ立身出世す
一 小指の渦紋なく他四本にあるもの 人に愛
一 せらるるも分別定らず進ぶ
一 小指無名指なく他二本にあるもの 萬事定
一 小指無名指なく他二本にあるもの 性急内
一 大指に渦紋なく他四本にあるもの 人と争
一 氣にて災に遇ふ住所苦勞あり
一 大小指渦紋なく他三本にあるもの 人争
一 ふこと多し
一 無名指大指になく他三本にあるもの 立身
一 出世す人に隔てられ後調ふ
一 人指中指にあり他三本になきもの 柔和に
一 して人に愛せられ色難あり
一 人指無名指になく他三本にあるもの 好色
一 にして得りある人多し
一 中指大指にあり他三本になきもの 親朋朋
一 友又は住所を離れ苦勞す
一 人指小指になく他三本にあるもの 大體に
一 して人を助け争ひをなす
一 人指に渦紋なく他四本にあるもの 大吉望
一 み叶ふ好色なり

一 中指小指にあり他三本になきもの 災難争
一 論あり
一 中指に渦紋あり他四本になきもの 小事に
一 吉大事は障り辛勞ありとす
一 中指無名指にあり他三本になきもの 親し
一 人に分かれ災難あり財を失ふ
一 中指無名指になく他三本にあるもの 住所
一 定まらず破財女難あり
一 大指人指に渦あり他三本になきもの 人に
一 欺むかれ苦勞多し損失あり
一 大指に渦なく他四本にあるもの 正直なり
一 迷ひて災ひを受く
一 中指小指になく他三本にあるもの 散亂の
一 性にて損失し遠方往來すべし
一 人指無名指にあり他三本になきもの 住所
一 苦勞病難あり
一 人指に渦あり他四本に渦なきもの 人に親
一 しみ深し他國に旅行すれば吉なり
一 大指中指に渦なく他三本にあるもの 不意
一 の災ひあり運拙なし
一 人指小指に渦あり他三本になきもの 一旦破る
一 中指人指に渦なく他三本にあるもの 末よ

ろしきも急に叶はず  
中指人指に濁なく他三本にあるもの 人と  
中指人指に濁なく他三本にあるもの 人と  
中指人指に濁なく他三本にあるもの 人と  
中指人指に濁なく他三本にあるもの 人と  
中指人指に濁なく他三本にあるもの 人と  
中指人指に濁なく他三本にあるもの 人と  
中指人指に濁なく他三本にあるもの 人と  
中指人指に濁なく他三本にあるもの 人と  
中指人指に濁なく他三本にあるもの 人と  
中指人指に濁なく他三本にあるもの 人と

(五四) 竹齋山人秘傳數言

一面大なる婦人は不孝ものなり晴丸き女子は  
夫を尅す  
一面大なる婦人は不孝ものなり晴丸き女子は  
夫を尅す  
一面大なる婦人は不孝ものなり晴丸き女子は  
夫を尅す  
一面大なる婦人は不孝ものなり晴丸き女子は  
夫を尅す  
一面大なる婦人は不孝ものなり晴丸き女子は  
夫を尅す

一 眼偏し胸深き人は淫淫なり  
一目紅く語結ぶ人は好色極りなし  
一 左肩高き人は富む右肩高き人は貧す  
一 女子汗多きは一生貧にして兒多し  
一 肩薄きものは好俊にして不信なり  
一 女子額骨高きものは男を尅す  
一 少年神散するものは死す老年頭頂の皮乾け  
一 ば死す女子肩白ければ病む肩青ければ死  
一 小兒眼黒ければ死す  
一 龜頭黒色あれば子早し白色なれば子遅し  
一 眉骨高く眉毛鬢尾の如きもの子死して育た  
一 眼大にして露はるものは多く刑死す  
一 鼻柱筋あるものは家を破りて流浪す  
一 肥人の面赤きは性悪し人なり  
一 瘡人の髪黄なるは貪欲好俊の人なり  
一 頭大く短髪人は三十前後にて死す  
一 頂圓く頭小頭偏したる人は一生成就  
一 男女眼暗黄なる人は燥急の人にて刑せらる  
一 ことあり  
一 眼大なる人は人の口を言ふ  
一 男子の細眉なる人は財帛を保つ

一 女子の髪深きは淫淫なり男子も同じ  
一 男女共結喉高きものは悪夢を見る  
一 眉輕く口潤ふ人は水難あり  
一 耳中に黒子ある人は水難あり  
一 眉中に黒子ある人は悪口せらる  
一 男女共笑のちどれたる人は色を好み罪を犯  
一 頂背肉を生じ項の後髪脚の處高肉あ  
一 り眼深く髪黄なるものは殺人をなす  
一 眉毛を逆生し耳左右大小ある人は養子に  
一 行く  
一 眼珠動かず睛上下に轉ずる人は盜をなす  
一 眉垂れ骨低きは妾腹の兒なり  
一 女の耳稜なく額削られ骨粗なる人は人の妾  
一 となる  
一 婦人の面を仰ぐは好淫の人なり  
一 男子の頭を垂るは一心に貪欲なり  
一 身大手小なる人は一生貧なり身小手大なる  
一 人は下賤なり女子は夫を尅す  
一 老て房事多ければ壽なり老て巖落つるもの  
一 は子を尅す  
一 女子下唇上唇を包めば口舌あり上唇下を  
一 包めば子なし

一 足指堅く足心陥り骨多きものは一生貧なり  
一 足肉を生じ足軟毛を生ずる人は一生安樂なり  
一 男子髪粗なれば刑を犯し女子は夫を尅す  
一 體白く面黄なれば貧 身黄にして面白きは  
一 榮ゆ  
一 女子掌上紋深ければ兒多し男子陰囊に紋な  
一 ければ必ず嗣絶ゆ  
一 女子頭圓きは子を愛す男子額削れば諸事成  
一 功せず  
一 黄面の婦人は色を好む 唇青白きは兒なし  
一 四肢乾けば一年内に死す四肢潤へば三年間  
一 富む  
一 老年多眠は近きに死し少年多眠は愚なり

(五五) 面相

一 藤原の少納言通憲色相十二色七十二法有て  
一 面中に色を以て吉凶善惡を知る法あれども中  
一 中書に顯はし文につる事にて其妙知れ難し  
一 勿論其の傳を得たり其の妙を得ざれば却て  
一 其の吉凶を過る事多し今世相人多く出で支  
一 那相法を以て日本人の死生壽夭を分つ譬へば  
一 中正(鼻筋の上眉の間なり) 印堂(眼と眉と

(五六) 音聲之相

一 能く相するものは看一 看し死生を別ち一 言  
一 聞いて禍福を知る大江匡房卿或時禁裏に於て  
一 障子を隔て因幡守清隆卿の物言の音律を聞い  
一 て大いに感じ此の人の官は正一位中納言に進み  
一 壽は六十歳なりと相せられしが果して其の詞  
一 の如し是等は奇々妙々にして相法を述ぶる事  
一 言語を以て傳ふべきに在らず然れども相を知  
一 らざる者は匡房の傳才をあらはさんと文章を  
一 飾りたるなりといへり僅かに相を學ぶものは  
一 其の妙を既かれども我不能を以て故人の明達

(五七) 死相

一 此の書に死生を表はさざるものは色相を表  
一 はさざると同じ、すべて死する相を窺ふは色  
一 を以てす前に云ふ如く目下書いたものを的に  
一 してかりそめならぬ死生をかりそめに説下し  
一 する時は悉く偽りとなりて己が過ちのみなら  
一 ず人を害ふに至るべし死生の吉凶を學ばんと  
一 欲せば喜びある人毎に其の色相をよく斟酌記  
一 得し又父母兄弟の死因ある人を見て其の憂ひ

【七】性相と骨相運命大要

の相を記得しかりそめに遇ふ人なり其の色相を委く置きて應用となすべし數百人を看る中に自然と其の妙に通ずる時本者と引き合はせ取捨折衷にて其の死凶を判断する時は大體當らずと云ふ事なし又死相あらはれて其の色の枯るゝあり古へ登照と云ふ僧よく人を相する時内裏の朱雀門前を通りしに多くの相人夫あつまり居るに悉く死相あらはるゝ事必定なり登照怪しく思ひ則ち數多の人を其の處を立ち去らしむ人皆疑ひ訝りながら立ち去りしが須臾有て朱雀門地震の爲めに忽ち碎け倒る若し人あらば悉く死すべきなり爰に於て登照が死相ありと言ひしを感じあたりすべし此の如き災難にかゝる死相あり是等は通るればのがべき死相なり又極めて死すべき死相あり其の妙に至らずは死生を論ずべきにはあらず依て暫らく爰にあげずと雖も其の大法の色相は前篇に詳らかに記せり。

(五八) 貧富善惡總括

支那の人は凡として我朝當世の人物を看一看しても貧富善惡の大概を知る先づ色よく肥えて骨節荒々しからずゆつたりと見ゆるもの

(五九) 士農工商遊民總括

其の人の家財ゆふくなるものなり又我がれて色悪しくかじけたるは極めて貧窮人となり是れ則ち一般に人の目に善相と見ゆるは相法にてもよし一般に惡相なりと云ふは相法にても惡相なり所謂世間にて盜賊目と云ふ者は相にても好しきなり眼造ひりんとして烈しきものは短氣ものなる事能く知れり相にて短氣の相なり或は骨高く骨太く肉送しきものは至て強し骨低く骨細く肉送しきものは至て弱し然る時相を學ぶに及ばざる皆是れ定相なり然る時相を學ぶに及ばざるに似たれども其の善惡の定相の差別種々あり其の差別名目を立て其の法を一箇の定相として判断するもの此の書に録す然りと雖も管て相を學ぶ者約子定規の諸忘るゝ事なくんば又認りなかるべし是れ本朝相法の金言なり。

(六〇) 人相總論(男子の部)

- 一眉毛濃からず薄からず新月の如く光潤あり
一玉樓骨正しく高隆なり五岳三停廣潤にし
一肉厚し
一耳厚く眼深長山林山根骨正し
一人中狭く下廣く深長なり
一法令深長にして外に開き地開丸し双條も同

壽貴威富

- 一前髪高く後髪低く鬚鬚調ふ
一額廣く顛骨角立たず圓し
一横眼に骨角なく圓く喉の下ゆつくりと見ゆ
一鼻は細く直ぐ我耳に朝し二重目多し
一鼻は面相應にして筋通る
一口は面に對し小さく見ゆるも言ふ時は四字形なり
一唇上下厚く光潤あり兩角や上る
一時丸く長く手柔かに指長く指に主紋あり
一足は毛多く柔かなり
一輪廓分明にして耳中に黒子あり
一齒は白く齒並揃ひ格別大ならず三十二枚あり

【八】性相と骨相運命大要

- 一十分有餘ならず
一類の髪を生際濃からずして高し肩と目の間縫麗にしてさのみ高き肩には非ねど尻太く肩と目の間狭く肉あるをよしとす
一目は中眼にて長く腫のはたらき靜に奥深く薄黄色にて上下豐なり
一鼻はむつくり肉ありて眼の間低からず骨見え肉あるをよしとす
一口は上下唇厚く見苦しからず紫赤色に赤黒色の包みよしとす
一齒は大にして並びよく白きを可とす
一耳は肉厚くきつぱりして赤き中に黒み交へたるを可とす
一口は多けれどよく分かれ綺麗に見え兩口の邊に茂るを可とす
一頤の骨少なく色黒く光あるを可とす
一全體面の色皮肉の間に光あるを可とす
右の相あれば中年迄貧なるも中年後は必ず有福にして繁榮すべし
一有福にして繁榮すべし
一面部下方豐滿にして額窄くとも高く廣く頭大にして圓きを可とす
一眉薄く一文字に長く尻下れるを可とす
一眼は少し大きく眼づかひ靜にして鮫魚の尾

の如し  
 一鼻は肉あれ共根もと平たく小孔いからず  
 一口大にして笑ふが如し齒は大にして並びよ  
 一少し黄なり  
 一耳大にして垂珠に肉あり色つやよし  
 一耳の前の頬に肉のありて小耳を覆ふ如くに  
 見えて毛あり  
 一口多けれどむしやつかね様に見え唇の  
 下に十筋ばかりの毛あり顔の鬚多く生え  
 一耳の下よりつゞき生ゆ然し此毛喉の下迄む  
 しやくしやと生えず多くは見えざるもの多  
 全體右の如くにてゆつたりとしたるは生涯  
 仕合せよし

貧窮の相

此相は大形の顔にも小形の顔にもあり  
 一額の兩角すぼり凡て頭の間みじかく髪の色  
 潤ひなく太く剛し又厚くして一箇の毛穴よ  
 り二三毛を出す  
 一眉毛薄く短く目と眉との間狭く兩の眉の正  
 中鼻筋の皮肉なくうぶ毛繁く生え眼は小さ  
 く細く黄色にてうどみ、目尻の皺下りて長

一目の上肉なし又は二皮目は睨たる如き目又  
 象の目の如き種々あれ共眼中あざやかなら  
 一目の皺多く垂る  
 一鼻の形根基ひく、小鼻の筋深く鼻に肉なし  
 一口少し尖りて小さく上唇あつく下唇う  
 すくすけ色に赤し或は上唇うすく下唇  
 厚く赤りかへりあり  
 一齒は揃はず数二十七八枚色黒赤し  
 一耳は小さく垂珠なく粘着したるが如し肉な  
 し  
 一髪は口のぐるりにむしやくと生える  
 一額はすぼりて短かく又は長く毛むしやく  
 右將來發達せず薄命なり

下賤の相

一頭大きくして額横へはり額狭く紋多し眉薄  
 く眼  
 一眼大きく赤らどみ、鼻小さく少し歪みあり  
 一口卑しく唇の色黒く耳小さく薄し  
 一掌中薄く指太く短かく節くれだち全身に毛  
 あり

名を起す人の相

一面方長にして額高く眉は尻太く毛色黒  
 く光りありて長く眼より一寸位高し  
 一眼は細く長くまぶた二重にして眼洗ひたる  
 が如し白黒きつぱりとして奥深く  
 一鼻丸く竹を二つに割りたるが如く尖圓く孔  
 小さく上の根基肉あり厚く少し太く見えて  
 低からず  
 一口は上下の唇正しく兩端正しく笑ふ時四の  
 字形なり  
 一齒は列よく白く三十四五枚なり  
 一耳は大きとも小くとも厚く圓く色紅に  
 して白きなり

聰慧の相

一眉長く中に黒子あり但し大に高き黒子は凶  
 一耳大にして厚く黒子あるか光ありて潤ひあ  
 るもの  
 一額の形細く眉毛まじはりて間際なく  
 一眼はつきりとしたれ共、物を見るに目ば

愚痴の相

大にして長し  
 一上唇長く下唇尖り齒さきあらはれ舌小さし  
 一耳大にして上へあがりめにて後へそる  
 一後の髪は生際高く物言ふ時常に下眼を使ふ  
 もの

膂力相

一頭虎の如く威ありて眉高く尻上り太く長し  
 一眉頭に旋毛あり  
 一目大きく長く鼻は骨大にして肉厚く圓にし  
 て根に鈎の如き紋あり  
 一口至つて大きく耳圓く厚く高く鬚剛し

出家の相

一頭圓く腦後の骨高く頂き平たく面方長髮生  
 際高く  
 一眉上りて薄く末太く厚く二三毛長き毛交る  
 一髪は八字に似たり  
 一眼は中眼にして清黒く奥深く瞳多し  
 一鼻ゆつたりとして清黒く鼻深く鼻多し  
 一耳至つて細く長く柔かに青白く後へ粘着す

盜賊相

一鼻は面相應高く大きく根基瘦せて骨見ゆ孔  
 然にあり  
 一丸く小にして常に白眼勝なり黄色の光自  
 然にあり  
 一眉長く眉毛諸々抜けたる如く間疎なり  
 一舌を以て常に唇をなめる  
 一眼尻下り肉なく色青く煤けたり

根性惡相

一舌を以て常に唇をなめる  
 一眼尻下り肉なく色青く煤けたり  
 一鼻肉圓く下り鼻の下溝廣く厚し耳薄く赤し  
 一眼尻に黒子あり色白く黒子そばかす多し  
 一舌を以て常に唇をなめる  
 一眼尻下り肉なく色青く煤けたり

淫亂の相

一眉毛縷の如く又は女の眉に似たり  
 一眼の瞳黄にして小さくきらりと上光りし  
 一舌を以て常に唇をなめる  
 一眼尻下り肉なく色青く煤けたり

艱難の相

一面うじけ顔すぼり顔骨尖り眉毛太く荒く生  
 え逆毛に生えたる毛多し  
 一眉と目の間せまく短かし眼は凸眼にして大  
 なり必ず妻を失ふ  
 一鼻柱大にして瘦せ肉なく根基骨見え孔大な

破財の相

一口少しく大きく唇薄く黒色なり  
 一耳薄く反りかへり耳たぶなし左右大小あり  
 一唇薄黒く毛縮みたり  
 一鼻柱大にして瘦せ肉なく根基骨見え孔大な

一眉と目の間なく眉毛短かく尻上がる  
 一魚の目に似てまぶた一枚にはり出し睛出  
 一赤し又目の下に白き粟粒の如き者あり  
 一鼻は根基薄く尖り頭大にして薄く鼻柱なく  
 一鼻の先の間赤し鼻の根より上は黒し  
 一口は大にして薄く長く商大にして間すく色  
 一齒先き枯れ耳小さく低し垂珠利かにして小  
 一赤脈二行兩頭の角より髪の中へと貫く筋  
 あり

天死相

一頭には大あり小あれども何れにか至み面は  
 一色薄くけにて體は瘦せて氣短かく常に眉を  
 ひそめ眉尻下る  
 一眼は大なれ共常に睨ふたるが如し  
 一鼻和かにて骨なきが如し肉薄く根に堅紋あ  
 りて至見ゆ  
 一鼻毛長く生え出で鼻の下薄く平かなり  
 一口小さく縮まり上唇と鼻との間狭く短し  
 一耳薄く青白く垂珠なく附着す

長壽の相

一眉長にして目鼻口の間ゆつたりと見え眉  
 一文字にて長く濃く眼より甚た高く眉頭に  
 一志父は長き毛あれば長命なり  
 一鼻は根基高く頭丸く鼻の下薄二筋深くあり  
 一耳厚く垂珠おもく垂れ孔に毛長く生じ  
 一面よりは身肥え首筋肉厚く皺あり  
 一春中くばます腰に肉あり丸く乳に毛あり  
 一腹大にして養に物を入れたる如し

女子の部

貧窮の相

一眉も長く肥厚の色は白黒白青ありそばかす  
 一黒子あり  
 一額平たく髪薄し髪厚きは賤しく薄きは貧な  
 り  
 一或は生上り黒くとも光なし  
 一眉は高けれ共薄く又眉尾下りなり  
 一鼻は根基低く瘦せて骨見え孔開からず或は  
 大額にて鼻小さし

下賤の相

一口は面に對して大きく唇うどみて黒赤し  
 一眼は白眼勝か又黄ばみ青眼がちなり  
 一耳は大きくも色黒く尖り小にして粘貼した  
 るようなり  
 一丈低く肥え足手きめ悪しく指先太く短し  
 一眉は平面にして腮骨高く額に小皺多し  
 一眉毛こゆく眼との間狭し  
 一鼻はだんご鼻にて根基低く孔大なり  
 一口大にして黒く口のはたに堅筋あり  
 一耳大なれ共色黒くちぶ毛多く目より下に附  
 きて耳珠粘貼す  
 一丈低く圓く肥面圓にて生際厚く出入あり  
 一額に角の如くに生ゆ  
 一眉低うして薄く目丸く魚尾下る  
 一耳小さく耳珠なく鼻連切にて根基なし  
 一額骨横に張りて下頤尖り手足至つて短なり

聰慧の相

一眉長にして額廣からず髪を生際光ありて綺  
 麗なり  
 一上唇薄く下唇は厚し  
 一耳大なれ鼻上にて尖り耳珠粘貼す  
 一頭の下骨大にして目に立つ潔なり  
 一人と物語るに下眼脈にて物を見つゝ歩む

艱難に遭ふ相

一而四角にて下腮はり髪薄く額に鬚斑あり  
 一眉兩方の間迫まり肥頭肥え尾に至りて薄し  
 一鼻の玉小さく茶色なるか眼中黒子あり  
 一鼻面より小さく鼻柱に堅紋二三筋あり

嫉妬深き相

一骨氣は大女に少く中小の女に多し  
 一額の骨高く探り見れば凸凹あり  
 一眉短く薄く眼陷り左右魚尾下り陷りたり  
 一鼻の根基に筋ありて小鼻に紋深し  
 一口大にして齒尖り又は重り齒あり唇の下  
 陷る  
 一額すぼり此骨きつとせり  
 一此相は根性悪又は淫亂相に似たり

淫亂の相

子の有る相

一鼻の下の溝尻張りて深きもの  
 一溝下はりにて浅きもの  
 一又溝の下に黒子あるものは双子を生む  
 一兒なきものに此處に黒子あれば淫亂なり  
 一全身身肌の皮膚細やかならず脂つきたり肌  
 のきめを見よ  
 一乳頭大にして黄黒みたり  
 一腰の骨横に張り尻からかに大なるは兒多し  
 一陰性にて物數多く言はぬ人は女の兒多し  
 一左の耳右より大なれば男子を生み反すれば  
 女子を生む

子なきの相

一鼻梁低く髪薄く赤色なれば女子多し  
 一魚尾に横皺あり髪黒ければ男子多し  
 一兩眼窪み鼻下の溝上開き下細く又至て淺し  
 一溝下に廣くして笑ふ時横に紋出るもの  
 一體丸くきめ細かく皮ひつばる如く見ゆ  
 一尻丸く小さく肩より腰遠く短し

胎兒の男女を知る

一歩行に左の足より踏出せば男子右は女子也  
 一左の眼下薄紅色なれば男子右は女子  
 一孕みて四五ヶ月にて臍出れば男子なり  
 一額に暗み出で唇青く眼うどめば女子なり  
 一兩の眼上下紅色は男吻紅色は女子なり

魂性悪相

一眉面なる者は額骨横に見え方長なる者は額  
 一兀上るなり  
 一眉の上横骨高く眉一文字は薄く生ゆ  
 一眼角あつて眼尻少し下り口小さく内窪りて  
 一眼尻に横紋あり  
 一鼻節は高く頭面小鼻怒り孔大にして養形

〔八〕性相と骨相運命學大要

- 一 骨相尖りて面中窪みあり
- 一 眉下り至みあり眼「へ」の字形にして少し尻下りなり
- 一 二皮眼にてむしやくしやしたり人を見る上
- 一 下の眼一つになる
- 一 魚尾に横皺あり下目をつこもものあり
- 一 鼻柱通り窩口鼻に似て基に節あり又仰向な
- 一 鼻柱に堅紋あるは極めて淫亂なり。

骨相の部

(一) 骨相と性相と人相の差異

骨相とは原語「フレンロジ」と稱する語に  
適す希臘語にては「フレンロジ」とは精神論  
と云ふ意味である然れども他に適當の文字な  
きが爲めに借用したるものなり、西洋にては  
千七百五十七年日耳曼人ドクトル、ジュセツ  
ブール氏が此學を主張せしに始まり其國に  
てはドクトル、スベルツハエル氏セオロジ、  
コムプ氏又マンドレウコムプ氏等の學者輩  
出するに至り就中ドクトル、スベルツハエ

ム氏は蘭の解剖及び生理學上に於いて基礎を  
立て醫家未發見の人體諸器能を發見するに至  
れりと云ふ。  
東洋にては支那古代より人相學なるものあ  
り佛者儒道に於て是れを論ずるもの多しなから  
ず從つて麻衣、水鏡、神相、人鏡、曰く何日  
く某と一は體格より一は骨路より論じたるも  
のにして要するに人の身體組織の全體及び起  
居靜靜を見て其の資質を推論するの學とな  
りたるものなり、然るに今日科學的生理解剖  
等の學術進歩し來り物質的方面の人體組織學  
發達するに連れ人の精神即ち意思は頭腦に存  
するといふこと決定せられてより専ら頭蓋骨  
盤の組織のみを論ずるに至りて始めて骨相學  
なる名稱を付し之を分科するに至りたるので  
ある故に骨相學とは人の資質を頭蓋骨組織  
及び頭蓋の多少及び頭蓋傾斜欠陥等を以て  
人運を判斷するものにして、人相學は是等凡  
てを參照して顔面全身手相、體格、氣色血色  
等の配合調和を見て其の何實行面より其人  
の前途の運命吉凶の盛否を推斷するものなり  
故に骨相學は人相學の一分科にして即ち基礎  
を専ら組織に取りたるものなれども人相學の

其礎は必ず組織の基礎即ち靈の作用意識の  
發動に取りたるものなりと謂ふことを得るの  
である去れども人相學は必ず骨相學を離るべ  
からず骨相學亦人相學なくしては其意を盡す  
能はざるものにして歸する所は同一なるは恰  
かも醫師が或る患者を診するに其患部のみに  
て之れを斷ずる能はず必ず其原因は何れよ  
り來るやを知るを要するが如く而して之れを  
治術する亦其原因を根治して而して後其患部  
に及ぼすと同一なるものなり。  
性相とは人相學中專ら其天稟を論ずるもの  
にして、是亦人相學の一分科といふを得るの  
である何故なれば性相學に於て論ずる所のの  
ものは其人相の表顯する人の意識のみに重き  
を置きたるものなればなり。  
要するに余は性相と骨相とは何れも人相に  
必要にして、離るべからず人相とは性相と骨  
相とを説明する學問にして、人相判斷とは性  
相と骨相とを比較研究して人の資質より前途  
の運命を説明するの學術といふことを以て正  
論を得たるものなるべしと思ふ故に之れを大  
別するときは大體左の如く言ふことを得。  
一 性相 人の靈即ち意識血液氣色(遺傳等

を論據とするもの)  
一 骨相 專ら人の頭蓋及び腦梁を基礎とす  
るもの  
一 手相 とは専ら手掌紋理配合にて判斷す  
るもの  
一 人相 とは手相性相骨相を根據として相  
者の通力を應用し身體全部起居動作の微  
を洩さず取捨比較して斷定するもの  
以上にて性相骨相手相の人體を知られる  
ことと思ふ以下少しく骨相學に關して最近の  
新學說を紹介すべし。

(二) 骨相とは如何なるものか

上述せる如く最近生理解剖學の進歩と共に  
歐米文明國にては最早何れも此學を疑ふも  
のなきに至りたるものなり、殊に近年ロンダ  
ロソウ氏の如きは犯罪骨相學と稱して尙此骨  
相學中より一分科を成して研究を怠らず其他  
コムプ氏オーランド氏クレーベル氏チャプマ  
ン氏クリネー氏アストレー氏クルーベル氏ブル  
ンバック氏等の學者輩出するに至り骨相學  
は斯の如く浸々として進歩發達するに至りた

〔九〕性相と骨相運命學大要

るは吾人々類の爲め誠に喜ばしきことなれど  
も我國に於ては古來人相見なる賣卜者流坊間  
に播り居るもの多しは元來何の素養なく何  
等識見なきの徒が猿りに吉凶禍福を説きて愚  
夫愚婦を惑はすもの多しに至り爲めに有識者  
は之を以て荒唐無稽なりとして一笑に付する  
に至りたるのみならず却て其人相見と稱する  
者を下賤視し或は之を一種の香具的のものな  
りとして顧みるものなきに至りたるの結果其  
人の罪跡終に學理を遂げがすに至りたるもの  
此學の不進歩なる最大原因なるのみならず元  
來明治維新泰西文化輸入して以來彼の科學萬  
能主義に戀々として凡て何學に據らず宗教哲學  
倫理等形以上學及び儒教の如き者に至る迄之  
れを顧みる者なきに至りたるは一の不進歩原  
因を爲したる者ならん、西洋にても彼の英の  
ベイヤコンの如きは凡ては滅びん去れ共科學は  
發達せんと絶叫するに至りたるの時代が恰か  
も大日本國民が始めて彼の文物を輸入する  
に汲々たるの時にして此時代こそ實に科學萬  
能時期なりしなり去れ共眞理は何時迄も之を  
沒了し盡す能はず生理學の進歩は骨相學を喚  
起し理學の進歩は人生の解釋必ず物質的組

織と解剖學の理論のみにて満足する能はず靈  
は顯微鏡の實驗の及ばざる者覆載の眞理は空  
氣の引力説明のみに一任する能はざるに至る  
ことなり彼の「カント」等の心理學者輩は  
に至り我國に於ても近來朱子を思ひ孔子を  
思ひ陽明を思ひ釋迦を思ひ起すに至り始め  
て骨相を思ひ人相觀の學說を吟味するに至り  
たる者である、であるからして獨りこの學は  
進歩運々たるが故に未だ生理學者物理學者が  
研究したるが如く發達せず彼等科學者は其  
事實の證明し得らざる方面にのみ全力を傾  
注し其證明力乏しき方面に力を盡くさる  
のみならず全然之を無用視して打捨て置きた  
るなり否其解するを得ざる點は之を凡て神の  
妙用造物主の不可思議に一任し去りたる次第  
なり從來人相の古書及び古人の論說多から  
ずと雖も是亦日月五行に根柢を置きたる者  
み未だ之を以て眞の科學となし科學的秩序を  
以て説述したる者絶無なりしは豈遺憾至極な  
らずや此間に處し余は微力ながら洋の東西を  
問はず古今來凡て是等の學說を蒐集し諸書  
を跋渉し其他心理哲學及び生理學進化論等斯  
學に必要な諸書を涉讀し以て曩きに人相五

【八】性相と骨相運命學大要  
行運命骨相學てふ名稱を付し一書を刊行し今  
又續いて本篇を起草するに至りたる者なりと  
す諸氏は以上の説明にて最早骨相學の如何は  
了解せられたるならんと信ず

年 數 早 見  
萬 年 七 曜 早 見  
滿 月 求 年 表





【ル】年數早見表  
 ○年數早見表（上部ハ年號及年數ニシテ其下部右方ノ數字ハ大正五年ヨリ廻リテ數ヘル年數ナリ例ヘバ明治初年生レナレバ四十九歲（辰年）ナルヲ知ルベシ）

三	卅七	卅七	卅七	七	元治	安政	弘化	五	七	十一	文化	六	四	三	明和	四	延享元
とら三	たつ三	うま三	ささ三	いね三	うま三	とら三	たつ三	うま三	ささ三	いね三	うま三	とら三	たつ三	うま三	ささ三	いね三	うま三
四	卅八	卅八	卅八	八	慶應	二	二	六	八	十二	二	七	五	四	二	五	二
うま二	ひつ二	うま二	ささ二	いね二	うま二	とら二	たつ二	うま二	ささ二	いね二	うま二	とら二	たつ二	うま二	ささ二	いね二	うま二
五	卅九	卅九	卅九	九	三	三	三	七	九	十三	三	八	六	五	三	六	三
たつ一	うま一	ささ一	いね一	うま一	とら一	たつ一	うま一	ささ一	いね一	うま一	とら一	たつ一	うま一	ささ一	いね一	うま一	とら一
四	四十	四十	四十	十	三	四	四	八	十	十四	四	九	七	六	四	七	四
ひつ〇	とら〇	うま〇	ささ〇	いね〇	うま〇	とら〇	たつ〇	うま〇	ささ〇	いね〇	うま〇	とら〇	たつ〇	うま〇	ささ〇	いね〇	うま〇
四	卅一	卅一	卅一	十一	明治	五	嘉永	九	十一	文政	五	十	八	七	五	八	寛延
ささ九	いね九	うま九	とら九	うま九	とら九	うま九	とら九	うま九	とら九	うま九	とら九	うま九	とら九	うま九	とら九	うま九	とら九
四	卅二	卅二	卅二	十二	二	六	二	十	十二	二	六	十一	寛政	八	六	九	二
とら八	うま八	ささ八	いね八	うま八	とら八	たつ八	うま八	ささ八	いね八	うま八	とら八	たつ八	うま八	ささ八	いね八	うま八	とら八
四	卅三	卅三	卅三	十三	三	萬延	三	十一	天保	三	七	十二	二	九	七	十	三
いね七	うま七	とら七	うま七	とら七	うま七	とら七	うま七	とら七	うま七	とら七	うま七	とら七	うま七	とら七	うま七	とら七	うま七
四	卅四	卅四	卅四	十四	四	文久	四	十二	二	四	八	三	天明	八	十一	寶曆	三
うま六	とら六	うま六	ささ六	いね六	うま六	とら六	うま六	とら六	うま六	とら六	うま六	とら六	うま六	とら六	うま六	とら六	うま六
大	卅五	卅五	卅五	十五	五	二	五	十三	三	五	九	二	四	二	安永	十二	二
とら五	うま五	ささ五	いね五	うま五	とら五	たつ五	うま五	とら五	うま五	とら五	うま五	とら五	うま五	とら五	うま五	とら五	うま五
大	卅六	卅六	卅六	十六	六	三	六	十四	四	六	十	三	五	三	二	十三	三
うま四	とら四	うま四	ささ四	いね四	うま四	とら四	うま四	とら四	うま四	とら四	うま四	とら四	うま四	とら四	うま四	とら四	うま四

大正五年八月二十日印刷  
 大正五年八月二十三日發行

版權  
 所有

發行所

東京市麴町區有樂町一丁目三番地（日比谷公園角）

每日通信社

電話新橋二七三八五番  
 振替口座東京九八一五番

編輯者 福田 東作  
 東京市深川區西平野町壹番地

印刷者 伊藤 武次郎  
 東京府豊多摩郡内藤新宿北裏町五十三番地

印刷所 日清印刷株式會社  
 東京市牛込區板町七番地

終